

正命とし、自らの種々の生業をなして自活するのを邪命といつてゐる。

【坊主】は(一)もと一坊の主僧をいつた。住職。(二)轉じて僧侶の通稱。多く賤めていふに用ひる。こゝは(二)【科擧】クワキョ 支那唐代に始めて制定せられた官吏採用試験(特に文官に關するもの)。秀才・明經・進士・俊士・明法・明字・明算等の科目に分たれ、科目によつて多少の相違はあつたが、主として四書五經等の經書を中心に、策略時務・雜文等の試験をしたものである。科擧の制は宋に入つて改良が加へられ、明に至つて最も整備されたが、清代には廢止された。

【經書】ケイシヨ 儒學の經典。論語・孟子・大學・中庸を四書、易・詩・書・春秋・禮記を五經となし、これに樂記を加へて六經とし、易・詩・書・周禮・儀禮・禮記・春秋左氏傳・春秋公羊傳・春秋穀梁傳・論語・孝經・爾雅・孟子を十三經とする。

【五言の詩】ゴゴンのシ 五言を一句とする詩。四句二十字よりなる「五言絶句」、八句四十字よりなる「五言律詩」、句數に制限のない「五言古詩」の三種類がある。

【佛典】ブツテン 佛教の書物。經文。

【老子】ラウシ (一)支那周代の思想家 道家哲學の始祖。姓は李、名は耳、字は伯陽、諡して聃といふ。楚國苦縣厲郷の曲仁里の人。初め周室の守藏吏であつた。道徳を

を没却して無條件に感情的に尊敬すること。

【僧侶や道士といふものに對しては、何故といふこともなく尊敬の念を持つてゐる】

其の時代にあつては少くとも智識階級に屬してゐたであらう閑の氣質がよく出てゐる。前に「神經質であつた」(七七頁七行)とある。官吏として一通りの學問もあるが、さればとて昂然と他を見下す程の豪放さはない。學問がある爲に未知の世界に好奇的憧憬的な尊敬の念をいだく。要するに「上機嫌である」「意氣揚々としてゐる」閑の性格の發展である。凡俗ではあるが、官吏としては理解があると褒められさうな人物である。

【垢つき弊れた法衣】アカつきヤブレたホフエ

「法衣」は、僧尼の衣服。納衣・僧衣・僧服ともいふ。

【うち遣つて置く】うちやつておく すてて置く。うつちやつておく。

【鐵鉢】テツバツ 僧侶が米錢を受ける用器とする鐵製の鉢。

【僧は黙つて立つてゐるので、問が問うて見た】

垢驅弊衣の乞食坊主の不思議な風格が「黙つて立つてゐる」の一句によつて先づ思ひ描かれる。問から先に口を開かずには居られなかつたのも、この僧に何か彼を壓倒する力があつたからではなからうか。

【進ず】シンズ 奉る。さしあげる。

修めその學は無爲を以つて務となし、孔子に禮を教へたといふ。周室の衰微するに及んで亂世を避けて關(函谷關)又は散關ともいふ)に至つた時、關の令尹喜の求めに應じて道徳五千言を述べた。世にこれを「老子」又は老子道徳經といふ。遂にその去る所を知らない。(二)一に「老子道徳經」上・下二卷。老聃の著。後世の編纂となす説もある。無爲を以つて萬事を包含するを大道となし、無爲に歸すれば亂離なしといふをその本旨とする。こゝは(二)の意。

【道士】ダウシ (一)道徳を修めた人士。(二)佛教修行の士。沙門。(三)道教を修めた人。こゝは「老子の研究」に關聯して、(三)道教を修めた人をいふ。

「道教」は、老子の虚無自然の思想に、神仙家の説と俗間信仰とを加味し、佛教組織を摸して出來た支那の一大宗教。主眼を福・祿・壽に置き、虚無自然・恬淡を道徳の主として、不老・長生・昇天の神仙方術を説くもので、元始天尊を最高神とし、老子をその權化なりとして太上老君の名を以て呼び、經典を「天啓」と名づけた。後漢の張道陵を開祖とし、魏・晋・南北朝を経て次第にその勢力を擴充し、宋代を経て遂に支那宗教界に不動の地位を占めるに至つた。

【會得】エトク 心から悟ること。さとり知ること。

【盲目の尊敬】マウモクのソッケイ 理性的な判断批評等

【どうして】如何なる方法で。「いかなる理由で」の意味ではない。

【藥方】ヤクハウ 藥の盛りかた。藥のつくりかた。

【四大】シダイ (一)佛教に於て、萬物生成の根源は堅・濕・軟・動の四つであると説き、この四つの性質を表してゐるものを地・水・火・風であるとし、これを名づけて四大といふ。(二)老子教に於て、道・天・地・王をいふ。

老子に「道大、天大、地大、王亦大。域中有四大、而王處一焉。」とあるに據る。こゝは(一)の意。

「四大の身」は、地水火風の四大よりなる身體の意で、要するに人間の身體のこと。

【病は幻でござります】

病氣は現實に存在する實體ではなく、人間の錯覺から招く幻影に過ぎないといふ意を、僧徒らしい言葉で表したもので、「病は氣から」といふ俗間の言葉を言ひかへただけである。

「幻」(マボロシ)は幻影、即ち心理學上にいふ所の、思想・感覺等の錯覺によつて、事實でないものを事實の如く認める意識現象。

【清淨】漢音「セイジャウ」吳音「シヤウジャウ」こゝは吳音に讀むべきである。

【受糧器】ジュリヤウキ 糧食を受けるうつは。こゝは「鐵鉢」を指す。

【咒】 マジナヒ 神佛などに祈り、その靈力通力によつて災禍厄難などをはらひのぞくわざ。
【いや】 四大の身を惱ます病は幻でございませう。唯清淨な水がこの受糧器に一ばいあれば宜しい。咒でなほして進ぜませう】

いささかの疑惧もなく斷乎として直言して憚らない。その一語一語に自信が満ち充ちて、「黙つて立つてゐる」(同頁初行)この坊主の風格に更に光が當てられた。「なんとなく偉さうに見える坊主の態度に信を起した」(次頁五行)といふ間の告白が極めて自然に首肯される。のしかかるやうな威壓の感ぜられる坊主ではないか。

【仔細】 シサイ「子細」とも書く。(一)事のわけ。いはれ(二)一部始終。くはしいこと。(三)差支へとなる事柄。かれこれ言ひたてるほどの事情。ここは(三)の意。後の方に、「水一ばいにする咒なら、間違つた所で危険な事もあるまい」と説明されてゐる。

【治療】 チレウ 病をなほすこと。病氣の手あて。

【定見】 テイケン 一定の意見。定つた見識。

【悟性】 ゴセイ (一)哲學上、思惟の作用。理性。(二)概念を作り、又判斷をなす作用。知性。ここは(二)のこと。判定。(三)うらなひ。(三)論理學上主辭と賓辭の

綜合をいひ、判斷の綜合が推理となる。ここは(一)の意

人類。

【福利す】 フクリス 「幸福」(名詞)を動詞化した語。幸福利益をはかる。但し、佛教によれば世間出世間一切の幸福は善業の果に他ならないから、物質的のみならず精神的なものをも意味することはいふまでもない。

【橋慢】 ケウマン おごりたかぶること。おごつて人をあなどること。

【橋】は「驕」に通ずる。

【折伏】 シヤクブク 邪惡・煩惱・迷執を破折摧伏すること。惡人惡法を挫いて正人正法に服従させること。

佛・菩薩が衆生を濟度するには折伏と攝取の二法を用ひこれは佛道の二大要綱で、前者は知門に、後者は慈門に配する。

【わたくしは群生を福利し、橋慢を折伏するために、乞食はいたしますが療治代は戴きませぬ】

人間として、僧侶としての豊干の偉大さが愈々明瞭になつて來た章句である。この折伏攝受の高徳をもつた所に後の寒山拾得と對比せらるべき豊干の特異性がある。

【豊干】 ブカン 釋文に「豊干是阿彌陀」とあるが、その傳記は詳かでない。唐代禪宗の高僧、國清寺に居り、奇行が多く、天下を行脚して衆生濟度に盡くした。その詩は寒山詩の中に載せられてゐる。

【眉を擧める】 マユをヒソめる 心中に憂ひ危み又は他人

【信】 シン ここは信仰心・信心の意。

【集注】 シフチュウ (一)あつめそぐこと(他動)。あつまりそぐこと(自動)。(二)書物の注釋を集めたもの。ここは(一)

【衝む】 フクむ 音は「カン」物を口にくはへる。【どうしても癒らせずにゐた頭痛を、坊主の水に氣を取られて、取逃してしまつたのである】

何となく偉いと思ふ―胸に捧げた水に精神を集注する―水を吹きかけられてはつとする―氣が附くと頭痛が何處かへふつとんでしまつてゐたといふのである。自己催眠に落ちながら遂に頭痛を忘れて行く間の心理過程が實に輕妙な筆で運ばれて來た末に、「取逃してしまつた」の一句は、何とも言へぬ味がある。急に輕くなつた頭をふりながら、狐にでもつままれたやうにきよとんとあきれてゐさうな顔が浮かび上つて來る。

【僧は餘に鉢に残つた水を床に傾けた】
豊干が靈力を示した後の物しづかな所作である。高德の僧の全貌が、さりげないこの一句に至つて、姿として、態度としてはつきりと浮かび出てゐる。凡手の及び難い筆の冴えである。

【寸志】 スンシ (一)いささかの志。(二)わづか志をあらはしたまでの進物。心ばかりの贈物。ここは(二)【群生】 グンジャウ「衆生」に同じ。多くの生物。一切の

の思はしい行爲に對して顔をしかめる。

【擧】は、音「ピン」うれへて顔をしかめる意。

【普賢】 フゲン 普賢菩薩の略稱。梵語 Sumanta-bhadra の譯。偏者とも譯し、徳、法界に普く、至順にして善を調へる義。釋迦如來の脇士で慈悲を掌り、右手に金剛杵を、左手に金剛鈴を執り、五佛の寶冠を頂き、白象に乗る。普賢延命菩薩といひ、略して延命菩薩ともいふ。

【菩薩】は梵語 Bodhi-sattva (菩提薩陲)の略。覺有情と譯す。上は菩提を求め下は衆生を化する高德者、即ち大心を以て佛道を修行する行者。轉じて佛心ある高僧を言ふ。

【石窟】 セキクツ いはや。いはあな。岩窟。

【文珠】 モンジュ 文珠菩薩。梵語 Manjusri (文殊師利)の略。妙徳。妙吉祥の意。釋迦如來の左に侍して智慧を司る菩薩。蓮華の上に坐し、右手に智劍、左手に青蓮華を持ち、頭に五髻を結ぶ。

【さやうなら】 (一)しからば。さらば。それならば。(二)訣別の挨拶に用ひられるのは「さやうならお別れ申さう」の省略された用法。ここは(一)の意。

【輿】 ヨ「コシ」の訓もあるが、ここは矢張支那風に「ヨ」と音讀するがよい。屋形の上に人をのせ、その下にある二本の長柄で肩に昇き上げ、又は手で腰の邊にもたげて

行く乗物。乗者の身分によつてその形式を異にする。

【官舎】 クワンシヤ 官吏・職員の仕事として官府で設けた家宅。

【椒江】 セウカウ 靈江・澄江・海門河・台州河などの異稱がある。源を大盆山に發し、始豐溪とよばれ、東北流して諸水を合はせつつ天台山麓に到り、更に南流して椒江となり、台州の南を過ぎて東支那海に注ぐ。

【始豐溪】 シホウケイ 「始め豐溪」とあるものは、始豐溪の誤植であるから訂正して戴きたい。

【始豐溪】は椒江の上流の稱。前項「椒江」参照。

【迂回】 ウクワイ 遠まはりをすること。まはり道をする

こと。

【陰つて】 クモつて 蒼白い日 冬雲の切れめからこぼれる白々とうすら冷たい冬の日の形容である。この作者には珍しい感覺的描寫である。

【牧民】 ボクミン 民を養ひ治めること。管子・牧民篇に「凡有地牧民者務在四時守在倉廩。」とあるより出た語。

【牧民の職】は「牧民官」ともいひ、地方長官の異稱。【賢者を禮する】ケンシヤをレイする 賢者に對して禮をつくす。禮を厚くして賢者を遇する。この場合の賢者は寒山拾得。

とある。

【陶宏景】は梁の名高い隱士であるから、唐代には既に「一萬八千丈」の稱があつたのであらう。

【測量】 ソクリヤウ 地理學上、地形・地域の廣狹・高低を測ること。

【所詮】 ショセン つまる所、結局。

【詮】は、事理をつまびらかにすること。

【虎】 トラ 食肉目、猫科の哺乳類。アジア洲の特産で、溫・熱兩帶を通じ殆ど全洲に亙つて分布し、現在では約七種に分れてゐる。一般に印度産のものは毛が短く、朝鮮・滿洲・支那産のものは比較的毛が長く粗剛である。

【一體天台一萬八千丈とは、いつ誰が測量したにしても、所詮高過ぎるやうだが、兎に角虎のゐる山である】

【一體】と始め、「所詮」と受け、「兎に角」と續く。この言葉の運びに軽い機知が閃いて、一種ユーモラスな趣がある。

【三門】 サンモン 「山門」とも書く。寺院の本堂前の樓門。一建築で中・左・右の三箇の通路を有する樓門。後世ただ一門でも三門と稱した。寺院の本堂を法空・涅槃に擬し、其の出入の端緒たる三解脱門、即ち空門・無相門・無作門を寺院の門に譬へていふ。

【智者大師】 チンヤタイシ 天台宗の始祖。天台大師ともいふ。俗姓は陳。字は徳安。梁の大同四年（我が宣化天

【牧民の職に於て賢者を禮するといふことが、手柄のやうに思はれて、閭に満足を與へるのである】

閭の盲目的な信仰は、またかうした愚かしい満足感をも伴ふのであつた。「威勢ならぶ者なき長官の自分」がいふ氣持が先に立つた手柄顔である。賢者の境涯からみて、かうした尊敬がいかにも無意義であるかはいふまでもない。併し彼は決して悪い人間ではなかつたことは勿論である。寧ろ愛すべき善良な牧民官であつた。そしてこの程度の役人にかうした心持はあり勝なのである。

【輿を昇かせ】 ヨをカかせ 輿をかつがせ。

【昇】は、音「ヨ」又「キヨ」兩人共に一物を擧げる意。

【知縣】 チケン 縣の長官。縣知事。

支那の縣は行政区劃の最小單位で、秦代以來各代を通じておかれ今に至つてゐる。したがつてその長官は地方長官中の最下級者である。初め「縣令」といひ、宋に「知縣事」と改め、明清に「知縣」の稱に變つた。ここは明清時代の呼稱を用ひたのである。

【爪先上り】 ツマサキアガリ 漸次にのぼり路になる坂。

【天台一萬八千丈】

南宋の嘉定赤城志に「天台山、在縣北三里。按陶宏景眞語、高一萬八千丈、周回八百里。山有三重四面如一。十道志謂、山之頂對三辰。或曰當牛女之分、上應天台、故曰天台。一曰大小台。以石橋大小得名云々」

皇三年）荊州華容縣に生まれた。十八歳法緒に就いて法門に入り智顛と稱した。初め慧曠に學び、二十三歳南岳大師慧思に從つて法華經の深旨を究めた。三十歳陳の都金陵に到り、瓦官寺に入り、普く朝野の歸向を得、天台宗開立の基をきづいた。以來八年専ら傳道にたゞさはり陳の大建七年九月（我が敏達天皇四年）始めて天台山に入り一字を建ててこれに籠り、隱棲苦行すること十年、正に天台宗成立の時期であつた。四十八歳再び金陵に赴いて靈曜寺に寓し、陳・隋兩主を始め、朝野の尊信を一身にあつめ、屢々招せられて玉泉寺（荊州當陽縣）・瓦官寺等で法華教を講じ、遂に天台宗の宗義を完成した。その教を四方に弘めて衆生を濟度し、寺院を建てること三十有六、僧侶を度すること一萬四千餘人であつたといふ。隋文帝開皇十七年（我が推古天皇五年）示寂。享年六十。隋煬帝より「智者大師」の謚を贈られた。

著作には「淨名義疏」「法華文句」「維摩經界疏」「維摩經玄疏」「觀音玄義」等がある。

【大師】は、(一)佛の尊號。(二)朝廷から高僧に賜はる號。こゝは(二)

【滅後】 メツゴ 入滅の後。僧侶の死に「滅」といふ。

【入滅】は滅度に入るの意で、證果の人の死をいふ。

【隋】ズキ 支那南北朝に次ぐ王朝。北周の外戚楊堅が宣帝の禪を受けて文帝と號し天下を一統した時（我が崇峻

天皇二年)に始まり、煬帝を経て、恭帝が唐の高祖李淵に位を譲るまで、三代三十年にして滅びた。存続僅かに三十年に過ぎなかつた隋朝が、支那文化史上重要な位置を占め得たのは煬帝の事業に俟つものが大きかつた。

我が朝は推古天皇十五年(隋煬帝大業三年)小野妹子を正使として使を派し、以來留學生・留學僧等の往來があつて、彼の文化の恩澤に浴する所が大であつた。

【煬帝】 ヤウダイ 隋朝第二代皇帝。文帝の第二子。名は廣。父帝を弑して即位し(我が推古天皇十三年)逸樂豪奢を好み、苑を造り離宮を營み、大運河開鑿の事業を起し、又外征の軍を派して四隣の夷狄を服するなど、隋朝の勢威は此の一代に極まつたかの觀があつた。然し重なる苛稅勞役に民心は漸く離反し、朝鮮半島の高麗が叛くに及んで、三度大軍を派したが、却つて大敗を喫するに及び、群雄が各地に鋒起し、中にも太原の守將李淵はその子世民と共に遂に都長安を陥れた。偶々出遊してゐた煬帝は江都(江蘇)に於て臣下のために弑せられ隋朝は滅亡するに至つた。

【道翹】 ダウゲウ 國清寺の使僧。閩丘胤の命によつて、「寒山詩集」の編輯をたすけたといふ事實の他、その傳記は詳かでない。

【饗應】 キヤウオウ 茶菓酒食等を設けてもてなすこと。
【僧院】 ソウキン 寺院。

かくて豐干の偉大さは全く超人的なものとなつた。閩丘胤をして「活きた阿羅漢ですな」と感歎せしめたのも當然であつた。而もこの偉大な豐干の風格を越えて、寒山拾得は更にその上にゐたことが後に顧みられねばならぬ。

【阿羅漢】 アラクアン 略して羅漢といふ。梵語 Arhan の音譯。應供・殺賊・離惡などの意。小乗佛教の修行者が悟了到達する最高の地位。佛教に於てその悟の境地を聲聞・緣覺・菩薩の三乘に區別する。阿羅漢はその聲聞の極位で、賊を殺すが如く、一切の煩惱を斷じ盡くし、あらゆる惡を離脱して、人天の供養を受けるに堪へた聖者であるから此の名がある。

【偶々】 タマタマ (一)丁度その時。折しも。(二)たまたまか。時たま。こゝは(一)

【堆い】 ウヅタカイ 盛りあがつて高い。積つて高い。

【寂寞】 セキバク ものさびしく静かなこと。ひっそりとしてゐること。

【肌に粟を生ずる】 ハダにアハをシャウする とりはだがよる。寒さや急の恐怖のために皮膚の毛孔が粟粒のやうに粒立つ。

【偶々山風が窓の外を吹いて通つて、堆い庭の落葉を捲き上げた。其の音が寂寞を破つて、さわさわと鳴ると、閩は髪の毛の根を締めつけられるやうに感じて、全身の肌にも粟

【本堂】 ホンダウ 寺院の一部で本尊を安置する堂宇の俗稱。法相・華嚴・眞言の諸宗では「金堂」禪宗では「佛殿」天台宗では「中堂」といふ

【行脚】 アンギヤ 僧侶が佛道修業のため諸國をめぐる旅すること。「アンギヤ」の音は「唐音」。

【春く】 音は「ショウ」 うすつく。白に入れてつく。

【骨惜しみ】 ホネヲしみ 心身を勞することを厭ふこと。

【同宿】 ドウシュク (一)同じ旅宿にとまり合せること。

またその人。(二)同じ寺に住むこと。又その僧侶。こゝは(二)の意。

【わたくし共が大切にいたすやうになりました。すると或日ふいと出て行つてしまはれました】

「何か外の僧達と變つたことはなかつたのですか(同頁初行)と問ひ、そして、「いえそれがあつたのでございませ」と答へる、かうした宗教的俗人が何か奇蹟を求め、そして盲目的な尊敬を捧げようとする、宗教的眞人にとつてそれは全く無價値であるばかりでなく、彼はまた極力さういふ尊敬から逃げようとするものである。大切にされて何故出て行つたのか、生徒自らに考へさせたい所である。

【或日山から虎に騎つて歸つて參られたのでございます。そしてその儘廊下へ這入つて虎の背で詩を吟じて歩かれました】

を生じた】

特別凄愴の氣をそゝるやうな形容詞もない。それでゐて「肌にも粟を生じた」程の鬼氣身に逼る戰慄を感じさせる。荒削りのやうで實は要所々々をしつかりと抑へて行く鷗外の手堅い手法には實に驚嘆に堪へない。而もそこに閩の境涯がはつきりと出てゐる。「活きた阿羅漢ですな」と如何にも尤もらしく感心してゐる彼が、實は豐干の住居では「全身に粟を生じて」縮み上る凡下の境地を曝露して、「忙しげに空家を出た(次行)のであつた。

【不審】 フシン (一)つまびらかでないこと、たしかにわからないこと。(二)うたがはしいこと。あやしむべきこと。こゝは(一)

【廚】 クリヤ 「黒屋」の轉訛といふ。烟に煤ける意より出た名。臺所。食物の調理所。

【願つてもないこと】 我から願つても容易にかなひ難いこと。大層都合なこと。

【あれは豐干さんが松林の中から拾つて歸られた捨子でございます】

道翹によつて紹介される拾得の經歷である。前に豐干は「普賢でございます(八二頁二行)と紹介した。豐干と道翹との境涯の差が、この紹介の言葉によつてはつきり示されてゐる。

【上座の像】 ジャウザのザウ こゝは「賓頭盧尊者の像」

(九〇頁一行)を指す。

「上座」は、こゝは、寺院で食堂に安置してある文珠菩薩又は賓頭盧尊者の像のこと。「聖僧」ともいふ。

【香】カウ 佛教では、有情非常の氣の、一切鼻に嗅ぐべきものをいふ。香は能く人の信心を佛に通ずる使である。とせられ、「特使」といひ、又心身の穢を去つて清淨ならしめ、信心を増發せしめる功德があるものとされてゐる。

【燈明】トウミヤウ 神佛に供へる燈火。みあかし。

【賓頭盧尊者】ビンヅルソソシヤ 賓頭盧の尊稱。おびんづる様。

「賓頭盧」は、梵語 Pindola の譯。不動又は捷疾の意。十六羅漢の第一位に居り、白頭・長眉の相を具へ、佛勅を受けて涅槃に入らず、天竺摩利支山に住んで、末世の衆生濟度に任じたといふ。今支那・日本の諸寺に多く之を安置し、我が國では俗間にその像を撫でて疾病の快癒を祈る迷信がある。

「尊者」は佛語で、智徳の備つた尊い人、多く羅漢の尊稱に用ひる。

【そのうち或日上座の像に食事を供へて置いて、自分が向き合つて一しよに食べてゐるのを見つけられましたさうでございます。賓頭盧尊者の像がどれだけ尊いものか存ぜず致したことと見えます】
これも亦道翹によつて理解された拾得の紹介である。所

謂奇行を奇行としてその奥にひそむ眞實の姿をみようとなし、道翹の境地が示されてゐる。つまり木や金の佛像への無自覺的尊敬に終始して、人間の中に生きてゐる佛をみる事が出来ないのである。それにしても、知らずして道翹に「一しよに食べてゐる」といはせた所に、寒山の境涯は出てゐるといへよう。

【只今では厨で僧共の食器を洗はせて居ります】

【拾得が食器を洗ひます時、残つてゐる飯や茶を竹の筒に入れて取つて置きますと、寒山はそれを貰ひに參るのでございませう】

道翹に紹介される寒山と拾得の日常である。一人は皿洗ひであり、一人は殘飯貰ひである。殊に「洗はせて居ります」には先輩道翹のかゝる場合における得意さがはつきり出てゐる。

【此の時道翹が奥の方へ向いて、「おい拾得」と呼びかけた】
「皿を洗はせてをります」といふ心理の發展である。「おい、拾得」には、道翹の拾得に對する全部が投げだされてゐるやうな響がある。

【木履】ボクリ (一) 木製のはきもの。下駄の類。釋名に「屨乃木履之下有齒者」とあるを見れば、齒のない下駄を木履といつたもののやうである。(二)國語では「あしだ」といふ。こゝは(一)

【一人は髪の一三寸伸びた頭を剃き出して、足には草履を

穿いてゐる。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履を穿いてゐる。どちらも瘦せてみすばらしい小男で、豊干のやうな大男ではない】

閻丘胤の目にうつつた寒山拾得である。これが普賢と呼ばれた拾得と、文珠と稱された寒山との風貌であつた。拾得は振向いてにやりと笑ひ、寒山は身動きもしない。弊衣蓬髮の此の二人の風彩と、それに結びつくこの薄氣味悪い舉動が、二人の風格に底深い陰翳を投げてゐるやうに思はれる。

【朝儀大夫、使持節、台州の主簿、上柱國、賜緋魚袋、閻丘胤と申す者でございます】

【寒山詩集】の劈頭に見える撰者閻丘胤の「朝儀大夫・使持節台州諸軍事・刺史・上柱國賜緋魚袋」とあるによつたものであらう。(參考欄参照)

「恭しく禮をして」とあるから、これは當時の官吏として極めて禮を盡くした挨拶だつたに違ひない。牧民の職にゐる賢人を禮する事を手柄のやうに思ひ、それに満足を感じてゐる善良な閻が、今賢人の前に立つて禮を盡くしてゐる姿である。形式的で、大仰で、こけおどしのこの挨拶が、寒山拾得の前にあつては、また何と滑稽な姿に見えることか。對立した二つの境涯がこゝに鮮明に浮かび上つたかの感がある。

【朝儀大夫】(テウギタイフ)は、支那の階官の一。唐代

には一品から九品に分れ、朝儀大夫はその五品にあつた。もとゞ散官であるが、官吏の身分地位を定め、朝廷の席次もこれによつて決つた。

【使持節】(シチセツ)は、天子の代官として州・郡の軍事を統べる役。魏晉時代より起り、唐代には州の長官は文官であつたが必ず州内の軍事をかねすべたもので、閻にもこの官名があつた。この名は天子より「節」(しるし)を賜はつて證としたのによる。

【上柱國】(ジャウチウコク)は、勳官の一。隋唐に於ては最高級(我が勳一等)におかれてゐた。地方官にこの勳官のあるのは當時のそれがかなり安直にあたへられたものだからである。

【賜緋魚袋】「シヒキョタイ」は、緋衣・魚袋を賜はつてゐる者の意。唐初服制が定つて、三品以上は紫衣・金魚袋・四品五品は緋衣・銀魚袋をおびることになつてゐる。「魚袋」は唐代官人が朝廷に出入するに當つて一種の門鑑として用ひられた魚形のわりふを入れた袋。

【逃げしな】逃げて行く折。逃げる拍子。
「しな」は、動詞に添へて「そのをり」の意をあらはす接尾語。

【逃げしなに寒山が「豊干がしゃべつたな」といつたのが聞えた】

腹の底からこみあげて來た笑聲と共に、これは何か空に

つゝ抜けて高く響く超自然の聲のやうに聞える。「豊干がしやべつたな」には、更に豊干を超越した境涯が暗示されてゐる。此處に至つて象徴化は絶頂に達したのである。「といつたのが聞えた」などもよく此の場の氣分を描いて、無量の趣を見せてゐる。

【たかる】「集る」の字をあてる。より集る。集りつく。

【立ち竦む】「立ちスクむ 立つたまゝ身がちぢみ上がる。」

【竦む】は、音「ショウ」おそれぢぢむ。身が小さくなる。

【驚いて跡を見送つてゐる間が周圍には、飯や茶や汁を盛つてゐた僧等がぞろぞろと來てたかつた。道翹は眞青な顔をして立ち竦んでゐた】

置き去られ叩きのめされた人々の姿がこゝにある。賢者を禮する満足に酔つてゐた間の驚きによつて、「おい拾得」と呼び棄ててゐた道翹の眞青な顔によつて、それがはつきりと象徴されてゐる。二人の高い境涯に對比される凡下の姿を描いて文を結んだ餘情深い手法が如何にもよく据つてゐる。

2 文の構成

- 第一節 初―七六頁三行 物語の時代。
- 第二節 七六頁四行―同頁末行 新任台州の主簿閻丘胤の威勢。
- 第三節 七七頁初行―八三頁七行 閻の國清寺訪問の因縁。
 - 1 閻の病氣と僧の來問（七七頁初行―七八頁二行）
 - 2 僧に對する閻の盲目的信仰と、僧の咒による治病（七八頁三行―八一頁六行）
 - 3 僧は國清寺の豊干であつたこと、及び豊干の紹介する寒山拾得のこと（八一頁七行―八三頁七行）
- 第四節 八三頁九行―終 閻の國清寺訪問。
 - 1 訪問道中の有様と閻の自己満足（八三頁九行―八五頁四行）
 - 2 道翹の案内説明（八五頁五行―九一頁一行）

(イ) 豊干の住んでゐた僧院の案内説明（八五頁五行―八八頁三行）

(ロ) 寒山拾得の經歷・生活の説明（八八頁四行―九一頁一行）

3 寒山拾得の風貌とその非凡な境涯（九一頁二行―終）

3 文意

善良にして愛すべき主簿閻丘胤は、いはば平凡な有識者の中の代表的人物である。閻の頭痛を一瞬の咒によつて忘れさせ、豊干は、虎に騎つて詩を吟ずる高德の僧である。併し豊干の不思議な神通力も、寒山拾得の境涯に比しては尙その下にあつた。凡人の理解や尊敬を超絶した無限に高い世界、それを閻丘胤の盲目的な尊敬と、高德豊干の風格を透して象徴的に表現した文である。

4 鑑賞批評

背景的人物に過ぎない主簿閻丘胤を全篇の主人公の如くに仕立て、これに豊干の高徳を配し、更に道翹の解釋を透して、そこに超人間的な寒山拾得の境涯を、立體的象徴的に浮かび上らせてゐる構成の妙がまづ指摘せられねばならない。閻丘胤は愛すべき善良な官吏であつた。此の善良な官吏の盲目的な尊敬の對象として、豊干の偉大な境涯が置かれてゐる。それは閻丘胤や道翹から奇蹟として仰がれる超人間的な偉大さではあつたが、併しその偉大さはなほ偉大さとして理解せられる世界である。「豊干がしやべつたな」の一語によつて、まだ人間的臭味の脱しきれない豊干の風格が喝破せられたと共に、人間の理解や尊敬を遙かに高く越えて存在する、寒山拾得の境涯が瞭然として描きだされたのであつた。閻丘胤・道翹から豊干を経て寒山拾得に至る、この一種の遠近法的手法が、立體化と象徴化とを遺憾なく果してゐる。文に些かの技巧の跡も止めず、寧ろ淡々として荒削りのやうでゐながら、而も要所々々を的確に抑へて、登場人物それらの性格・心理・境涯を浮彫の如く鮮明に描き分けてゐる巨匠鷗外の筆致はもとより驚歎すべきものがあるが、特に枯淡な筆は、こ

の氣格の仙ともいふべき超人間的風格と如何にも自然な融合をとけて、その象徴化を全うしてゐるものと言ひ得るであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一) 現代語で書かれた文、殊に現代小説は所謂「読み」に困難を感じない。殆ど註釋を要求しないかと思はれる。併し實は現代小説の眞の「読み」はさう容易なものではない。殊に註解事項の如きも屢々無識の中に讀過されてゐることが少くないのである。かうした安易な學習態度は是正せられて、飽まで正しい學習指導が要求せられねばならない。言ひかへれば、學習の方法、體系が確立されねばならないのである。教授者その人に於て學習の方法、體系が自覺せられ、それが具體的に働いてこそ、生徒の讀みの深さが測定されて、彷徨する生徒の學習の方向を指示する事が出来るからである。

(二) 全文を通じて、量的には豐干禪師の事、閻丘胤のことが最も多く扱はれてゐる。併しそれは結局寒山拾得を描出せん爲の背景的人物であつて、この手法に二人の風貌境涯が立體的に浮かび上つてゐる事は既に述べた通りであるが、人間の理解を超越したかうした境涯は、つまり人間の言説を以てしては表し得ない世界であつて、かうした構成をとるより他はなかつたのではなからうか。其處を狙つた作者の意圖が敬服に値するのである。まづ何よりも作者の、この立體的構圖が見えて來なければならぬ。

(三) 閻丘胤の人物が單に善良なる官吏に過ぎないことは瞭然たることであるが、豐干の偉さも、閻に寒山や拾得の事を吹聴してゐる所などから考察して人間の至り得ないといふ程度のもではない。こゝから推しよめて「豐干がしやべ

つたな」の一語に象徴される寒山拾得の境涯が味到せらるべきであらう。

(四) 鷗外の文趣は此の時代の生徒には一寸理解し難いのではないかと思ふ。醇化され盡くした枯淡な筆には文がな滑ることを誠めて、ひたすら精讀せん事が要求されねばならない。

2 参考

(一) 本課に省略した部分を原文から採録する。

イ、本課七六頁三行「閻丘胤といふ官吏がゐた。」の次。

尤もそんな人はゐなかつたらしいと云ふ人もある。なぜかと云ふと、閻は台州の主簿になつてゐたと言ひ傳へられてゐるのに、新舊の唐書に傳が見えない。主簿と云へば、刺史とか太守とか云ふと同じ官である。支那全國が道に分れ、道が州又は郡に分れ、それが縣に分れ、縣の下に郷があり、郷の下に里がある。州には刺史と云ひ、郡には太守と云ふ。一體日本で縣より小さいものに郡の名を附けてゐるのは不都合だと、吉田東伍さんなどは不服を唱へてゐる。閻が果して台州の主簿であつたとすると、日本の府縣知事位の官吏である。さうして見ると、唐書の列傳に出てゐる管だと云ふのである。しかし閻がゐなくては話が成り立たぬから、ともかくもゐたこととして置くのである。

ロ、本課八三頁七行「閻は天台の國清寺をさして出かけるのである。」の次。

全體世の中の人の、道とか宗教とか云ふものに對する態度に三通りある。自分の職業に氣を取られて、唯營々役々と年月を送つてゐる人は、道と云ふものを顧みない。これは讀書人でも同じ事である。勿論書を讀んで深く考へたら、道に到達せずにはゐられまい。併しさうまで考へないでも、日々の務だけは辯じて行かれよう。これは全く無頓著な人である。

次に著意して道を求める人がある。専念に道求めて萬事を抛つこともあれば、日々の務は怠らずに、斷えず道に志してゐること

もある。儒學に入つても、道教に入つても、佛教に入つても、基督教に入つても同じ事である。かう云ふ人が深く這入り込むと、日
日の務が即ち道そのものになつてしまふ。約めて言へばこれは白道を求める人である。

この無頓着な人と、道を求める人との中間に、道と云ふものの存在を客観的に認めてゐて、それに對して全く無頓着だと云ふわけ
でも無く、さればと云つて自ら進んで道を求めるでも無く、自分をば道に疎遠な人だと諦念め、別に道に親密な人がゐるやうに思つ
て、それを尊敬する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、單に同じ對象を尊敬する場合を顧慮して云つて見ると、道を求める
人なら遅れてゐるものが進んでゐるものを尊敬することになり、ここにいふ中間人物なら、自分のわからぬもの、會得することの出
來ぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、偶もそれをさし向ける對象が正鵠を得てゐても、な
んにもならぬのである。

(二) 本篇の物語の典據である「寒山詩集序」を次に採録する。

朝議大夫使持節台州諸軍事守刺史上柱國賜緋魚袋閭丘胤撰、詳に夫みれば、寒山子とは何れの許の人なるかを知らず。古老より之
を見て皆謂へらく貧人風狂の士と。天台唐興縣の西七十里に隱居す。號して寒巖と爲し、毎に茲の地に於てし、時に國清寺に還る。
寺に拾得なるもの有り、食堂を直し、尋常に餘殘の菜滓を竹筒の内に收め貯ふ。寒山若し來れば即ち負うて去る。或は長廊に徐に行
きて叫喚快活に獨言獨笑す。時に僧遙ひ捉へて、罵り打ち追ふときは、乃ち駐り立ちて掌を撫つて呵々大笑し、良久うして去る。且
狀貧子の如く、形貌枯悴なり。一言一氣、理其の意に合ひ、沈んで之を思へば、隱に道情を況す。凡そ言を啓く所、玄默を洞該す。
乃ち禪皮を冠と爲し、布裘破弊、木屐履を履む。是れ故らに至人迹を避れ、類を同じくして物を化するなり。或は長廊に唱詠して、唯、
咄哉咄哉三界輪廻と言ひ、或は村墅に於て、牧牛子と與に歌笑す。或は逆或は順、自ら其の性を樂しむ。哲者に非ずんば安んぞ之を議
る可けんや。胤、頓丹丘の薄官を受け、途に臨むの日、乃ち頭痛、榮はる。遂に日者と醫とを召して治するに轉た重し。乃ち一禪師
に遇ふ。名は豐干。言く、天台山の國清寺より來つて、特に此 相訪ふと。乃ち命じて疾を救はしむ。師乃ち舒容にして笑つて曰く
身は四大に居す。病は幻より生ず。若し之を除かんと欲せば應に淨水を須ふべしと。時に乃ち淨水を持つて師に上る。師乃ち之を

喚く。須臾にして袿疹す。乃ち胤に謂つて曰く、台州は海島の嵐毒あり。到らん日必ず須く保護すべしと。胤乃ち問うて曰く、未審
し、彼の地に當に何なる賢有つて師となして仰ぐに堪ふべきと。師曰く、之を見れば識らじ、之を識れば見ず。若し之を見んと欲せ
ば、相を取ることを得ざれ。乃ち之を見る可し。寒山は文殊なり。迹を國清に避る。拾得は普賢なり。狀貧子の如く、又風狂に似た
り。或は去、或は來、國清寺の庫院に在つて廚中に走使して火を著く、と。言訖つて辭し去る。胤乃ち途に進んで台州に任ずるに至
る、其の事を忘れず。任に到つて三日の後、親ら寺院に往き、躬ら禪宿を問ふ。果して師に合へり。乃ち、唐興縣に寒山拾得ありや
否やと勸せしむ。時に縣、申稱すらく、縣の界の西七十里の内に當り一巖有り、巖中に古老より貧士有るを見る。頻りに國清寺に往
つて止宿す。寺庫の中に一の行者有り、名づけて拾得と曰ふと。胤乃ち特に往きて禮拜せんとして國清寺に到り、乃ち寺衆に問ふ。
此の寺先に豐干禪師の院有りと、何れの處にか在る。并に拾得寒山子何れの處にか見在すると。時に僧道翹答へて曰く、豐干禪師の
院は經藏の後に在り。即今、人の住し得る無し。毎に一虎有り、時に此に來つて吼ゆ。寒山拾得の二人は見に廚中に在り、と。僧、
胤を引いて豐干禪師の院に至る。乃ち扉を開けば、唯虎迹を見るのみ。乃ち僧寶德道翹に問ふ、禪師在りし日、何の行業か有りし、
と。僧曰く、豐干在りし日、唯、米を舂いて供養することを攻め、夜は乃ち唱歌して自ら樂しむ、と。遂に廚中に至れば、胤の前に
二人、火に向かつて大いに笑ふを見る。胤便ち禮拜す。二人連聲胤を喝し、自ら手を相把つて呵々大笑。叫び喚んで、乃ち云く、豐
干饒舌、彌陀を誦らずして、我を禮して何をか爲ん、と。僧徒奔り集つて週に相驚き訝る、何の故にか尊官二貧士を禮する、と。
時に二人乃ち手を把つて走つて寺を出づ。乃ち之を逐はしむれば、急に走り去つて、即ち寒巖に歸る。胤乃ち重ねて僧に問うて曰く
此の二人肯て此の寺に止らんや否や、と。乃ち扉を窺めしめ、喚んで寺に歸して安置せしむ。胤乃ち郡に歸つて、遂に淨衣二對を製
り、香藥等特に送つて供養す。時に二人更に寺に返らず。使乃ち巖に就きて送上す。寒山子を見るに、乃ち高聲に喝して曰く、賊々
と。退きて巖穴に入り、乃ち云く、汝諸人に報ず、各々努力せよ、と。穴に入り去れば、其の穴自ら合し、之を追ふ可き莫し。其の
拾得の迹は沈んで所無し。乃ち僧道翹をして、其の往日の行狀を尋ねしむるに、唯、竹木石壁に書せる詩、并に村墅の人家廳壁の上
に書せる所の文句三百餘首及び拾得の土地の堂壁の上に於て書せる言偈、竝に纂集して卷を成す。(岩波文庫本による)

(三) 太田悌藏氏譯註「岩波寒山詩」に附せられた解説中、参考とすべき部分を左に抄録する。

寒山子とは如何なる人物か。豊干拾得と共に、其の行住は、次に掲げる編者閻丘胤の序、又宋の志南「三隱集記」「宋高僧傳」「景德傳統錄」「佛祖通載」「明高僧傳」等に明かではあるが、實は甚だ明かでない。編者閻丘胤は、朝議大夫上柱國賜緋魚袋と云ふ立派な肩書を持ちながら「唐書」にも見えず、僧道魁も亦、寒山子との因縁の外、其の行跡は分らない。而も閻丘胤の序、「景德傳統錄」には年代を明記せず、「宋高僧傳」十九には、豊干を封干に作り、唐睿宗先天中、京師に在つて行化し、萬廻師の蹤を躡み、風狂の相これに過ぎた、とある。萬廻師は先天の前年睿宗の景雲二年に寂した。閻丘胤が豊干に寒拾二子の特説を聞き、天台山に尋ねたのは此の前後である。然るに同じく「宋高僧傳」十一には鴻山靈祐が、先天より約百年を降る憲宗の元和中、天台山に入つて寒山子に遇つたと傳へ、志南の「三隱集記」には、寒山子が鴻山及趙州と相語つた因縁を記し、而も、豊干を正觀の初の人とする。然るを「佛祖通載」には貞元から元和中の人として居る。かくの如く其の年代を知るべき記録が區々であるのみならず「宋高僧傳」には豊干が天台山を出て京師に行化したと記し「傳統錄」には天台山に示寂したと録する。然れども寒山子が其の詩中に唐の萬廻法雲と、梁の光宅寺法雲とを混同して萬廻を梁朝の人とするが如き不用意を示し、玄宗の朝の畫聖吳道子を吟じ、拾得詩中には趙州と同門崇山を頌じ、更に寒山子が「客を送る琵琶谷」と詠ずるを、白居易の琵琶行を知るものと解すれば、琵琶行のものされた元和十年以後たる事が確實となる。而して此の詩が大いに世に行はれ、後、曹山本寂がこれを註解して「これを對寒山子詩」と謂つた。此の註解は「唐書藝文志」によれば七卷あつた。

補材

面壁九年といふ言葉があるが、九年も壁に靜坐した人であつて、はじめて虎のやうな猛獸にも騎れるかと思つた。

(島崎藤村)

「藤村讀本」から採つた。「藤村讀本」及び作者「島崎藤村」は、五三頁・補材欄参照。

【面壁九年】メンベキウネン 禪宗の初祖達摩が嵩山の少林寺で、壁に面して坐すること九年、初めて悟つたといふ傳燈錄の故事に出た語。傳燈錄に、「達摩祖師至少林寺、面壁九年、始悟而成佛。」とある。

「達摩」は、南印度香至國王の第三子、初め般若多羅に道を學ぶこと四十餘年、師の寂後大い化を本國に布いたが、梁の普通元年支那に來り、武帝に謁して問答

し、機縁未だ熟せずとして、去つて嵩山の少林寺に赴き、面壁九年、坐禪修養した。魏の明帝の正光二年、慧可はこれを訪ひ、斷臂して求道の赤誠を示し、禪の奥義を傳へられたといふ。永安元年示寂。後、唐の代宗から圓覺大師と謚せられた。

【靜坐】セイザ 心をおちつけて端坐すること。端坐して心身をしづかにおちつけること。

これは達摩大師の話であるが「虎に騎れる」といふ點に於て、豊干禪師の高徳と相通するものがある。豊干禪師の超人間的な境地は、やがて面壁九年の修養によつて到達されたものに他ならない。そこに關聯して補材としたものである。

一四 見よや春

渡邊 畢山

一 解題

1 作者

渡邊畢山 ワタナベクワザン 名は定靜、字は子安、又は伯登、通稱は登、畢山はその號である。寛政五年九月、三河國田原藩(三宅氏)の藩士渡邊定通の長子として江戸の藩邸(半藏門外にあつた)に生まれた。幼時から大志を抱き、初め儒者を志したが、一家貧窮のため、家計の資を得る目的を以て繪畫の道に入り、白川芝山・金子金陵・谷文晁等の諸家に從遊し、傍ら經史の勉學に勵んだ。一方藩務にもよく精勵し、天保三年寄役に列し、佐藤信淵に學んで殖産興業に力め治績大いに見るべきものがあつた。又夙に西洋の事情に着眼し、蘭學を鷹見泉石に學び、高野長英・伊藤玄朴・江川英龍等と交つて時事を論じ、開國の要を唱へたため、洋學嚴禁の際とて漸く幕府の注目する所となつた。天保九年英使モリゾンが我が漂流民を護送して來ると、幕府は是非を問はずこれを擊退した。畢山はこれを不可とし、「缺舌或問」「慎機論」等を著して世人を警醒したが、偶々同志の中に南洋渡航を議する者があり、幕府の監察鳥居耀藏の探知する所となり、長英等と共に捕へられ、十一年一月、終身藩地禁錮の刑に處せられた。然るに憂世の念なほやみ難く、幽囚の間屢々同志と書信を往復し、ために幕府の追譴する所となり、累を藩侯に及ぼさんことを恐れ、十二年十月自刃した。享年四十九。明治二十四年正四位を追贈せられた。

著作には、前記「缺舌或問」「缺舌小説」「慎機論」等があり、輯めて「畢山全集」に收められてゐる。その畫は宋・元

明の諸家を範として洋畫の描法を採り入れ、近世畫壇の巨星として知られてゐる。

2 出典

「畢山全集」卷一所收の「退役願書稿」から抄録した。「退役願書稿」は畢山四十六歳(天保九年)の作で、時に藩侯から藩政を執掌すべく内命があり、大いに感ずる所があつて、藩の家老に差出したものである。

本課はその中極めて一小部分の抄録に過ぎない。原文を参考欄に掲載して置いたから就いて参照せられたい。

3 主眼及び採擇の趣旨

逆境は偉人傑士の温床であるといふ。併し逆境は結局機會に過ぎない。その機會をとらへて發憤の動機たらしめる情熱と、その逆境に蹉跌しない不撓の意力と、その意力を以て闘ひ抜く血みどろな努力とにその人の偉大さは存する。古來偉人英傑と呼ばれる人の多くは、實に逆境の中にあつて感奮興起し、これを征服した人々であつて、畢山も亦その例を漏れない。備前侯の御先供に打擲された少年畢山は、其處に發憤の動機を把へ、困窮悲慘、赤貧洗ふが如き逆境を、不屈不撓の精神力で闘ひ抜いたのである。幕末の志士として、はたまた近世畫壇の巨星として、畢山が永くその名を青史にとゞめた所以の遠きを思はしめ、發憤の契機たらしむべき人間的・國民的教材として採擇した。

二 解釋

1 語釋

【見よや春】「見よや春大地もとほす地蟲さへ」(九九頁)といふ畢山自作の俳句の第一句を取つて、編者が假につけた題名。

【私十二歳の春】光格天皇文化五年(二四六八年)に當る。

一四 見よや春

英船が長崎を掠めたり、南部・津輕兩氏が蝦夷に警備の兵を派したり、漸く物情騒然たる時代である。

【日本橋通】ニホンバシドホリ 江戸日本橋通。今の東京市日本橋區。全國里程の元標とされてゐる有名な日本橋があり、日本橋から京橋を経て銀座に通ずる「通り」を

古く「日本橋通」といひ、今もなほこの稱呼は用ひられてゐる。

【通行仕候節】 ツウカウツカマツリサフラフセツ 通行致して居りました際。

【仕】は、「仕へまつる」の音便の「つかうまつる」の約訛。(一)仕へるの敬語。(二)轉じて、する・なす・行ふの謙讓語。こゝは(一)

【候】は、(一)侍坐する。伺候する。(二)あり、居りの敬語として、専ら書牘文の候文に用ひる。(三)語の下に添へて相手に對する尊敬の意を表す。こゝは(二)の用法で、此の場合には、過去・現在・未來の意味に係らず普通現在形が用ひられる。こゝでは過去の意味を表してゐる。

尙現代文法の「動詞の語尾は送假名として書き添へる」といふ約束に従へば「通行仕り候ふ節」となる譯であるが、古い書簡文、殊に「候文」にあつては、能ふ限り假名を省くのが慣例となつてをり、此處もその一例であるが、本課にはかういふ形が多いのであるから、豫め注意して置くべきであらう。

【備前侯】 ビゼンコウ 備前岡山藩(三十一萬五千二百石)の藩主。時の藩主は從四位少將池田齊敏。薩摩藩主島津齊彬の弟で、上總介齊政の養子となつて岡山藩を繼いだ。

【先供】 サキドモ 行列などの先に立つて行く供人。お先拂ひの從者。

この場合は「ダイシユ」と讀む。こゝは(一)

【横行】 ワウカウ 氣まゝにおし歩くこと。

【天分】 テンブン (一)天から受けた性質。天性。(二)天から命ぜられた職分。天職。(三)天から受けた分限。生まれながら身にうけてゐる身分。こゝは(三)

【發憤】 ハツブン (一)憤を發すること。憤慨すること。(二)精神をふるひ勵まして目的達成に邁進すること。奮發。論語・述而篇「其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至。」こゝは(二)

【發憤に堪へず】とは、發憤せずにはゐられない。

【如何なる儀】 イカなるギ どんなこと。いかなる事。

【儀】は、こゝでは、こと・ことから意味・件等の意。【私は同じ人間にて、天分とは申しながら、その御先供に當りて打たるゝ事發憤に堪へず、今より何なりと志し候はば、如何なる儀にても出來申すべし】

「王侯將相寧んぞ種あらんや」といひ、又「舜何人ぞ、予何人ぞ」といつて、感奮した支那人がある。今峯山は打擲した當の御先供には一顧もくれず、先づ備前侯その人に目をつけてゐる。そして「同じ人間でありながら」と、そこに發憤の動機をつかみ、「如何なる儀にても出來申すべし」と、その大志を燃え立たせてゐる。打擲されてその人を恨む小我に拘泥せず、大局に立つて發憤興起する、峯山の偉さはそこにあつた。それが彼の名を青

【當り】 アタリ 「あたる」は突きあたつたやうにとれさうであるがさうではない。碧瑠璃園作の「渡邊峯山」には「虎之助慌てて道を渡らんとしたるが、如何したりけん雨後の泥濘刎ねあがりて、前供の袴の裾にしとどかかぬ。」(参考欄参照)とあるが、恐らくこんな事であつたらう。

【當る】はこゝでは「であふ」意で、出會つて粗相をする位に譯す。

【打擲】 チャウチャク 打ちたくこと。毆打すること。【ダテキ】と讀まぬやう注意。

【忘れも仕らず】の倒裝形に注意させたい。「子供ながら大息して」といひ、「發憤に堪へず」とも言つてゐる。少年ながら氣骨隆々たる峯山の、逆境にあつたが故に、更に堪へ難かつたであらう悲憤の情も察せられるのであるが、同時にこれは、生涯に亘る發憤の動機として、峯山の中に把住せられてゐたことを示す強い一語であつた。

【大息】 タイソク 大きい息をつくこと。ためいきをつくこと。

【大衆を率ゐて】 タイシユウをヒキゐて 多數の人数をひきつれて。

【大衆】は、(一)多數の人。多衆。(二)多くの僧侶。

史に列せしめた所以であり、生徒をして反省感激せしむべき點である。

【存ず】 ゾンズ (一)思ふ。考へる。(二)知る。心得る。こゝは(一)

【高橋文平】 タカハシブンペイ 三河國田原藩士。藩主三宅康明の祐筆として深く信任せられた。峯山は幼よりこれと親交を結び、その感化を受ける所が大であつた。殊に峯山が畫家として名をなすに至つたのは、本課にある通り、彼が文平の助言に耳を傾けた結果であつて、峯山は深くこれを徳とし、後日その像を描き、朝夕これに禮拜したと傳へられてゐる。

【祐筆】 イウヒツ 「右筆」とも書く。(一)昔、貴人の側に侍して筆札の事を掌つた役。かきやく。(二)武家時代(特に徳川時代)に、廣く文筆のことを掌つた職名。奥祐筆(若年寄の下で日記・公文・書案のことを掌つた職)とがある。(三)文筆に長じたもの。文學に従事するもの。こゝは(一)

【相勤む】 アヒツトむ つとめる。

【相】は、こゝは書牘文で動詞の上に添へて語調を整へる語。以下「儒者に相成り」(次行)「相心得」(同頁末行)などの「相」はすべてこれである。

【日頃】 ヒゴロ (一)日數の重なること。數日。(二)平

常。つね。ふだん。(三)此の頃。近頃。こゝは(一)
 【合口】 アヒクチ (一)話のよくあふこと。又その人。
 (二)轉じて、仲のよい友達。親友。こゝは(一)
 【候間】 サフラフアヒダ ますから。ましたから。
 【間】 は、こゝはから・ゆゑ・ほどに等の意を表す接尾語。

【爽鳩先生】 サウキウセンセイ 鷹見爽鳩。名は正長。字は子方。通稱は三郎兵衛。爽鳩はその號である。本姓は石川であるが、田原藩の家老鷹見定重の養嗣子となつてその姓を冒した。年十六、始めて仕へて藩侯の近侍となり、ついで二十一歳、江戸に遊學し、荻生徂徠の門に入つて經史を修め、また好んで詩を作つた。後、經世済民の學に志し、廣く諸書を涉獵し、和漢の政治・法令・制度儀制の類に至るまで精通せざるはなかつたといふ。當時田原藩は國用に乏しく、藩士に對する給與の如き頗る不如意であつたが、爽鳩が宰臣となるに及んでその施政宜しきを得、終に富藩の名をなすに至つたといふ。文化八年十月歿。享年六十一。

【儒者】 ジュシヤ 儒學を修める人、又講ずる人。
 【儒學】 は、孔子を宗師とし、これを繼承祖述した子思・孟子の所説を参照し、四書・五經を經典とする學問。その思想は天を以て根本とし、仁によつて一貫された人道を道とし、道を履踐するを徳となし、政治・道徳上の教

を述べ、修己治人を以て目的とする。

【私親父】 ワタクシシンパ 私の父。三河田原藩士渡邊定通である。定通、字は叔澤、市郎兵衛と稱し、巴洲と號した。本姓平山氏。十五歳渡邊家の養子となり、寛政四年養父の歿後家督をついだ。以來恪勤して世子傳役・奥向用掛等を経て文政元年寄役にまで進み、祿百石を食むに至つた。後病を以つて職を退き文政六年九月歿。享年六十。

【持病】 チビヤウ 全治し難く常に悩み苦しむ病氣。宿病。宿疾。

【看病】 カンビヤウ 病人を介抱すること。看護。みとり

【按摩】 アンマ 按摩ともに、「撫でる」「もみさする」等の意。

【退食】 タイシヨク (一)古く廷臣が朝廷より退き私宅にかへつて食事をする義。(二)轉じて、役人が君公の御前又は官廳から歸つて休息すること。詩經・國風・召南・羔羊篇「退食自公、委蛇委蛇。」こゝは(一)

【奉公】 ホウコウ (一)公にかへ奉ること (二)君國のために力を盡くすこと。(三)主人にかへること。こゝは(三)

【相心得】 アヒココロエ 「相」は前記接頭語。「心得る」は(一)會得する。さとる。(二)のみこむ。承知する。(三)覺悟する。思ひさだめる。(四)ひきうける。こゝは(三)

【母の手一つにて】 母一人の働きで。

「手」は、こゝは仕事・作業・はたらき等の意。

【母】は永井大和守家臣河村氏の女。俗名つぎ。貞順にして至孝、又女丈夫であつたことは本課の通りである。

【その日を送る】 「日を送る」は、日を過す意から、轉じて日々の暮をたてる、日々の生計をたてる等の意。

【老祖】 ラウソ 名は定延。本姓平山氏。寶曆二年、藩侯の命によつて渡邊家をつぎ、十五人扶知を賜はる。

【些か】 イササカ すこし、わづか。ちよつと。

【餘裕】 ヨユウ 餘りあつてゆたかなこと。ゆとりのあること。こゝは生計のゆとり。

【貧窮】 ヒンキユウ 貧しく生活にくるしいこと。貧困。貧苦。

【筆紙に盡くし候處にはこれなく候】 文章に書きつくし得る程度ではありませんでした。

【筆紙】(ヒツシ)は、(一)筆と紙。(二)轉じて文章。こゝは(二)

【出家】 シュツケ 自分の家を出て佛門に歸依すること。即ち僧侶になること。轉じて僧侶。

【旗本】 ハタモト 旗下・麾下とも書く。(一)軍中で大將のゐる所。本陣。本營。(二)大將の麾下にゐる直參の將士。(三)江戸時代の武士の一階級。家祿一萬石未満・御目見得(徳川時代直參の士中將軍にまみえる資格あるも

の)以上で、將軍に拜謁する格式のあつたもの。こゝは(三)の意。

【板橋】 イタバシ 東京市板橋區板橋町 舊江戸四宿(千住・品川・新宿・板橋)の一。中仙道口の首驛で、浦和・大宮方面に向ふ要路である。板橋とは驛の北、石神井川の架橋より起つた名である。

【生別れ】 イキワカレ 生きながら永遠に別れること。「生別」と熟す。

【見も知らぬ荒男】 全然知らない荒くれ男。
 「見も知らぬ」は、「見知らぬ」の意を強めて、間に強意の助詞「も」を挿んだ形。一面識もない。見たこともない。

【荒男】(アラヲトコ)は、荒々しい男。荒くれ男。亂暴な男。こゝは必ずしも荒男ではなかつたであらう。併し弟を連れ去つて行く男が少年畢山の目には「荒男」に見えたのであつた。

【髣髴】 ハウフツ 「彷彿」とも書く。(一)よく似てゐる様。さながら。(二)はつきりしないさま。ほのか。ぼんやり。こゝは(一)

【今に目前に髣髴仕候】 今に至るまで目の前にあり／＼と思ひ浮かんでまゐります。

「今に」は、今に至るまで。今もつて。

【ちら／＼降り来る雪の中を、八・九歳の弟が見も知らぬ荒男に連れられ、後を振り向き振り向き別れ候事、今も目前に髣髴仕候】

少年畢山の切ない悲しみが滲み出た涙の記録である。弟を連れ去つて行く男が、少年畢山の眼にはどんなにか荒男に映つたことであらう。その「荒男」に連れられて、「振り向き振り向き」降りしきる雪の中を去り行く弟の姿が、「今に目前に髣髴」する程、はつきりと胸奥に刻まれたのも、その弟が熊谷宿で客死したことを思ひ合せると、血縁の間の不思議な豫感であつたかとさへ思はれる。

本課全文を通じてみて、こゝには特別に修飾が施されてあり、その調子も極めて感傷的であるが、結局畢山の眞情が自ら此の形と此の調子とを以て流露したのであらう。

【定意】 「畢山全集」所載の渡邊家系譜に、「次男定意、年十三にして上州館林の善道寺に薙髮、僧となり、文政十三

年七月二十六日、武州熊谷驛釜屋音次郎方に客死す。東京市小石川區餌差町善雄寺に葬る。年二十八。」とある。「定意」は、碧瑠璃園作「渡邊畢山」には「テイイ」と音讀してゐるが、畢山の名定靜を「サダシヅ」と訓じてゐる所を以てすれば、これも何か訓讀のある筈である。一本には「サダモト」と訓じてゐるが、確實な根據がある譯ではない。今は假に「テイイ」と音讀して置くことにする。

【熊谷宿】 クマガヤシユク 現埼玉縣熊谷市。鐵道高崎線の主要驛、秩父鐵道の接續驛であり、同地方一帯の交通産業の中心地をなしてゐる。熊谷寺・熊谷堤などの名所がある。古くは中仙道の一驛であり、秩父街道・忍街道の要衝に當り、北關東の要驛であつた。

【客死】 カクシ 旅行先で死ぬこと。他郷で死ぬこと。

「客」は、旅又旅人の意で、萬葉集には「客」を「タビ」と讀んでゐる箇所が多い。

【雷之助】 ライノスケ 「畢山全集」所載の渡邊家系譜に「三男平次、初名雷之助、改木村又藏。水野伯耆守家來堀田又左衛門の養子となる。文政十一年六月十三日歿す。東京市牛込區神樂坂獅子寺に葬る。」とある。

【青松寺】 セイシヨウジ 曹洞宗の巨利。東京市芝區愛宕山の南を占めて東面し、三縁山増上寺に隣接する。文明年間太田道灌の草創にかゝり、開山は雲岡俊徳である。

初麴町貝塚の地にあつたが、天正年間今の地に遷り、江戸時代には觸頭(寺社奉行と宗内の寺院との間にあつて命令傳達及び相互の交渉を掌つた寺)として榮えてゐた。

【御旗本屋敷】 オハタモトヤシキ 水野伯耆守家來の堀田又左衛門の邸。(前記雷之助年譜参照)

【是以て】 コレモツて これはつまり、これは要するに。

「以て」は、上をうけて下をおこす辭であるが、こゝでは如上の説明を總括する氣持で、つまり、要するに位に解したらよい。

【丸裸】 マルハダカ (一)まっぱだか。あかはだか。(二)轉じて、一身の他に全然所有物のないこと。こゝは(二)【親不知】 オヤシラズ 幼兒の時から他人に養はれ、又は孤兒になつて、生みの親を知らないこと。

【仕合】 シアハセ 「爲合」の義。(一)始末。仕儀。有様。次第。(二)爲合せた折に、運に當り不安に當ること。めぐりあはせ。運命。(三)幸運。吉運。こゝは(一)

【先方里方を侮り候を心外に存じ】 養子先堀田家の者が雷之助の實家を輕侮致しましたのをくち惜しく思つて。

「先方」は、養子先の堀田家を指す。

【里方】(サトカタ)は、實家。嫁・養子・掣などの實家の汎稱。

【心外】(シングワイ)は、(一)一心の外。(二)思ひの外

意外。案外。(三)事の意外に殘念に思ふこと。口惜しいこと。思ひの外なる事を恨み憤ること。こゝは(三)【出奔】 シユツボン 出で走ること。逃亡して踪跡をくらますこと。逐電。

江戸時代には徒士以上に「出奔」といひ、足輕・仲間等には「脱落」の語を用ひた。

【その後主人惜しき人物に存ぜられ、引戻され候】

その後養父が惜しい人物にお考へになつて、養家へつれもどされました。

「惜しき人物に存ぜられ」といふ説明の中には、辛苦のうちに夭折した弟を哀惜する畢山の衷情が籠つてゐるのではなからうか。親不知のやうに丸裸で養子にやられて苦しみ通して死んだ弟への限りない憐愍の情と、「先方里方を侮り候を心外に存じ」て、出奔した程の氣慨に満ちた若者の早世をなげく眞情と、それが自らこの説明となつて溢れ出たものであつた。

【主人】は、こゝは養父堀田又左衛門を指す。

【存ぜられ】の「られ」は敬語の助動詞。

【引戻され】の「れ」は受身の助動詞。

【辛苦】 シンク づらく苦しいこと。難儀。

【かの地】 養家堀田又左衛門の住んでゐた地。

【罷り成る】 マカリナる 成る。

「罷る」は、動詞に添へて、語聲を強め、又は謙遜の意

を示す接頭語。罷りまちがふ・罷りあり等の類。殊に書牘文には語調を整へるために多く用ひられてゐる。類字「羅」(ツラヌ・音ラ)「罹」(カカル・音リ)との區別注意。

【歸府後】 キフゴ 江戸に歸つて後。

【府】は幕府所在地の意で、徳川時代江戸の別稱。

【罷り越す】 マカリコす 「罷り」は前記接頭語。「越す」は「行く」の意、こゝでは嫁いで行つたのをいふ。

【妹兩人】 イモウトリヤウニン 「崋山全集」所載・渡邊家系譜に、「長女もと、上州桐生岩本家に嫁す。孝行を以て聞ゆ。慶應三年七月二十六日、年七十三にして病歿す。次女まき、永井左衛門の家來佐藤藤助に嫁し、年三十二にて歿す。東京麻布徳用寺に葬る。」とある。

【一人は遠方へ遣はし】は、長女もとの桐生岩本家に嫁したをいひ、「一人は貧家へ罷り越し」は、次女まきの佐藤藤助に嫁したのを指してゐる。

【彼此】 カレコレ あれやこれや。いろ／＼。

【至貧至困】 シヒンシコン 此の上もなく貧困なこと。

【無策無術】 ムサクムジュツ 術策のないこと。手段がないこと。はかりごとのないこと。

【非業同様の病死】 ヒゴフドウヤウのビヤウシ 不慮の災禍に罹つて死ぬと同様な悲惨な病死。横死同様な病死。「非業」は佛語。前世の業の報いでないこと。定業でないこと。

のこと。

【業】は梵語(Karma)の譯語。身・口・意によつてなす善惡の所行。前世の業は現世の果となり、現世の業は來世の果となる。

【兄弟過半非業同様の病死仕候次第に御座候】

死は最後である。死にまさる慘事はあり得ないのだ。貧困故に、兄弟姉妹達がかく非業同様な病死を遂げて行く現實をならべたてれば、それで十分であらう。生やさしい形容詞や、修飾語で言ひ盡くし得る貧困ではないのである。「當時困難至極の儀御察し申さるべく候」と訴へる言葉には、聞く者の胸を抉る萬斛の涙が溢れてゐる。

【蒲團】 フトン 「フトン」の音は唐音。もと僧家で坐禮・禮拜などに用ひる蒲の葉で編んだ圓座をいひ、我が國ではこれを轉用して専ら「しとね」の意に用ひた。

【夜具】 ヤグ 夜寝る時に用ひる蒲團・搔卷等の類の總稱。夜の寝具の稱。

原文には「夜着」とあるから、こゝはその意味に解すべきである。「夜着」は、衣の形をして長く袖をつけ、厚く綿を入れた寝具で、上に覆ひ懸けるのに用ひる。

【ごろ寝】 ごろネ 寢床に入らず、着のみ着のまゝでごろりと横になつて假寝をすること。

【炬燵】 コタツ 「火燵」とも書く。床をきつて爐を設け、上に櫓を置き、蒲團などをかけて、手足を温めるもの。

た。(二)江戸時代に二朱銀の異稱。一朱は銀一兩の八分の一。こゝは(一)

【身内】 ミウチ (一)全身。からだぢゆう。(二)親類。みより。一門。(三) 同じ親分に從屬する子分。(俠客・博徒仲間)の語)こゝは(二)

【山伏】 ヤマブシ (一)世を遁れて山住みすること。(二)佛道修行のために山野に起臥する僧。(三)特に修驗道の道者、即ち修驗者。普通「山伏」と呼ぶ時は(三)の意の「修驗者」をさしていふ。

【修驗道】は仁明天皇承和年中役小角の創設した一種の教法で、眞言宗に基づき、胎藏界・金剛界の兩部を旨とし、加持祈禱を行ひ、本地垂迹説に從つて神佛何れにも仕へる。その修驗者は、教理上の研究に餘り力を用ひず、山中に入つて難行苦行して呪法を修得し、神驗を證得することを目的とした。小角から義角に傳はり、後一時中絶したが、宇多天皇の頃、醍醐僧聖實がこれを再興し、ついで勝覺がその流を傳へた。明治五年禁止され、十八年再興を許され今日に及んでゐる。

【本所一丁目】 ホンジョヒトツメ 今の東京市本所區一つ橋通り千歳町。昔は兩國から龜戸に通ずる堀割に架けられた橋が五つあつて、兩國の方から數へて「一の橋・二の橋……五の橋」と呼び、その橋の南北に通ずる通りを順次「一丁目・二丁目……五丁目」といつた。

【高料の藥種】 カウレウのヤクシユ 値段の高い藥の材料。「高料」は、料金の高いこと。値段の高いこと。次に「藥禮」といふ語があるから、これは醫者の手を経ないで、それ以外に藥種商から買ふ藥種を指すものと思はれる。

【藥禮】 ヤクレイ 醫者に支拂ふ藥價と謝禮。

【日食の麵類】 ヒグヒのメンルキ 毎日食べる麵類。

【麵類】は、饅飩・蕎麥・素麵等の類。

【日食の麵類】の語は、米食などは言ふに及ばず、かつがつ腹を満たす麵類の如き粗食にすらくことかく貧困を物語つてゐる。

【事缺く】 コトカク 不足する。満足に得られない。

【建具】 タテグ 戸・障子・襖など、すべて室をくぎるために取附けて開閉するもの。

【質物】 シチモツ 借金の擔保として質主に提供した物品。質ぐさ。

【借り盡くす】 借りられるだけは借りてしまふ。

【南鐐一片の儀にて】 南鐐一片を手に入れるために。

【南鐐】(ナンレウ)は、(一)もと銀の異稱。爾雅釋器に、「白銀謂之銀。其美者謂之鐐。」とあり、「南」は支那の荊州(今の湖北・湖南兩省の地)揚洲(今の江蘇省揚州府)の地方の呼稱で、此の地方は金銀の名産地である。故に銀の美質なるものを「南鐐」といふやうになつ

【存生】 ソンジャウ 生きながらへてゐること。生存。存命。

【助右衛門】 スケエモン 「畢山全集」所載渡邊家系譜に「四男助右衛門、岡崎中山氏を繼ぐ。」とある。

【僅か南簾一片の儀にて、母方身内に當り候山伏の本所一つ目に住居候方へ、母事只今存生仕り居り候助右衛門と申す弟を背負ひ、雪中を冒して罷り越し、夜に入り候うて歸宅仕候】

身内だとは言へ、たかが山伏であつてみれば、懐の豊かな人とも思へない。併し「親類どもにも借り盡くし」せつばつまつた今は、その人をすらあてにしないでならなかつたのだ。而も、「夜に入り候うて歸宅仕候」とあるを見れば、路もかなり遠かつた筈である。その遠路かけて、雪の降る中を、子を背負ひ、たつた二朱の金を借りに行かなければならなかつたといふのである。いかに逼迫した窮乏状態にあつたかは想像に難くない。「血の出るやうな貧困」とは、こんな事實を言ふのであらう。次の、洗足の湯を沸かすために衣服を焦して叱られたといふ告白は、暗澹たる生活に昂ぶつてゐる母の氣持が滲み出てゐて、涙を誘はれるものがある。

【洗足の湯】 センソクのユ 足を洗ふための湯。

【芝】 シバ 現東京市芝區。白芝山の住居が芝のどの邊にあつたのか詳でない。

の汎稱となつた。縦は二四乃至二六、横は三二乃至三五、五種 二十枚を一帖とし、十帖を一束とする。

【調ふ】 トトノふ ここは、買ふ・あがなふの意。

【初午燈籠】 ハツウマドウロウ

「初午」は、陰曆二月の第一の「午の日」に行ふ稻荷神社の祭禮。初午祭。此の日は社頭に幟をたて、社道境内等に繪燈籠をかけつらね、小兒は集つて太鼓をうちならしなどする風がある。此の繪燈籠を「初午燈籠」といふ。「初午燈籠」は普通掛行燈式の燈籠で、表に戲畫をかき地口・川柳などを書き添へる。よつて一に「地口燈籠」の異稱がある。

【一貫】 イツカン 一文錢一千枚。(時に九百六十枚の事もあつた。)貨幣價值の上の相違は別として、唯單位の上からみれば今の十錢に相當する。今尙故老の間に十錢を一貫、二十錢を二貫、以上三貫五貫八貫などいふはこの遺風である。

【遠江屋】 トホトホミヤ 「初午燈籠」を商ふ店であらう。

【麴町天神】 カウチマチテンジン 現東京市麴町區平河町にある天満天神。祭神は菅原道眞。社格は府社。太田道灌が川越の三芳野天神を分祀したものだといふ。

【たこや】 同天神の社頭にあつた風屋。

【憐を乞ふ】 アハレミをコふ 買ひとつて貰つたことを言ふ。

【白芝白】 ハクシザン 白川芝山。名は景時、芝山又は玉蕉庵と號し、書畫をよくした。安政年中歿。享年九十。「白芝山」は「白川芝山」を支那風によんだ稱である。

【畫工】 グワコウ 繪をかくことを業とする人。繪かき。畫家。繪師。

【附屆】 ツケトドケ 年始・年末或は中元等に、謝禮又は義理合上贈りとどける金品。

【行届く】 ユキトドク (一) 遍くゆきわたる。隅々まで氣がつく。萬事にぬけめなくする。(二) 至りつく。及ぶ。追ひつく。等しい程度に達する。ここは(一)

【如何仕るべきかと泣き沈み候】

手も足もでぬ窮乏に、さすが畢山ほどの人も泣いたのであらう。「泣き沈み候」の率直な告白は、失望落膽なす所を知らなかつた畢山の心情を推し測るに十分なものがあ

【金陵】 キンリョウ 江戸の畫家。姓は金子。名は允圭、字は君璋、金陵又は日南亭と號した。谷文晁に師事し、殊に花鳥をよくした。文化十四年歿。

【大森勇三郎】 オホモリユウサブラウ 田原藩士 傳未詳。

【少々は出來候様に相成候】 少しは繪がかかるやうになりました。

【半紙】 ハンシ もと杉原紙の一種の延紙(のびが)を半分切つて用ひたものを稱したが、後、別にその大きさに製した紙

「憐を乞ふ」は、何か物乞ひのやうに、辭を低くし、腰を折つて金を受取つたであらう當時の畢山の惨めな姿を思ひ描かしめる言葉である。

【閑暇】 カンカ 「閑暇」とも書く。ひま。いとま。

【朝七つ時】 アサナナツドキ 午前四時。

昔、一晝夜を十二分して、眞夜中を九つとし、順に八つ七つ・六つ・五つ・四つと數へ、又眞晝を九つとして、同様に數へて四つに至つた。此の數は漏刻ではかり、鼓を打つてこれを一般に知らせたのであるが、此の場合、易の陽數「九」からはじて、時毎に二倍・三倍……して打つたのを、後にその倍數十八(二・九)・二十七(三・九)・三十六(四・九)……といふ數から各々その十位の數を去つて、残りの八・七・六・五・四を打つことになつたので、その數を時の名としたといふ。

【何分閑暇これなく候へば、冬に相成り候へば朝七つ時に起き出で、飯を焚き、その焚火にて讀書仕候】

晝道の修業は所詮彼にあつては一時の道草に過ぎなかつた。彼は尙儒者たらんとする一念は棄てなかつたのである。そしてかくの如く人知れぬ苦心と努力とを以て目的の貫徹に邁進したのであつた。學問に對する此の熱意とこれを裏づけるまつしぐらの努力と、これこそ、單に畫家としてのみでなく、藩政にたづさはつてはよくその職を全うし、幕末の志士としては至誠奉公の名をたたへら

れた、崋山その人の偉大をなした所以であつた。生徒をして静思反省せしむべき所である。

【取立つ】 トリタツ (一)特別のものとしてとりあげる。特別に目をかける。(二)擧げ用ひる。召しだして使ふ。こは(一)

【文晁】 ブンテウ 谷文晁。名は正安、通稱は文五郎、文晁は字である。文朝・師陵・一如居士・學畫齋などの號があり、家を寫山樓といつた。初め加藤文麓に學び、後北山寒巖に就いて清人の畫風を修め、宋の牧溪・我が雪舟探幽等の筆致を追慕し、深く内外古今の畫法を究め、遂に自ら一派をたてた。人物・山水・花鳥・蟲魚を巧にし、特に水墨山水に妙を得てゐた。田安家に仕へて繪師となり、松平定信の知遇を蒙り、集古十種及び石山寺緣起に増補した。門下に集るもの千餘人を數へ、頗る豪華な生活を營み、當代の畫壇に君臨した。天保十二年十二月歿享年七十八。

【古繪目錄】「畫學大全」「歴代名公畫譜」「君臣圖像」「本朝畫譜」「日本名山圖繪」等の名著がある。

【右畫事】 ミギダワジ 右の如く繪をかくこと。

【初午燈籠】 書いて筆紙の料を得たことをいふ。

【内職】 ナイショク (一)本職以外に營む職業。(二)婦人などが家事の暇にする賃仕事。こは(一)

【恩澤】 オンタク めぐみ。なさけ。

江戸濱町に生まれた。幼にして學を好み、長ずるに及んで嶄然頭角を顯し、天下第一の人たらんことを志して深く聖賢の學に心を潜めた。寛政二年藩侯の近侍となり林述齋と親交を結び共に切磋した。四年述齋の勸説によつて大阪に遊び、中井竹山に學んで翌年歸府。述齋が林家を繼ぐに及んで師弟の名を正してその門に入つた。その學は陽に朱子學を奉じ、陰に王陽明の理氣同一論に従ひ、爲に陽朱陰王の謗を蒙つたが、既にして林氏家塾の塾長となり、名聲頓に揚り、門生日に多きを加へた。文政九年、一齋輔導する所の岩村侯の世子が國を承けるに及んで、彼は擧用せられて老臣の列に加はり國政に參與した。天保十二年十一月擢んでられて幕府の儒官となり名聲天下にあまねく、諸侯或は聘して講説を乞ひ、或は駕を官舎に枉げて學んだ。弟子三千と稱され、我が近世の名教育家の一人として、門下に佐久間象山・安積良齋・横井小楠等の偉材をだした。幕末國家多事に際し、林祭酒を助けて外交文書を作り、また幕府に獻策する所も少くなかつた。安政六年九月病歿。享年八十八。大正四年十一月、從四位を追贈された。

【古本大學旁釋補】「大學摘說」「言忘錄」「愛日樓文詩」等數十種の著書がある外、一齋點なる經書訓點法を創案した。

崋山二十六歳は恰も文政九年、一齋が五十六歳で、林氏

【澤】は、うるほひ。めぐみ。

【見よや春大地もとほす地蟲さへ】

【大地】 ダイチ と音讀する。この讀みの持つ音感の強さには、青年崋山の感激を、そのまま擱んで投げだしたやうなひびきがある。

【地蟲】 チムシ 金龜子科の昆蟲の幼蟲。體は圓筒狀で長さ三糎位。數條の横皺があり、毛を生ずる。頭胸部は赤褐色で、胴部は灰白色。觸れると腹面を屈曲して丸くなる。土中に蟄居して草根や嫩苗の根を食害する。すくもむし・ねきりむしの異名がある。

一句の意は、見よ、世は正に春、生々の氣は鬱勃として天地に滿ち、長い冬を地中に蟄伏してゐた地蟲さへ、今や大地の中から這ひいでて活動をはじめてゐるではないか。若者たる自分がどうして安閑として青春を過すことが出来ようか、といふのである。

全體に荒けづりで大膽率直な表現の中に、氣魄に滿ちた崋山の感激に燃える熱情が脈々として波うつてゐる。そしてそれはまた、不撓な意志の根柢から突き上げて來た烈しいまでの強さを藏した調べである。青年崋山の面目躍如たるものがある。

【一齋】 イツサイ 佐藤一齋。名は坦、字は大道、通稱は捨藏、一齋は號である。他に愛日樓・老吾軒等の別號がある。美濃の岩村侯の家老佐藤信由の子。安永元年十月

家塾の塾頭の時代である。

【申し談ず】 マウシダンザ 「談ず」の敬語。「談ず」はこはかけあふ。談判する。

【門制】 モンセイ 門を閉ぢるきまつた時刻。門限。

【然るべく取成す】 シカルべくトリナス 適當にとりかはらふ。

【取成す】は、こは、よいやうに計らふ。とりつくらふ。

【申遣はされ候趣】 一齋から言ひよこしました趣旨。

その趣旨は、本人親父より自藩の家老を経て願ひ出でよといふのであつたのであらう。「即ち親父より：以下、崋山は早速その手續をとつたのである。

【村松六郎左衛門】 ムラマツロクザウザエモン 田原藩の筆頭家老。崋山を厚く信任し、田原藩が紀州家と隙を生じた時、六郎左衛門は彼を起用してこれが折衝に當らしめ、崋山はまたこの恩遇に酬いて力を盡くし、百方奔走して事無きを得たといふ。

【沙汰】 サタ (一)裁斷處分すること。(二)朝廷の命令。官府の指令。君命。(三)報知。(四)うはさ。評判。(五)こと。儀。こは(三)の意で、一齋の塾から村松六郎左衛門の許に來た通知を、そこから更に崋山に傳へられたのである。

【熟々存じ候は】 つくづく考へましたことには。

「熟々」は、「ツクツク」又は「ツラツラ」と訓ずる。よくよく。

【上にして君に忠、下にして親に孝】上、君に對し奉つては忠義を盡くし、下、親に事へては孝行をはげむといふ意である。

【上にして下にして】「君に忠親に孝」と對句形式をとつてゐる。

【急にしては親の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相成り申すべき一事に思を定め申候】

現下直接には親の貧困を援助し、將來に於ては天下第一等の畫家にならうと、繪畫の一事に勵まうと決心致しました。

【急にしては緩にしては】「親の貧を助け天下第一の畫工と相成り」と、これも對句の形をなしてゐる。

【急】は、猶豫すべからぬこと、現在急ぎなすべきこと。

【緩】は、差し迫つてゐないこと、將來ゆつくりなすこと。

【上へ忠と申す事は無學無術にては叶ひ難し、これよりは愈々以て繪事を専らとして、急にしては親の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相成り申すべき一事に思を定め申候】

君への忠は「無學無術にては叶ひ難し」といふ。今學問への道を斷念するの餘儀なきに至つた峯山は、ここには

つきり畫道によつて立たんことを決意したのであるが、彼にあつては、此の「畫術」によつて忠孝一本の道を具現せんとするにあつたのである。繪はもとより口すぎの仕事ではない、さりとて又藝術的自己陶醉の満足でもない、それは忠道貫徹の一方途である、それが「一事に思を定め候」峯山の根本的精神だつたのではなからうか。治道と畫道の一致を説く次項以下の所論も實にこの精神の示現であり、幕末志士峯山の佛をも亦此處に窺ひ得るのである。

【心と申すもの立ち申さず】精神といふものが確立しない。即ち何を如何に描くべきか、その主題、意匠といふやうな内面的製作意識が明確に立てられない。

【落ちなく】手落がなく。萬遺漏なく。缺けた所がなく。【やたけ】「彌猛」の字をあてる。いやたけく。いよいよたけりたつて。勇みに勇んで。

【手が心の通りに動き申さず】

表現技巧が作意に相伴はないことを言つたのである。

【手】はこは描法、即ち技巧をいひ、心は作意、即ち前記主題意匠等をいふ。

【胴體四肢治まり申さず】

「胴體」は軀幹、「四肢」は兩手・兩足。「胴體四肢」は全身の意。全身を統整する主體は心である。心が治まつて胴體四肢が治まるのであるから、つまりこは「心と申

【總身のうち猶更に御座候】

心が立たねば落ちなく見事な仕事は出來ず、手が心の通り動かねば畫は完全に出來ない如く、全身の中に於ける關係影響する所の大なることは、身外のもの比でないことを言つた。

【家中】カチユウ（一）家中の中。（二）大小名の家來の總稱。藩士。（三）昔、藩士の住んでた町内。こは（一）

【百姓】「ヒヤクセイ」と讀む時は一般人民。蒼生。四民。【ヒヤクシャウ】と讀む時は農民。こは「ヒヤクシャウ」をいふ。

【出精】シュツセイ 精をだすこと。事に勵むこと。勵精。【これあるべく哉】ありませうかありますまい。（反語）

【哉】は漢文で疑問・咏歎・反語を表す助辭をそのまゝ轉用したもの。

【諸侯にして、國を治めずして家中・百姓に出精致せと令し候とも服従仕る者これあるべく哉】

國全體を一箇の身體に譬へれば、これを主宰する諸侯は即ち心であり、家中百姓はとりもなほさずその胴體四肢である。繪事に就いて言へば、「心と申すもの立ち申さず云々」といふ所に當るのである。

【奉行】ブギヤウ（一）上の命を奉じて事を執り行ふこと。又はその者。（二）徳川時代、上命を受けて事務を擔當した種々の職の長官。寺社奉行・町奉行・勘定奉行・書

すもの立ち申さず」を更に敷衍したのであつて、畫事を以て全身全靈的な仕事と考へてゐる峯山の創作論の表現である。これを次頁一行には、「總身の中、髮の先、爪の端まで皆畫に相成候様仕る事にて候。」といつてゐる。峯山の作品が不滅な生命に輝く所以は、實に彼の全身全靈がその中に投げこまれて、「腹より溢れ」出た作品だからであらう。

【明窓淨几は書の合】メイソウジヤウキはショのガフ 明るい淨らかな書齋は書を読むに最も適合してゐる。

【明窓淨几】は、明るい窓と、その下に置かれたきよらかな机、即ち明るくきよらかな書齋。

【几】と「机」とは普通によつて同意に用ひられる。

【風雨擾雜は書の乖】フウウゼウザツはショのクワイ 風が荒れ雨が激しく亂れ降るやうな時は、心がかき亂されて讀書に不適當である。

【擾雜】は、入りまじり亂れること。みだれにみだれること。こは雨と風とが擾雜する意である。

【乖】は、そむく・もとのさかふ等の意。

【身外のものすら此の如し】

「明窓淨几・風雨擾雜」はこれ身外のものである。然るにそれが我々人間の心を、或は落ちつけ、或はかき亂しその影響する所は頗る大きい。

物奉行の類。こゝは(一)

【足輕】 アシガル 足輕く走驅する義。(一)平時は驅使・雜役に服し、戦時には歩卒となる者。歩同心、歩卒。(二)江戸時代に大名の物頭(鐵砲組・弓組などの首領)の下にゐた弓・銃の卒。こゝは(一)

【治安】 チアン 國家が安らかに治まること。國家社會の安寧秩序が保たれること。

【上諸侯よりして下足輕に至るまで、治安の志これなくては】

繪事に就いて言へば、「胴體四肢治まり申さず候うては」(前頁一一行)といふ所に當る。

【治道】 チダウ 國家を治める方法。政治の法術。禮記・樂記篇「審_シ樂_ヲ以_テ知_レ政_ヲ、而_{シテ}治_メ道_ヲ備_フ」

【繪事も右の通りと相心得候へども、治道の事は如何哉、審かに辨へ申さず候】

一理にして二理なき治道と畫道との一致を言はんとしてゐるのである。局外者、門外漢として「治道の事は如何

哉」と謙遜してはゐるものの、説き來つた所は卓見達識の政治論である。研學の熱意に燃えながら、不幸中途にこれを阻まれて、畫事の一事に専念しつゝ、而もこれによつて忠孝の道貫徹せんとした畢山の畫論であり、又それを通して把住せられた政治論である。畫家として、且志士であり得た彼の素因は此處に存したのであつた。

【畫事も治道も一理にして二理はこれなく、畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには】

「治道の事は如何哉、審かに辨へ申さず候」とある所から推して、「二理にして二理にこれなく」は、畢山自身の斷定と解さない方がよい。即ちこゝは、「畫事も治道も一理にして二理はこれなければ」と、次の「畫道を以て治道に試むべし」の前提條件として解すべきである。

【随分】 スキブン (一)身分相應に。自分の力の及ぶ限り。(二)すこぶる。はなはだ。(三)なまきけ知らずに。無鐵砲に。こゝは(一)

2 文の構成

第一節 初—九六頁一一行 發憤の動機と、當時に於ける家庭の窮乏。

第二節 九六頁末行—九七頁末行 畫家志望の事情。

第三節 九八頁初行—一〇〇頁七行 畫工修業中の苦心と、研學への執心。

1 家庭貧困の爲内職しつゝ、畫事に勵んだこと。(九八頁初行—同頁末行。紙筆を調へ申候)

2 研學の初一念とその蹉跌。(九八頁末行—一〇〇二行)

3 結局畫事を以て忠孝を全うせんと決意したこと。(一〇〇頁三行—同頁七行)

第四節 一〇〇頁八行—終 繪畫創作論と畫道治道一致論。

3 文意

備前侯の御先供に當つて打擲され、發憤して儒者たらんとする大志に燃えた畢山も、兄弟過半非業同様の病死を遂げた程の困苦悲惨な家庭にあつて、一時畫工志望に轉向の止むなきに至つた。然し研學の初志はそれで中斷されたのでなく、畫工修業に勵みながら、問學讀書して目的の貫徹に邁進したが、閑暇なき貧困生活のために全くその道を阻まれ、終に畫事に専念して忠孝兩全の道を遂げんとしたのであつた。治道と畫道とは一理にして二理なしとの抱負は、つまりかうした經歷を通して把住せられた彼の創作論であり、政治論である。彼の少青年時代の苦闘を物語る自叙として、少年の感奮を促すに足る好箇の讀物である。

4 鑑賞批評

構成の巧拙・表現の技巧など、文學的批評の規範を超越して、自叙傳は屢々人の胸奥を衝擊する力を藏してゐる。それは體驗の告白だからである。體驗の告白は修飾の加はらない生地のみであることによつて—勿論體驗の特異性にもよるが—より強い迫力を發揮するものである。本課に於て、畢山は寧ろ客觀的な冷靜さを以て、その貧苦の實狀と、自らの苦闘の生活とを物語つてゐる。次々に非業同様に病死する兄弟の悲運、疊にござる寝する母、或は雪中子を負うて二朱の金を借りに行く母の姿、そしてまた或は途方にくれ、或は泣き沈み、逆境の中に喘ぎ苦しみつゝ苦闘した自分自身の生活、それ等をたゞありのままに、誇張も咏歎もなく、現實を現實として訴へてゐるばかりである。而もその一語一語は畢山の涙

に濡れ、一句一句に彼の魂が籠つて、直接讀者の胸にこたへる力を持つてゐる。畫家として、經世家として、また幕末の志士として、眞に偉大であつた崋山の面目が窺はれると同時に、その偉大さをなした所以の遠いことが思はれて、自ら發憤の情を刺衝するものがある。

三 備 考

1 指導研究

(一) 候文の書牘文で綴られてはゐるが、内容上からみれば崋山がその少青年時代の苦闘を物語る自叙傳である。悲惨を極めた困窮の狀を敘し、發憤の動機を述べ、その窮乏を貫いて戦ひ抜いた努力苦闘の事實をありのままに物語つてゐるのであるが、これは、幕末の志士として、はた一世の畫家として、眞に偉大であつた崋山の全人格を背景にして、更に一段の光彩を放つものである。その爲に彼の傳記逸話などに關する生徒の既得知識を整理補説して置くことは、是非必要な豫備的工作である。

(二) 候文で書かれてゐる此の文は、形式の上から生徒に近寄り難い感じを抱かせるかも知れない。併し習熟さへすれば此の形式は何等生徒の理解の障害にはならない筈である。そして此の形式は、複雑な様ではあるが、大體二三の特別な法則慣例にあてはめて解釋し得るのであつて案外容易なのである。一應それ等の特例を解説した後、反復熟讀せしめて理解を徹底せしめると同時に、進んで、候文の持つ簡潔な味をも感得せしめたい。

(三) 學問に志し初志貫徹の爲にあらゆる苦心努力を傾けながら、萬策つきて畫家を以て身を立てるに至つた經緯と、その畫事によつて忠孝二つながら全うせんと決意したことは、單に畫家としてのみでなく藩政に處してよくその職を果たし、幕末の志士としても亦偉大であつた崋山の全人格を物語る重大な點として深く注意されるべき所であるが、同時にこ

れはまた、將來多様な方面に向つて、曲折の道を開拓して行くべき生徒に取つて、さまざまな示唆を含むものとして、慎重に玩味せらるべきであらう。

(四) 參考欄にその一部を抄録した碧瑠璃園作「渡邊崋山」は、崋山の生涯を題材にした傳記小説で、長くも明治天皇の乙夜の覽を辱くしたと漏れ承る。丁度生徒にも手頃なものであり、課外讀物として與へられるならば本課を補うて餘りあるものがあらう。

2 参 考

(一) 挿繪 渡邊崋山肖像

崋山筆。天保九年崋山四十六歳の肖像である。

(二) 渡邊崋山の「退役願書稿」中、本課に省略された部分を次に採録する。

私退役之儀に付、先達而内々申上候處、段々御懇切に御手書に付、猶又相勸辨仕候得共、何分近來痢火相募、日夜わくわく仕、心氣落付不申、今日も長英相談仕候處、公私にも、唯今之處は氣保養ならでは藥餌之届候處には無之、脈もぶよぶよと浮緩にて線緯あり無之、草木にたとへ候得ば水草之様なるものと申聞候。右は此通之次第を以長英に御問合被下候得者相分り申候。

一、私病を以退役奉願候次第、段々厚き御思召にて、有體に申上候。御聞分奉願候。先御役願仕候心定に是非を考候に、古人四十にして仕へ、七十にして致仕仕候事に候得者、御奉公之數、中三十年に御座候。私八歳にて御御初召出、今四十六歳、其間三十七八年に御座候。奉公仕、十六歳より三十三歳迄は隔日にて日勤同様に繁多に相勤候。其間和田倉御番所へ四年越勤番仕、又は三十七八歳の頃、御用人被仰付候已來、又々繁多相成、出生候より四十六年の間、中五十七年までは人並之義も出來不申者に御座候。右之通唯粟を食ひ、生て罷在候のみにて御座候。近來各様御當職に御就被成候より、當殿様被仰上方も御虚稱被下候事哉、御家督四五年後、始て、御側近くも罷出で、追々格外之御仁憐を賜はり候義、銘骨難有仕合、全く各様方之御庇護と奉存候得共、右大御恩に奉

報候義も無之義は、前書之通繁勤、犬馬之齡相積、何程御鞭撻を受候而も、練磨不仕鈍劍之如に御座候。縱令利劍に御座候而も、平日小刀にも鉋丁にも用候時は、終に大用には相立不申候。まして不練之刀、有は有、なければ無きまゝに、骨かぎり用ひ來候驚馬に御座候得ば、能々病身罷成候。第、御憐可被下候。抑、私十二歳之時……以下本課九九頁五行（全く前爽鳩先生の恩澤に御座候。）迄抄録……其頃は家中風儀不宣、心得不宣もの、若もの頭と相成、勤番ものを勤め、游所通ひ致させ、又は御役相勤候ものは威光を借、上下を恣に仕り、又は奥向不取締り、又は古道具など世話を致、又は他の婚禮慶應の事を内食に志し、又元締共寄修に相成、又は御家中之もの申合、強情の願事仕、又歌三味せん之稽古仕、果は出奔御暇人など出来、必竟御政事漫弛致、御困窮之あまり、御家中之者如何様にも勤さへすれば宜敷との事より、上役衆おどしたりすかしたり致、下を取あつかひ被申候より、かくは相成候に而誠に淺ましき御事にて御座候ひき。右之通之間、かれこれ八九十年計にても有之や。私二十六歳、正月元日……以下本課一〇〇頁七行迄抄録……かくては御奉公仕候而は出来がたくと存、内々親共へ懇願のぞきの事内願致候處、以之外之義と被申候、かくても止みがたく、とても此有さまにて、一助可相成藝は出来がたく、ましてや天下第一人と相成候事出来不申、何も眼前小孝を盡し候よりは、古人游藝の例にならひ、後々孝養を盡し可申、大道に於てさほどの間違ひも有之間敷と、ひそかに長崎表へ出奔之志を起し申候。其節書置之ためと存つまらぬ詩を作り日記有之間、左に書し入御覽候。御笑可被下候。

莫囀鶴試鴨雲 決起槍楯初見分

游子固知風木歎 花朝月夕何忘君

小鳥の大鳥を學び候は、分限を不知ごとなれ共、又志は滿べからずともいひ、つれづれ草に、物を思ひ立んには、亦傷るるをも願るべからずとも存、行く處迄は行きても見たく、乍去家語に、子養んと欲れども親とどまらず、木定らんと欲れども風止まずと申事もあれば、一旦學び得たらんには、早歸府致、孝養仕度と申を、詩に致今や出んと存候。親父早く此様子をさと心痛仕、太白堂・萊石・堀備後などへ相頼、私之心を解き候よし、其頃私夜中遅く歸り候處、親父病を抱へ途中迄迎ひに出候を、私早く相察し候得共私に不知様に歸宅致、しらぬ顔にて私へ挨拶致候時、私も胸塞竊に兩袖を濕し申候。此一時に感じ、又々志もくだけは、其後親父

御年寄役被仰付間もなく大病に及、隱居仕候後は、引續大病に罷成、二ヶ年程は晝夜看病、萬事打捨申候。死後借財等之爲に、千辛萬苦申計も無之、家督後は又々世事遊境のみ相踵、終今年四十六歳之夢路をたどり、世に生れ出てより、前書之通心勞多慮之艱難を經、終に難治之病身ものと相成候。乍去老母義、右之通苦節を凌ぎ候故、他人之母とは抜群之勞、私ありて老後も相養ひ候事、申迄にも無之、干然私一昨年より益々疲勞仕、何分にも不慮の病にても生じ可申様に存、昨年弟死後は猶更之儀に御座候。萬一母より先に一大事にて出来候而は、死候而も游魂天に歸し不申、せめて御役儀にも相願候て一年にても保養仕度候。畢竟萬一を存泣涕歎願仕候にて御座候。其上右之仕合故、何ひとつ御政事の御裨益に可相勤道筋心得不申、重き御役に尸位罷在、恐怖至極に御座候。乍去其義は御勘辨をも賜り候而も、御大政扶持可仕學文出来不申、是迄心得候義は、晝事内食計に御座候。たとひ憤發仕候とも、日暮道遠く、其上病身相成致方無之候。

(一) 唯繪事にて推謀り存候に……以下本課終迄抄録……乍去其心より手足腹爪髮迄、皆一途存込候哉、其證據無之候而者、手を取て晝はかかせられ不申候、よしや一枚二枚はかかせ候とも、年百年中左様に可參様無之候。申さば寢て居、我を歩かせて呉ると申様なるものに御座候。右之通家中中間に至る迄、何卒上を奉存上候様相成候時は、前に申惣身皆晝に相成候故、病身ものは病身だけ之義も出来可申、又病身とて惣身の内に付、剪て逃されも不仕候。或は右申様に、中間迄も左様に殘なく、上を奉存上候様には被仰候半か、水を引ものは源を不濁と申通、いかやうなる至愚なるものとて、己が呑み候水源を思はざるもの可有之哉、上の宜敷ければ己も宜く、影の形に従ふ如くに御座候。右之通三歳の童子にても、能々相分り候事の、左様に相成と不申は、各其歸する所愚昧には無之、風俗の然からしむるにて御座候。風は勢に生じ、勢ひは一致より出申候。一人悪く有之候得者、風俗を破り候は顯然なることにて候。然ば善といへども右之通に御座あるべく、恐多くも、上御一人より、御一途に御治安被思召候得者、下は破竹の如く御座候。右御一途之被思召候事は、いとも御心易きことにて、却而道ならざることを御志被遊候者、御思慮多難に相成、種々様々の御苦心生じ、御心安き日は更に無之、下たるものも一二人道理之相分り候道理を解し候て、上合候得者、跡は又破竹の如に御座候。若從はざるも憂ふるに不足候。然らば上下一體、内外一致、即座相定り可申候。其證も至て見し易かるべし。右之通に存候得共、今諸候

左様なる御事は更に承り不及、さすれば其職に當り、前の並合出来合にて、天下と申大なる箱、諸侯と申小なる箱、士と申す内のしきり、活物世界を死物にて治候世の中に御座候故、帳面例書の繁多なるにても、能ありさまは相分申候。然る上は、割れ物は下の道具に遣ふべく、無疵ものは客前に卸し遣ふべし。病身ものは官散へ用、丈夫なるものは大職を授るがよいと申ものに可有之候。右世上之事に及候も、私此度其度其内願之通奉願こと故、何卒退役之後、此趣は誰れも誰れも存候様に仕度と、太早計ながら申上候。唯々病氣快方之上は、何卒、御寸補にも相成度、差當保養仕、老母令終を心願仕候。何卒格別之御仁慈を以、偏に御取計奉願上候。

(三) 碧瑠璃園作の傳記小説「渡邊峯山」中、本課の事實と關係あるもの一二を掲出する。

(イ) 備前侯の御先供に當り打擲を受け

虎之助は一圓に辰刻までに上邸に歸りて若殿に今一輪の御藥を參らせんと、それにのみ心を奪はれて、足早に歩み行く時、不圖出會ひたるは行裝美はしき諸侯の通行なりき。この大名は備前岡山の藩主池田内藏頭殿なりき。今日は何事かの佛事ありて、上野東叡山へ參詣の途次と見ゆ。

虎之助は慌てて道を渡らんとせしが、如何したりけん、雨後の泥濘剣ねあがりて、御供の袴の裾にしとどかりぬ。「免させられ」と駆け寄りて言葉を掛け、「えらう疎忽を致しました。」「やいやい」と前供に立ちたるは眼をみはりて、「おのれは目は無いか。このお行列が目へ入らぬか。」「思ひがけもない疎忽、平に御免下さりませ。」と、大地に手をつかばかりにいふ。「これ、あやまつて済むか。おのれ武士の魂に泥を塗つたぞ。これこの佩刀のこじりを穢したぞ。泥はねて佩刀のこじりにかかり居たりき。」「平に御免を願ひまする。」「武士の魂に泥を塗つて、それであやまつて済むと思ふか、これへ出え、これへ……」「ハッ」と大地に跪いて、「誠に不調法を致しましてござる。平に御容赦を願ひまする。」「供廻りの人数はばらばらと駆け寄つて、虎之助を取圍みぬ。この中に十三四と見ゆる前髪の少年一人交り居たるが、虎之助の前へすつと進みて、「やい、おのれ兩刀さして居るな。何處の家來ぢや、名を名乗れ名を名乗れ」と威丈高に罵りぬ。

かかる處に名を名乗らんは、家の恥辱、身の恥辱、主君の御恥辱と心にこらへて「御免しを願ひまする。私名乗る名は持ちませぬ」

「なに名を持たぬといふか、おのれ杉本殿の御佩刀を穢しながら、名乗る名も無いか、怪しからぬ奴ぢや。」と彼の少年は又口を極めて罵りぬ。

「姓名を持たぬ程なりや、此奴主人も持つまいぞ。」杉本と呼ばれたるも、又尾につきて、「主君持たぬ素浪人ぢやぞ。」「お素浪人か、みぢめな奴な。」と少年は虎之助の顔を覗き込んで、「素浪人の顔御覽なされ。どことなく勢がない。どこともなくひだるさうなわ。」「ええ、ひだるさうな……」と杉本は嘲るやうに、「昨夜から食ふ物に有りつけぬと見える。いとしい奴ぢや。この鐵拳喰はしてやらうか。」「おお」と少年は躍り上つて、「まづ拙者から振舞うて遣る。」

いふ言葉も終らぬ中に、堅めたる鐵拳を虎之助の頭上に加へられぬ。二つ、三つ、終りには平手に頬を打据ゑて、「どうぢや、ちつと腹が膨れたか。」虎之助は無言なりき。打たれても叩かれても、ただ爲すがままに任せたりき。「いや、河村氏、まだ欲しさうな顔でござるぞ。」この情知らぬ少年の苗字は河村といふなりき。池田殿身内に河村某といふ者なりき。「いかさま、さらば今度は貴殿のその硬いのを振舞はるるかな。」「いや我等は。」と杉本はしたり顔に「別の物振舞ひする。」「えつ別の物とは。」「河村氏は鐵拳を振舞はれた。さるによつて我等はこの肥え太つた脛の肉喰はしてやるわ。」と早や足をあげてハッと蹴ぬ。されど虎之助は無言なりき。前齒を噛みたる唇より、たらたらと血の流るるまでは彼は無念を堪へ忍びき。「はは……」と其處に群りし家人どもは高く笑ひて、「是でちと腹が膨れたぢやらうな。」「欲しければもそつと遣る。どうぢや。」と河村は白い眼で見入つて、「まだひもじいか。」虎之助は何を言はれても無言なりき。心は絶えも入る如くに堪ふれども、無謀に喧嘩するほどの小智にてはなかりき。大地に跪きたるのみ手も出さず、口も開かず、宛ら彫刻の如く寂然たりき。

「さすがの浪人、もう腹が膨れたと見ゆるぞ。」杉本・河村を先に立てて、前供の八九人はがやがやと行き過ぎぬ。虎之助は蒼い顔、血走りたる眼、わなわたと木の葉の風に搖ぐが如き唇、じつとこの一群の後姿を見送る時、池田侯の乗輿は近づき來りぬ。虎之助は道の側へ身を避けて、見るともなく視上ぐれば、黄金色したる紙、金物燦然たる駕の窓を開けて見遣られし乗輿の主は、虎之助と同じ年比なるべき若殿なりき、虎之助は今更ながら無念の涙に暮れたりき。彼の若殿とて神の御胤にてはあるまじく、我とても同じ人

間に生を受けた。しかもその懸隔はかくの如し。上野の御参詣の御途次ならん、供廻りの美しき。さすがは幾十萬石の御主人たるべき態は見えたり。御年はまだ十一・二歳と見ゆるに、幾十人の御供に取りまかれて大道狭しと乗物を行き給ふ。我も亦同じ人間、しかも同じ程の年齢ながら、唯一椀の御薬を我が君に参らせたまに雨の暗夜を御下邸に辿り、朝の泥濘を御上邸へ歸る。身分の高下は生れぬ先よりの約束なれば已むを得まじきも、今の家人の振舞は何事ぞ。河村と呼ばれし少年、杉本といひたる前供、我を犬畜生の如く打擲して足蹴になしぬ。あはれこの恨み、あはれこの無念。虎之助は思はず拳を握りて奮然と立上りぬ。池田侯の乗物は早や上野の御門に近づきたり。「おのれ」と口の中に繰返して後を追ふべく一歩進み出でし時、彼は鋭然として覺りぬ。彼のさとき心は何物かに觸れたる如く動きぬ。「大名ばかりが尊くはない。大名の頭抑ふるものはいくらもある。大名の頭抑ふるは……」虎之助は血走りたる眼に遠く彼の乗物を見入りたりき。

(ロ) 洗足の湯を沸し候とて衣服を焦し

御前勤め終りて虎之助が家に歸るは初更なり。外はちらちらと雪降りて、内には細き燈火消えんとす。換もなく障子もなければ、庭の寒さは壁を穿ちて、家の中にも北風は浙瀝たり。一枚の破れ蒲團に瘦せやつれたる病苦を包みて淋しく横はる市郎兵衛(華山の父)の側に五人の子供は枕を並べて打臥し、母は乳呑兒の助右衛門を懷に抱きて肅然と坐り居たりき。

「虎之助か。」重々しく呼びて「今お歸りか。」御前の首尾かはる事もなく、今日も無事に退りました。「それは嬉しい事、さぞ寒からう。」と縁のとれたる火鉢を突きだして、「此處へ来て當りやいの。」「いえ」と凛とした聲で、「私寒いことはござりませぬ。」それでも今日は甚う冷える。「お父様、御容態はどうござります。」「相變らず長くなうて、私もとんと困り切つた。」と、お繼は太い息を吐いたが、「それに就いて、今日はそなたに話がある。」「えつ、私に。」「他でもないが、私は是から本所まで行かうと思ふ。」「え」とびつくりして、「お母様、何事でござります。この寒ざらに、ちらちら雪も降つて居ります。」「雪はおろか、恐しい槍が降つても、行かねばならぬ用があるわいの。」「それは又いかなる御用事でござります。」「是非叔父様にお願申さねばならぬ事がある。」「本所の叔父様に。」と言葉を切つて、「それなれば私がまゐります。」「いえ、そなたではならぬ。そなたは留守をしてたものぢ

や。」「何故私ではなりませぬ。私でならぬ事なら御手紙戴いて参ります。」「いえいえ、手紙では辨じぬ事ぢや。」といふ目の中に涙を浮べて、「そなたは知るまいが、明日戴くお米が切れて居るわいの。」「ええ」と虎之助はうなだれて、「それは困つた事でござります。」「お米ばかりではない。お父様のお薬代、それからお父様のお粥も喉へ通らぬ故、お蕎麥をおあげ申さねばなりません。その用意がないわいの。」「ああ」と虎之助は身にしみるやうな聲で、「情ない事でござります。」「それに米屋の拂ひ、彼や是やと合せると、どうしても二兩の金がなくてはならぬ。本所の叔父様にお願ひ申して、その錢を借りて参る。そなたはきつと留守してたもや。」といひ終つて眼を拭ふ。燈火も亦しばたきぬ。「お留守はきつといたします。」と虎之助は深く母の心を思ひ遣りて、「なれど此の夜中に……」「夜は深けても道はある。雪は降つても御飯がなくてはかなはぬさ。」と、末子の助右衛門を背に負ひて、「お父様に氣をつけや。」「心得ましてござります。」「夜は更けても事さへ調へば歸つて参る。しかしお金の調はぬ時は……」と悲しうに振返つて、「明日の朝になる、も知れぬ。」「それも心得て御座ります。」虎之助はきつと引受けて、「權平(下男)をおつれ遊ばせ。」「いや、好いところへ参るのではない、殊にお父様の御用もある。私ひとりで澤山ぢや。」「さらば御機嫌好う。叔父様によりお願ひして……いふのを後に聞き残して、お繼は雪の降る門邊へ出でぬ。乳の少きに瘦せたる助右衛門は悲鳴を揚げて泣くなりき。

……………中略……………
(この間に弟達を他家へやる相談があつて、やがて下男の權平と華山とで洗足の湯を沸しにかかると)

虎之助は竈の下に火を焚く中も書物を離さず巻き開きて床板の烈々と燃ゆる火に書を照らして読み居たり。「若様やはり御書見でござりますな。」「少しの間も惜しいわ。」「それでは到底御本をお止め遊ばすことなりませぬ。早う御成人遊ばしてお父様にもお母様にも温い御飯をお上げなされて下さりませ」と、權平が言へども、虎之助はそれに答へなく、一念ただ讀書に耽りたりき。雪はこやみもなく降りしきりて、庭の松葉、瀬戸の篠の葉、南天、だうだん、その他の枝より崩れて、ばたりばたりと落つる音、眞夜中の淋しさを破りて聞え、戸の隙間より吹き入る雪は、あはれ子供等の打ち臥したる褥の上にとけて、ここに寒き露を結びぬ。權平竈の前にこくりこくりと居睡りしてありしが、やがて不意に眼を覺まして、「若様紙子臭うござります。なんぞ焼けたのはござりませぬか。」書物に心を奪はれたる虎之助は何の氣もつかず、「いやそんな事はない筈ぢやが。」權平は睡たさに目をすりつつ、ぎろぎろ光

る眼を睜りしが、「やあ若様、あなたのお袖に火が着いて居ますぞ。」「おお」と驚いてみれば、天にも地にも唯一枚の紋付の袖にいつの間にか飛火やしけん、くすくすと焼け居たりき。

「若様早うお消し遊ばしませ。」権平はあわてたる聲にて言ひぬ。虎之助は驚き慌てて揉み消しぬ。讀書に心を奪はれたれど、心付かでありし中に左の袖を方二寸ほど焼きたるなりき。「若様、とんでもない事遊ばしました。奥様お歸り遊ばしたら、さぞお叱りでございますせう。」「権平、どうしようの、これぢや御前のお勤めもなにかねる。」「お召替も御座りませんのに、まあとんだ事を遊ばしました。」「権平も虎之助も焼けたる跡を恨めしげに見やるのみ。床板の薪に由つて釜の湯はわくわくとたぎりぬ。外は雪の軒端をうつつ音聞えて、夜はほのぼのと明けんとす。

……………中略……………(そこへ母が二兩の金は取付たつたが、二枚だけ借りて歸つて来る、すぐその金で買物に権平をたしてやる)

権平は唯心得て破れ傘かたげながら雪の中を急ぎ行きぬ。その後を見送つて「お母様、私とんだ疎忽を致しました。」「えい、疎忽とは。」「こんな事致してござります。」と焼きたる袂を示したりき。

「やあ存外の疎忽、外に掛けがへのない衣服、そんな事をしてなんとしやるぞ。」「誠に悪い事を致しました、これからは氣をつけます。どうぞ御勘辨下さりませ。」「お籠の前にでも居る時は何故飛火に氣をおつけなさらぬ。この様な見苦しい物着て御前勤めが出来ますか。」「はい。」と手をついて「此の後は氣を付けます。どうぞ御勘辨遊ばしませ。」と同じ詞を繰返しぬ。「勘辨するにも外に着換の物はなし。ああ鈍なことをしてたもつた。この御紋服もそなたの爲に調へたのではない。お父様の御禮服をいろいろ仕立て直してやつと袖の通るやうにした、それをよく知つてゐながら疎末すると言ふがありますか。」「悪い事をいたしました。御勘辨下さりませ。」「南條一片戴くために、雪の中を本所まで參つたその留守中に、一張羅の衣服を焼いて差引き何が残らうぞ。ああ。」とその言葉が骨身にしみる程辛く「とんだ疎忽を致しました。」「一枚より無いお召し、そのやうな事をして今日から何を着よう心で居る。」とお繼は涙さへこぼして「そんな事なら本所へ參らねばよかつたわい。」「お母様。」と身を進めて「御勘辨遊ばしませ。私が悪うございました。」「あやまつて済む事ではない。今日のお勤めをなんとしやるぞ。」「

……………中略……………(この間に父が母をなだめ、母も心が落ちついてくる)

権平は口ごもつて、「奥様」と改まつたが、「若様、どう遊ばしたのでござります。何が悲しさうにお泣き遊ばしていらつしやいます。」「おお、虎之助がな」とお繼は身も世もあられず、「私が悪かつた。お召しはどうともする。心配せぬやうにいうてたも。」「へえ。」「権平は次へ退つて、「若様、めめしくお泣き遊ばすものではござりませぬ。夫では却つて奥様に當付を遊ばすやうで、却つて御不孝になりませうぞ。」「虎之助は焼けたる袖に顔を當ててさめざめと泣くなりき。」「

一五 戯作三昧

芥川龍之介

一 解題

1 作者

芥川龍之介 アクタガハリユウノスケ 澄江堂主人と號し、又俳號を餓鬼と稱した。明治二十五年三月、東京市京橋區入船町に新原家の長男として生まれた。辰年・辰月・辰日・辰刻の出生に因んで龍之介と名づけられた。生後間もなく母方の叔母の養子となり芥川姓をついだ。東京府立第三中學校・第一高等學校を経て、大正二年東京帝國大學英文科に入學。久米正雄・菊池寛・松岡護等の諸友と、第三次「新思潮」を刊行し、三年同誌に處女作「老年」を、四年「帝國文學」に「羅生門」を發表して漸く一部文壇の注目をひいた。同年漱石の門に入り、翌五年再び第四次「新思潮」を發刊、同誌上に「鼻」を發表するに及んで漱石の激賞する所となり、一躍文壇に新進作家の地位を占めた。この年大學卒業。海軍機關學校の英語教官となり、その間引續いて小説の筆をとり、第二短篇集「傀儡師」を上梓する頃には既に中堅作家として重きをなした。大正八年三月教職を辭し、東京朝日新聞社の客員となり、以來専ら創作に従つた。その後極度の神經衰弱にかゝり、昭和二年七月田端の自宅で自殺した。享年三十六。

大正文壇に於ける所謂新理知派の代表的作家で、清澄明徹、而も高雅な作風は當代獨歩であつたが同時に理知的冷徹さは氏の作品共通の缺點とされてゐる。著作には前記「傀儡師」を初め、短篇集「羅生門」「煙草と惡魔」「影燈籠」「夜來の花」「邪宗門」「春服」「黃雀風」等、隨筆集「點心」「百艸」「侏儒の言葉」等があり、今總て「芥川龍之介全集」に收められてゐる。「鼻」「羅生門」「將軍」「秋」「藪の中」「或日の大石内藏助」「黃雀風」等は傑作として數へられてゐる。

2 出典

中篇小説「戯作三昧」から抄録した。「戯作三昧」は大正六年の作。初め大阪毎日新聞に掲載され、後第二短篇集「傀儡師」に收められた。材を「八大傳」執筆中の瀧澤馬琴にとり、所謂戯作三昧の心境を主題としたもので、全篇十五章から成り、氏の作品としては長篇に數ふべきものの一である。

本課はその最後の部分、即ち十三章の大半と、十四・十五の二章全部を殆どそのまま採録したもので、岩波書店發行の「芥川龍之助全集」(全十卷)の中、第一卷所收の文に據つた。

3 主眼及び採擇の趣旨

「八大傳」執筆中に於ける瀧澤馬琴の、創作上の苦悶と、それを通して到達せられた所謂戯作三昧の法悦境を描いたものであるが、本文の生命は、小説家としての作者が、自身の體驗の上に立つて、その創作論の一端を表現した點に存する。整然たる構成、微妙な心理描寫等、技巧の冴えは、物語を藝術化する上に於ていさゝかの遺憾もない。藝術を創作する作家の苦悶に觸れしめ、その三昧境を體感せしめることによつて、創作の意義と作品の價値とに對する認識を新にさせた。文藝的教材として採擇した。

二 解釋

1 語釋

【戯作三昧】ギサクザンマイ 小説の創作に全身心をうちこみ、いさゝかの餘念も交らぬ忘我恍惚の心境。

一五 戯作三昧

「戯作」は、本來娛樂を目的とする讀物をつくること、又その讀物の意であるが、實際には小説にのみ限られた稱呼として用ひられた。廣義には江戸時代の小説をさし

狹義には江戸時代後期に行はれた洒落本・讀本・黄表紙滑稽本・人情本等を指し、當時これらの作者を「戯作者」その著作を「戯作本」とよんだ。因みに「小説」なる名稱は、坪内逍遙博士がその著「小説神髓」(明治十八年刊行)の中で novel の譯語として用ひたのに始まり、江戸期には勿論この名稱はなかつた。

「三昧」は、梵語 Samadhi の音譯。等持・正受・正心行處等の意。心を一事に集注して動かさないこと。一心不乱に物事に熱中して我を忘れること。

【崑山】 クワザン 渡邊崑山。前課作者欄参照。

【馬琴】 バキン 姓は瀧澤、名は初め興邦、後解と改めた。字は瑠吉、通稱は清右衛門又は左吉。戲號「曲亭」は支那の地名、「馬琴」は、小野篁の句「才非馬卿、彈琴未_レ能」から取つたといふ。別に著作堂主人・蓑笠漁隱・信天翁・飯台陳人・玄同等の別號・狂號・變名が多い。父興藏は松平信成の家臣であつたが、主家に用ひられずして江戸深川の高松通淨心寺門前に浪居した。馬琴は明和四年六月その五男として此處に生まれた。幼にして不遜、長ずるに及んで益々自恣であつたが、文學には異常な才分を示し、七八歳既に句作し、十一二歳の頃には和漢古今の稗史小説數百冊を讀了したといふ。九歳父を失ひ、十二歳初めて武家奉公に出たが勤まらず、以來醫學・儒學・書道等を學んだが何れものにならず、轉々た

る青年期を経て、寛政二年(二十四歳)山東京傳の門に入つて戯作全盛の時流に投ぜんとした。然るに處女作に不評をかひ、失望して京阪の間に安住を求めたが得ず、翌年落魄して江戸に歸り、京傳の許に寄寓し小説類を耽讀しつゝ、戯作の筆をとり、漸く戯作者を以て立たんことを決意した。こゝに於て過去の放浪生活を清算するとともに性格を一變し、謹嚴なる戯作者として、時流に迎合する頹廢的著作を屑しとせず、勸善懲惡主義を標榜して立つに至つた。四年京傳の家を辭して書肆葛屋重三郎の家に移り、翌年始めて曲亭馬琴の名を以て黄表紙數種をだして漸くその名を知られた。以來續々と著作を發表し享和三年(三十七歳)「月氷奇縁」をだすに及んで、彼の文壇的地位は全く確立し、文化十一年「八犬傳」の初輯を著すや、一時洛陽の紙價を高かしらしめ、遂にその師京傳をも壓倒するの概があつた。然るに天保四年(六十歳)右眼の明を失つてから、俄かに家庭的な不幸が臻來し、六年嫡子宗伯に先だたれ、ついで左眼も盲して全く瞽者となり、また妻と死別するなど、彼の晩年は誠に悲惨を極めたものであつた。併し剛毅不屈な馬琴は、嫁みち女の貞順な孝養に守られ、愛孫太郎興邦の成人を樂みに、命終に至るまで筆硯を廢せず、「女郎花五色石臺」を絶筆に、嘉永元年十一月歿した。享年八十二。彼は稍々片意地な性格の所有者ではあつたが、負けじ

魂の強い不撓な根氣をもつ努力家で、自信力が頗る強く名聲の高まるにつれて愈々自恣となり、方正剛氣、いささかも時流に阿らなかつた。儒教思想を崇拜して勸善懲惡主義を標榜した結果、道義觀念に執して世態人情の機微に觸れ得なかつたとも評されるが、和漢の稗史小説を涉獵し、辭章を修め脚色を練り、その引證の精博、結構の雄大、文藻の絢爛等の點に於て、誠に古今獨歩の大戯作者であつた。著作は三百種に垂んとするが、日記隨筆等は僅か二十餘種に過ぎず、その大部分は小説である。

【興奮】 コウフン (一)感情が興起すること。感情のたかぶり。(二)刺戟によつて神経のたかぶりたつこと。(三)感じて心氣の奮起すること。こゝは(一)

【崑山が歸つた後で、馬琴はまだ残つてゐる興奮を力に】こゝは前との連絡がないとびんと來ない所である。参考欄に前の部分を概説して置いたから参照せられたい。要するに、「まだ残つてゐる興奮」とは、訪ねて來た崑山と藝術家の苦惱を告白し合つて、お互に藝術のために討死しようといふ様な覺悟を吐露し合つた、その「寂しいながら一種力強い興奮」をいつたのである。(参考欄参照)

【八犬傳】 ハツケンデン 南總里見八犬傳 全篇百八十回百六卷。文化十一年より天保十二年に至る前後二十八年を費した馬琴畢生の大作で、彼自らも「我を知るものは唯八犬傳か」と言つてゐる。南總の名族里見家興隆の史

實に材をとり、その結構脚色共に支那小説「水滸傳」に倣ひ、規模の雄大・文章の絢爛は他に匹儔がない。「弓張月」と共に馬琴の歴史小説中の雙璧といはれてゐる。その梗概は、

南總の里見義實は一家興亡の危期に際して、敵將の首を持ち來つた怪犬八房に、約を履んで愛女伏姫を與へる。姫は八房に伴なはれて安房の富山に住み、犬の氣を感じて姫も自ら自害する。此の時姫の手にかけてゐた珠數の親玉八箇が四方に飛散し、仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌の八徳を表す八犬士(犬山道節・犬塚信乃・犬坂毛野・犬川莊介・犬飼現八・犬江親兵衛・犬村大角・犬田小文吾)となつて生まれ、諸國を浪人修行する間に、或は君父の復讐に苦心し、或は悪人の奸作に陥るなど、幾多波瀾曲折ある挿話を經て後、名玉の縁によつて八人が相逢會し、共に里見家に仕へて主家を再興し、功なり名遂げて昇天する、といふのである。

【稿をつぐべく】 原稿を書きつがうと。

「べく」は、推量の助動詞「べし」の文語形が、口語に混用された形で、「なるべく」「然るべき人」等、「べく」「べき」の二形はよくそのまゝ口語中に混用せられる。

【先を書きつぎける前に、昨日書いた所を一通り讀み返すのが、彼の昔からの習慣である】

作者自身の體験を生かしてゐる一句である。馬琴の習慣もさうであつたかも知れないが、それは同時に作者自身の習慣であつたにちがひない。

【そこで彼は今日も】 原文の書きだしに「天保二年九月のある日」とある。天保二年は彼の六十五歳の年である。【べた一面に朱を入れた原稿】 紙面全體に朱墨で添削を施した原稿。

「べた」は、すべて。全體。
「朱を入れる」は、朱筆で訂正を加へる。朱墨で添削する。

【不純な雑音】 フジユンなザツオン 「雑音」は、不規則な波動から起る不愉快な感じをそよる音で、もと／＼不純な性質の音であるが、更にこゝでは「不純な」といふ形容詞を添へてその雑然たる不快感を強調したのである。文字と文字との間にある「雑音」とは、文章の調子を破る粗雑不快な感じを、下の「調和」といふ語の縁によつて、譬喩的に表現したものである。文字・言語、そしてその間に流れる調和といふやうなものに對する、作者の細かい神経の動きを示した一語で、矢張馬琴をかりて告白された作者自身の創作上の苦心と言ひ得よう。

【調和】 テウワ (一)音楽上の用語。音聲の調子がよくとのふこと。(二)轉じて、ものがと／＼のひやはらぐこと。矛盾衝突がなく程よくと／＼のふこと。こゝは(一)の意。

【痼が昂ぶる】 カンがタカぶる 神経がいらだつ。いらいらする。

「痼」は、激怒し易い性質。昂奮していらだち易い情。

【書き切れる所まで書き切つてゐる筈だから】 自分の筆力の及ぶ限りは十分書ききはめてゐる筈だといふのである。所謂「戯作者」共が時好に迎合してお茶を濁してゐるのは違つて、常に全力を傾け盡くしてゐた眞剣な馬琴の創作態度であり、また作者自身の體驗の告白である。此の文學的良心があつたればこそ、一度自信のぐらついた馬琴の失望と煩悶は深かつた。

【書き切る】は、主觀の域を脱して客觀性を得るまで表現を完成する。

【彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽した】 實に逞しいともいふべき一句で、冷徹な觀察による心理解剖の鋭さには驚くべきものがある。苦痛・不安・落莫たる孤獨へと沈んで行く心理はこの狼狽から發展する。

【粗雑】 ソザツ 粗末でみだれてゐること。

【粗雑な文句】は、統一もなく混亂した拙劣な文句。

【様然】 チウゼン 入りまじるさま。雜然といりくむ様。

「様」は「まじる」又は「まじふ」と訓む。

【彼は更にその前を読んだ。さうして又その前の前を読んだ】 「もう一度読み返した」(同頁二行)からつゞいて、「その前に書いた所へ」(同頁七行)「更にその前を」さうして又その前の前を」と運ぶ漸層的な手法の中に、狼

狽—混亂—焦慮と動いて行く心理が如實に描かれ、次第にゆがんで行く馬琴の表情さへ見えさうな氣がする。

【布置】 フチ (一)物をくばり置くこと。配置。(二)轉じて、文學・繪畫等の素材の配置。結構。組立。こゝは(一)

【亂脈】 ランミヤク 亂れて筋の通らないこと。混亂して條理のないこと。

【映像】 エイザウ 本來、光線の屈折又は反射によつて物の像のあらはれること、又その物の像のことであるが、こゝでは、「敘景を讀んで心に思ひ描かれる心象」の意に用ひた。

【敘景】 ジョケイ 景色をのべ記すこと。

【何等の映像をも與へない敘景】 讀んでゐて少しもその實景が心に浮かんで來ないやうな敘景。

【詠歎】 エイタン (一)聲を長くしてうたふこと。(二)文章で深遠・強烈な感情をいひあらはすこと。(三)うたひほめること。こゝは(一)

【何等の感激をも含まない詠歎】 文字の上では、あゝあはれ・悲しかな等いふ風な詠歎を述べてゐながら、それに少しも實際の感激のこもつてゐない空疎な詠歎。

【理路】 リロ 物事のすぢみち。

「理路を辿らない」は、すぢみちの通らない。條理のたない。

【論辯】 ロンベン 意見をのべて論ずること。論じて理非を述べ説くこと。論辯は、理路を辿ることが要請される。

【何等の映像をも與へない敘景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又何等の理路を辿らない論辯があつた】

敘景は物語の背景である。詠歎は作品の迫力であり、論辯は必然性だといへよう。その三要素がみなの外れてゐたのでは仕方がない。「悉く無用の饒舌としか思はれない」といふ馬琴の失望も無理はない。それにしてもこれは、磨きに磨かれた幾多の作品を遺した作者の、彫心鏤骨のあとを思はせるやうな敘述であり、この透徹した心理解剖は作者獨特の境地であらう。

【饒舌】 ゼウゼツ 多辯なこと。おしやべり。

【忌々し】 イマイマシ 「イマイミシ」の轉訛。(一)いみづつしむべきことだ(古語) (二)忌みきらふべきことだ。いやなことだ。(古語) (三)腹立たしい。残念だ。ここは(三)

【片肘つく】 カタヒチつく 片方の肘をつき、その掌で頭を支へて體を横たへること。

【それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない】 視線の方向が心そのものの方向を示してゐる象徴的な表

現である。と同時に根強い馬琴の性格の一端がそれとなく現されてゐる。

【弓張月】 ユミハリヅキ 椿説弓張月。三十卷。文化三年から七年に亘つて順次刊行された。自序に「此の書保元の猛將八郎爲朝の事蹟を述ぶ。その談唐山の演義小説に倣ひ、多くは憑空結構の筆、閱者理外の幻境に遊ぶとして可なり」とある一節は、此の小説の構想を物語るものである。つまり源爲朝の外傳に、作者の勸善懲惡主義の理想を盛つた傳記小説で、前記「八犬傳」次頁「南柯夢」と併せて三大奇書と稱せられる馬琴の傑作の一である。その梗概は、

爲朝十二歳の時父爲義に伴はれて參朝し、崇徳上皇御前に於て信西と強弓の事から論争してこれを説伏し、大いに面目を施したが、爲義はその怨を恐れて勸當してこれを肥後に下す。肥後に下つた爲朝は阿曾忠國の女白縫姫を妻として九州を征服したが、保元の亂に新院方に召されて奮戦、敗れて大島に流される。後九州に歸つて白縫姫にめぐり會ひ、一子舜天丸を儲けたが、平氏追討の爲京に上らんとし船出し、海上暴風雨に遭ひ白縫は海に投じ、爲朝は琉球に漂着する。ここで白縫の靈の憑つた寧玉女を授けて國亂を平定し、玉女の夫となり、遂に神仙と化して昇天する、といふ筋である。

【南柯夢】 ナンカノユメ 「三七全傳南柯夢。」文化五年七月刊行。全六卷七冊。世話淨瑠璃で有名な三勝半七の情話に取材し、これに勸善懲惡主義を盛つた作品。その梗概は、

「ひきがへる」は、無尾目・蟾蜍科の兩棲類の總稱。體は肥大で概ね土色をなし、運動は不活潑。産卵期以外は陸上に棲むため蹼は發達してゐない。皮膚に疣状突起が多く、その頭上後眼部の兩側のものは耳腺とよばれて一種の毒液を分泌する。我が國には「ひきがへる」「にほんひきがへる」「えぞひきがへる」をはじめ約九種類を産する。

【水差】 ミヅサン 水を入れて置いて他の器に注ぐ器。鐵瓶・花瓶等に注ぎ入れるものは注ぎ口があり、茶の湯の釜にさす水差は茶杓で汲み出すやうになつてゐる。但しここは硯水を入れる水差で、俗に「水入れ」といふものは繪畫彫刻などに取材される所謂「唐獅子」で、實際のライオンより遙かに圖案化し裝飾化された形象を呈し、よく牡丹と配して畫題として取扱はれてゐる。殊に我が桃山時代の屏風繪・唐紙繪等に、好んでかかれたのであるが、兩者を配する由來は明瞭でない。「筠庭雜考」(喜多村信節著)に「名物法言」を引いて「獅子を獸王といふ。牡丹は唐の代にはいたく愛で貴重して花王とす。共にその種族の王なるを對しむかへたるなるべし。」とあるは、稍々信ずべきものであらう。

「獅子」(Lion)は、猫科の食肉獸。多くアフリカ等の熱帯地方の特産。頭は圓大で顔面廣く、成長した牡は頭胸

概は、

靈桶を伐つた功によつて取立てられた奈良續井家の巨赤根半六の倅半七と、伐木の際に誤つて半六のために殺された丹波都の娘おさんとは許婚であつた。然るに半六は身の榮達に目くらんでおさんを逐ひ、半七を家老の娘園花の婿にする。成長したおさんは舞々になつて笠屋三勝と名乗つてゐたが、續井家の若殿がその容色に迷ふ。偶々若殿に隨つて上落してゐた半七はおさんと邂逅してその許婚であることを知り、手を携へて走り心中を決心して千日寺に死場所を求めて行く。するとそこに半六と、三勝が先夫丹波都との間に生まれた實の子であることを知つた園花の母敷波が、罪障を懺悔して自殺してゐる。その忠義貞節があらはれて、半七はやがて本地歸參がかなふ、といふのである。

【端溪】 タンケイ 現支那廣東省高要縣にある硯石の產地。その硯石は暗綠色に美しい紋様を具へ、而も質が極めて緻密で、硯石中の王と目されてゐる。

【蹲螭の文鎮】 ソンチのブンチン うづくまつる螭の形のつまみをつけた文鎮。

「螭」は、みづち。兩龍。角のない龍。一説には黄色の龍。「文鎮」は、紙や書物が風などに散らないやうに、その上に重しとして載せておく文具。

【墓】 ガマ 「蝦蟇」とも書く。ひきがへるの類の俗稱。多くその大形なものをさし、古來一種の靈力を有するものとして妖怪視され、種々の傳説が附託されてゐる。

部に長毛を發生して鬣をなすが、毛は鬣がなく體も稍々小さい。腰は細いが四肢は強健。體色は暗褐色で體毛は短い。吼聲極めて凄しく、百獸これを聞いて畏縮する。性強猛で百獸の王と稱されてゐる。

「牡丹」は、毛茛科の落葉灌木。高さ九〇乃至一〇〇釐に達し、葉は羽狀複葉で平滑、長い葉柄を有する。初夏の頃大形の美花を開き、花の直径一五乃至二〇釐に達する。支那では花王と目され、我が國で二十日草・深見草・名取草などの異名がある。

【青磁】 セイジ 鐵分を含有した青磁色、又は淡藍色の釉薬をかけた磁器。支那唐代に越州ではじめて製せられて以來宋・清及び高麗等で名作を出だし、我が國には平安朝時代に傳來して、肥前の三河内・攝津の三田・京都等がその産地として知られてゐる。

【硯屏】 ケンピヤウ 硯の邊に立てて塵埃などを防ぐ小さい衝立のやうなもの。青磁製・陶製・銅製・唐木細工製などがある。

【蘭】 ラン 蘭科植物の總稱。熱帯地方の原産で、世界に於ける總種類約一萬七千に及ぶ。多年生草本で、葉は全縁鞘狀、花は不整。觀賞用として栽培される。

【孟宗】 マウソウ 孟宗竹の略。禾本科苦竹屬の多年生植物。地下莖を以て繁殖し、地上莖の高さ十數米に達する。稈の周圍は三〇釐内外、中空で節があり、毎節二主

枝を生ずる。葉は披針形で先端が尖り、夏秋の交穠に穂状の花をひらく。筍は食用として、稗は建築・器具の用材となる。支那江南地方の原産で、元年間琉球を経て渡來し、薩摩を経て各地に傳播した。江南竹の異稱があるはこの爲である。

【根竹】 ネダケ 地上莖が地下莖と接続してなほ土中に埋れてゐる部分をいふ。此の部分は節間がつまり、節が隆起して一種の雅致があり、筆立・花差などの細工物の材料に用ひられる。

【文房具】 プンバウグ 「文房」は、讀書執筆などの文筆に當てる室の意。随つて文房具は、もと文房に備具しておく品。即ち机・硯・墨・紙・文鎮等をいつたのであるが、今は勉強用具一切をいふ。

【創作】 サウサク (一)はじめて作ること。(二)文藝上、獨創的に藝術的感興を、繪畫・音樂・文藝等の作品に表現すること。又はその作品。(三)狹義には、純粹小説をよぶ稱。こは(三)。

【勞作】 ラウサク (一)ほねを折つてはたらくこと。ほねをりわざ。(二)勞力を費した作品。力作。

「一生の勞作」は、一生の努力を傾け盡した作品の意にもとれるが、こは一生に亘る間の多くの力作の意で、前記「弓張月」「南柯夢」をはじめ馬琴の全作品を指してゐる。

【孤獨】 コドク 頼るものなくひとりぼつちのこと。禮記「老而無子曰獨、幼而無父曰孤。」

【かういふ不安は、彼の上に、何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した】

「狼狽」(一〇三頁四行)から「苦痛」(一〇四頁五行)へ、苦痛から不安へと墮ち來た、その不安の中にやがて襲ひ來つた淋しさの表白である。人一倍自信力が強く、自分の才分を恃みきつてゐた馬琴だけに、その信念のぐらつきかけた今、みすぼらしい自分の惨めさが餘りにも鮮やかに顧みられたのではなからうか。「不安」を擬人化してそれが「落莫たる孤獨の情を齎した」といふ手法には、馬琴の堪へ難い心中の動搖に觸れるものがある。

【謙遜】 ケンソン へりくだること。ひかへめにすること。
【屑々】 セツセツ (一)こせこせするさま。(二)せはしくつとめるさま。(三)雨などの細かくふるさま。こは(一)の意。

「屑々たる作者輩」は、こせこせする取るに足らないつまらぬ作者共。

【傲慢】 ガウマン おごつて人をあなどること。おごりたかぶること。

【不遜】 フソン へりくだらぬこと。おごりたかぶること。

【暗い影を投げる】 クライカゲをナげる 不吉な運命をまねく。不祥なことを招來する。こは「けちをつける。」位に解すればよい。

【忌まはし】 イまはしい 「忌々し」(前頁八行に同じ)。

【本朝】 ホンテウ (一)我が國の朝廷。(二)轉じて、我が國。こは(二)。

【比倫を絶する】 ヒリンをゼツする 比較すべき類似のものがない。たぐひがない。

【儷】 は、類。ともがら。くらべる。

【自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた】

馬琴はこの朝錢湯に行つて「八犬傳」に對する毀譽相半ばする批評をきき、腹立たしい不愉快さを感じると同時に、反動的に、古今に比類のない大傳記を作らうといふ自信を抱いて歸つて來たことが、本課の前の部分に書いてある(参考欄参照)それを受けて言つてゐるのである。

【人並に】 ヒトナミに 世間なみに。凡庸の人と同様に。

【己惚】 ウヌボレ 自分を實際の價值以上に評價して自ら慢心すること。自分を實際以上にえらく思つていい氣になること。

【落莫】 ラクバク 「落莫」とも書く。「落」は零落、「莫」は薄の義で、落ちぶれたやうなもの淋しさ。

「傲慢」と「不遜」とは殆ど同意に用ひられるが、嚴密にみれば、前者は積極的な内容を持つ語で、能動的にこちらから相手を見下げてのしかかつて行くやうな態度であり、後者は消極的受動的で、相手の長所・美點等を許容承認してそれを立てることをしない態度である。

【同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽くまでも不遜である】

同時代の作者といへば、十返舎一九・式亭三馬・柳亭種彦・爲永春水等を始め、幾多の洒落本・人情本・滑稽本などの作家が擧げられるのであるが、これら幕末の頹廢的な時流に迎合して、その人氣に汲々たる戯作者達に對して、馬琴が極めて傲慢不遜であつたことは有名な話で、彼がそれら當時の文壇の中に一人の交友をも持たなかつた事實はこの明證である。と同時に、これは屢々高踏的と評された作者自身の生活態度をも物語るものとして興味深いものがある。

【遼東の家】 レウトウのキノコ 自ら奇異なりとして誇るものも、他から見れば凡庸に過ぎないことの譬。

後漢書、朱浮傳に「朱浮責彭寵書曰、伯通(彭寵の字)自伐以爲、功高天下。往時遼東有冢、生子。白頭、異而獻之、行至河東、見群冢皆白、懷慚還。若以子之功、論於朝廷、則爲遼東冢一也。」とある故事によつた語である。

教科書頭註に(漢書)とあるは「後漢書」の誤であるから訂正せられたい。

【我】ガ (一)自我。(二)佛語。梵語 Atman の譯語。常一主宰の義。佛教の解釋によれば、人の身は五蘊(色・受・想・行・識)によつて假に和合凝集して生じたもので、「われ」と稱すべきものは何處にもない。然るに人は誤つて一の常住な主宰を認める。これが即ち「我」であつて、ここから我欲・我執が生じ、一切の煩惱の根本となるといふのである。(三)佛語の「我」から生ずるあらゆる心の働。こゝは(三)の意。

【さとり】「悟」と書く。(一)さとること。知ること。(二)氣づくこと。感づくこと。(三)佛語。迷が解けて眞理を會得すること。無明の妄念が去つて心地の光明の現れること。こゝは(三)の意で、自分を天才だと己惚れたり、古今の大作を書かうと野心に燃え立つやうな迷妄から覺醒すること。

【あきらめ】「諦」と書く。(一)あきらめること。斷念すること。(二)佛語。一切理法を悟つて欲念を斷つこと。こゝは(二)の意で、「本朝に比倫を絶した大作を書く」(一〇五頁七行)といふやうな考はさつぱり思ひきつて、それに心を悩まされないこと。

【さとりと】「あきらめ」に避難する】
深い苦悶から逃れるために、眞の自己の要求に眼をおほ

つて、安易な「さとりと」「あきらめ」とを求めて、そこに強ひて安心してゐるといふ意で、眞實に眼をおほひ安易な一時的平靜を求める態度を「避難する」といつた。

【彼の強大な「我」は「さとりと」「あきらめ」に避難するに餘りに情熱に溢れてゐる】

馬琴の作家としての烈しい情熱をいつたのである。佛教的な常識では「さとりと」「あきらめ」は欣求の目的であり、「我」は一切煩惱の根元として否定される。こゝではそれを逆用して、安易なさとりとあきらめを避難といひ、我執の根強さを情熱として、そこに馬琴の強大な人間的性格を示さうとしたのである。馬琴の傲慢不撓な人となり、その故に更に痛切であつたであらう苦悶が深く洞察されてゐると同時に、名人氣質でとほつてゐた作者自身の本領も窮はれる所である。

【親船】 オヤブネ (一)多數の小艇を積みこんだ船。もとぶね。本船。(二)僻で陸地又は他船と交通する船。こゝは(一)の意で、難破船を避難した舳から、沈みつゝある本船をさして言つた。

【難破】 ナンバ。暴風雨等に遭つて破船すること。

【難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜かに絶望の威力と戦ひ續けた】

見つめてゐる絶望感を「絶望の威力」と擬人化した。此の警拔な譬喩を得て、馬琴の苦悶の深刻さが遺憾なく表現せられた。と同時に、その不可抗な絶望を靜かに戦ひ抜かうとする馬琴の大きさがうなづかれる。

【もしもこの時】
これは此の作者が好んで用ひた獨特の手法である。事件の突發性の強調、これを契機とする心理的轉換、かうした此の假設法の技巧の味を考察させたい。「丁度その時」とか、「恰もこの時」などの表現法と比較してみれば自ら明かにされるであらう。

【孫の太郎】 名は興邦。宗伯の子。馬琴には嫡孫である。馬琴が此の孫を愛してゐたことは一通りではなかつた。それは彼の日記などを見ても明かであるが、殊に嗣子宗伯に先立たれて以後の如き、彼の晩年の生活意力は、此の孫への愛によつて燃焼してゐたと言つても過言ではない。或は多年惜藏した書籍五千巻をひさいで孫の後圖の資に當てたり、或は平生極端に嫌つてゐた山手住居に移つたり、馬琴にとつては、この孫の成長こそが唯一の樂みだつたのである。

【大膽】 ダイタン (一)きもだまの太いこと。物事におそれない態度。度胸のすわつてゐること。(二)づぶといこと。ひどく横着なこと。こゝは(一)の意で、今の語法では「大膽さ」などいふ所である。

【率直】 ソツチヨク かざりけのないありのままなこと。生一本で正直なこと。こゝも今の語法では「率直さ」といふ所である。

【いきなり】 (一)なり行きに任せること。(名詞) (二)準備もせずに。すぐに。(副詞)こゝは(一)【子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた】

絶望の威力と戦ひつゞける馬琴の顔は、沈みきつた、苦り切つた澁面であつたらう。然し相手の顔色や表情は子供の關する所でない。太郎にとつて、馬琴はいつも優しいお祖父様だつた。「大膽と率直とを以て」には、子供の行動が躍如として描かれてゐるだけではなく、寵愛され切つてゐる太郎と、寵愛しきつてゐる馬琴と、二人の間の深い情愛が溢れ、「この語と共に」(同頁四行)の一句に對して、伏線的な働をなしてゐる。作者の周到な用意の示されてゐる所である。

【八大傳の著者】
勿論馬琴のことである。平生藝術的道義的に嚴格な、而も今八大傳の著作に苦悶してゐるこの藝術家も、孫の前には忽ちにして好々爺になつてしまふ。「藝術家」としての馬琴と「お祖父様」としての馬琴と、この對比を際立たせ戲畫的なユーモラスな趣を加味して、太郎に對する愛情の深さと、家庭人としての馬琴の一面とを描きださ

うとてゐる。

【茶の間】 チヤのマ 家人の食事をする室。

【痢高い】 カンダカイ 聲の調子が高い。聲が細く高く鋭くひどく、聲がかんばしつてゐる。

普通「甲高い」と書くが、こゝでは神経ばしつた意を示すために、特に「痢」の字を用ひたのであらう。

【妻のお百】 江戸飯田町の下駄商伊勢屋會田氏の寡婦。馬琴は二十七歳の時、書肆葛屋重三郎の周旋でここに入夫したのである。馬琴より三歳の年長で、平生多病であつたが、よく長壽を保ち、馬琴に先だつこと七年、天保十二年七十八歳で歿した。

尙馬琴は下駄商を嫌つてこれを止め、以後兒童の書師をしたり、藥種商をしたりして、生計をたてつゝ、戯作を續けたのである。

【内氣】 ウチキ 遠慮深い氣質。うちわでひかへめがちな氣質。

【嫁のお路】 馬琴の嗣子宗伯の妻。土岐村氏の女。太郎の外二女を生み、夫宗伯の歿後は貞順を以て馬琴に仕へ、殊にその失明後は口授を筆寫してこれを助けた。「八犬傳」の完成は路女の力に負ふ所が大であつた。

【倅】 セガレ (一)音「サイ」未だ仕官しない子。へやずみ。(二)國語では、自分の子の謙稱。(三)轉じて、少年を卑しめていふ場合にも用ひる。こゝは(二)

に、作者の苦心と力量とが認められる。
【よく毎日】 「うん、よく毎日？」 「御勉強なさい。」 實に巧みな會話である。「よく毎日」と語りだされた孫の言葉を、「うん」と受取つて、それを鸚鵡返しに、「よく毎日？」と次の言葉を促しながら期待を以て耳を欷てる。答は矢張り子供らしく極めて平凡に「御勉強なさい。」と來た。すつかり張合が抜けて思はず噴き出したといふのである。子供の子供らしい詞、鹿爪らしい、併し孫をあまやし切つてゐる老藝術家の詞、そのやりとりの間に加味された劇的な趣、それらが渾然と融け合つて、言ふに言はれぬ和やかな温い雰圍氣を醸してゐる。

尙以下會話の妙味を二三抜きだしてみると、
【それから—え—と—癪癪を起しちやいけませんつて— (同頁末行) 考へ考へ言ひ淀んでゐる子供の心理のよく表れた所。
「おやおや、それつきりかい」 (一〇九頁一行) 孫の可愛さにすつかり溺れてゐる馬琴の心情の表れた所。
「まだね。いろんな事があるの」 (一〇九頁一行) 思はずせぶりの誇張的な所。
【それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした】
【馬琴はとうとう噴き出した】
【馬琴は思はず眞面目な聲を出した】
巧妙な會話に伴なふ、これは馬琴の心理的發展の描寫で

【宗伯】 ソウハク 名は興繼、通稱は鎮五郎。二十二歳神田同朋町に醫業を開き、二十四歳松前侯の抱醫者となつたが、生來羸弱で、天保六年父に先だつて歿した。享年三十八。

【跨がる】 マタがる
【外氣にさらされた頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をする度に動いてゐる】
平常の精細な觀察が役立つ所である。子供らしい無邪氣な魂膽があつて、眞面目らしく取澄ましてゐるのであらう。その表情から、艶々しい皮膚の色、さてはまたその下に流れてゐる若々しい生命までが、生々と描かれてゐる。

【栗梅】 クリウメ 栗梅色の略。栗色が濃くて、やゝ紫色を帯びた染色。

【壓】 エクボ 音は「エフ」
【考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、壓が何度も消えたり出來たりする】
この壓には複雑微妙な象徴的な意義が考へられる。即ち壓に現れた太郎の心境と、それによつて微笑をさそはれる馬琴の心境との交錯、その交錯を契機としての事件の展開と心境的發展、それらがすべてこの壓によつて暗示されてゐる。子供の子供らしい表情を如實に描いた手腕も凡庸ではないが、壓をかういふ風に取り上げてゐる所

ある。微笑から爆笑になり、それが急角度に轉換して眞面目な聲になる。この心理的經過が、會話の運びの間に如何にも自然的に描寫されてゐる。この發展が、後の「嚴肅な何物か」(一一一頁五行)となり、「幸福な微笑」(一一一頁六行)となるのである。

【悪戯さうに】 イタヅラさうに からかふやうに。なぶるやうに。
この「悪戯」は、からかふ、ぢらしてなぶるものにする等の意。

【太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた】
子供の敏感さはお祖様の急に眞面目になつた聲を聞き逃さなかつた。「ちよいと彼の顔を見た。」のは、「してやつた」といふ子供の表情である。さうしてにつこり笑ふ所、子供の得意さである。簡潔な描寫のなかに子供の無邪氣さが髣髴として浮かんで來る。

【御佛參】 ゴブツサン お寺まゐり。
【擽ぐ】 モタぐ 音は「タイ」又は「ダイ」もち上げる。あげる。

【馬琴の膝から半分腰を擽げながら、頭を少し前へ出すやうにして】
【馬琴の膝から半分腰を擽げながら、頭を少し前へ出すやうにして】
半分逃げ仕度をしてゐる子供らしい仕草である。「馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退

いた」(次頁一行)の豫備的描寫として、矢張なくてはならないものであらう。

【浅草の観音様】アサクサのクワンオンサマ 東京市浅草區浅草公園内にある浅草寺。天台宗で金龍山と號する。俗に浅草観音堂といひ、本尊の観音は一丈八分の金像である。本寺縁起によると、推古天皇の三十六年三月土師臣中知といふものが、その臣濱成・武成と宮戸川(隅田川下流の古稱)に魚網を投じた時、その尊像がかゝつたので、主従は驚き奉持してこゝに一字の堂を建てて安置したといふ。後大化九年海勝上人が東行の途次この地に寶塔を建立した。これを當山の開祖とする。爾來多く武將僧侶等の堂塔の建立があり、近く徳川家康が寺領を與へて保護を加へるに至つて俄かに繁盛を至した。現在の堂宇は慶安中將軍家綱の造營にかゝり、七間四面、單層の入母屋造りで、四方に縁を廻らし、結構壯麗を極めてゐる。公園は浅草寺の舊境内で、園中には尙仁王門・五重塔等が残つて古の面影をとどめてゐる。

【あのね。】「うん。」「浅草の観音様がさういつたの。」幕切れの緊迫した味が會話を生かしてゐる。「うん。」は老藝術家馬琴が魂こめた一語であらう。強い期待が響いてゐる。そこへ「観音様」が出る。全く意外といふ他はない。「観音様」は恐らく獨創ではあるまい。誰かに教はつて來たに違ひないだらう。併し此の時この孫の口か

ら言はれたこの一語は、馬琴にとつては誠に神の啓示であつた。「嚴肅な何物かが」(次頁五行)閃いたのも當然ではないか。

【かつぐ】こゝでは、だます・欺く・のせる等の意。

【嚴肅】ゲンシユク (一)おごそかなこと。きびしいこと。(二)きびしくつゝしむこと。こゝは(一)

「肅」も、おごそか・きびしいの意。

【刹那】セツナ 梵語 Kṣana の譯語。「劫」に對し、極めて短い時間。一瞬間。ちよつとの間。

【彼の唇には幸福な微笑が浮かんだ】

孫の一語から観音様の啓示を受感した馬琴の心境である。絶望の嵐の中に一縷の光を見出した力強い悦びが涙となり微笑となつた。感激の涙の中から湧き上る微笑、それはやがて神來の興を喚びさます崇高な微笑なのであつた。

【この時、この孫の口から、かういふ語を聞いたのが不思議なのである】

「この時」の「この」「この孫」の「この」「かういふ語」の「かういふ」は、一語一語が具象的に直觀せられるほど必然的に生かされてゐる。馬琴は今太郎の口を通して、不思議な運命の囁きを聞いてゐるのである。

【観音様がさういつたか。勉強しろ。癩癩を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ】

【夜長】ヨナガ 夜の長いこと。主に秋の夜についていふ。

【ひっそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる】

燈心の油を吸ふ音と蟋蟀の聲と、靜中この物聲があつて更に集中的に深まり行く靜寂である。これは文末の「蟋蟀はこゝでも、書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。」に關聯して、秋の夜長の寂しい環境を鮮明ならしめてゐると同時に、又一面「彼の耳には、何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼にも、圓行燈のかすかな光が今は少しも苦にならない。」(一一三頁末行)といふ箇所と對照して、心理的發展の前提をなしてゐる。

【かすかな光のやうなもの】
次條「神來の興」をさす。これから書き起さんとする意匠のひらめきを形容した。

【神來の興】 シンライのキヨウ 恰も神から與へられたやうな靈妙不可思議な感興。「天來の妙想」といひ「靈感」といふ。インスピレーション。即ち藝術的創作の過程に於ける超意識的な心的状態を、一種の神祕的過程に擬へていつた語。

【あせるな。さうして深く考へろ】

「神來の興」は火と少しも變りがない。あせつて掻き亂すとすぐに消えてしまふ。それを燃え立たすことはあせ

簡單に言ひ括つてゐるが、前からの長い曲折の經過を受けてゐる爲に、一語一句が深重な意味の結晶として、千鈞の重みを持つて据つてゐる。感激の涙と微笑の中に、「子供のやうに領いた」(次頁一行)老藝術家の心中が察せられる。

【圓行燈】 マルアンドン 圓形の行燈。

「行燈」は、木・竹又は銅鐵などの框に紙を張り、中に油皿を据ゑて燈心を置き燈火をともし具。鎌倉時代頃から用ひられ、古くは文字の通り携帯用であつたが、後世提燈の發達と共に室内用燈具となつた。その形は圓・四角・六角など多様である。

「アンドン」の音は唐音。訛つて「アンドン」「アンドン」といふ。

【燈心】 トウシン 燈油に浸してあかりを點す物料。細菌の白い心を用ひ、又綿・紙などを用ひる。これを油皿に入れて一端に火を點すると、燃えるに従つて油の吸收される音が微かにじい〜と聞える。

【蟋蟀】 コホロギ 直翅類蟋蟀科の昆蟲。全體が暗褐色。頭部は比較的大きく、觸角は體より長い。二箇の尾毛を有する。好んで陰所に棲息し、秋日草間に鳴き、聲は哀愁を含んで古來多くの詩歌に詠まれてゐる。古名「きりぎりす」「いとゞ」別にちゝろむし・筆津蟲・蜻蛉等の異名がある。

らずにじつと考へることだといふのである。この創作上の心理は、小説家としての作者の體驗の表白に他ならない。經驗のない生徒に理解し難いところであらう。併し彼等にも作文自作の時など、浅いながらこれに似た經驗はある。それを足がかりにして、以下創作上の三昧境に發展して行く心理過程について、じつくりと味讀せしめたい。

【走りさうな筆を警めながら】
前へ／＼と書き進まうとあせる心持、それを「走りさうな筆」といつた。

【警める】(イマシめる)は、警戒する。用心する。「誠む」との區別に注意。

【星を砕いたやうなもの】

「かすかな光のやうなもの」(同頁一行)といひ、次に「神來の興」と呼び、こゝでは又別の語で形容した。作者の創作經驗の實感から生まれだ形容であらうが、神來の興は、こゝに至つて、更に美化され神祕化された。

【否應なしに】イヤオウなしに 否でも應でも。有無をいばさず。是非をいばさず。

【否應なしに彼を押しやつてしまふ】

超意識的實在ともいふべき神來の興の不思議な威力である。「彼」の意識は既にもその中に没して去つて、天來的な感興がすべてを押し流して行くといつた心理状態である。

るかぎり。

【根かぎり書きつゞける。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けない事かも知れないぞ】

藝術創作上の悲壯・深刻な、それ故にこそ貴い決意である。肉體的存在を超越した、靈魂の崇高な姿がそこにはある。永遠な藝術の生命は、その嚴かな魂によつてのみ支へられてゐるのである。

【光の霽に似た流】「神來の興」はまたかく形容された。幅と深みと、何か神祕な力を示すやうな形容である。

【目まぐるしい】種々の形・色などが眼前に移り動いて、眼がちらついて煩はしい。ちら／＼して目がくらむ。

【飛躍】ヒヤク (一)とび上りをどり上ること。(二)勢よく活動すること。(三)地位が俄かに進むこと。こゝは(一)

【澎湃】ハウハイ 水の漲りさかまくさま。又その聲。

【目まぐるしい飛躍の中にあらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて来る】

「神來の興」が如何に旺盛であるか、そして作家が一度その興に乗る時、如何に凄じい情熱に驅られるか、誠に如實に表した一句である。かくて「遂に全くその虜になつた」(次行)馬琴と「光の霽に似た流」(前行)とが一つになつて働く時、こゝに戯作三昧の境地は成立するの

【否應なしに】の副詞がよく利いてゐる。「彼の耳には、何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼にも、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない」視覚や聽覺の、否あらゆる心靈の障害は排除され、殘滓は洗ひ流されて、今や忘我恍惚の状態、戯作三昧の法悦境が馬琴を支配しはじめたのである。

【神人】シンジン (一)神と人。(二)神の如き能力を持つ人。神通力を得た人。(三)神に奉仕する人。かんぬし。こゝは(二)

【相搏つ】アヒウツ 力を以て互に闘ふ。格闘する。

【神人と相搏つやうな態度】は、勿論「必死に」の修飾であるが、「神人」と「神來の興」との間の心理的聯關を生かして、一種嚴肅崇高な感じをだしてゐる。

【空を走る銀河のやう】

「星を砕いたやうなもの」と譬へられた神來の興の形容である。豊かな語彙を持つて、それをまた嚴密に、自由に生かして行く所、技巧の冴えと周到な用意とが注意されねばならない。

【銀河】(ギンガ)は、天の川。夏秋の交、晴夜中天を過つて乳白色の微光を放ち、河のやうに見える無数の恒星の集合體。銀漢・天漢・天河・星河などともいふ。

【滾々】コンコン 水の盛に湧きいで流れるさま。

【根かぎり】コンかぎり 精根のつゞくかぎり。氣力のあ

である。

【その虜になつた】そのトリコになつた 全身心を神來の興に没して、忘我的活動の境地に入つた。

【筆を驅る】フデをカス 筆を走らせる。

【王者のやうな眼】

「難破した船長の眼」(一〇六行)と對比される形容である。今や彼の眼は嚴肅崇高な光に輝いてゐるのである。

【愛憎】アイソウ 愛することと憎むこと。

【毀譽】キョ 所しることとほめること。褒貶。

【あるのは、唯不思議な悦である】 戯作三昧の境地を道破したのである。利害・愛憎・毀譽など一切の煩惱を超越した境地にのみ味はひ得る悦、その悦の湧きいでる所が即ち戯作三昧の境地だといふのである。

【或は恍惚たる悲壯の感激である】

一切煩惱を超越した法悦境、それほど純一・無雜な心境である點に於て「恍惚たる」と形容された。それはまた生命をすら絶した感激であり、捨身な心境である點に於て悲壯なのである。これこそ誠に戯作三昧境の崇高さであるが、それにしても此の透徹した心理描寫は作者自身の體驗がなければ至り得なかつたであらう。

【恍惚】(クワウコツ)は、(一)物事に心を奪はれてうつとりとするさま。(二)ほのかにして分明ならぬさま。

こゝは(一)

「悲壯」(ヒサウ)は、(一) あはれにいさまいこと。悲哀の中に壯んな所のあること。(二) 悲哀・同情・價值感情の高揚等を含む複雑な感情。こゝは(一)

【心境】 シンキヤウ 精神の状態。心もち。

【味到】 ミタウ 理知の力で了解するだけでなく、感情によつてその情味を會得すること。味得。

【淺滓】 ザンシ 残りかす。

【滓】 は、説文に「澁也」とある。沈澁物。をり。かす。

【鑽石】 クワウセキ 金屬の原料となる鑛物。

「新しい鑽石のやうに」は、いかにも鮮烈な汚れなさを思はせる譬喩である。

【こゝにこそ「人生」は、あらゆるその殘滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか】

戯作三昧の心境にこそ始めて眞の人生が味はひ得るといふ藝術家的立場の表明である。こゝに成立する人生を、「新しい鑽石」の純潔に譬へ、それが作者の前に輝いてゐるといふ所に、作者その人の藝術家的個性が示現せられてゐる。

【姑】 シウトメ 舅(シウト)に對し、妻から夫の母、夫から妻の母である人。但し今は姑・舅の何れも「シウト」と呼ぶ。

【その間も茶の間の行燈のまはりでは……】

以下一節は、馬琴の執筆を他に、茶の間で取交されてゐる世俗的な會話である。すぐ次の書齋に於ける馬琴の心境と、茶の間の世俗的な雰囲気との對比によつて、戯作三昧の境地を一際鮮明に印象させる効果がある。然しこゝへ来てまた新しい問題を提示してゐると見るのは考へものである。寧ろ馬琴の創作生活の背景・環境としての平々凡々たるありふれた團圓を描出してゐるものとみておくべきであらう。

【厄弱】 ワウジヤク かよわいこと。ひよわいこと。

【厄】 は「厄」の俗字。弱い意。

【丸藥】 グロンヤク 煉り合せて粒狀に丸めた藥。

【お父様はまだ寝ないかねえ】

勿論無理難な非難の言葉ではある。併し「お百はかういつて、倅と嫁とを見た。」(同頁九行)とあるから、倅や嫁への氣兼ねもあつたであらう。

【針に髪の毛を油をつけながら】

縫針がよく布をとほるやうに、頭髮につけてある油を針に附着させる仕草である。裁縫中の婦人たちのよくする仕草をとらへて、うまく利かしてゐる。

【きつと又お書きもので、夢中になつていらつしやるのでせう】

盲目になつた晩年の馬琴の口授を筆寫して、これを助け

たお路の言葉として、これは深い理解と同情との表白であらう。併し同時に姑の氣兼ねに對する心安めの挨拶であつたことはいふまでもない。

【碌な】 ロクナ 満足な。十分な。

「碌」は「陸」の宛字で、「陸」は、(一)物の形・面の正しくゆがみのないこと。(二)轉じて、事の正しく整つてゐること。あたりまへ。こゝは(二)の意によつた形容語。

【困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ】

非難が露骨になつて、すつかり俗に染んだお百の氣持が自然にそこにさらけだされたのであるが、かくすることによつて、倅や嫁への言譯の効果を強調してゐるのであらう。

【お百はかういつて、倅と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをして答へない。お路も黙つて針を運びつづけた】

2 文の構成

第一節 初—一〇六頁五行 馬琴の苦悶。

第二節 一〇六頁六行—一〇七頁五行 馬琴と太郎。

第三節 一〇七頁七行—一二二頁二行 太郎との會話と嚴肅な感激。

第四節 一二二頁四行—一二五頁一〇行 戯作三昧の境地。

第五節 一二五頁末行—終 家族の會話と夜の静けさ。

「かういつて」言葉をきつたお百と、「聞えないふりをして」ゐる宗伯と、また「黙つて針を運びつづける」お路と、この三人の心々の味到は興味ある問題である。併しそれは解釋としての問題であつて、現實の意識としては、非難の中に言譯が含まれてをり、言譯の中に非難が含まれてゐるといふ氣持であるから、どちらか一方へ片づけてしまふといふことは冒險であらう。

【蟋蟀はここでも、書齋でも、變りなく秋を鳴きつづけてゐる】

「ひつそりとした部屋の中では……」(一二二頁八行)といふ所と照應して、秋の夜長の寂しい環境を印象的に鮮明ならしめてゐるだけでなく、馬琴の戯作三昧の境地をめぐつて、心々の感傷に沈む家族の心理を暗示するやうな餘韻を含んだ結尾である。

3 文意

八犬傳の原稿を書きつぐべく、例の通り前日の原稿を読み返してゐた馬琴は、ふと原稿の失敗に気がつく。老人とは思はれない程の狼狽が、やがて激しい苦痛となり、更に堪へ難い落莫たる孤獨感となり、遂に絶望的な不安に陥つて苦悶してゐる。そこへ急にとびこんで来た孫の太郎によつて彼の氣持は明るくなる。孫との和やかな會話の中に「辛抱しなさい」といはれ、それが觀音様のお告だと聞く。時も時、この孫からこの一言を聞いた馬琴は嚴肅な感激にうたれ、その夜神來の興に乗じて、所謂戲作三昧の心境に浸りつゝ八犬傳の稿をついたのであつた。

4 鑑賞批評

恐らくは馬琴の日記あたりから資料を得てゐるのであらうが、戲作三昧の心境そのものは作者の體驗を生かしたものに違ひない。眞に藝術家のみが知る創作上の苦悶と悦びと、それを擱んで投げだしてゐる所に此の作品の力があり、それが作者の體驗であるが故に眞實性があるのではなからうか。成程整然たる構成の妙味はある。原稿の失敗に氣づいて狼狽し苦痛を感じ、不安から絶望に陥ちて行く時、孫の一言に天の啓示を聞き、心機一轉、天來の興に乗じて戲作三昧の心境に浸り行く—この筋の運びに一分の隙もない。寧ろ整ひ過ぎた程の布置である。而も豊富華麗な語彙を自由に驅使して、此分々の雰圍氣を醸して行く技巧の冴えがあり、且此の作者獨特の透徹した心理解剖がある。これだけを以てしても、此の作品は既に美しい藝術である。その上作者自らの體驗の基礎を持つたといふことは、此の作品の争はれぬ力であり生命である。もとゞ新理知派の名を以て呼ばれ、名人氣質の技巧的な小説家であつたこの作者の、創作上に於ける潔癖性やその故の苦悶の深さは、馬琴のそれと相似たものがあつたのであらう。随つて作者その人らしく解釋せられた馬琴ではあらうが、而も矢張馬琴の馬琴らしさはつきりと生かされてゐるのは、つまり共通の體驗に基礎をおく眞實性の力であるといはねばならない。讀みこたへのある傑出した短篇といふべきである。

三 備 考

1 指導研究

(一) 一三・寒山拾得の指導研究欄でも述べた所であるが、同じく現代小説を讀んで行くのであるから、そこを参照しつゝ、何よりも先づ學習の方法・體系を確立してかゝらねばならない。

(二) 強大な我と搖がぬ自信力とを以て群小作家を睥睨してゐた傲慢な馬琴の人柄や、八犬傳製作の経緯などを概説して置くことは、理解を助ける所以であり、解釋欄にそれ／＼稍々詳細に取扱つたのはこのためである。適當に取捨して利用せられたい。

(三) 創作上の深刻な苦悶、その苦悶を透して到りついた三昧境、そしてまた孫に對する優しい愛情など、かう寫されてみると、如何にも馬琴がさうであつたらうと思はれるし、事實またさうであつたかも知れない。併しこれは要するに作者その人らしく理解された馬琴であることを忘れてはならない。作者は勿論多くの資料から類推してはゐるであらう。而もその心境の如きは、要するに作者の體驗によつて基礎づけられたものに他ならないのである。本課鑑賞の上に重要な問題として、一應指摘して置かるべきである。

(四) 所謂「戲作三昧」の發展と、その心境とは、此の文の中心的主題であり、作者も筆を盡くして解剖し描寫してゐる。作文などの經驗をとらへて、じつくりと反復熟讀させて行くべきであらう。

(五) 本課は一面に於て創作論の表現とも見得るものであるから、創作の意義と貴さ、それを通して得られた作品の價值等の問題が當然考へられねばならない。しかしそれは一通りの解釋がすんでからの問題である。さうでないと學習を混亂させて指導を失敗させる恐があるだらう。

2 参考

(一) 本課に至るまでの梗概を左に略述する。

天保二年九月のある日、神田同朋町の錢湯で、馬琴は珍らしく朝湯に入つてゐる。すると小間物屋の近江屋平吉といふ男が、馬琴が執筆中の「八大傳」を盛に褒めたてる。馬琴は相手の大袈裟な褒め方にある輕蔑を感じて軽く受け流す。所がこれに反感を起してか、湯槽の中にゐた眇の男が、反對に八大傳は水滸傳の燒直しで京傳の二番煎じだといつて、馬琴に聞えよがしにさんくゝな惡口をいふ。表面は他まで傍若無人で傲慢ではあるが、内心人一倍氣の弱い馬琴は、眇の男の毒舌など一顧の價値もない、矢張日本に古今を絶した八大傳を完成しようといふ自信を抱きながら、何か不快な沈んだ憂鬱な氣持で家に歸つて来る。

歸宅すると家族は皆外出した留守で、その留守に和泉屋市兵衛といふ本屋が待つてゐる。本屋は例の原稿の催促で、それを斷ると當時世評に喧しかった鼠小僧の評判など持出して何か書かせようとする。それも斷ると、今度は種彦や春水の評判を持ちだして馬琴の反撥心をそよるやうな態度に出るので、判頭腹を立てた馬琴はこれを返ひ歸してしまふ。が馬琴の憂鬱は益々濃くなつて、獨りで淋しい晝食をすませて書齋に入つてからも、「道徳家としての彼と、藝術家としての彼との間に何時も纏綿する疑問」に悩まされてゐる。

そこへ借りた書物の返却旁々、自分の描いた繪を見せに渡邊華山が訪ねて来る。華山と彼との間には次のやうな會話がとり交されるのである。

「八大傳は相變らず抄がお行きですか。」

「いや一回抄どらんで仕方がありません。これも古人に及ばないやうです。」

「御老人がそんな事をいつては困りますな。」

「困るのなら、私の方が誰よりも困つてゐます。併しどうしてもこれで行ける所まで行くより外はない。さう思つて、私はこの頃八大傳と討死の覺悟をしました。」

かういつて馬琴は自ら恥づるやうに苦笑した。

「たかが戯曲だと思つても、さうは行かない事が多いのでね。」

「それは私の繪でも同じ事です。どうせやり出したからには、私も行ける所まで行き切りたいと思つてゐます。」

「お互に討死ですか。」

二人は聲を立てて笑つた。しかしその笑聲の中には、二人だけにしかわからない或寂しさが流れてゐる。と同時に、又主人と客とは、ひとしくこの寂しさから、一種の力強い興奮を感じた。

(この後へ本課の文が續くのである。)

一六 春 寒

夏目漱石

一 解 題

1 作者

夏目漱石 ナツメソウセキ 名は金之助。慶應三年一月東京市牛込區喜久井町に、名主夏目直克の末子として生まれた。三歳の時養子にやられたが十歳にして實家に歸つた。戸山小學校・市ヶ谷小學校・錦華小學校を経て一ツ橋中學校（府立第一中學校の前身）に入學、半途退學した。その間、二松學舎に漢學を、成立學舎に英語を學んだ。明治十七年大學豫備門豫科に入學、一回原級に留つて、同二十一年本科に入り、二十三年卒業。ついで帝國大學文科大學に入り、英文學を專攻した。在學中正岡子規と交り感化をうける所が大であつた。二十六年英文科卒業。以後大學院にとどまり、東京高等師範學校の囑託となり、二十八年四月正岡子規の紹介で松山中學校に赴任、翌年第五高等學校教授に轉じ、三十三年文部省の命により英語研究の爲英國に留學。三十六年歸朝。第一高等學校教授に任じ、東京帝國大學講師を兼ね、三十七年からは明治大學にも講義した。四十年一切の教職を辭し、東京朝日新聞社員となり、専ら文藝的著作を同紙に掲載することになつた。四十二年滿洲に旅行し、翌年胃潰瘍のため大吐血、危篤に陥つたが、この大患は氏の人及び藝術上に一轉機を齎した。四十四年博士號辭退。大正五年十一月宿病の胃潰瘍再發の爲、十二月九日永眠した。享年五十。墓は東京市小石川區雜司ヶ谷の墓地にある。

氏の文名をして頗に高からしめたものは、明治三十八年一月から雜誌「ホトトギス」に連載された「吾輩は猫である」

であつた。以來引續いて「倫敦塔」「薙露行」「坊ちゃん」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「硝子戸の中」「道草」等を發表し、絶筆「明暗」は未完にして遺された。その作品の特色は、自然主義文學とは反對に、一貫して餘裕を存する所にあり、餘裕派の名がある。然し晩年の作は初期の輕妙絢爛なものに比して、内面的心理描寫に沈潜して行つた。評論の方面に於て「文學論」「文學評論」は時代の文學に大きな示唆を與へたものである。大學在學中、子規との交際は彼をして俳壇にも一位置を占むるに至らしめた。三十六年頃から畫筆を弄び、その歿年には漢詩をつくる事が多かつた。以上小説を初め文學論・文學評論・隨筆・俳句より紀行書簡に至るまですべて集めて「漱石全集」の中にある。

2 出典

漱石全集（全十四卷）第九卷、同普及版（全二十卷）第十三卷の卷頭に載せられてゐる「京に着ける夕」と題する文を抄録した。

「京に着ける夕」は明治四十年三月二十八日から四月十二日まで京都に旅行した作者が、京都着の一夜の事を録したもので、文末に「四〇・四・九」の附記があるから、その旅行中に作られたものであらう。

3 主眼及び採擇の趣旨

漸く陽春の氣の動き初める季節を考慮して、漱石の小品「春寒」を配した。

淋しい京の町を背景にして早春の旅情を敘してゐるのであるが、春寒の情趣と、漱石の旅情と、淋しい京の町の風格とが結びついて、一種特異な境地を醸しだしてゐる。殊に漱石獨特の機智と諧謔に溢れた筆致がこれに洒脫な味を添へて、特色ある文趣をなしてゐる。これが鑑賞味到せらるべき文藝的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語釋

【春寒】 シュンカン 春のさむさ。杜甫・人日詩「氷雪驚難至、春寒花較遲。」

【流星】 リウセイ 急に空中にあらはれ、大速度で通過する光體。極めて微細な天體が、その運行の途中地球に接近し、地球の引力の作用を受けて地上に落下する時、空氣との摩擦によつて發熱發光するもので、平均速度毎秒五十六軒に及ぶが、地上百六十軒から八十軒の高さに降下して大部分燃盡し去るものである。併しその大なるものは時に地上に落下して隕石又は隕鐵となる。

【流星】はその速度の極めて迅速なために物事の速いこととの形容に用ひられ、また一瞬にして消えるために、物事のはかなさに譬へられる。

【疾きに】 トきに・ハヤきに 「疾き」は形容詞「疾し」の連體形。ここは「疾き速度に」の省略。はやさで。

【に】は、ここは「にて」「で」などの意。

【二百里の春】 既に春色にいろどられた二百里の地といふ意。簡略化したこの語法は、春色を賞でたのしむ暇もなく、一瞬にして過ぎ行く汽車の「疾さ」を表してゐる。

【七條のプラットフォーム】 京都驛のプラットフォーム。

【京都驛】は京都市七條通にあるので、その所在地の昔通りの名をとつて古風な味をだした。

【七條(シチデウ)】京都は桓武天皇が此の地に奠都せら

意。

【叩き】 タタき ここは「叩土」の略。「三和土」とも書く。石灰・赤土・砂利などに苦鹽の汁をまぜ、水を加へて煉り固め、土間などに塗つて固めたもの。今は多くセメントを用ひる。

【黒き咽喉】 クロキノド 機關車の煙突。汽車を「黒きもの」と譬へたので、その煙突をかく形容した。

【火の粉】 ヒのコ 飛び散る火。火片。火花。

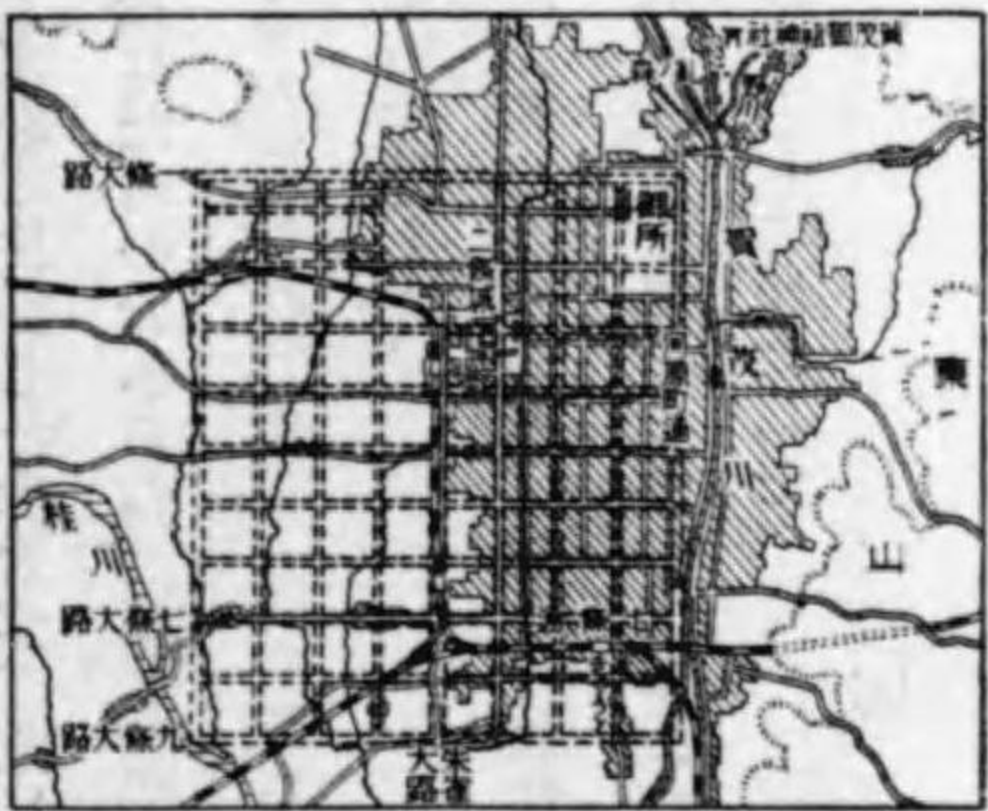
【轟と】 グワウト とどろく様の形容。もと群車の軋りをいひ、轉じて雷鳴・大砲の音などにも用ひる。

【黒きものは、黒き咽喉から火の粉をばつと吐いて、暗い國へ轟と去つた】

【黒きもの】「黒き咽喉」「暗い國」と頭韻を踏んで印象を鮮かにし、感銘を盛上げてゆく所、機智に富んだ漱石獨特の筆法である。警拔な譬喩によつて、所謂「長蛇のうねり」などと形容される夜汽車の一種妖怪じみた不氣味さを表して、次の「唯さへ淋しい」といふ京の町の春寒の宵の淋しさの伏線とした。

【眞葛】 マクズ 「眞葛が原」今の京都市東山區東山の麓圓山公園の東邊、現京都市の野外音楽堂のあるあたりの地。一説には滋賀縣滋賀郡坂本村滋賀院の邊の地ともいふ。

【賀茂】 カモ 「賀茂川」京都府愛宕郡北部の山間に發源



り、新市の街衢はその交錯する舊平安京の區劃を規準にして整理されてをり、京都驛のある地は古の七條大路、今の七條通に近い地にあるのである。なほ挿圖について参照せられたし。

【プラットフォーム】は Platform. 汽車・電車等の停車場・停留場の昇降場所。

【振り落す】 フリオトす 「汽車は」と汽車を主語にして書き起したので下車したことを「振り落す」と擬人化したのであるが、有情の人が無心の汽車に振り落されたといふ言ひ方の中には、既にわびしい旅情が籠つてゐる。

【余】 ヨ 「ワレ」と訓ずる。人代名詞自稱。

【踵】 タビス・キビス かかと。「踵の」の「の」は「が」の

し、鞍馬・貴船の二支流を合せ、南流して高野川と會し京都市に入つてその東部を貫流し、末は桂川に注ぐ。河床は概ね砂礫で、淺瀬の所々に晶玉を轉せしめ、古來京都の夏の清涼な景物として賞でられ、殊に「四條河原の夕涼」は有名である。

【比叡】 ヒエ 「比叡山」山城・近江兩國に跨り、海拔八四八米。京都市の東北方に聳えるので北嶺と呼ばれ、山上を占める天台宗山門派の總本山延暦寺に因んで天台山ともいふ。頂上を四明嶽と稱する。登山路は滋賀縣坂本村からの坂本口、京都側には白川町から登る白川口、修學院町からの雲母坂及び八瀬村から上る八瀬道がある。今は京都市出町柳から叡山電車、坂本村から比叡山登山鐵道の各ケーブルカーが山上に通じ十分餘で山路の大半を登る事が出来る。

全山延暦寺の境内で所謂三千坊を擁してゐた古の佛はなすが、尙根本中堂初め幾多の僧坊が谷々に散在し、全山を蔽ふ鬱蒼たる杉の老樹は、山にまつはる千年の歴史傳説と相俟つて、森氣幽邃身に迫るの概がある。加ふるに山嶺の眺望は東に琵琶湖を脚下に望み、西南に京都の古都から近畿の山河を一眸の内に集めて誠に絶佳である。

【愛宕】 アタゴ 「愛宕山」京都市右京區嵯峨の西北にある名勝。海拔九二四米。坂路五軒餘。附近第一の高山で山上は老樹鬱蒼、頗る幽邃を極め、三伏の候なほ暑熱を

知らぬ靈境である。山上の愛宕神社は火除の神として崇められ、毎年六月二十四日は千日詣の参詣者で賑はふ。なほ山の東嶺には月輪寺があり、西溪には清和天皇退位後の山居水尾里に水尾山陵がある。

【鞍馬】クラマ 「鞍馬山」京都府愛宕郡にある山。京都市の北約一〇軒。海拔五七〇米。古名を「闇部山」と稱し、山形の鞍馬に似てゐるために今の名にかへられた。貴船山と連恆して丹波高原の一部をなしてゐる。山腹に有名な鞍馬寺があり、源義經の傳説に因む僧正ヶ谷・魔王堂・天狗の大杉等の名所がある。

【九條に至つても、十條に至つても】

京都の街衢は一條から九條までで十條はない（前参考圖参照）十條は假定に過ぎないのであるが「八條に至つても九條に至つても」と事實によらず、ここにこの假定を用ひ、更に「百條に至り」「千年に至るとも」と假定法をもつて進み、永遠に昔の儘に、永遠にものさびしい京の町の風情を強調してゐる。

【依然】イゼン もとのまま。前の通り。

【會釋なく】 エシヤクなく 挨拶もなく。斷りもなく。

「會釋」は、(一)佛語。法文の難儀に會通して之を解釋すること。(二)のみこむこと。合點すること。(三)應接すること。相手となること。(四)首を垂れて一禮すること。挨拶、辭儀。ここは(四)の意。

【顛へる】 フルへる 音は「セン」

【轆】 ナガエ 「長柄」の義。もと牛車馬車などの前に長く出した二本の棒。その前端に轆を渡し、牛馬に駕して挽かせたもの。後に一般に車の棍棒をいふ。ここは人力車の棍棒のこと。

【遠いよ】と云つた人の車と、「遠いぜ」といつた人の車と顛へてゐる余の車は、長き轆を長く連ねて、狭く細い路を北へ北へと行く】

「主人と居士と余の車は、轆を連ねて……」で十分意味の通ずる所である。それを「人の車と」「……人の車と」長く連ねて」と受け、「北へ北へ」と続ける。眞實道の遠さをかこつ作者の實感が流露して、自らこの文調をなしたのであらう。殊に「ながきがながえをながく連ねて」といふ頭韻を踏んだ一句が如何にもよく効いて、果しなく遠い道の長さをつくづくと感銘させる。

【静かなる夜を、聞かざるかと輪を鳴らして行く】

當時人力車の車輪は金輪で、今のやうにゴム輪ではなかつたし、街路も今のやうに舗装されてゐなかつた。随つて輪の軋る音もひどかつたのであるが、それにしても、「聞かざるか」とはうまい表現である。ただ車輪の音だけ激しく鳴る京の町の、春宵のしんとひそまりかへつた静けさが、この一句によつてまさまざと印象される。

【北のはて】 次行「主人」とある狩野享吉氏の住所、京都市外下鴨村二十四番地（現京都市上京區）を指す。下鴨は賀茂川と高野川の合流する地點で京都の北郊に當るのである。

【主人】 シュジン 漱石の友人狩野享吉氏。

「狩野享吉」は明治二十一年東京帝國大學數學科を卒業、更に二十四年哲學科を卒業し、三十九年京都帝國大學に文科大學の増設されるに及んで、その初代學長となり、四十年文學博士となつた。漱石にとつては大學の先輩であり、また最も畏敬した親友の一人で、この旅行の目的は狩野氏と會ふことであつて、半月の間をここに起居したのであつた。（参考欄参照）

【居士】 コジ (一)學徳が高く仕官せぬ人。處士。(二)佛語。(イ)梵語 Kṛpāṇa の譯。眞宗以外の諸宗派で、男子の法名の下につける稱號。(ロ)俗人で佛門に歸依する男子の稱。ここは(二)の(ロ)の意で、友人菅虎雄氏を指す。氏は嘗て洪川和尚について參禪したことがある（「洪川和尚の會下」の條参照）のでかく呼んだ。

【菅虎雄】は、明治二十四年東京帝國大學獨文科卒業。漱石の親友の一人で、漱石は大學時代その下宿に同居したことなどもあつた。四十年二月第三高等學校教授として赴任し、當時狩野享吉の家に寄寓してゐた。

【車】 クルマ ここは人力車。

【鳴る音は狭き路を左右に遮られて、高く空に響く】

狭い道の兩側が家竝に遮られてゐる爲に、鳴る輪の音が上につつぬけて空に高く響くのである。

【かんかららん、かんかららん、と云ふ。石に逢へばかかん、かからんと云ふ】

「陰氣な音ではない、併し寒い響である」といふその輪の音が、この擬聲音によつて如何にもうまく象徴されてゐる。静閑な夜空に高くつつぬけて行く音を巧みに把へて、そこに觀察の精緻的確さを示し、而もこれを漱石獨特の機智によつて生かしたものである。

【風は北から吹く】

春宵の寒さが吹く風によつて具象化された。寒さを言はずして肌に沁みる春寒の底寒さを感じさせる。この俳句的な簡潔な表現には味はふべきものがある。

【仕切る】 シキル (一)區劃する。さかひを立てる。かざる。(二)帳面を決算する。(三)物事の決着をつける。ここは(一)の意。

【小田原提燈】 ヲダハラチヤウチン 不用の時は折疊んで腰にさし、用ひる時延べひろげ得るやうに作つた細長い提燈。享保の頃小田原で始めて造りだしたので此の名があるといふ。

【ぜんざい】 「ぜんざいもち」の略。つぶし餡の汁粉。みなかじるこ。

【人氣】 ヒトゲ (一)人のゐるけはひ。(二)人らしいこと。人なみ。ここは(一)の意。

【抑々】 ソモソモ 「そも」を重ねた語。(一)事物の由来などを説き起す時に用ひる。一體全體。(二)上を抑へて下を起すに用ひる語。(三)ただしはまた。もしくは。あるひは。以上は副詞としての用法で、名詞として、「抑々」は冒頭に用ひられる語だから、はじまり・發端などの意となる。ここは副詞の(一)の意。

【人氣のない軒下にせんさいは抑々何を待ちつつ赤く染まつてゐるのか知らん】

寂寥たる夜寒の中に、提燈のぼやけた光が赤くにじんでゐる昔ながらの京風景を眼に浮かべしめるのであるが、「せんさいが……赤く染まつてゐる」とは如何にも警拔な表現であつた。正に一幅の戲畫をみるやうな微笑を誘はれる。

【氣色】 ケシキ ここは、様子。ありさま。

【成程遠い】 ナルホドトホい

【遠いよ】と主人が後から云ふ。『遠いぜ』と居士が前から云ふ。【(前頁三行)に應じて、「成程」と言つた。

【成程】は、(一)まことに。げに。(二)さかにも。(三)なるべく。なるだけ。ここは(一)の意。

【膝掛】 ヒザカケ (一)まへかけ。前垂。(二)乗車又は理髪・著座の際などに膝に蔽ひかけるもの。汚れを防ぎ、

橋の袂を左に折れると間もなく葵橋があつて、その橋を渡つて行つたもののやうである。(挿圖参照)

【河原】 カハラ 「川原」「碓」とも書く。川邊の水がなく砂石の多い處。ここは鴨川の河原。

【藁葺】 ワラブキ 屋根を藁で葺くこと。又その屋根。

【棍棒】 カチボウ 人力車などの轆をいふ。

【棍棒を切る】は、棍を轉ずる・方向をかへる等の意。ここは人力車が目的地に着いた途端、ぐるつと轆を半回轉させて、乗客の降り口を家の門口の方に向ける、例の動作を敘したのである。

【四抱】 ヨカカへ 四人でだきかかへる程の太さ。

【鼻先】 ハナサキ (一)鼻の先端。(二)轉じて目の前、つ近く。ここは(一)の意。

【よくよく】 (一)念には念を入れて。よつく。(二)極めて甚だしく。極度に。(三)萬止むを得ない時にいふ語。よくせき。よつほど。ここは(二)の意。

【料峭】 レウセウ 春風の肌を寒く感ぜられること。

【料峭たる星】は、肌寒さを感じしめる冴えた春の星、程の意。

【遙かなる頭の上に見上げる空は、枝の爲に遮られて、手の平程の奥に料峭たる星の影きらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元來何處へ寝るのだらうと考へた】
頭上の空の小ささは森の深さを印象させる。その森の奥

又は防寒のために用ひる。ここは(二)の意。

【洋傘】 ヤウサン 「かうもりがさ」のこと。屢々よく此の文字に「カウモリ」の讀假名が附けられる。

【拾つて仕舞つた】

客の勞をいたはつて居士がわざわざ代つて持参したこと勿論である。その親切を如何にも無情げにとがめてゐる口調に諧謔味が出てゐる。

【奮發】 フンパツ (一)心を奮ひおこして決心すること。

(二)思ひ切つて物を買ふこと。ここは(二)の意。

【此の寒いの膝掛を拾はれては、東京を出るとき二十圓五十錢を奮發した甲斐がない】

隨分氣を利かしたつもり親切を「拾はれて」と言はれ事實それがまた大枚の金を投じた甲斐をなくしたと言はれては、居士たるもの微苦笑を禁じ得ないであらう。俗

に「氣が利き過ぎて間が抜けた」といふ。事の顛倒から起るユーモラスである。殊に「二十圓五十錢」と數字

をはつきりとだした所、漱石の特色が躍如として、ここに一段の滑稽味を加へてゐる。

【橋の袂】 ハシのタモト 橋の際。橋の渡り口のあたり。

【長い橋の袂を左へ切れて、長い橋を一つ渡つて】

明記されたものがないから正確には知り難いが、恐らく作者は河原町通を眞直ぐに北に進んだのであらう。その通を出抜ける所を右に折れると賀茂大橋がある。その大

にきらめく料峭たる星影は、春寒の底冷えを肌に沁みて感ぜしめる。都に遠いこの幽邃な境地を描きながら、その境地とは凡そ遠い「何處に寝るのだらう」と考へてゐる。所謂餘裕派の名を以て呼ばれる作者の特質の一端が顔を出してゐる所で、この心理の飛躍の間に、何とも言へぬ洒脫な味が醸されてゐる。

【賀茂の森】 カモのモリ 「糺の森」(二三頁八行)ともいふ。京都市左京區下賀茂神社の森。また賀茂・高野二

流の合流點にある爲に「川合の森」ともいふ。老樹鬱然として繁る幽邃の地で、細流瀨見の小川が貫流して雅趣

を添へてゐる。古來下賀茂神社の神境たると同時に、時鳥の名所として、又納涼の地として平安都人の遊歩の地である。

【下賀茂神社】に就いては五・平家物語二七頁四行「賀茂」参照。

【繞る】 メぐる 音は「ゼウ」又は「ネウ」

【野明さん】 ノアキさん。傳未詳。

【哲學者】 テツガクシヤ 哲學を研究する學者。ここは狩野亨吉氏。

【哲學】は Philosophy の譯語。人生・世界の具體的な問題を嚴密な知識によつて根本的に解決する學。

【洪川和尚】 今北洪川。諱は宗溫、字は洪川、虚舟と號した。文化十三年攝津國西成郡福島村に生まれた。初め藤

澤東暖に儒典を學んだが、十九歳出家を志し、相國寺の大拙禪師に道譽をきき、二十五歳遂に父母愛妻と別れて禪師のもとに刻苦勵精し、四十三歳吉川侯に聘せられて周防國岩國の永興寺の住持となり、明治維新に至つて次第に宗内に重きをなし、八年(六十歳)鎌倉の圓覺寺にうつり、その禪風は關東の地に高く道俗の尊信をうけた。十三年權大教正となり、十五年七月管長の職につき二十五年示寂。享年七十七。著書に「禪海一瀾」「廣録五卷」等がある。

【會下】エゲ 禪宗・淨土宗等で師僧の下に集つて參禪修學する所。またその學徒。

【居士は洪川和尚の會下である】

菅虎雄(居士)は明治二十一年以來、一木喜徳郎・内田康哉等と今北洪川の會下に參禪してゐたといふ。

【玄關に待つ野明さんは坊主頭である。臺所から首を出した爺さんも坊主頭である。主人は哲學者である。居士は洪川和尚の會下である。さうして家は森の中にある。後は竹藪である。顛へながら飛び込んだ客は寒がりである】

等しく頭を坊主にしてゐる人々の風手と、森の中で藪にかこまれた所の様と、この一風變つた境地を簡潔に敘して行く筆致に、既に禪味が溢れてゐるのであるが、殊に「飛び込んだ客は」とここに一脈の生動を加へ、しかも「寒がりである」と警拔な一句で結び、一段と洒脱な味

を添へてゐる。

【見兼ねて】ミカねて 見てをられないで。

【兼ぬ】は、ここは、出来ないの意。

【公】コウ こゝは人代名詞對稱。「貴公」といふに同じ。主として尊長の敬稱に用ひる。

【透き徹る】スキトホる

【浸ける】ツける ひたす。

【齒の根が合はぬ】ハのネがアはぬ 寒さや恐怖のためにふるへをのくさまの形容。ここは勿論湯が寒かつたといふのであるが、事實は作者がさう感じたのであらう。

【古往今來】コワウコンライ 昔から今まで。古來。

【郡内】グンナイ (一)現山梨縣南北都留郡の稱。相模川の上流桂川の流域地方で、谷村町を中心市場とし、養蠶が盛に行はれ、甲斐絹の特産と、桂川沿岸の幾多巨大な發電所とを以て有名である。(二)郡内織の略。ここは(一)の意。

【郡内織】は甲斐絹の一種。縞甲斐絹とも呼ばれ、南都留郡谷村町附近を主産地とする。平織の絹で、縦縞・横縞・格子縞等がある。主として羽織裏・夜具等に用ひられる。

【太織】フトラリ 經に玉絲、緯に鬘斗絲を使つて平織に織つた太地の絹織物。今一般に「銘仙」と呼ばれるものがこれである。伊勢崎・秩父・八王寺等がその主なる産地

で、縞・緋等種類が多く、實用本位の着物として使用される他、夜具・座蒲團等に用ひられる。

【新調】シンテウ (一)新しくととのへこしらへること。又その物。(二)新しい調子。ここは(一)の意。

【心得】ココロエ (一)會得する。さとる。(二)承知する。のみこむ。(三)覺悟する。用意する。(四)ひきうける。ここは(二)の意。次頁・初行「心得ぬ」は(一)の意。【御免を蒙る】ゴメンをカウムる 御許を受ける。失禮する。

【御免】は、ここは容赦・赦免の敬語。

【蒙る】は、ここは「うける」の意。

【寢心地】ネゴコチ 睡眠中の心持。

【夜着】ヨギ 衣のやうな形で、やや長く、袖をつけ、厚く綿を入れた夜具。故に「袖のある夜着」と言つた。

一般に「夜着」は關東地方以北の風俗で、京都ばかりでなく關西から以西に於ては夜着を作らないやうである。【京都はよくよく人を寒がらせる所だと思ふ】

「車に寒く、湯に寒く、果は蒲團にまで寒かつた」といふその寒さを、京都といふ場所の所爲にしてゐる。この擬人的手法が一種ユーモラスな趣をだしてゐるのであるが、同時に、その中に「夜着をつくらぬ」京に来てゐるといふやう所ない旅情を滲ませてゐる。

【枕頭】チントウ 枕もと。まくらべ。

【違棚】チガヒダナ 二枚の棚板を左右から上下くひちがひに吊つた棚。正式の床の間にはこの違棚が附屬するのが定則である。

【紫檀】シタン 荳科の常緑喬木。印度南部の原産。高さ一〇米に達する。葉は七乃至一枚の小葉からなる羽状複葉で互生し、小葉は卵形で全縁。枝頭・葉腋に帯黄色の蝶形花を圓錐狀に開く。花後、圓形の翅を有する圓形莢果を結ぶ。材は帯紅色で質が堅く、器材として珍重される。

【枠に嵌め込まれた】ワクにハメコマれた

【枠】は、(一)細い材を用ひ、布帛・紙面・器具等の形を保持せしめる爲の骨格又は輪廓。(二)印刷物の四方を圍んだ線。ここは(一)の意。

【嵌】は、音「カン」はめこむ。

【銀椀】ギンワン 銀色又は銀製の椀。

【象牙】ザウゲ 象の上顎門齒の口外に突出して上に向かふもの。堅く色白く文理があり、種々の器具を作るに用ひる。

【チーンと銀椀を象牙の箸で打つ様な音を立てて鳴つた】濁りがなくさええと美しい音の形容である「銀椀を象牙の箸で打つ」とは如何にも美しい譬喩であつた。「チーン」といふ擬聲音も此の場合よく利してゐる。

【頭の中はまだ鳴つてゐる】

頭の中に時計の冴えた音の餘韻がなほ響いてゐるのを言つたのであるが、それを「頭の中は……」と直接法にして、既にここに主客を越えた悠遠な感じをだしてゐる。

【心のつながる所】

「心が無限の幽境に接続する所」といふ意。作者は、人間の脳の奥に心があり、更にその奥に心のついて行き得ない深遠幽邃な境地が存在すると考へてゐるのである。

【濃か】

コマヤカ ここはこまかく・ちひさく等の意。「濃」はもと濃い・淡いの意に用ひられる語であるが、こは色彩の意ではない。

【退かなる】

ハルかなる 遠い。

【退】

「退」は音「カ」はるかなること。遠いこと。「其の鳴りかたが、次第に細く、次第に遠く、次第に濃かに、耳から耳の奥へ、耳の奥から脳のなかへ、脳のなかから心の底へ浸み渡つて、心の底から心のつながる所で、しかも心の尾いて行く事の出来ぬ、退かなる國へ抜け出して行く様に思はれた」

「次第に細く」以下「次第に」を丁寧に三つ重ねて、更に「耳から耳の奥へ、耳の奥から」といふ風に前句末をうけて次句を起して行くこの一種迂遠な敘法が「心の尾いて行くことの出来ぬ退かなる國」といふその悠遠さにびつたりと適つて、無限の幽境に赴く心理過程を如實にあらはしてゐる。

【涼しい】 スズしい (一)程よく冷やかである。暑くなく寒くなく心地がよい。(二)清らかである。さわやかである。(三)潔白である。いさぎよい。こは(二)の意。

【幽境】 イウキヤウ 奥深く遠い所。奥深くもの静かな境地。

【氷盤】 ヒョウバン 氷でつくつた盤。

【盤】 は、さら・はち等の意。

【雪甌】 セツオウ 雪でつくつたかめ。

【此の涼しき鈴の音が、わが肉體を貫いて、わが心を透して無限の幽境に赴くからは、身も魂も氷盤の如く清く、雪甌の如く冷やかでなくてはならぬ。太織の夜具の中なる余は愈々寒かつた】

涼しい鈴の音にひかれて無限に冴え徹る心境を、「余は愈々寒かつた。」と片づけてしまふ、この一こまビントのはづれた表現が、洒脱な味をだしてゐるのではあるが、それは既に肌身の寒さだけではなくて、心の底から寒々しい旅情の寒さでもあり、更に言へば心境の寒さでもある。

【曉】 アカツキ 音は「ゲウ」夜明方。

【樺】 ケヤキ 楡科けやき屬の落葉喬木。幹の高さ三〇米周圍三米餘に達するものもあり、上部に多くの枝を分つ。樹皮は帯緑・暗紅褐色で粗糲。葉は短柄で互生し、卵狀長楕圓形又は披針形で尖り、縁邊に鋭鋸齒を有する。雌

【いとど】 「いと」との約略。いよいよ。ひとしほ。一層。【神意】 シンイ 神の御心。神の御意志。

【うき我をいとど寒がらしめ給ふの神意かも知れぬ】 芭蕉の句に「うき我を寂しがらせよ閑古鳥」といふのがある。それをもじつたものであらう。

芭蕉はひたむきに傍目もふらず主觀の世界を深く掘り下げて「寂しがらせよ閑古鳥」といふ。漱石はひらり體をかはして「寂しがらしめ給ふの神意かも知れぬ」と、よそ事のやうに客觀的に眺めてゐる。これが餘裕派と呼ばれる漱石の態度であり、漱石獨特の諧謔味がそこから湧き出てゐることが感じられる。

【依稀】 イキ さも似てゐること。おぼろげなこと。

【罩む】 コむ 「罩」は音「タク」又は「タウ」つつみこめること。

【寂然】 セキゼン さびしいさま。易繫辭「無思也、無爲也、寂然不動、遂通天下之故」

【依稀たる細雨は、濃やかに糺の森を罩めて、糺の森はわが家を遶りて、わが家の寂然たる十二疊はわれを封じて、余は幾重ともなく寒いものに取り圍まれてゐた】

春先の雨が冷たく降り罩める森の中の家であり、而も十二疊といふ広い室に、たゞ一人寂然として顛へてゐる作者の姿が思はれる。「幾重ともなく寒いものに取り圍まれてゐる」といふ、その寒さは、ここではもう感覺的な寒

雄同株で四五月頃淡黄緑色の聚繖花序をなす雄花と、灰黒色の單立の雄花とを、それぞれ新條の下部又は又部に腋出し、十月頃扁球形の小核果を結ぶ。材は堅硬で木理が美しく、家具・建築・船艦の材料として重用される。

【曲折】 キョクセツ (一)折れ曲ること。(二)變化のあること。(三)こみこみつた事情。一部始終。こは(一)の意。

【單純】 タンジュン (一)まじりけのないこと。純一。(二)複雑でないこと。簡單。制限又は條件のないこと。こは(一)の意。

【きやけえ、くうと曲折して鳴く。單純なる鳥ではない。への字鳥、くの字鳥である】

「きやけえ、くう」といふ擬聲音がまづ奇抜である。それを「曲折して鳴く」と言ひ、而も「單純なる鳥ではない」と大袈裟に出て、最後に「への字鳥、くの字鳥」と戲畫化してしまふ。輕妙な機智に溢れた漱石獨特の筆法である。

【賀茂の明神】 カモのミヤウジン 下賀茂神社の神様。「玉依姫」と神武天皇の御東征を嚮導し奉つた「建角身命」(八咫鳥)とである。

「明神」は、天神・鬼神の尊稱。更に尊んでいふ時は大明神といふ。

【うき】 「憂き」と書く。憂へる。心配する。悲しむ。

さを越えて、心の底から湧き上る空漠たる精神的な寒さである。新聞記者への轉換を決意した當時の漱石の心境に觸れるものがある。

【社頭】 シャトウ 神社のほとり。

【春寒の社頭に鶴を夢みけり】

句意は春寒の一夜、社頭の家に宿つて鶴の夢をみたとい

ふのである。冴え徹つた春寒と、森嚴幽邃な社頭と、それを背景にして清淨崇高な鶴のただずまひが思ひ描かれる。作者の夢はまことに神韻縹渺として清く汚れがない。そして句境句體も亦そのやうにすつきりと澄みきつてゐる。

2 文の構成

第一節 初―一七頁四行 京都驛着。

第二節 一七頁五行―二〇頁七行 淋しい京の町を、春寒の宵、車を北へ走らせる。

第三節 二〇頁八行―二二頁二行 主人の家と居合はした人々。

第四節 二二頁三行―二二頁三行 湯に寒く果は蒲團にまで寒かつたこと。

第五節 二二頁四行―二三頁二行 眞夜中の幽寂な心境。

第六節 二三頁三行―終 曉の鳥と、一入の寒さ。

3 文意

唯さへ淋しい昔ながらの京の情調を背景として春寒の旅情を敘した文である。出迎へに來た「主人」と「居士」と、春寒の宵の淋しい京の街を、轅をつらねて行く車上に寒く、主人の家について湯に寒く、果は蒲團にまで寒かつた上に、眞夜中は置時計の涼しい音に眼を醒され、曉は鳥に夢を破られて身も心も泌々と寒いものに取り圍まれる早春の旅情を述べてゐる。

4 鑑賞批評

愈々大學教授をやめて新聞社に入社を決め、雜務を整理した後、漱石は此の旅に出たのであつた。長い教師生活から新聞人への轉身は、漱石自身にとつては、相當大きい精神的な悩みもあつた筈であり、空漠として薄ら寒い心境にゐたことも推察に難くはない。さうした境地が自らの旅情の上に濃やかな陰翳を投じたことは當然である。而もその時が季節の變りめに當る早春の頃であり、その場所が唯さへ淋しい昔ながらの京都であつたことも、さうした旅情を更に色濃くし、行間に浸潤してゐる濃やかな旅愁は自ら讀者の胸に觸れて來る。併しこれを敘する漱石の態度は飽まで冷靜な彼獨特の餘所々々しさである。殊に本課は短文であるために、漱石の非人情的態度はその中に結收されて、遺憾なくその本領を發揮してゐる。巧妙な譬喩と適切な措辭とによつて、一語一句を新しい陰影を以て生かしつつ、而もその一語一句が互に結び合ひ、一章から次の一章へと展開してゆく緊密さは問はぬとしても、その表現の俳句的な簡潔さに於て、更にまた機智諷諷を縦横に驅使した輕妙洒脫な筆致に於て、正に漱石の獨壇場であり、禪味を帯びた枯淡な文趣には汲めども盡きぬ味がある。蓋し巨匠漱石の特色を窺ふべき好箇の讀物であらう。

三 備考

1 指導研究

(一)所謂餘裕派と呼ばれ、また滑稽諷刺の作家と言はれてゐる漱石の特色の最も端的に表れてゐる文であるから、先づ表現に即しつつ具體的に漱石のかかる特色を解明して行くべきである。

(二)極めて洒脫な文趣ではあるが、漱石の心境が、春寒の季節と京都の情調との間に溶けこんで、全文の底に流れる旅愁は蔽ひ難いものがある。讀みはそこまで掘り下げられなければならない。

2 参考

(一)本課に省略した部分を原文の中から次に摘録する。

(イ)一一九三行「赤く染まつてゐるのかしらん」の次。

桓武天皇の御宇にせんざいが軒下に赤く染め抜かれてゐたかはわかり易からぬ歴史上の疑問である。然し赤いせんざいと京都とは到底離されない。離されない以上は千年の歴史を有する京都に千年の歴史を有するせんざいがなくてはならぬ。せんざいを召し給へる桓武天皇の昔はしらず、余とせんざいと京都とは有史以前から深い因縁で結びつけられてゐる。初めて京都に來たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一所であつた。鉄屋町の柵屋といふ家へついて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の眼に映つたのは此の赤いせんざいの大提燈である。此の大提燈を見て余は何故か、是が京都だなど感じたきり明治四十年の今日に至るまで決して動かない。せんざいは京都で、京都はせんざいであるとは、余が當時に受けた第一印象で、又最後である。子規は死んだ。余はいまだにせんざいを食つた事がない。實はせんざいの何物たるかを辨へぬ。汁粉であるか、煮小豆であるか、眼前に髣髴する材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稻妻の迅やかなる閃のうちに思ひだす。同時に——ああ、子規は死んで仕舞つた。絲瓜の如く干枯びて仕舞つた。提燈は未だに暗い軒下にぶらぶらしてゐる。余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける。

(車はしきりに駈ける……につづく)

(ロ)一一九頁一一行「奮發した甲斐がない」の次。

子規と來た時は斯様に寒くはなかつた。子規はセル、余はフランネルの制服を着て得意に人通りの多い所を歩いた事を記憶してゐる。その時子規はどこからか夏蜜柑を買つて來て、之を一つ食へと云つて余に渡した。余は皮を剥いて一房毎に裂いては噛み、裂いては噛んで、あてどもなくさまようてゐると、いつの間にもやら幅一間位の小路に出た。此の小路の左右に竝ぶ家には門並方一尺ばかりの穴を戸にあけてある。さうしてその穴の中から、もしもと云ふ聲がする。始めは偶然だと思つてゐたが、行く程に穴のある程に、申し合せた様に、左右の穴からももしもといふ。知らぬ顔をして行き過ぎると、穴から手をだして捕まへさうに烈しい呼び方

をする。子規を顧みて何だと聞くと妓樓だと答へた。余は夏蜜柑を食ひながら、同分量で一間幅の道路の中央から等分して、その等分した線の上を、綱渡りをする氣分で、不偏不黨に練つて行つた。穴から手を出して制服の尻を捕まへられては容易ならんと思つたからである。子規は笑つてゐた。膝掛をとられて顛へてゐる今の余を見たら、子規は又笑ふだらう。然し死んだものは笑ひたくても顛へてゐるものは笑はれたくとも相談にはならん。

(からんからは長い橋の袂……につづく)

(ハ)一一二頁二行「客は寒がりである」の次。

子規と來てせんざいと京都を同じものと思つたのはもう十五六年の昔になる。夏の夜の月圓きに乗じて、清水の堂を徘徊して、明らかならぬ夜の色をゆかしきものの様に、遠く眼を微茫の底に放つて、幾點の紅燈の夢の如く柔かなる空想を縱に酔はしめたのは、制服の釦を眞鍮と知りつつも黄金と強ひたる時代である。眞鍮は眞鍮と悟つたとき、われ等は制服をすてて丸裸のまま、世の中へとび出した。子規は血を嘔いて新聞屋となる。余は尻をはしよつて西國へ出奔する。御互の世のお互に物騒になつた。物騒の極子規はとうとう骨になつた。その骨も今は腐れつつある。子規の骨が腐れつつある今日に至つて、よもや漱石が教師をやめて新聞屋にならうとは思はなかつたらう。漱石が教師をやめて寒い京都へ遊びに來たときいたら、圓山へ登つた時を思ひ出しはせぬかと云ふだらう。新聞屋になつて、糺の森の奥に哲學者と禪居士と若い坊主頭と古い坊主頭と一所にひっそり閑と暮してゐると聞いたら、それはと驚くだらう。矢つ張り氣取つてゐるんだと冷笑するかも知れぬ。子規は冷笑が好きな男であつた。

(若い坊さまが「お湯に御道り」と云ふ。……につづく)

(ニ)漱石の京都旅行の事情を物語る小宮豊隆の文をその著「夏目漱石」の中から左に抄録する。

漱石は池邊三山と會つて朝日新聞入社をきめ、大學と高等學校とに辭表を提出し、去年から持ち越しの文學論の校閲を卒へ、明治四十年三月二十八日東京を出發し京都に向つた。京都は漱石が明治二十五年の夏、正岡子規とあるいて以來漱石にとつては十五年振りの土地である。のみならず京都にはそこに新設された文科大學の學長として狩野享吉が赴任してゐた。明治四十年一月六日漱

石は伊津野直にあてて「閑靜なる御住居を卜され候由結構。狩野君より毎々京都はよい所だ、是非こいこいといはれ候。小生も行き度候。一ヶ月ばかり遊んで東京へ歸つたら嘸面白からうと存候。竹箴の中杯は東京では到底住めず候」と書いてゐる。その上二月には菅虎雄が三高に赴任し、狩野享吉と同居してゐた。三月二十三日野上豊一郎宛の手紙に「京へは参り候……京都には狩野といふ友人有之候。あれは學長なれども、學長や教授や博士杯よりも種類の違ふエライ人に候。あの人に逢ふ爲に候。わざわざ京へ参り候」とあるやうに、無論漱石は狩野享吉や菅虎雄に會ふ爲に、また大阪の朝日新聞の人々と近付になる爲に京都に出かけて行つたのであつたが、それとともに漱石には京都で暢氣に遊んでゐる内に、その内書かなければならぬ管の小説の材料を出來れば拾つて來たといふ下心も多少は動いてゐたに違ひないと思ふ。

一七 雪線旅情

藤木 九 三

一 解 題

1 作者

藤木九三 フチキキウザウ 明治二十年九月京都府福知山市に生まれた。福知山中學校を経て、早稻田大學英文科に入學、同校卒業と共に操觚界に投じ、明治四十二年東京毎日新聞社に入社、四十三年やまと新聞社に轉じ、大正四年東京朝日新聞社に入り、ついで同七年大阪朝日新聞社員となつて今日に及んでゐる。その間、青島戦役・シベリヤ出兵等に從軍したこともあり、又、大正十五年から昭和二年に亘り歐洲に留學してゐる。

氏の登山趣味は、幼年時代その郷土の大江山・普甲峠などに對して幼な心に山の神祕を感じた事に胚胎し、後富士山に登つていよ／＼山の靈感に打たれ、大正五年東久通宮殿下に扈從して、上高地から槍ヶ岳に登り、初めて日本アルプスの雄大な山容に接して以來、山岳に特別の執着を感じ、生涯山とは切つても断れぬ因縁に置かれるに到つたと、氏は述べてゐる。歐洲留學中、アルプスの最高峯モンブランを初め、マッターホーン・ワイスホルン等著名な山々に登つた他、ピレネー及び英國湖水地方の岩場に於て、ロッククライミングを経験し、歸朝後滿蒙學術調査團に從つて熱河を探險し、また京大の嚴冬期白頭山登攀に参加するなど、登山に關する豊かな經驗をもち、この方面の權威者を以て推されてゐる。著書に「屋上登攀者」(昭和四年)「雪・岩・アルプス」(昭和五年)「槍・穂高・岩登り」(昭和六年)「アルプス傳説集」「チロール傳説集」(昭和七年)「峰・峠・氷河」「雪線散歩」(昭和八年)「雪表縦走」(昭和十年)等山岳關係のものが多し。

2 出典

「雪線散步」から採つた。同書は主として昭和四年以後にものされた隨想・研究・評傳・小品・詩などを選び輯めたもので、昭和八年七月三省堂から出版された。

卷末の「雪線旅情」と題し七章から成る一文は、スキーの旅の豊かな情趣と、經驗に基づく行き届いた注意とを述べてゐる。本課はその一・二章の全部と、第三章の前半部とを殆どそのまま採録した。

3 主眼及び採擇の趣旨

春寒の旅情を敘した前課にひきつゞき、本課も亦冬山の情趣を描いた文章である。

スキーを導入することによつて一段の光輝と生彩を加へて更生した山行の滋味が、旅を愛し、山を愛する作者の體驗と實感を通して敘述せられた文で、冬山の自然に寄せる限りない親愛の情を經とし、精緻な觀察を緯とし、あやなすに華麗豊富な辭句を以てして、詩趣溢るゝ特異な藝術的情調を漂はしてゐる。これが鑑賞味に資せらるべき文藝的教材であり併せて登山趣味の培養に資したい。

二 解 釋

1 語 釋

【雪線】セツセン 本來地理學上の用語。四時雪を見る高所の限界線。その位置は一般に、夏季平均氣温零度の地點を連ねた線で、その海拔高度は赤道附近で四千内至五千米、極地方で零米である。
但しこゝでは「積雪期の高山」位の意に用ひられてゐる。

【旅情】リョジャウ 旅する時の心情。旅の情緒。

【時代から置き去りにされようとした「旅」】

作者の所謂「旅」とは「土に親しみ、風景の中に歩み入る姿」である。さういふ旅は、時代人の嗜好・趣味・欲求等から無趣味・無價値なものとして捨てて顧みられなくなつてゐるといふのである。「旅の風格や山行の滋味も、いはゆるスピード時代とよぶ文化の嵐に掻き亂

され」(同頁九行)と、作者は後にこの原因を説明してゐる。

【スキー】SKI (一)木製の雪上滑走・登行の運動具。橇體と縮具の二要素から成る。橇體は強靱で水分の吸収が少く、雪の附着しない木質部、即ちイタヤ・ヒツコリー等を用ひ、長さは使用者の身長・體重・用途にもよるが、大體一・八米位、幅は七・八厘、厚さは一・二厘。中央より稍後部に縮金を裝置し、靴の足先に緊縛する。(二)スキーをつけて雪中を滑走する運動。

スキーが雪上歩行に用ひられ始めたのは、古く六世紀頃からであつたが、冬のスポーツとして愛用されるに至つたのは十九世紀中期以後の事で、ノルウェー及びアルプス地方に發達し、我が國に輸入されたのは明治末期である。近代スキー術は平地・登山・滑降の三要素からなり、これにリーススキーとしてデスタントリースやジャンピングが加はり、壯快な近代的スポーツを構成してゐる。本課は(一)の意で、(二)の意の場合には特に「スキーイング」(一二七頁九行)と言つて(一)の意と區別してゐる。

【導き入れる】ミチビキイれる「取り入れる」位の意。

【峠】タウゲ (一)山坂の上りつめた所。(二)山の上り下り。こゝは(一)の意。たうげは「手向」の音便で、昔旅行者が其處で旅の安穩を祈る爲國津神・道祖神に手向し

たのだといひ、又「嶽の延音」だともいふ。「峠」は國字。

但し本課でいふ「峠」は作者の説明によると「峠と名のつく尾根のくぼみ」(参考欄参照)のことである。特にカギ印をつけたのもその意味のためであらう。

【情趣】ジャウシュ オもむき。おもしろみ。氣分。

【本來】ホンライ (一)もともと。從來。(二)あたりまへ。通常。こゝは(一)の意。

【持味】モチアヂ 固有のおもむき。自然に具存してゐる趣。

【息吹】イブキ 息をふくこと。呼吸。

「新しい息吹を吹き込まれ」は、新鮮な風趣を注ぎ込まれたことを意味する。

【光輝】クワウキ (一)ひかり。かゞやかしさ。(二)勢威。名譽。こゝは(一)の意。

【生彩】セイサイ 生々とした趣。「彩」は、(一)いろどり。かざり。(二)ひかり。つや。

【更生】カウセイ (一)死者が再び蘇ること。(二)轉じて、衰退死滅に傾いた事物が再び生氣をとりもどすこと。こゝは(二)の意で、峠の情趣が再び理會せられるに至つたこと。

【どうかすると時代から置き去りにされようとした「旅」は、

スキーを導き入れることによつて救はれた。そして「峠」の情趣は、本来の持味に新しい息吹を吹き込まれ、一段の光輝と生彩とを加へて更生した」

作者は原著「雪線散歩」の序文の中にも「由來、山行はスキーを導入することによつてフレツシュなぶきを吹き込まれたと云ひ得よう」といひ、また「吾々はスキーを介して、積雪期の「山の」新生を祝福しなければならぬ」とも言つてゐる。雪に蔽はれた山の自然が、スキーと結合することによつて更生した新鮮な情趣に對する禮讃の言葉である。以下此の一文は、正にスキーを介して、冬山に吹き込まれた新しい息吹を、自らの體驗を通して、詩情を傾けて物語つてゐるのに他ならない。

【由來】 ユライ (一)物事の由つて來る所。來歴。(二)もとより・元來等の意を表はす副詞。多く文首に用ひられて發端の辭の用をも兼ねる。こゝは(二)の意。

【由來旅は、土に親しみ風景の中に歩み入る姿である】

「歩一步大地を踏みしめる事それ自身に、生のよろこびと冥福とを感じる」といふ巡禮者の姿、それが土に親しむ旅の姿である。歩一步大地を踏みしめる事に歡びと冥福とを感じる姿こそ、更に風景の中に身を置き風景の中に溶化し、主客融合の妙境に歩み入る姿に他ならない。旅をかく規定する作者の中に、素樸な旅の姿に對する限りない憧憬が潜んでゐることは言ふまでもない。誠にこ

の作者は心から「旅を旅する人」なのである。

【旅を旅する】 初の「旅」は本来の意味に於ける旅をさす。即ちたゞ享樂のために、また漠然として旅行くのではなく、旅に價値と生活とを見出し、旅の中に盡きない情緒を汲みとり無限の親を感じ得る旅の態度、それを「旅を旅する」と言つた。聖地をめぐる巡禮者の心理と相通するものがある所以である。「旅を楽しむ」といひ、また「旅に住する」といふも、「旅を旅する」態度に他ならない。

【聖峯】 セイホウ 神聖な山。

【カイラス】 ヒマラヤ山系中の山。西藏の西境に近いマナサロウ湖の北方に位置し、海拔六六五四米。インダス河の發源する處で、印度教徒の神聖視する山として知られてゐる。

【オム・マニ・パド・メフム】 六字大明咒といふ。喇嘛教徒の唱へる觀世音菩薩の寶號。梵語の Om mani padme hum で、「嗚呼蓮華上の寶珠」の義である。此の寶號は一切の智慧福德及び萬善萬行の勝行と信ぜられ、喇嘛教徒の間では、僧俗官民の別なく普く念誦されてゐる。恰も我が國に於ける六字名號・七字題目・光明眞言などに當るものと考へたらよい。

【唱誦】 シヤウシヨウ となへ口ずさむこと。

【歩一步】 ホイツポ 一步々々。

【生のよろこび】 生存のよろこび。生きてゐることの歡喜。

【冥福】 メイフク (一)死後の幸福。(二)死後の幸福を祈るために佛事を修すること。追善。こゝは(一)

【巡禮者】 ジュンレイシヤ 信仰によつて聖地・靈場を巡拜する人。

「巡禮」は俗に「順禮」とも書く。キリスト教徒のパレスタナ巡禮、マホメット教徒のメッカ巡禮など有名である。佛教徒の巡禮は釋尊がその晩年に四處巡禮(生處・成道處・初轉法輪處・入涅槃處)の功德を説いたのに始まり、印度では殊に盛に行はれた。我が國には入唐求法の僧徒によつて傳へられたもので、南都七大寺巡拜に始まるもののやうである。平安朝末期には既に西國三十三所の觀音靈場を巡拜する風が行はれ、以來次第に流行し、今なほ信徒の間にはこの風が行はれてゐる。

【共鳴】 キョウメイ (一)理學上 Resonance の譯語。振動数の等しい二箇の音叉を取り、一つを鳴らす時は、暫くして他も亦鳴るやうな現象。音叉・三味線等に箱の具へてあるのは、その内部の空氣に共鳴を起させる爲である。(二)轉じて、他の言行を感受して、同感の念を起すこと。こゝは(二)の意で、旅を旅する人が、巡禮者の氣持に同感の念を起すこと。

【風格】 フウカク (一)人がら。人品。(二)轉じて、物事

のやうす。おもむき。こゝは(一)

【滋味】 ジミ (一)うまい味はひ。(二)滋養となる食物。こゝは(一)の意で、「山行の豊かな趣致」を食物の味に譬へた語。

【スピード時代】 速度尊重の時代。スピードをモットーとする時代。

近代機械文明の大きな特色である速度尊重の傾向は、まづ交通機關の異常な進歩發達に伴なつて招致された。それが物質文明と結びつく時、こゝに商・工業等經濟機構内に於ける國內及び國際間の激烈な競争状態を現出したのであるが、それはやがて次第に全文化領域内に浸潤して遂に個人生活をすらスピード第一主義的なゆとりのない慌しいものにしてしまつたのである。

【文化の嵐】 ブンクワのアラシ 文化の威力を「嵐」に譬へた。その緣によつて、「旅の風格や山行の滋味」が世人に棄てて顧みられなくなつたことを、下に「掻き亂され」と言つてゐる。

「文化」は、もと哲學上の用語、Kultur の譯語。人類の本来所有する理想を實現して行く人間の價値活動の過程をいひ、藝術・道德・宗教から國家・法制・經濟等に至るまですべてその所産である。「文明」が一般に外的物質的發達を意味するに對し、「文化」は精神的・内面的なものの意味する。但しこゝでは寧ろ精神的な方面より外的・

物質的なものを意味し、随つて「文明開化」位の意に用ひられてゐる。

【プリミティヴ】 Primitive (英語) 原始的の。質朴な。古風な。

【佛】 オモカゲ 「面影」とも書く。(一)かほつき。顔かたち。おもさし。(二)轉じて、様子。姿。おもむき。(三)幻影。こゝは(二)

【土の香に親しむといつたプリミティヴな佛】 「土の香に親しむ」ことは、歩一步大地を踏みしめることによつてこそ可能であるが、歩一步大地を踏みしめて行くことは、スビード時代と呼ばれる現代人の生活とは全くかけ離れた、原始素朴な姿である。

【虐ぐ】 シヒタぐ (一)残酷なあつかひをする。(二)暴威をふるつて苦しめる。(三)理を歪曲して罪におとす。こゝは(一)

【楯】 タテ 敵の矢石銃丸を防ぐための防禦兵器の一。我が國では神代からあり、實戦の外儀式の裝飾として用ひられた。多くは木製。西洋では初め革製で、後世金屬が用ひられ、形狀裝飾共に複雑化し、中世騎士道の象徴として尊重された。火砲の發達と共に殆ど用ひられなくなつたが、最近また様式を變へて採用される傾がある。こゝは嚴しい寒氣や積雪や結氷を以て人を近づかぬ冬季節の威力を「楯」に譬へ、更に寒氣・積雪・結氷

を「武器」に譬へた。

【かざす】 「翳す」と書く。(一)覆ひにする。陰にする。(二)頭上におほふ。頭にかぶる。但しこゝは「振り翳す」の意に用ひられてゐる。「頭上に振りあげる」の意。

【矢おもて】 (一)矢の飛んで来る方向。陣頭。(二)質問・批難などの集注する位置。こゝは(一) 「矢おもてに立ち向ひ」は、「機械力」を「矢」に譬へて自然の威力が、迫り来る機械力を阻止するさまを擬人化した表現である。

【生命線】 セイメイセン 生死の境界線。最低生活線「生命線を死守してゐる」とは、僅かに取残されてゐる峠の本來の原始的な持味を保持してゐることを擬人的に表した。

【形】 カタチ こゝは、様子、ありさまの意。【峠】 峠は冬と名附くる季節を楯に、氷と雪と寒さとの武器をかざし、迫り来る機械力の矢おもてに立ち向ひ、雄々しく最後の生命線を死守してゐる形である。

近代文明の機械力を以てしても征服し得ない冬山の「嚴しい自然の威力」(次行)を述べてゐる。冬の季節を「楯」に譬へ、氷や雪や寒さを「武器」に比し、機械力を「矢」に言ひなしてゐる譬喩は、冬山の嚴しさを言ひ表はすにいかにも適切であるが、特に「武器をかざし」「矢おもてに立ち向ひ」「生命線を死守してゐる」といふ擬人的表

現には、冬山の姿に寄せる作者の禮讚の情が色濃く表れて、讀者の共鳴を誘ふ力が籠つてゐる。

【威力】 キリヨク 人を威服せしめる力。人を強制して服従させる力。

【命脈】 メイミヤク 生命の續くこと。命。たまのを。

【感覺】 カンカク (一)心理學上、Sensation の譯語。神經の末端に觸れた刺戟が、神經纖維を傳つて腦の中樞に達して起る意識現象。「感覺」は精神を構成する最も簡單な要素であるが、併し實際上感覺が感覺のみ單獨に現れることは殆どなく、常に推理・想像・記憶等をも同時に呼び起すものであつて「感覺」は實は此の複雑な精神状態を組立てる一要素に過ぎない。(二)隨つて一般に感覺に伴なつて生起するこの複雑な精神状態を「感覺」と呼び、普通「感じ」位に譯す。こゝは(二)

【愛著】 アイチャク かはゆくて思ひきりにくいこと。愛して執著すること。

【新鮮】 シンセン (一)もと、肉類の生で新しいこと。(二)轉じて、新しいこと。新しく生々としてゐること。こゝは(二) 下の「感覺と持味」とを限定する。

【さまよひ歩き】 「さまよひ歩く」(動詞・カ行四段活用)の連用形から轉化した名詞。あてどもなく歩きまはること。所を定めず歩きまはること。

【接觸】 セツシヨク 近づき觸れること。さはること。

【享樂】 キヤウラク 楽しみをうけること。楽しむこと。

【享】 「受」と同じく物を受取り容れること。

【介す】 カイス なかだちにする。媒介とする。

【容貌】 ヨウバウ 顔かたち。すがた。みめ。【季節の容貌】とは、季節によつてあらはれる外面的な風景の擬人化で、かくいふ時、作者は既に、その容貌の蔭に溢れるばかりの滋味情趣の潜んでゐることを暗示してゐる。

【慈悲】 ジヒ (一)あはれみ。いつくしみ。(二)佛語。法界次第に「能與_レ他_レ之樂心、名_レ之爲_レ慈。能拔_レ他_レ之苦、名_レ之爲_レ悲。」とある。即ち衆生に淨樂を與へその苦しみを去る佛の心で、柔和にして怒を發せず、順情にして福德を與へる心をいふ。こゝは(二)の意により、プリミティヴな接觸によつて感ぜられる冬山の無限の情趣を「神の慈悲」と言つた。

【祕法】 ヒハフ (一)祕密の法。(二)佛語。眞言宗で、祕密の祈禱。(三)鍊金術・占星術・降神術の如き、神祕的・超自然的現象に關する科學。こゝは(一)

【それは考へ方により、スキーが「旅」を救つたといふよりは、人々がスキーを介して嚴しい季節の容貌の中から、溢れるばかりの神々の慈悲を汲みとる祕法を發見したと解すべきであらう】

雪と氷とに覆はれた冬山の相貌は嚴厲そのものである。

併し作者はそれを自然の本然の姿とは見てゐない。その中に溢れるばかりの滋味が潜んでゐて、たゞ人々はスキーを介してそれを汲みとる秘法を發見したと解すべきだと言つてゐる。「スキーが『旅』を救つた」といふ説明では満足し得ない作者の自然に對する敬虔な思慕の情が此處に發露したものである。

【影は千尺の尾を曳く】夕陽のために影がはてもなく長く延びてゐる有様。

【曳く】「ヒク」は、ひきずる意。尾を曳く・裾を曳く・杖を曳く等と用ひる。

【夕陽】音は「セキヤウ」訓は「ユフヒ」「ユフヤウ」は誤。

【頂稜】チャウリヨウ 尖つた山頂。「稜」はかどの意。

【佇む】タタズむ 立ちどまる。しばらく立つてゐる。

【厚化粧】アツゲシヤウ こつてりと白粉をつけた化粧。こゝは、厚い積雪に覆はれた様を擬人化した。

【投影】トウエイ (一)物體のうつり宿つた影。うつりあらはれた影。(二)映像をうつしだすこと。影を投射すること。こゝは(一)

【影繪】カゲエ Silhouette (佛語)の譯語。輪廓の内部を黒く塗りつぶした黒色の畫像。(八・影・四〇頁・一一行 既出)こゝは雪面に投影された映像を指していふ。

【尾根】ヲネ 山裾。「尾」は(一)山裾の長く延びた所。

長く傾斜をひく山裾。(二)山の高い處。山の峯。「根」は接尾語。垣根・岩根などの「根」と同類。

但し、今は一般に「山の分水境をなす頂稜」をいひ、本課にもこの意に用ひられてゐる。

【スロープ】Slope 傾斜。勾配。斜面。

【光芒】クワウバウ 光のほさき。光。

「光芒を投げつけてゐる」の主語は影繪である。「影繪が光芒を投げつけてゐる」とは、長く伸びた影が向ふ側の尾根のスロープにとどく時、うつすりと紫色にぼやけてその影の横たはる雪面が微かに光つて、恰も影繪が光芒を投げつけてゐるやうに眺められるのである。

【スキーを穿いて、夕陽を背に峠の頂稜に佇んだ時など、べつとりと厚化粧した雪の壁に投影する自分の美しい影繪は、半日ばかりで登つて来た谷間を越えて、向ふ側の尾根のスロープにまで、ほんのりと紫色がかつた光芒を投げつけてゐる】

自ら峠の頂稜に立つてこそ眺め得られた美しく神秘的な夕色である。「べつとりと厚化粧した」といふ形容は實感であらう。その深雪の上に谷を越えて伸びる影が「紫色がかつた光芒を投げつけてゐる」とは、神秘感を盡くし得た言表で、經驗がなくては到達し得ない敘述である。

【高原】カウゲン 地理學上、四周の低地から比較的急激に隆起した廣原。

【來し方】コシカタ (一)通過して來た場所、又は方向。

(二)過去。既往。こゝは(一)の意。

カ行變格の動詞「來」と、過去の助動詞「き」とは「こし・こしか」「きし・きしか」といふ特別な接續をなすが一般には「こし・こしか」の用例が多い。

【拍子】ヒヤウシ こゝは、とたんはすみ等の意。

【生え抜く】ハえヌク 大地から生え出す。大地を抜いて生えいでて來る。

【影法師】カゲバフシ 影を擬人化した語(八・影・三七頁 六行既出)

【脚下から生え抜いた長大な影法師】

影は長大な生き物のやうな強い魅力をもつて心を衝つのである。その實感が「生え抜いた」といふ語に現れてゐる。この場合「影法師」といふ擬人化もよく効いてゐる。

【空合】ソラアヒ (一)空の様子。空模様。(二)ことなりゆき。こゝは(一)の意で、「空の色合」位に解すべきところ。

【恍惚】クワウコツ (一)物事に心を奪はれてうつとりすること。(二)ほのかにして分明でないこと。こゝは(一)

【單調】タンテウ (一)單一な調子。一本調子。(二)簡單なおもむき。

【描影】ベウエイ 描かれた影。

【投影する影繪】(前頁九行)といひ、「影法師」と擬人化し、こゝには「描影」といふ。同じ「影」を様々な語によつて表現し、而もそれと其の場の情調にびつたりと適つてゐる。作者の苦心と周到な注意との窺はれるところである。

【幾何學的な竝行】キカガクテキナヘイカウ 幾何學上いふ所の竝行。幾何學に於て定義する所の竝行。

「幾何學」は、Geometryの譯語。物の形・大きさ及び位置に關する理論を研究する所の、空間に關する數學。

「竝行」は、「平行」とも書く。數學上、二つの平面、或は同一平面上にある二つの直線、または一平面とその平面外にある直線とを如何に延長しても出會はぬこと。

【シュプール】Spur スキーの術語。スキーで滑つた後の條痕。

【心憎い】ココロニクイ (一)心中に憎く思はれる。(二)奥ゆかしい。この場合「憎い」は、心が測り難いの意。(三)覺束なく思はれる。心置がせられる。この場合「憎い」は、つれない・羞しい等の意。こゝは(二)

【感傷】カンシヤウ 感じて心をいためること。感じて悲しむこと。感じ易いこと。

【この白と黒との極めて單調な描影が、規則正しく何處までも幾何學的な竝行を保つてひかれたシュプールと心憎い

までの調和を示し、單調にして盡くるなき旅の感傷をそよること夥しいものがある。

單調な色彩と單調な線によつて描きだされた盡くるなき情趣である。單調であればこそ、それは端的に旅情を刺戟し、旅の感傷をそよめるものがあるのではなからうか。そして此の新鮮にして感覺的な風景は、實にスキーを導入することによつてこそ描きだされたのであつた。

【尾根筋】 ヲネズチ 「尾根」(前頁一行)に同じ。「筋」は河筋・街道筋など細長いもの・貫きとほつたものを呼稱する場合に添へる語で、分水界をなす山稜は、谷を挟んで裾野から頂へ筋をなして通つてゐるので「尾根筋」とス。よ。

【スキーイング】 Skiing (Ski) を活用しこれに進行形(ing)を添へて特に運動具としての Ski と區別した。スキーで滑走すること。スキー滑走。(一二四頁一行スキー参照)

【あつらへ向】 あつらへた物と同様にできてゐること。望み通りであること。

【粉雪】 コユキ こまかなさら／＼とした雪。寒氣の厳し

【塗り込める】 ヌリコめる 内に物をこめて塗り固める。

【塗り込められた峠】 といふ形容は、峠の雪の深さを思はせる壓力的な表現で、この言葉の端にも作者の實感

所灯を點じ、枝には菓子・玩具・マスコット・人形等を吊し、所々に銀色の星をつけ、頂上には羽根と冠をつけ紗のスカートを擴げた美しい平和の天使に模した人形を飾る。クリスマスに此の飾をなす風習は古くローマ時代に行はれ、後ライン地方に流行したが、十九世紀に至つて全キリスト教國に行はれるやうになつた。

【マントル】 Mantle 「マント」のこと。袖がなく上着の上にくるやかにまとふ外套。

【綿のマントル】 はすつかり樹木を蔽つてゐる雪の形容。

【ボーゲン】 スキーの術語。「制動廻轉」と譯される。曲線を描きながら滑降する廻轉法の一。(二)轉じて制動廻轉に描かれた曲線をいふ。こゝは(二)(二八頁挿圖參照)

【縦や唐檜の巨木がクリスマスツリーのやうにふつくりした綿のマントルを着込んで佇んでゐる間を、右に左にボーゲンを描いて滑り降る】

深雪に蔽はれた「峠」の、清淨にして平和な美しい光景である。「クリスマスツリーのやうに」といふ譬喩も、「綿のマントルを着込んで」といふ擬人法も、情感をそよめる美しい形容であるが、併し作者の感情の全部は「佇んでゐる」の一語に盡きる。萬象が雪の白一色に蔽はれ、寂として静まりかへつてゐる一種神祕な光景が、此の一語を得て眼前に髣髴として展開せられ、「右に左にボー

み出てゐる。

【印象】 インシャウ (一)心理學上 Impression の譯語。吾人が現在直接に物に觸れて得た感情が深く心に銘じて活々としてゐる心の状態。(二)内・外的知覺が精神に表現せられたもの。即ち觀念の根柢となるもの。(三)強く感じて忘れられぬこと。忘れ難い強い感じ。こゝは(三)「烙きつける」ヤきつける 深く胸中に刻みこむ。「烙」は音「ラク」鐵を熱して體にやきつける。やきがねをあてる。

【縦】 モミ 松科の常緑喬木。樹皮は暗灰色で不規則に剝げ、葉は線形で密に互生する。初夏の頃、雌雄花を同株に開き、圓柱形線褐色の毬果を結ぶ。材は建築材・船材・經木材・製紙原料等となる。本州・四國・九州の山地に自生する。

【唐檜】 タウヒ 松科の常緑喬木。高さ約三〇米、直徑六〇糎以上に達する。樹皮は帯赤暗褐色、葉は針狀で短く下面に白色の氣孔線を有する。花は雌雄同株に咲き、小毬果を結ぶ。材は建築材・土木用材に用ひられ、檜の代用品とされる。

【クリスマスツリー】 キリスト降誕祭に室内に飾る常盤木。樹は小さい樅の木が一番上等で、これを六尺内外に形よく刈りこみ、金銀のモールや色紙で、花形や鎖を造つて掛け、葉の上には雪に擬して綿を置き、枝の間に所

ゲンを描いて滑り降る」作者の快味も推し測られる思がする。

【勢力範圍】 セイリヨクハンキ (一)勢力の行はれる範圍。勢力の及ぶ範圍。(二)附近の土地を有効に占領した一國が、將來の占領の爲に、専ら留保した地域。こゝは(一)の意。「範圍」は、(一)かこひの内に入れこむこと。(二)かこひ。かぎり。區域。こゝは(一)

【尾根通し】 ヲネドホシ 「尾根」のこと。「通し」は、物事の連續してゐる意を表す接尾語で、裾野から頂へかけてずつと一続きにつゞいてゐる尾根全體を指して呼ぶ時に「尾根通し」といふ。

【雪煙】 ユキケムリ 粉雪が風に舞ひ立ちなどして煙の如く見えるもの。

【ちぎれ雲】 ちぎれ離れた雲。斷雲。

【木の間を縫ふ】 コのマをヌふ 日光が木々の間を通して雪上に落ちるさまを「縫ふ」と擬人化した。

【日射し】 ヒザシ 日光の射すこと。射し照る日光。

【ものうい樹影】 鈍くぼやけてはつきりしない木影。

【ものうい】 は、何となく氣がすままない。けだるい等の意。どんよりと鈍くぼやけた樹影がけだるくものどほく身も心もうつとりとさせるやうな感じを表してゐるので「ものうい樹影」と形容した。

【編物を披けてゐる】 アミモノをヒロけてゐる「木の間を

縫ふ日射し」(前行)の「縫ふ」といふ語の縁により、その日射しに映し出された樹影を「編物を披けてゐる」と擬人化した。巧妙な譬喩である。

【行く手】 ユクテ 「手」は、こゝは或語に添へて、位置・方向・状態を表す。(一)向つて行く先方。行方。前途。(二)轉じて、行くついで。行きがけ。物事のついで。こゝは(一)

【ふくよか】 ふつくらしてゐること。

【展開】 テンカイ のべひらくこと。のべひろがること。振りかへる尾根通しには時々雪煙が立ちのぼり、その上をちぎれ雲が飛び交うてゐるにしても、谷間には、木の間に縫ふ午後の日射しがものうい樹影の編物を披けてゐるのである。そして行く手には、やがて美しい肌をしのばせるふくよかな高原のスロープが展開してゐる。】

頼みる尾根通しに吹雪が猛威を逞しくしてゐる時、谷間にはものうい程な日射しが浚んでをり、更に行く手には美しい高原のスロープが果しなく展開する。それが作者の身を置く冬山の姿である。作者は自らそこに足跡を印することによつて、今「溢れるばかりの神々の慈悲」(一二六頁二行)を汲みとつてゐるのであるが、而も作者の華麗な筆は、その「慈悲」を餘す所なく言ひ表して、滋味溢るゝ詩趣を醸しだしてゐる。

【牧場區域】 ボクチャウウキキ 牧場のある區域。牧場と

してくぎられてゐる地域内。

【玩具箱】 オモチヤバコ 玩具を入れる箱。

【雪にひしやけた】 雪の重みで傾いた。

【ひしやける】は、ゆがむ・傾むく・つぶれる等の意を表す俗語。

【牧場小屋】 ボクチャウウキキ 「牧舎」(ボクシヤ)と同じ。牧場に立てられてゐる小屋。牧場に放養する畜類を、夜間又は冬季の間收容するための小屋。下に「牛や馬を家族として一つの屋根の下で越冬する年老いた牧夫」同頁四行)とある如く、牧舎の中には、畜類の世話をする牧夫の住居も設けられてゐるのが普通である。

【炊煙】 スキエン 飯などを焚く竈の煙。炊爨をする煙。

【しめた】 「占め得たり」の義。物事が自分の思ふ通りになつた時に喜んでいふ語。こちらの望み通りだ。思ひ通りだ。

【木戸】 キド (一)城の入口。城門。(二)通路入口などに設けた屋根のない開戸の門。(三)興行場などに設けた見物人の出入口。こゝは(二)

【朴訥】 ボクトツ (一)質樸で無口なこと。(二)無骨で飾り氣のないこと。こゝは(二)

【朴】は、本音「ハク・ホク」通音「ボク」飾り氣のないこと。

【訥】は、(一)口の重いこと。(二)言語・容貌を飾らない

こと。こゝは(二)

【飼草】 カヒバ 牛馬の飼料とする枯草。

【飼葉】の義で、「飼草」は宛字。

【牧夫】 ボクフ (一)牧人。牧畜の世話をする男。「牧婦」の對。(二)古、牧民の官をいつた。書經「惟宥司之牧夫。」こゝは(一)

【遠くから大聲で呼べば、直ぐにも木戸を開いて、朴訥な爺さんが迎へてくれるに違ひない。そして飼草の匂を嗅ぎながら、牛や馬を家族として一つの屋根の下で越冬する年老いた牧夫の生活にしたしむのも、忘れがたい旅の思ひ出とならう】

雪に埋められた「峠」にしてこそ、「大聲で呼べば直ぐ木戸を開いてくれる」朴訥な老人があり、「牛や馬を家族として一つの屋根の下で越冬する」牧夫の原始の生活がある。人々はスキーを穿いて自らこの峠を訪れることによつてのみ、かゝる原始の姿に接し得るのであつて、言はばスキーの旅人は「もつともブリミテイヴな接觸によつて」(一二五頁一行)かゝる忘れ難い旅情を享樂し得るのである。

【追憶】 ツキオク 後になつて以前の事を思ひ出すこと。過去のことを思ひ出すこと。

「旅情といつた意味の追憶」とは、旅中に於ては、見るもの聞くものにつけて何かと過去の記憶を新にされる。

そしてそれがやがて旅の心を慰め、旅の情趣を豊かにすることになる。さういふ意味の「追憶」といふ意である。

【コンディション】 Condition 條件・状態・有様などの意。こゝは「状態」。

【豫想】 ヨサウ 豫め推しはかり思ふこと。かねての想像。

【期待】 キタイ 心待ちに待つこと。さうあるであらうと待ち構へること。

【知的興趣】 チテキキョウシユ 知識に關する興趣。合理的な思慮に關する興趣。次の頁にあるやうに、氣温や氣壓のカードを手にして、峠を埋めた雪のコンディションをいろ／＼と豫想するやうな興味。

【興味】は、おもしろみ。興味。

【デリケート】 Delicate (英語・形容詞)こゝは微妙な・優美な・精緻な、などと譯す。

【感受性】 カンジュセイ (一)心理學上 Sensibility の譯語。外界の對象を直觀的に受け入れる感覺の作用。(二)外界の刺戟を直觀的に感受する性質。直觀の力。こゝは(二)

【デリケートな感受性に富んだ雪の畫人】

「雪」は時々風・太陽・氣温の推移變化に伴なつて、繊細極まりない多様な風景を現出する。故にこれを「デリ

ケートな感受性に富んだ畫人」と擬人化した。「雪の畫人」は「雪といふ畫人」の意。

【風・太陽・氣温などの感情】

旅を愛し、自然の中に歩み入つてゐる作者にとつては、風も太陽も氣温も心ない死物ではない。その氣持が自ら「一などの感情」といふ擬人化になつて表れたのである。一體本課には、既にそれ／＼指摘したやうに極めて多くの擬人法が用ひられてゐる。これは山の自然に注ぐ作者の無限の親愛の情のおのづからなる發露であらうが特に「風・太陽・氣温などの感情」といふこの擬人化に至つては、全く自然の中に融化してしまつてゐる作者の愛の深さがはつきりと推し測られる。

【推移】 スキイ おしうつること。うつりかはること。

【繊細】 センサイ こまかなこと。

【織】 も、ほそい・こまかい・ちいさい等の意。

【筆致】 ヒツチ 文字又は文章の書きぶり。筆のおもむき。ふでつき。ふでつかひ。

【繪模様】 エモヤウ 模様畫。こゝは「波模様の浮彫」(同頁四行)「綾羅の縞目」(同頁六行)などを指してゐる。

【模様】 は、織物・染物・彫刻等の裝飾に施す「あや」。紋様。

【幻想曲】 ゲンサウキョク Fantasia (伊語)の譯。最も自由な器樂形式の一。一樂句を主として、それを種々に模

倣して構成される。形式上何等の拘束を受けず、全く作曲の幻想によるものである爲に奔放且夢幻的な情感の表現を特色とする。

【魅惑】 ミワク 魅力を以てひきつけまどはすこと。

「魅」は(一)變化。ものけ。(二)轉じて人をばかす。不思議な力を以てひきつける。こゝは(二)

「幻想曲の魅惑」とは、幻想曲が奔放自由な且夢幻的な魅力を以て人を幻惑するやうな、さういふ魅惑。

【脅かす】 オビヤカす おどす。おどろかす。おそれさせる。

【夢幻的】 ムゲンテキ 夢か幻のやうな。

「夢幻」は、ゆめとまぼろしの意から、(一)非現實的の把へどころのないさまにいふ。(二)世の一切の事物のはかないことに譬へていふ。こゝは(一)

【樹氷】 シュヒョウ 氷點以下に冷却した濃霧が、樹枝その他の寒冷な地物に凝結して氷層をなし、花のやうな美觀を呈したるもの。

樹氷が日に映えて、目覺めるばかりきらびやかに輝く光景は全く現實の世のものとは思はれない美しさである。それを「夢幻的な」と形容した。

【波模様】 ナミモヤウ 波形の模様。

「雪の波模様」は、海波・砂丘上の波紋等と同じく、風的作用によつて起る現象で、氣象學上「雪浪」と名づけ

られてゐる。氷結硬化した積雪上に硬いた粉雪が降り積み、その上を吹雪の吹きまく時この現象を呈する。

【浮彫】 ウキボリ・フテウ 「浮上彫」のこと。種々の模様や形像を物の面の上に高く彫りあげた彫刻。

こゝは雪浪の起伏するさまを浮彫にたとへたのである。

【うつとり】 よく「恍惚」の字を宛てる。氣を奪はれて茫然とするさま。

【クラスト】 Crust 氣温の上昇などの爲に僅かに溶けかゝつた積雪面が突然急激な氣温の降下にあふと、その表面が極めて薄い氷殻に蔽はれ、且雪量の收縮のために硬化面には無数の龜裂を生ずる。この現象を名づけて「クラスト」といふ。

Crustの語義は、總べて物の硬くなつた表面。外皮。硬皮。

【硬化】 カウクワ (一)物がかたくなること。(二)軟弱な意見を捨てて強硬な意見を取ること。(軟化の對)こゝは(一)

【現象】 ゲンシャウ (一)あらはれて見えるかたち。(二)哲學上 Phenomenon の譯語。吾人に感知せられるものの形象。主觀に映ずる相。こゝは(一)

【綾羅】 リョウラ あやとうすぎぬ。

「綾」は、あやぎぬ。經絲・緯絲をあやに組合せて織つた絹で、種々の紋様を現し頗る優美なものである。

「羅」は、うすぎぬ。細絲で薄く織つた絹。

【縞目】 シマメ 縞の色と色とのさかひめ。こゝでは單に「鮮やかな縞」位の意。

【綾羅の縞目で掩ひつくす】

雪面が硬化して薄い皮殻に蔽はれ、その皮殻の上に縦横に細かい龜裂を生じて恰も綾羅の縞目のやうに見える様の形容。

【それは時に、吹雪の怒りとなつて旅人を脅すこともあるかはりに、また夢幻的な樹氷や、鮮やかな波模様の浮彫で人々をうつとりとせしめる。ある時はまた、クラストと呼ぶ極めて藝術的な、そして變化に富んだ雪面硬化の不思議な現象で、スロープ一面を綾羅の縞目で掩ひつくすことがある】

雪の畫人が繊細な筆致で描いた繪模様の具象的描寫である。或は「吹雪の怒り」と擬人化し、或は「夢幻的な樹氷」と形容し、また「波模様の浮彫」に譬へるなど、作者は豊かな語彙を自在に驅使し、多様な譬喩形容の技巧を以て、雪の畫人の「デリケートな感受性」(前頁一行)を描き盡くさうと苦心努力してゐる。その譬喩形容の表す實感實景を明確に思ひ描かしめる事によつて、作者の苦心努力に添ふやう工夫せらるべきである。

【山ふところ】 山間のくぼまつて懐のやうに入り籠つてゐる處。

【ヒュツテ】 Hütte (獨語) 小屋。登山者の便宜の爲に建てられた山中の小屋。

【たて籠る】 たてこもる (一) 戸障子などを閉めきつて室内にこもる。(二) 城中にこもつて防ぎ守る。籠城する。こゝは(一)

【はぜる】 「爆ぜる」の字を宛てる。裂けひらく。はじける。「生木がはぜる」とは、生木を燃やすと、枝幹の水分が氣化し、破裂音と共に樹皮を破つて放散するさまをいふ。

【圍爐裡】 キロリ 床を方形に切りぬいて火を貯へ煖をとる爐。農家・山小屋などでは天井から自在鉤を吊り下げて物を煮沸し得るやうに装置してある場合が多い。

【氣壓】 キアツ 大氣の壓力。攝氏零度で、高さ七六〇耗の水銀柱が、其の底面に加へる壓力を一氣壓とする。

【カード】 Card 厚紙を小形に切り、物を記して控へとするもの。

氣温や氣壓は天候を支配し雪質に關係を持つので、登山家はそれを「カード」に記して携帯するし、又設備の整つた山小屋ならば、登山者の便宜のためかうしたものも備へてある。

2 文の構成

第一節 初—二六頁三行 スキ一の導入による峠の情趣の更生。

【感覺的】 カンカクテキ 感覺の方面に於ける。

氣温や氣壓のカードを手にして明日の豫想に耽ける樂しみは、記憶や想像や推理の作用に關係する方面であり、それは感情的といふよりも、寧ろ感覺的といふにふさはしい情緒である。

【情緒】 ジャウショ (一) おもひにつれて起る情。發作的で永續性のない感情。(二) 心理學上 Emotion の譯語。認識に伴なつて起る稍々複雑な感情。一般感情。一般感情と情操との間に位し、おもに生理上に關するもの。喜・怒・哀・樂・同情・嫉妬などの類。こゝは(一)

【山ふところのヒュツテにたて籠り、生木のはぜる圍爐裡をかこみながら、氣温や氣壓のカードを手にして、峠を埋めた雪のコンディションをいろいろと豫想することは、たしかに感覺的な新しい旅の情緒である】

「知的興趣で誘惑する」(前頁九行) 冬山の情緒を體驗的に物語つてゐる。かうした感覺的な新しい旅の情緒はスキ一を穿いて冬山に登り、ヒュツテの圍爐裡をかこみながら明日を豫想するといふ「ブリミティヴな接觸」によつてこそ得られるものであつて、スキ一を導入することによつて更生した全く新鮮な山行の滋味である。

第三節 一二六頁五行—一二九頁六行 スキ一による山行の滋味。

第三節 一二九頁八行—終 スキ一の旅人の感ずる山行の知的感覺的な興趣。

3 文意

冬といふ厳しい季節の威力によつて僅かにその命脈を保つてゐる「峠」の情趣が、スキ一を導入することによつて一段の光輝と生彩とを加へて更生し、人々はスキ一を介することにより、新鮮にして感覺的な山行の滋味を汲みとることが出来る」と説く。

4 鑑賞批評

「生涯山とは切つても断れぬ因縁に置かれるに到つた」(作者欄参照)と自ら告白してゐる作者の、山に寄せる限りない親愛の情から此の文は生まれたのであるが、その山が冬といふ厳しい季節の相貌を装ふ山であり、それがスキ一の快味と結びつくことによつて、ここに一種特異な文趣を醸し出したのであつた。旅を旅する人の心は「土に親しみ風景の中に歩み入る姿である」と規定する作者は、自然の威力によつて雄々しくその生命線を守守する冬山を、自らスキ一を穿いて上下する事によつて、その厳しい相貌の中から、溢れるばかりの滋味を汲みとつたのであつて、言はば本文は、その體驗の表現に他ならない。而も作者の鋭敏な感覺と精緻な觀察は、冬山の特異な情趣が、スキ一と結びついて醸される新鮮且感覺的な印象を淨彫の如く描きだしてゐる。修飾に過ぎると思はれる華麗な筆致が、いささかの不自然さを感じしめないのはつまり一語一句が實感に裏づけられてゐるからであり、豊かな語彙を自由に駆使した形容譬喩や、殊に多い擬人法の如きは、作者の山の自然に注ぐ底深い親愛の情を物語るばかりでなく、一種の詩趣を漂はせて讀者を魅惑する。素材の特異な點に於て、筆致の感覺的な華麗さに於て山の文學、冬の文學として蓋し出色のものであらう。

三 備考

1 指導研究

(一) 寒國に育つてスキーの経験を持つ生徒にとつては、この文趣の特異性も理解鑑賞の障壁とはならないであらう。反對に暖國の生徒はまたその素材の特異さのためにこの文に魅惑を感じるのではあるまいか。前者に於ては、各自の経験を生かす點に、後者は素材的興味を發展深化せしめて行く點に、指導上の工夫が要求せられるであらう。

(二) 即ち前者に於ては自己の経験に甘えて安易な讀みに終始する危険が警戒されるべきであり、後者にあつては素材的興味に彷徨する表面的な讀みに終ることが警められねばならない。要するに兩者何れに於ても、作者の體驗實感に融化せしめることによつて、作者と共にこの新鮮な情趣に浸り得る境地にまで讀みは深められねばならないのである。

(三) 文章にはかなり繁多な譬喩的修飾が施されてゐる。併しそれが概念的な誇張の域を脱して、常に極めて適切效果的に働いてゐるのは、作者の實感がこれを裏づけてゐるからに他ならない。寧ろ豊富な語彙を生かした華麗さはこの文の特色ともいふべきであるから、その譬喩の表す實景を具象的に浮かび上らせることによつて、作者の實感に共鳴せしめることは本文鑑賞の上に特に重要な點であらう。

2 参考

(一) 挿繪「スキーの旅人」

「寫眞」から轉載した。

前方に黒く見える柱はヒユツテの軒先であらう。べつとり厚化粧をした凱々たる白雪の山を目指してスキーの旅に踏み出す朝の光景のやうである。(場所は木曾福島)

(二) 挿繪「滑降」

「寫眞」から轉載した。

鮮やかな波模様を浮彫した果しないスロープに雪煙をあげながら「右に左にボーゲンを描いて滑り降りる」スキーの豪快味である。(場所は立山浄土山腹)

(三) 原文「雪線旅情」の末尾の一節を摘録する。本課のさまよひ歩きの場合を説明したもので、鑑賞上参考になるであらう。

もちろん、私が右に書きつらねたことは、中級山岳——それは頸城山塊、上越國境、霧ヶ峰、志賀高原といった風の間々——を取りまく峠や高原のスキーの旅であつて、それは信・飛・越にまたがる日本アルプスと呼んでゐる高山岳地帯に關するものではない。もちろん昨今では乗鞍、御岳、白馬など、いはゆる三千メートル級の山々でも、單にその頂に立つただけならば比較的容易になつた。しかしさうした高峻山岳にあつては、頂を極めるよりは、一つの「峠」と名のつく尾根のくぼみを越えることの方がより至極な場合がある事に留意しなければならぬ。そして多くの場合、さうした登高は、スキーの旅の領域を超えたアルピニズムの行動範圍であることを認識すべきである。

(四) 原著「雪線散歩」の自序の一部を左に抄録する。

「山をエンジョイする」といふ風の言葉づかひは、何うかすると輕佻浮薄に流れやすい。だが、人が——山の子が——慈父の膝下で嬉戲し、時にその肩にすがり、あるひは頭にしがみ付いたりして駄々を捏ねることは、山自身にとつて楽しい思ひ出であると同時に、それを照覽する神々にとつても、おそらく破顔微笑を催す情景の一つであるに相違ない。さうした意味で、私はこの著を「雪線散歩」と名付けた。しかし毛頭、「山」に狎れる氣持からでない事を斷つておく。

由來、山行は、スキーを導入することによりフレッシュな、ぶきを吹き込まれたと云ひ得よう。そして「雪線散歩」の感覺的な魅力と、親しさと、さらに著しい大衆性をもつて人々に呼びかけることとなつた。たとへば、惠まれた春山行に、一萬尺前後するスカイラインを劃つて、一條のシニプールを印する楽しさは、いつたい、何に譬へられよう？ ……吾々はスキーを介して、積雪期の「山」の新生を祝福しなければならぬ。

「雪線散歩」は、また、人生のメイン・ストリートに沿つたグリーンであり、都會生活者のための屋上庭園でもあり、更にまた、山を恐ふものにとつて、鐵筋コンクリートの絶壁に穿たれた心の「窓」でもある。そして人は——私は——しばしばこの窓を通して雲の峰を仰ぎ、吹雪を觸感し、時にまた「世界の屋根」に渦巻く雪煙を想像するてい、の涼爽清新の氣をみなぎらすべく心掛けた。ただ、作者の菲才が、單に念願に終りはしなかつたかを虞れるものである。

一八 古城のほとり

島崎 藤村

一 解 題

1 作者

島崎藤村 シマザキトウソン 名は春樹。詩人、小説家。明治五年二月長野縣西筑摩郡神坂村馬籠に生まれた。父は平田篤胤の息鐵胤に師事した國學研究者。十三年上京、三田英學校・神田共立學校を経て、二十四年明治學院を卒業。卒業後明治女學校に教鞭をとり、二十七年北村透谷等の雑誌「文學界」の創刊に參畫し文學生活に入つた。二十九年仙臺の東北學院の教授となり、此の頃から新體詩人として土井晩翠・薄田泣菫等と相並んで詩壇に頭角を現した。仙臺にあること約一年、翌年東京に歸り、三十二年長野縣北佐久郡小諸義塾に赴任し、約七年間を此處に送つた。この間まづ三十年處女詩集「若菜集」を上梓し、以來次々に「一葉舟」「夏草」「落梅集」を刊行し、その清新な聲調と優婉な姿態とを以て若々しい情感をうたひ、明治浪漫主義の輝ける記念塔たらしめた。三十五年頃から詩作を捨てて小説創作に轉換、轉換後第一回の作品「舊主人」は發賣禁止を命ぜられたが、ついで「水彩畫家」を書いて小説家としてデビューし、三十九年、一年有半の苦心になつた「破戒」を携へて上京、これを上梓して自然主義運動の先蹤をなし、小説家として本格的に立つに至つた。當時の自然主義の頭目田山花袋が、外國文學からこれを採上げて提唱したのに對して、藤村は自己の自然發展の過程によつて、浪漫的傾向から現實的傾向への明治文學史上の時代的發展に相應じたのであつた。大正二年フランスに遊び彼地に於て歐洲大戰に遭遇した。五年歸朝、歸朝後作風一轉して新現實主義的傾向を帯びた「新生」を發表した。爾來不

斷に創作に精進し、最近長篇小説「夜明け前」の大作を完成して、氏の文學的生命は未だに健全である。

著書は詩集には「若菜集」以下「一葉舟」「夏草」「落梅集」ならびにこれ等全部を合せた「藤村詩集」があり、小説には「破戒」「春」「家」「櫻の實の熟する時」等を第一期作品とし、歸朝後「新生」「ある女の生涯」「伸び仕度」等をはじめ、最近には「嵐」「分配」「夜明け前」等の力篇がある。隨筆集には「千曲川のスケッチ」「佛蘭西だより」「飯倉だより」「春を待ちつつ」「市井にありて」「桃の雫」等があり、童話集には「幼きものへ」「ふるさと」「をさなものがたり」等がある。「藤村全集」十二巻はこれ等作品の大部分を収載し、またこの他「藤村讀本」六巻も刊行されてゐる。

2 出典

「藤村詩集」の中最後の詩集「落梅集」から採つた。「落梅集」は、その自序（参考欄参照）によれば、著者藤村の小諸在住時代の詩稿を輯めたもので、「愈々詩より別れ青春より離れて、靜かに人生の中に歩み入る度ましい後ろ姿が眺められる」（北原白秋・参考欄参照）藤村の詩作生活の末期を飾る詩集である。本課の詩は落梅集の巻頭を飾る一篇で、その莊重優婉な調べと、洗煉醇化された詩句とを以て、落梅集のみならず、藤村の全詩集を通じて代表的な佳什とされ、古來人口に膾炙されてゐるものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

「峠」を下げれば、既に大地に春の息ぶきは動き初めてゐる頃である。前課につづいて、本課は早春の旅情を歌つた藤村の詩を配した。日射しこそ既に春めいてはゐるものの、まだ目に映る四圍の景趣のもの寂しい異郷の自然の中に、わびしい旅心を抱いて立つてゐる作者の胸に溢れる青春の感傷と、煩ひ多い苦惱とを歌つた詩である。

二 解釋

1 語釋

(一)

【小諸】 コモロ 長野縣北佐久郡小諸町。淺間山の西南麓の傾斜地にあり、千曲川の岸に臨んでゐる。現在信越線の要驛として、農産物・生絲等の集産地をなし、佐久地方の交通上・産業上の中心地であり、又淺間山の登山口に當り、夏期は登山客で賑はふ。もと城下町として發達した地で、その城趾、即ち本課の「小諸なる古城」は町の西南隅にあり、今は懐古園と呼ばれる公園となつて、そこにこの「古城のほとり」の詩を刻んだ詩碑（挿繪参照）が建てられてゐる。

【小諸の古城】は遠く壽永の頃（安徳天皇の御宇）小室氏が此の地を領して居寨を設けたのに始まり、文永・享徳の頃大井光照が此の地を兼領し、その子光忠が此の城に據つた。ついで永正・大永の頃に至つて村上義清の居城となつたが、天文十二年信玄がこれを陥れて修築を加へ、小山田昌行等が居城し、世に鍋蓋城・穴城等と呼ばれ、要害堅固を以て知られた。武田信豊が城主であつた時、城代下曾根覺雲が主を弑してこれに代り、以來守將數人の交迭を経て、天正十一年徳川氏に歸し、家康は松平康國を封じて居らしめ、以後仙石秀久・駿河大納言忠長・松平憲良等數氏を経て、元祿十五年牧野康重が一萬五千石に封ぜられて入城して以來、世襲して康民に至り

明治維新に際して廢城となつた。

【小諸なる古城のほとり】

端的にまづ場所を詠ひ出でた。「こもろなるこじやうのほとり」といふ頭韻が調子をなめらかにしてゐる上に、漢文的な悠遠な調べは豊かな情感を湛へて、一誦まづ讀者を魅するものがある。

【雲白く】 クモシロく 春の季節をその雲によつて象徴した。初春の訪れを示すやはらかな白雲が空に流れてゐるのである。

【遊子】 イウシ 家を離れて他郷にある人。旅人。ここは作者が自分をかく言つてゐる。

【雲白く遊子悲しむ】
時は初春、飄々として流れ飛ぶ白雲をみるにつけても、遊子の胸には遺瀨ない悲しみが自ら湧きいでて來るといふのである。李白の詩の「遊子浮雲意、落日故人情」などから暗示を得た句であるかも知れない。「くもしろく、いしかなしむ」といふカ行・サ行の清音は一句の哀感を助けて、全篇の主情をなす切々たる旅人の感傷が溢れてゐる。

【繁葉】 ハコベ 「繁縷」「雞腸草」とも書く。石竹科の越年生草本。山野路傍に自生し、長さ一五―五〇釐、下部は地に伏し、葉は廣卵形で下部のものは葉柄を有し、梢葉は無柄で對生する。春、葦端は屈起し、白色の小五瓣

花を聚繖花序に綴る。鳥餌又は食用に供せられる。春の七草の一。

【萌ゆ】モゆ (一)芽が出る。めぐむ。(二)轉じて、物事にある兆候があらはれる。きざす。こは(一)

【藉く】シク「藉」は音「シャ」草を物の下にしく義から廣く下地のしきものにする意となる。易經「藉以_ニ白茅_一慎之至也。」

【よしなし】「由無し」の字を當てる。(一)手段がない。すべがない。(二)據り所がない。理由がない。(三)つまらない。たわいがない。こは(一)

【しろがねの衾の岡邊】

しろがねの衾をきたやうに、なほ白々と残雪に覆はれてゐる岡邊。なほ消えやらぬ雪が、白々と細い春先の陽光に輝く岡邊を眼前に髣髴せしめる美しい形容である。

【しろがね】は銀。その色による名稱で、銅を「あかがね」鐵を「くろがね」といふのと同じである。こは「雪」を譬へてゐること勿論である。

【衾(フスマ)】は「伏す裳の義か」といふ。(一)昔寝る時に身をおほうた夜具。四角形に縫ひ、袖も縁もないもの。(二)今一般に寝具をいふ。ふとん。

【岡邊】「ヲカベ」は、岡のあたり。岡一面。

【淡雪】アハユキ「雅言集覽」に「春の雪の淡々しきを後世に言へり」とあり、多く春先に降る消えやすい雪をい

い旅情をまさまざとひびかせてゐるよく利いた一語であつた。

【旅人の群はいくつか 畠中の道を急ぎぬ】

畠中の道を急いで行く旅人の群の小さい姿を點出して、ここに一脈の生動を興へてゐる。而もそれが旅人の群であることは、時にとつて、遊子の哀感を一入深くするものであつた。

【暮れ行けば】クレユけば「暮れ行かば」ではない。假定法ではなく確言の形であることに注意させたい。「既にすつかり暮れてしまつて」なのである。

尙第一聯から第二聯へのつながりは「日に溶けて淡雪流る」から「あたたかき光はあれど」であつた。こはまた「旅人の群はいくつか畠中の道を急ぎぬ」から「暮れ行けば」と續いて行く。聯毎のつながりが如何にも自然で、詩情の流れのまにまに高く低く起伏して行く所、詩人藤村の詩心の豊けさが思はれる。

【淺間】アサマ 淺間山。群馬・長野兩縣界に跨る活火山。海拔二五四二米。那須火山脈の極西に當り、著名の複式活火山である。三次の噴出よりなり、最後の噴出によつて成つた火口丘が乃ち淺間山である。頂上に俗に御釜と稱する圓形の火口がある。直徑四百米。常に壁面や底面の隙間から水蒸氣を噴出し、暗夜には底部に深紅の光が見える。これは灼熱の熔岩であるといふ。淺間の南西に

ふ。

【日に溶けて淡雪流る】

白く浮かぶ春雲を漏れる陽光に、淡雪はしみらに溶けてささ濁る雪解の水が目につるのである。繁蕪ははまだ萌えずとも、さすがに陽氣が動きそめてゐることを作者はそこに感じてゐる。

【あたたかき光はあれど】

陽光のあたたかさは、前聯末句の「日に溶けて淡雪流る」からも推し測られる。さすがに春めいた日の光は明るく温かに照り渡つてゐるのである。日の色の明るさを思はせ、日あしの伸びやかさを感じさせるものは、ア列音の音感の齋らす調べのためであらう。

【野に満つる香も知らず】

「香」は春草の香を指してゐる。日は明るく温かに照らしはするが、併しまだ此の地としては春は淺く、麥の色も僅かに青んだばかり、繁蕪も萌えず、若草も藉くによしなない有様で、野に満つる若草の香といふものもまだ漂ひそめもしないのである。

【淺くのみ春は霞みて 麥の色わづかに青し】

ただ淺々とした霞が遠くたなびき、僅かに青みそめた麥の色に春のきざしが思はれるに過ぎないといふのである。淺春のこの情趣はやがて作者の影濃い情操の止み難い現れで、殊に「淺くのみ」といふ副詞は、遊子の切な

聳える牙山、及び其の北方の賣圓坊が第一次の火口壁の殘闕であり、牙山の北東、即ち淺間の西方に當る前掛山が第二次の火口壁の殘闕である。又東麓に小寄生火山がある。これを小淺間といふ。活動の中最も甚しかつたのは天明三年七月の噴火で、信濃・上野・武藏・伊豆・下總・陸奥等の諸國はみな降灰の害を被り、熔岩を北麓に押し吾妻川を塞ぎ、決潰して利根川に奔注し、沿岸の諸村落はこれのために蕩盡した。この時の熔岩は、今も残つて、山頂から北麓まで遙かに連なり、麓のあたりではその高さ十米に及ぶものがあり、土地ではこれを押し出し岩と呼んでゐる。現在尙噴煙を續け、屢々爆發する。「小諸」からは、北方すぐ眼の先に「淺間山」の全容が望まれる。

【佐久】サク 長野縣北・南佐久郡。「小諸」は北佐久郡にあるので「佐久の草笛」といつた。

【草笛】クサフエ (一)木の葉・草の葉を口にあてて吹きならすのをいふ。(二)くさかりぶえの略。草刈りの童などの吹く笛。こは(二)の意で、夕闇の中を家路に辿る村童などが吹きならすのであらう。佐久地方獨特の草笛の音色が作者の胸に哀切な思をそつたのである。

【暮れ行けば淺間も見えず 歌哀し佐久の草笛】

蒼然たる暮靄の底に萬象の姿は没して、おのづから旅愁の胸に湧く時、夕闇の中から響いて來る佐久の草笛の哀

調は遊子の胸をえぐるのである。「歌哀し佐久の草笛」といふ倒装法に示された切々たる調べは、その堪へ難い哀切の情の自らのひびきである。詩情は正にこゝに極まる。

【千曲川】 チクマガガハ 信濃川の支流。源を甲・信の國境、金峰山の北麓に發し、佐久平を北流して小諸の附近で稍西北方に轉じ、上田市を過つて篠井附近で東北流し、長野市の東南方で犀川と合し信濃川となつて北流する。

【さよふ波】 行かんとして行ききれず、止まらんとして止まれない様をいふ語。ためらふ。たゆたふ。「さよふ波」は、岸邊をうつ波がどんどんと流れ去らないで、寄せたり返したりしてゐるのをいふ。

【千曲川いざよふ波の 岸近き宿にのぼりつ】 千曲川のいざよふ波を眞下に見る岸邊の宿、それは濁り酒を飲ませるやうな鄙びた宿なのであつた。「岸近き宿にのぼりつ」の前後の句が、宿の位置と宿の有様とを髣髴として眼に描かせ、旅情といふ感じを色濃く滲ませてゐる。

【濁り酒】 ニゴリザケ 清酒に對して、糟を濾さないでそのまま飲用に供する酒。白色・濃厚で、多く下層の人、又は僻地の人に飲用される。どぶろく。濁酒。こゝは必ずしもそれではなく、質の悪い地酒をさして言つたものであらう。

かくあるであらう。これが萬人等しく碌々として過ぎ行く人の世の現實の姿であり、流轉極まりない生活の種々相も、極まる所一如の法に歸して了ふといふのである。わびしい旅情に浸る遊子は、やがて深い内面的思索へと沈潜し來つた。對句形式の漸層的な味がよく利いて居るのみならず、「今日もまた」の「も」が感情の昂ぶりを生かしてゐる。

【この命】 はかない生命を持ちながら。人間の生命のはかなさを忘れて。

【離離】 本音は「アクサク」現在普通に用ひられてゐる「アクセク」(教科書振假名)はこの轉訛で、昔教科書として用ひられた「文選」の樂府、放歌行に「小人自離離。安知曠士懷。」とあるを訛讀したのに始まるといふ。(一)もと、齒のこまかく密なこと。(二)轉じて、こせこせすること。せはせはしくすること。こゝは(一)

【思ひわづらふ】 思ひ苦しむ。思ひなやむ。【この命なにを離離】 明日をのみ思ひわづらふ】 思ひ來れば畢竟これ若き日の明日を急ぐ焦慮の姿に他ならない。今遊子の胸に溢れ來るものは悔恨と自嘲との交錯である。「なにを離離」といふ名詞止の強い句調と「明日をのみ」といふ副詞は、その深いなげきの卒直な流露であつた。

【榮枯の夢】 エイコのユメ 榮枯盛衰の歴史のあと。

【草枕】 クサマクラ 昔、旅路の宿りに假庵を作ること。「草結ぶ」といひ、茅・草などを束ねて枕とした所から出た語。(一)旅にあつて草を枕として野宿すること。(二)轉じて旅寢。又旅行。(三)旅にかゝる枕詞。こゝは(一)の意で、「草枕しばし慰む」は、旅のわびしい心をしばらく慰めるといふ意。

【濁り酒濁れる飲みて 草枕しばし慰む】 「濁り酒濁れる」と、「濁る」といふ語の反覆によつて、祝詞にでもあるやうな古淡な調子をだして、そこに纏綿たる情緒のたゆたひをみせてゐる。田舎酒にしばし旅情を慰めるのも遊子の感傷としてうけがはれる。この場合「しばし」といふ副詞は、切ない程の作者の感情を盡くし得た一語であつた。

(一) 【かくてありけり】 かうであつた。【かうであつた】とは、平々凡々、碌々として過されたことを言つてゐる。【ありなむ】 あるであらう。

【なむ】は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に、未來の助動詞「む」の添はつた語。未來を想像する意に用ひる。

【昨日またかくてありけり 今日もまたかくてありなむ】 悩み苦しみ憤り悲しんだ昨日の生活の如く、今日もまた

「榮枯」は、(一)草木の繁ることと枯れること。(二)榮えることと衰へること。こゝは(二)の意で、人の世の盛衰興亡の歴史は夢の如くはかないので、榮枯盛衰の「歴史」を「夢」に譬へて言つた。

【谷に下りて】 タニにクダりて 小高い岡の上の古城から谷に下つて、千曲川の岸近く歩みを運んだのである。

【砂まじり水巻き歸る】 千曲川の雪解の水は流れ去ると見えて、また砂をまじへ渦まきながら岸邊に歸つて來るといふのである。榮枯盛衰の跡を語る古城の荒廢の姿に對して、流れ去り流れ來つて止むことなきこの川波は、悠久に變ることなき自然の營みの象徴であり、この敘景はやがて次の第三聯の詠歎の伏線をなしてゐる。

【過ぎし世を靜かに思へ 百年もきのふの如し】 「詩歌は靜かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや」とは藤村自らの言葉である。古城に榮枯の夢を顧み川波に悠久不變の自然の姿を思ひつゝ、作者は今その靜かな感動をつましくうたひ上げてゐる。まこと悠久な自然の營みに思ひ較べれば、一個離離たる人間の百年は恰もきのふの如きに過ぎないであらう。

【千曲川柳霞みて 春淺く水流れたり】 悩み煩らふ青春の焦慮と昂奮を抑へて、靜かに内を省み

「る自然の姿が、こゝに色濃く投影せられた。『百年もきのふのごとし』と悟り終れば、まのあたり見る千曲川畔は、ほのぼのと柳が芽ぐみ、雪解の水のそこしなへに流れ行く、淡々として靜かな早春の風景に他ならないのだ。殊に『水流れたり』の一句は、作者の感懐をそのまま反映して、一種悠遠な詩趣を醸してゐる。

【愁を繋ぐ】ウレヒをツナぐ 哀愁を岸邊の岩に繋ぎとどめて、自分はその愁から遠ざかつて行くといふ意。

2 詩の構成

一

第一聯 全篇の主情をのべて、まづ身に近い景趣を眺め渡す。

第二聯 稍遠く廣く見渡す野面には、さすがに早春の景趣が動きそめてゐる。

第三聯 黄昏の堪へ難い旅愁を岸邊の宿に上つて濁り酒にしばし慰める。

二

第一聯 感傷から内省に轉じて、離齷たる生活を反省する。

第二聯 思ひ疲れて古城から谷間に下り、古城の榮枯の夢に對比される川波の悠久な姿をうたふ。

第三聯 榮枯盛衰の人世と悠久な自然の姿の對比とによつて悟り得た靜かな感動。

第四聯 新しい人生へ歩み入らうとする靜かな希望。

3 詩想

一
若き日の旅情に藉りて青春の多感な感傷をうたつてゐる。まづ端的に自らの立つ場所と、全篇の主情をうたひだし、身に近い岡邊の情景を描き、次に眼を野面に轉じ、淡い浅春の情趣を表出して、こゝに影濃い情操を託し、最後に黄昏の哀愁に結びつけて、詩情の極頂に導いて行き、千曲川の岸近き宿に上つて濁り酒を飲みつゝ、しばし旅情を慰めるやるせなさをもつてうたひ收めてゐる。

二

前詩の感傷から一轉して、これは周圍の自然と煩ひ多い青春の姿との對比の上に立つて、内省思索に沈潜してゆく靜かな内面的感動をうたつてゐる。昨日を顧み今日を思ひ、思ひ疲れた心を抱いて谷間に下り、こゝにいさよふ川波を眼前にして、人の世の榮枯盛衰と悠久な自然の營みとの對比を通して、至り得た靜かな悟りをうたひ上げ、かくてその靜かな情感到に映ずる千曲川畔の早春の景趣を描き、明日への希望をもつてうたひ收めて、多感な青春から一步深く人生へと歩み入る姿を暗示してゐる。

4 鑑賞批評

藤村詩集中の代表的傑作として、長く讀者の渴仰を招き、普く人口に膾炙愛誦されてゐるのは、一にその小曲風の形式が暗誦に適する故もあるであらうが、集中の他の多くの詩と異なつて、比較的作者の直接な心境の卒直な表現であり、主観と主観との交錯する所が深く、作者と讀者とをつなぐ力が内面的に根強く働いてゐる爲ではなからうか。その多感な青春旅情の感傷は、異郷に哀しむ詩人藤村の止み難い滲出であり、度ましく燃やす感動は、靜かに人生の奥深く求め入らんとする卒直な反省の吐露である點に於て、それは深く人の感傷をそより、殊に若い生命の同感に訴へる力を持つてゐるのである。勿論その言葉は美しく醇化せられ、徒らなる感傷を排して、一語一句がよく具象化せられてゐるところにも、こ

【ただひとり岩をめぐりて この岸に愁を繋ぐ】
ただ一人岸邊の岩をめぐりつゝ、人知れぬ哀愁を語り、すべての哀しみをそこに止め、そこに封じこめてしまつて、明日への新しい生活に踏みださうとの希望を詠つてゐる。遊子の情は、同時に心の上の遊子の情として、多感な青春の時代に訣別し、靜かに人生の中に歩み入らうとしてゐる作者の感懐が卒直に吐露されたのである。

の詩を通じての強い魅力が潜んでゐるし、五七調の莊重な吟誦體も作者の情懷の奥深く讀むものの心を導いて行くことも見逃し得ないものであつた。要するに言葉と詩想と、詩情と韻律との渾然たる融合の上に、間然する所のない完成に到達したものである。永遠に愛誦せらるべき傑作たるの價値を失はない詩である。

三 備 考

1 指導研究

(一)新體詩としては既に本學年に入つて卷五・十九に河井醉茗の「塔影」を學んでゐる。默讀に、誦讀に、反覆玩賞して、詩想と韻律との渾然たる一致の上のうちたてられた美しさを感じせしめたい。

(二)本課の詩は作者が小諸義塾の教師としてその地に在任の時代になつた作品であり、こゝに遊子といふも、それはその日その日轉々として地を變へて行く所謂旅人ではない。異郷にあつて、異郷の朝夕の詩懷を歌ひ出でたものであることは、この詩を誦んで自ら明らかな事である。この作者の境遇を定位することも忘れてはなるまい。

(三)遊子の情といふも、畢竟心の上に於ける遊子の情として、夢多い多感な青春の日に別れて、靜かに人生の奥深く歩み入らうとする心の姿をうたつた詩と見ることが出来るであらう。それは自然とこの詩情と韻律の上に現れて、前詩が旅情の哀愁に藉りて青春の感傷のおのづからなる發露としての表現であるのに對して、後の詩が更に一步をすすめて、自然と多感な青春の苦惱との對比の上に立つて、自らの姿を省みつゝ靜かな感動を度しやかにうたひ出でて、個的で微妙な詩情を盛つてゐる所以であり、隨つて前者が直情的な表現の強さと整然たる韻律とを以て、盡くるなき感傷に浸つてゐるのに比べて、後者は一種悠遠な調子の中に、内容的にはるかに複雑な心の綾を織りなしてゐる。前後比較せしめつゝ、この特質を感じせしめるまで讀みは深められねばならない。

2 参 考

(一)挿繪「古城のほとり」の碑 小諸の古城、今の懷古園の千曲川に面する岡の上に建てられてゐる詩碑で、自然石の趣をそのまま生かし、これに「古城のほとり」の詩が刻してある。高村豊周・有島生馬兩氏の意匠にかゝり、大正十五年に建設せられたものである。

(二)藤村自身の詩に對する態度を窺ふ爲に藤村詩集の序文を左に採録する。

「遂に新しき詩歌の時は來りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新聲と空想とに酔へるがごとくなりき、うらわかき想像は長き眠りより覺めて民俗の言葉を飾れり。

傳説はふたたびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を帯びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり。過去の壯大と衰頽とを照せり。新しきうたびとの群の多くは、ただ穆實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき。不完全なりき。されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはわれらの口唇にあふれ、感激の涙はわれらの頬をつたひしなり。こころみにおもへ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆んど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。

われも拙き身を忘れてこの新しきうたびとの聲に和しぬ。

詩歌は靜かなるところにて想ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦悶の告白なる。

なげきとわづらひとはわが歌に残りぬ。思へば言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いささかなる活動に勵まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か舊き生涯に安んぜんとするものぞ。おのがじし新しきを聞かんと思へるぞ若き人々のつとめなる。

生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。われもこの新しきに入らむことを願ひて多くの寂しき暗き月日を過しぬ。藝術はわが願なり。されどわれは藝術を軽く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今青春の記念としてかゝる思出の歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。」

(三) 本課詩篇の原典たる「落梅集」の成立を叙した作者藤村の自序を左に掲げる。

「落梅は胡笳の歌にして羌笛の韻なり。張翥が西城よりして摩訶兜勒の一曲を得たるや、李延年さらに新聲二十四解を造りき。横吹十五曲のうち落梅花とあるはこの調なりといへり。われ信濃なる山家に草枕ひき重ねて、こゝに早や二とせ、客心慰めかねし折々書き綴りなどしけるをとりあつめて落梅集といふは、淺間山のふもとなる鄙のしらべといふこゝろを名づけ、また一つには千曲川に散り浮く梅の花の、水は流れて香は僅に残りたる旅の思を盡さんとしてなり。」

(四) 藤村の詩について河井醉茗の批評。

藤村の詩は旅の詩である。事實に於て旅の詩といふよりも、心持に於て旅行く人のうたである。仙臺に「若菜集」を得、木曾に「夏草」を得、千曲川の畔に「落梅集」を得たのは、單なる事實に過ぎないけれど、その詩の心は旅行く人の初めて觸れた人生のすがたに感激し、初めて見た自然の情調に驚異し、聲をのみ眼をみはつて歌つた詩である。

——中略——

「落梅集」の詩を作つてゐた頃は、彼は同じ信州でも淺間の麓にゐた。木曾などより遙かに文化の進んだ、而して千曲川の溪谷が長江の大きさと廣さを持つたほとりの小都會にゐた。「小諸なる古城のほとり、雲白く遊子悲しむ」と悠揚とうたひ出した彼は、どんなに自然に親しんでゐたらう。その散文「千曲川のスケッチ」に書かれてゐる自然、その詩「常盤樹」や「寂寥」やに歌はれてゐる自然、さういふ自然の感化は又藤村を新しくし、藤村に力を與へ藤村の爲に新しい衣を裁つた。

「落梅集」の出たのは明治三十三年で「一葉舟」とは二・三年を隔ててゐる。その間に藤村は永遠の生を體得するやうになつた。生のだがたは春のやうな若さばかりではつづいてゆくものではない。人間の生活はもつと複雑なところまで突進して見ないと分らないものがある。藝術でもさうだ。畫も知り、音楽も知り詩も知り、その渾然たる藝術の深奥にふれてみなければ分らないものがある。彼は自然に於ても單なる印象を歌ふばかりでなく、ラスキンの自然論などにさへ觸れて行かうとした(下略)(明治代表詩人)

(五) 「落梅集」に就いての北原白秋の批評。

藤村の四つの詩集の最後の集「落梅集」(三十四年八月版)にも愈々詩より別れ青春より離れて、靜かに人生の中に歩み入る處まじい後ろ影が眺められる。眼は現實に、心はひたすらうら寂びて、たとひ壯年の歌を歌ひ、胸より胸に愛憐のわななきは傳へても、それは考ふかい觀想と五七の莊重味とから、香り高かるべき藝術の魅力は燃え立たなかつた。その中で「常盤樹」の破調が思想的ではあるが、雄々しく優れ、「椰子の實」の憂に流離の新しさも痛感された。「響りんく〜鈴りんく〜」の清しき、「鳥なき里」の童謡味、ことに「小諸なる古城のほとり」と唱ひ出した「千曲川旅情」の遊子吟はその典型的の佳什として終りを完うした。青春あながち芳ばしからず、老境必ずしも疎ましくはないが、いや、境涯老いて愈々神采の突々たるべきであるが、藤村の自然主義傾向は自らを却つて他の散文へ向け換へて了つた。それは或は本質としての行き方であつたかも知れぬ。長篇の「寂寥」がその千曲川の初聯、象潟の合歡の條を外にして、淺間佐渡と連想の巧を凝らしたのも詩の上の張りと感興とを次第に喪失しつゝあつたのではあるまいか。以來藤村の業績は一倍の重厚さと、精練細緻な描寫とを以てその光輝ある小説の上に増大された。(現代日本文學全集日本詩集)

(六) 「古城のほとり」の詩についての川路柳虹の批評。

この集に到つて藤村氏の詩境は著しく異つてきたやうに見える。即ち、ごくセンチメンタルな詠嘆からやゝ遠ざかつて、田園に於ける農民の生活を歌つたり、またそこに起臥する自分の沈思を語つたりする點に於て、詩として若菜集等より一段の深みを加へてきてゐる。

格調に於てもこゝには單にセンチメンタルな七五の詠嘆ばかりでなく、五七となつたり、また一種の破調を齎してゐる。全體に織

弱な甘さから、やゝ枯淡な味ひを加味してきた點に於て、たしかに氏の詩の詩境を進ましたものと見るのが適當であらう。その最初巻頭に出てゐるは人口に膾炙した有名な「小諸なる古城のほとり」の一行で初まる小曲である。調も五七の調で引き緊つたりズムがある事が視へる。

小諸は信越線の小驛で淺間山麓にある邊村である。藤村氏がこゝに起臥して種々な文藝上の勞作に耽つたことは、往年詩より小説に入つてもなほこの地を離れなかつた事に徴して氏には忘れ難い土地であらう。

この詩はたゞそこにあつて朝夕のおもひを歌つたまでのものであるが、いかにも句が洗練され、引き緊つた味があるのが懐しい。しかも暁翠氏のやうな徒らに豪壯な處もない。いゝ詩である。ことに第二聯など心ゆくばかり、その野原の情趣が出てゐる氣がする。(鳥崎藤村の藤村詩集)

一九 井伊大老

中村吉藏

一 解 題

1 作者

中村吉藏 ナカムラキチザウ 劇作家。明治十年五月、鳥根縣鹿足郡津和野町後田ゴノの商家に生まれた。幼名は常治ツナシ。十五歳の時、相ついで祖父・父を喪ひ、境遇が逆轉した。この年亡祖父の名を襲ひ吉藏と改めた。明治二十八年(十九歳)大阪に出で、三十二年上京、廣津柳浪方の書生として子息和郎等の家庭教師を兼ね、傍ら早稻田専門學校哲學科に入學した。三十四年春雨の號を以て大阪毎日新聞の懸賞に應募し、小説「無花果」を投稿して第一等に當選した。三十六年早稲田大學卒業。三十九年米國に學び、英・獨・露等を経て四十二年歸朝、四十三年社會劇「牧師の家」を發表し、爾來春雨の號を廢して、實名を用ひた。四十四年文藝協會が「人形の家」を上演するに當り、島村抱月と共にその演出を擔當し、翌大正二年同協會が解散せられて藝術座の成立すると共に、同座の舞臺監督となつた。その間同座の爲に「剃刀」「飯」「帽子ピン」「眞人間」等の社會劇を執筆上演し、七年抱月逝き、八年同座解散の後は、専ら劇作に耽り、「井伊大老の死」「大鹽平八郎」「錢屋五兵衛父子」の三長篇史劇及び「地震」「牛と鬮ふ男」「無籍者」「道化役者」などの現代劇、或は「星亨」「豫言者日蓮」「人鮫」等を逐次發表刊行、且上演した。十四年以來、早稻田大學講師としてギリシャ劇史・現代劇史を講じ、昭和三年からは沙翁劇研究の講座をも擔任し、現に同大學教授である。

その作品の大部分が脚光を浴び、舞臺的劇場的に見て甚だ實踐的效果の多いことは、他の新しい劇作家と比較して、注

意すべき特色とせられてゐる。尙、歐洲演劇、特にイブセン劇・希臘劇・沙翁劇に關する研究、並びに舞臺・劇場に關する研究等に造詣が深く、その方面の著書にも見るべきものが多い。

2 出典

「井伊大老の死」(五幕十場)から採つた。「井伊大老の死」は廣く史實を探り、作者の見た井伊大老の性格と運命との戯曲化を試みた史劇で、大正九年四月雜誌「早稻田文學」春季特別號に發表され、同年六月天佑社から單行せられた。單行本には卷尾に井伊大老詠抄・追弔歌が附録せられてをり、大正十五年にはジャパン・タイムス社から英譯が刊行されてゐる。大正九年市川左團次一座によつて歌舞伎座に初演、十五年澤田正二郎等の新國劇によつて帝國劇場に再演せられた。現代戯曲全集・現代日本文學全集・現代戯曲名作集等に收められてゐる。

本課はその第四幕第二場「井伊邸宵節句」の抄録である。

3 主眼及び採擇の趣旨

未曾有の難局に對處して、世の喧々囂々たる反對非難に抗して、敢然としてその所信を斷行した一代の大政治家井伊直弼の心境を描いた戯曲である。安政の大獄の立役者として時代の怨嗟を一身に買ひ、遂に櫻田門に非業の最期を遂げた井伊大老の憂國の苦衷に對する限りない同情と、その深く且廣い心境に對する已み難い尊敬の情と、それが本課をつらぬく精神である。これに共鳴共感を喚起することによつて、政治的社會的變動期に處する代表的政治家の立場を考察せしめ、國家的大人物の風貌に觸接せしむべき國民的教材として、兼ねて史劇の特質を學習せしめ、戯曲鑑賞の習練に資すべき文藝的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【井伊大老】キイタイラウ 井伊掃部頭直弼。幼名鐵之助。ついで鐵三郎と改名。字は應卿。埋木舎・柳玉舎・綠舎・樹露軒等の號がある。法號は宗觀。近江國彦根城主掃部頭直中の十四男。文化十二年(二四七五)十月彦根城内に生まれ、弘化三年(三十一歲)當主たる兄直亮に子無きを以て、その嗣子となり、嘉永三年兄の死を承けて封を襲ぎ、掃部頭を稱し、彦根三十五万石の大守となつた。爾來銳意治を圖つて土風・民俗を振肅し、安政元年京都守護の命を受けて朝幕關係の整調に當り、藩士長野主膳を京に遣はして公卿縉紳の間に斡旋せしめた。(師探題の任に當るのは藩祖直政以)二年左近衛權中將、四年從來井伊家本來の使命であつた。)二年左近衛權中將、四年從四位上となり、溜間大名の首席として幕政の樞機に參劃した。時恰も將軍繼嗣問題が紛糾して、一橋派(一橋慶喜)南紀派(紀州慶福)の抗争激烈を極めるや、後派の統領として重きをなし、又、漸く騒然たる開國・鎖攘兩論の渦中にあつては、夙に避戰開國の主張を持して水戸齊昭等の一派と對立した。安政五年(二五一八)四月、將軍家定以下城内の輿望を荷つて、遂に大老の重職に就き、未曾有の難局に處し果斷勇決、まづ慶福(家茂)を將軍に立て、又、對外事情の急迫して逡巡すべからざるに至つて、敢然勅許に先立つて通商條約に調印、囂々たる非難裡に責を一身に負つて所信を枉げず、水戸藩士の密か

に勅を奉じて事をなさんとするや、大いに諸藩士・浪人及び公卿家臣等を捕へて嚴刑を加へ、また水戸以下數藩主を嚴科に處し、所謂安政の大獄を斷行した。こゝに於て衆怨一身に集り、遂に萬延元年(二五二〇)三月三日登城の際、水戸浪士等に櫻田門外に要撃されて斃れた。享年四十六。

直弼は爲人剛毅不撓、よく修養を怠らず、武道に習熟して居合に一派を立てると共に、禪を修し、國學・和歌を學び、又茶道をよくし、苟も諸道に携はつては至境に到らざんばやまなかつた。彼の思想の根本をなすものは本居宣長の國學及び禪であつて、よく悟道に徹してゐたと共に、勤皇の心情は實は最も強かつたといふ。またよく民心を知り下情に通じ、表には犯すべからざる威嚴を具へながら、内には溢るゝばかりの溫情を藏してゐたといはれてゐる。

〔大老〕こゝでは、徳川幕府に於て、老中の上に坐して將軍を輔佐した最上位の職名。

「大老」の名は文祿中、豊臣秀吉が大名中の重望者徳川家康等を五大老に補し、五奉行の上に置いて大政に參與せしめたのに始まり、徳川時代には、寛永中土井利勝・酒井忠勝の兩名を家老職としたのが最初で、寛文三年(二三二二)酒井忠清の時始めて大老の稱が用ひられるに至つた。老臣中特に年勞徳望あるものをして細務を免じ

て大事のみに参割せしめるのがその趣意であり、無上の重職たるが故にこれを常置せず、家格十萬石以上の譜代大名中より隨時選任し、毎日登城して上部屋にあり、専ら内書の事に参じ、閑老より將軍への上申を聞き、これを専決し、又はその可否を令するものが主たる職務であった。

【掃部頭】カモンノカミ「かにもりのかみ」ともいふ。掃部寮の長官。但し、こゝでは單なる任稱で、實際にその役に就いたのではない。直孝以來、井伊家の當主は代掃部頭を稱した。

「掃部寮」は、昔、宮内省被管の役所で、宮中の鋪設・疊簾・酒掃等の事を掌つた。職員には頭・助・權助・大允・小允・大屬・小屬・史生・掃部等がある。

【用人】ヨウニン (一) 雑用を掌る小役人。(二) 王朝時代に親王・攝關家の雑用を掌つた下司。(三) 江戸幕府の職名。將軍に近侍してその命を老中に傳へるを任とした側用人を最高として、廣敷用人・女中方用人・姫君用人・三丸用人等の別がある。(四) 江戸時代、大名・旗本の家等で老臣(家老)の次に位し、主として出納の事等に當つた重職。こゝは(四)の意。

【宇津木六之丞】ウツギロクノジョウ 宇津木景福。井伊家の臣。古澤六右衛門の子に生まれ、伯舅宇津木三右衛門の養子となり、三百五十石を祿した。夙に藩主直弼の

信任を受けて用人に擧げられ、嘉永・安政にわたり、外京師に在つて活躍する長野主膳と相應じて、内に在つて直弼を輔け、直弼執政中一切の機密文書を掌つて事々に要務に参割、その懐刀を以て目された。直弼を中心とする幕末史の最も貴重な資料として知られる「公用方秘録」(六卷。安政五年四月より六年九月に至る公事の記録。)は、主として六之丞の手に成つたもので、又、「秘書集録」(十卷。直弼の彦根時代以後の藩政・幕政に)の直弼執政中の部分も、長野・宇津木間の往復書翰がその大部分を占めてゐる。直弼の歿後漸く藩臣に忌まれ、文久二年(二五二二)幼主直憲を擁して藩政を私した罪を以て遂に禁錮の上、十月斬罪に處せられた。享年五十四。恰も幕府内の形勢一變して井伊家追討の議があり、彦根の藩老等は長野・宇津木兩名を斬つてその罰を輕からしめんと圖つたといはれてゐる。

【左兵衛督】サヒヤウエノカミ 左兵衛府の長官。令制では從五位上、延暦中從四位下相當官となつたが、後には中納言・参議で兼帯するのが例となり、二位・三位の人が任ぜられた。但しこゝでは、單なる任稱。

【松平信茂】マツダヒラノブシゲ 「松平信發」のこのやうである。上野國吉井(一萬石)の藩主。美作國津山藩主松平越後守齊孝の弟で、幼名を哲丸、後和之助と稱した。弘化四年(二十四歳)上野國矢田(後吉井と改む)

の藩主松平左兵衛督信任の養子となり、家督を承けて侍

從兼左兵衛督に任じた。嘉永・安政の非常時に際しては屢々時務を畫策して幕政に裨益し、安政六年幕府が水戸齊昭に蟄居を命ずるや、大老井伊直弼は特に信發をして上使の任に當らしめた。信發は死を決して水戸邸に使用し處置宜しきを得て遂に兵戈を用ひるに至らしめず、水戸家をしてよくその封土を全からしめた。後幕政漸く振はず、彌縫を事とするを慨して、切りに建言する所があつたが用ひられず、慶應三年致仕して三猿と號した。蓋し見ざる、聞かざる、言はざるの意にとるといふ。維新後氏を吉井と改め、頻りに出仕を勧められたが、遂に出でず、明治二十三年九月歿した。享年六十七。死に當つて從三位に敘せられた。これより先明治十七年、その孫信實を華族に列し、子爵を授けられた。

原文の第三幕第二場には、信茂が井伊家を訪れて、水戸家への處分申渡の大役を受け大老の苦衷を諒として去る場面がある。

【井伊邸】キイテイ 彦根藩井伊家の江戸藩邸。江戸櫻田臺(現東京市麴町區永田町一丁目)にあつて、櫻田屋敷といはれ、又その門が赤かつたので、俗に櫻田の赤門などとも稱せられた。今參謀本部のある附近がその舊地である。

原文には、この「井伊邸宵節句」の場の最初に次のや

うに舞臺が説明されてある。

井伊家書院の屋體、庭先に香脫石、上手、春日燈籠の傍に緋桃白桃の花が眞盛り咲いてゐる。下手の植込、芽出し柳がもう青々としてゐる。そこらに建仁寺垣があつて、衛門が開いてゐる。座敷の床の間には緋毛氈の上に、内裏雜一對、柳と桃の花を活け、三寶に白酒が備へられてゐる。榻間には「至誠」の字額、二十疊の廣間の、中央にも緋毛氈が敷かれ、下手は曲り廊下、宵節句の氣分が見える。

【萬延元年】マンエングワンネン 皇紀二五二〇年。

「萬延」は孝明天皇の御代の年號の一。安政七年三月十八日改元、翌二年二月十九日文久と改元した。

【宵節供】ヨヒゼツク 節供の前夜に行ふ祭。

總べて例祭の前夜に行ふ祭を夜宮・夜宮祭・宵宮・宵宮祭・宵祭等といふ。古へはこの祭儀に於て高天原から祭神を迎へ奉り、本殿に奉齋して、翌日祭禮を行つたのであるが、後には單に形式的の祭祀となつて、専ら例祭の前夜祭とのみ考へられるに至つたのである。

【節供】「節句」とも書く。人日・上巳・端午・七夕・重陽等の節日。こゝでは、上巳の節供をさす。

「上巳」は、陰曆三月三日の節供で、「じやうみ」ともいひ、元巳・重三・上除なども稱し、普通俗間では桃の節供といふ。巳は正しくは十干の巳で、十二支の巳(音はシ)ではないのであるが、古くから誤つて十二支の巳と

するに至つた。支那に古くから三月の最初の己の日に觸
を水に流し、不祥を祓除する風習があつたが、後三月三
日に變更せられ、我が國にも夙くこの風を傳へ、三月三
日に巳の日の祓及び曲水宴が行はれた。曲水の宴の行は
れたことは國史では顯宗天皇の御代に初めて見える。江
戸時代には五節句の一として最も重んぜられ、上下祝儀
を述べる事が盛になり、幕府に於ては大小名が鬨斗目
長袴の禮装に威儀を正して登城し、拜賀の禮を盡くし
た。民間に於ても白酒を酌み蓬餅を祝ひ、婦女子のある
家には内裏を象つた雛人形を飾り、小道具・調度類を並
べ、膳部・菱餅・蓬餅・菓子・貝類等を供へて祝つた。この
風習は現在も廣く行はれてゐる。

【催し】 モヨウシ (一)うながすこと。催促すること。
(二)執り行ふこと。設け起すこと。企。舉行。(三)きざ
すこと。こゝは(二)

【茶室】 チャシツ 茶の湯を行ふために特に作られた室で
これに水屋(茶事の準備室)待合(容が席入り前に相客
を待合はせる所)露地(待合と茶室とを連ねる庭内の小
徑)が附屬してゐる。住居の一部分を仕切つて用ひるも
のを特に「かこひ」といふ。廣さは、小は一疊半から大
は十八疊に及ぶものがあるが、四疊半を正式とし、五客
を容れるを標準とする。床を設け、爐を切り、囀り口(客
の出入口)・勝手口(亭主の出入口)をつけ、勝手口から

水屋につゞく。露地には腰掛・雲隠・手水鉢・燈籠等を配
置し、樹木・蘚苔等を植ゑ、打水をし、奥外の清境への
通路たるにふさはしい山野自然の趣を出す。

【内談】 ナイダン ない／＼に話しあふこと。うちわの相
談。内話。密談。

【子細】 シサイ こゝでは、委細の事情、ことがら、いは
れの意。

【押し】 オして ここでは、強ひて、無理に、の意。

【狩野永岳】 カノウエイガク 京都の畫家。京狩野第九代
字は公嶺。通稱縫之助。山梁・晚翠等とも號した。中國
の畫人景山洞玉の長子で、狩野永俊の養子となつた。京
狩野近代の名手で、家風に圓山四條派の寫生風の筆意を
雜へて一家をなし、家職として禁裡御用を勤める傍ら、
關白九條尙忠に愛せられてその家臣となつた。直弼の壽
像を描くに至つたのは九條家との關係からであらう。慶
應三年(二五二七)正月歿。享年七十八。

【壽像】 ジュザウ 存命中につくつておく人の像。ここで
は畫像である。

この畫像は、現に清涼寺(次項「國元の寺」参照)に所藏
されてゐる。(挿繪参照)

【國元の寺】 クニモトのテラ 彦根の清涼寺をさす。佐和
山の麓(現滋賀縣犬上郡彦根町古澤)にある曹洞宗の寺。
山號を祥壽山といひ、井伊家の菩提寺であつた。はじめ

藩祖直政の子直孝が父の菩提の爲に開き、享保中直孝の
孫直興がこれの中興した。直弼の父直中の時に至り、百
人詰僧堂を建立して大いに興隆し、曹洞宗の四大叢林
(加賀前田の菩提所天徳院、安藝淺野の菩提所國泰寺、
佐賀鍋島の菩提所高傳寺、及び清涼寺)の一到に數へられ
て、雲水の集るものが極めて多かつた。就中その最も隆
盛を極めたのは、直弼畢生の恩師たる傑僧仙英禪師がこ
れに住した時代である。

直弼は十三歳の頃から清涼寺に通ひ、まづ仙英の先代
師虔に就き、次いで仙英の紺鎚を受け、雲水に伍して行
を修めること六年、深く禪道に悟入すると共に、廣く他
宗の教義にも通じた。殊に仙英とは終生親交を續けて、
精神上に非常な影響を受けてゐる。原文の第二幕にも、
仙英が左官屋利八(直弼の埋木舎時代の茶友)を伴なつ
て井伊邸を訪れ、直弼に劍難の相あるを告げて、「須ら
く千仞の嶮崖に手を撒して絶後に再び蘇られい」と、最
後の教示を與へる場面がある。

【國元】(クニモト)は「國許」とも書く。(一)生まれ
た土地。くにおもて。故郷。郷里。(二)領地又は主君の
領地。こゝは(二)の意で彦根をさす。

【彦根】は、現滋賀縣犬上郡彦根町の地。琵琶湖の東岸
に近く位して、要害無雙を以て知られた。慶應五年の關
原役直後、家康は重臣井伊直政をこれに封じ、佐和山城

(石田三成の舊城)に居して十八萬石を領せしめたが、直
政の歿後、その子直勝の時、家康の旨を得て新に彦根山
に城を築き、爾來、井伊氏三十五萬石の城下として、湖
東第一の繁華地となつた。

【出来】 シユツタイ(シユツライの音便) (一)物事の出で
來ること。事件の起ること。(二)物の出來上ること。成
就。こゝは(二)

【束帯】 ソクタイ 中古以降の朝服。論語、公冶長第五に
「束帯立於朝」とあるより出た名であるといふ。天皇以
下文武百官の正服で、衣冠・直衣を宿直裝束といふに對
し、晝の裝束といふ。平安朝から近世まで王公・縉紳の
正裝とされ、今猶御大禮・御神事等には、天皇以下御儀
服として著用せられる。冠を戴き、袍・半臂・下襲・袴・
單・表・袴・赤大口・石帯・魚袋等を著け、襪・履を穿
き、帖紙を懷に挿み、笏を把り、武官及び大納言以上の
文官は別に太刀を佩き、平緒を垂れる。

【正】 シヤウ 少しも違はぬこと。そのまゝであること。
まことであること。いきうつし。こゝでは前の壽像に對
し繪ではない生きてゐるそのまゝ、まことの身、生身、
正身等の意。

【束帯の正のお姿】 束帯をおつけになつた生身のお姿。原
文によれば、直弼當場の扮裝は、從四位少將の束帯姿で
ある。但し、當時の直弼は、實際には正四位上左近衛中

將であつた。

【参内】 サンダイ 内裏に参上すること。朝廷に出仕すること。

【今日は一寸参内しましたのぢや】

當場の最初に於て、東帯姿の直弼は、美しく飾られた難壇の前に坐して一揖し、遙に参内の意を表し、今日に至る自分の苦衷を言上し、死期の到来を豫知して最後のお暇乞を申上げる言葉が長々と述べてある。

東帯姿で内裏難を拜する所に、直弼の容易ならぬ覺悟が潜んでゐる。これは直弼の悲壯な覺悟が暗示された言葉であり、以後の心理的發展の端緒をなすものとして注意されなければならない。

【訝しさうに】 イブカしさうに 不思議さうに。

【内裏】 ダイリ (一)天皇の住まはせ給ふ宮殿。皇居。即ち大内裏(宮城)の内に在つてその中心をなした一郭。

大内。禁中。(二)「内裏難」の略。ここは(一)。

【察し入ります】 心から御推察申します。

【入る】(イ)動詞の連用形に連ねて用ひ、その意味を強める。「恐れ入る」「消え入る」の類。

【参朝】 サンテウ 朝廷にまゐること。参内に同じ。

【どのやうな風が吹いて来るか】 どのやうな状態がめぐつて来るかの意。

【去年の秋】 安政六年(二五一九)の秋。

安政の大獄に關聯して、この年八月二十七日、幕府が前中納言徳川齊昭に水戸表に於て永蟄居を、水戸藩主徳川慶篤に差控を、徳川慶喜に隱居愼を命じた時の事であらう。この時松平信茂(信發)が決死の覺悟を以て使したことは、原文第三幕第二場「井伊家書院」に見えてゐる。

【めがね】 品物又は人物等の善惡・良否を見分けること。鑑定する眼の力。めきき。鑑識。

【不肖】 フセウ こゝでは、謙遜していふ自稱代名詞。

「肖」は「似」で、「不肖」は、天に似ぬ義とも、賢に似ぬ義とも、親に似ぬ義ともいひ、要するに、人に如かぬこと、おろかなこと。轉じて謙稱となる。

【水戸家】 ミトケ 紀州家・尾張家と共に、徳川氏三家の一。家康の十一男頼房が、慶長十年常陸國河内郡下妻に於て十五萬石に封ぜられ、次いで十四年同國水戸城に遷り二十五萬石に加封せられたのに始る。元和八年同國松岡小川にて三萬石加賜。ことに光圀(義公)の英明は水戸家を重からしめること頗る大なるものがあつた。その子綱條の時(元祿十四年)、更に新治郡七萬石を加へて三十五萬石に加封、子孫相繼いで明治に至り、侯爵を授けられた。本文當時の當主は十代齊篤で、烈公として名高い九代齊昭が後見してゐた。

【上使】 ジャウシ 江戸時代に、將軍から諸侯に賜はつた使者。先方の身分又は場合によつて、老中・奏者番・高

家・小姓・使番等が適宜に任ぜられた。

【思ひ詰める】 オモひツめる 極度まで思ひ込む。一圖に思ふ。思ひ込んで決心する。

原文「思ひ詰めてをりました」(一三六頁八行)の次の、本文に省略した部分には、「案の定、血氣に逸る水戸武士の爲に危く一命を失ひかけましたが、同家の家老等に支へられて、首尾よく大任を果し復命に及びました節は、ホツとして再生の思ひをしました」とある。

【預る】 アヅかる ここでは、かたじけなく受ける、蒙るの意。

【命あつての物種】 命があつてこそ何事もすることが出来る、何事をするのも命があつての上のことである、命が何事をするにもととなる、等の意。

【物種】 モノダネ (一)物の根元となるもの。材料。

(二)草木の種。たねもの。種子。ここは(一)。

【執著】 シウチャク (一)佛語。事物に固著して離れないこと。始終心をとどめること。思ひこんで忘れないこと。(二)精神をそゝいで必ず成さうと志すこと。ここは(一)。

【膝を進める】 坐つたまゝ前へ進み出る。膝をのりだす。

【お達しなされた】 傳達なされた。

【達】はここは、とどける、送る等の意。

【別勅】 ベツチョク (一)特別の勅旨。(二)王朝時代に太

政官を経ないで施行した勅旨。ここは(一)で幕府を經由しないで直接水戸藩に下された勅書、即ち「戊午の密勅」をさす。

【返上】 ヘンジャウ お返しすること。返し奉ること。奉還。

【上意】 ジャウイ かみのおこころ。きみのおぼしめし。君主の命令。

【水戸藩】 ミトハン

【荒氣】 アラキ あら／＼しい心。荒々しい氣質。

【長岡驛】 ナガヲカエキ 現茨城縣東茨城郡長岡村長岡。

水戸市の南方約八軒に位し、古く水戸路に沿ふ一驛であつた。

【屯する】 タムロする 多く人が集る。陣を張る。陣所を設ける。

【聞き及ぶ】 キキオヨぶ 人づてに聞いて知る。傳へ聞く。傳聞する。

【脱走】 タツソウ (一)脱け出て逃げ去ること。出奔。逃走。(二)特に、徳川時代の末、諸藩の士が國事のため藩を出奔したこと。脱藩。こゝは(一)。

【江戸城】 エドジャウ 武藏國豊島郡江戸に在つた徳川氏累代の居城。今は皇居。長祿元年鎌倉管領上杉定正の臣太田資長(道灌)が始めてこれを築いて居城としたが、文明十八年定正が資長を相模に謀殺するに及び、曾我豊後

守を城代としてこれに居らしめた。永正二年定正の子朝良が川越城を逐はれてこれに據つたが、その子朝興の時北條氏綱の爲に攻められて走り、爾來北條氏の有に歸した。天正十八年北條氏滅亡後、徳川家康が關東に封ぜられてこれを居城とし、爾來屢々修築を重ねて、三代家光の元和中に至りその規模が完備するに至つた。その後火災に罹ること前後五回、その都度修築が加へられて幕末に及んだが、慶應四年（九月明治と改元）四月朝廷に收められ、十月明治天皇の御東幸と共に、皇居と定めて東京城と稱し給うた。六年炎上、後工を起して二十一年竣工、爾來宮城と改稱すべき旨達せられた。

【城下】 ジャウカ（一）城の下。城の外。（二）城下まち。大名の居城を中心としてその近傍に發展した市街。城市。ここは（一）

【別勅返上の御上意から、云々】

安政五年八月九日、朝廷では幕府に對して大老排斥、幕閣改造の御趣意を含む勅諭を賜はつた。しかもその前日に水戸家に對しても密かに同文の勅諭が傳達せられ、所謂安政の大獄はこゝに端を發したのであるが、大獄の事終るや、幕府は更にこの別勅を回收すべく、遂に勅許を得て、翌六年十二月、安藤信睦を小石川の水戸邸に遣はし、該勅書は幕府の手を経て朝廷に返上し奉るべしとの上意を傳達した。水戸家では直接返上の至當を論じて

争つたけれども、結局屈服のやむなきに至り、藩主齊篤は側用人横山甚左衛門を水戸に派して齊昭を説き、齊昭の命を以て旨を藩士に傳へしめた。がこれより先水戸藩に於ては、物議沸騰し、且この報に接して益々憤激した多數藩士は、城外各地に屯して甚左衛門を脅すに至つた。かくてそのまま翌七年に入り幕府の督促は愈々急であつたので、齊篤は家老白井織部等を歸國せしめ、必ず勅書を齎すべきを命じた。然るに藩士三百餘人は勅書を祖廟に納めてこれを護衛する他、城外二里餘の長岡驛に屯集して「大日本至誠至忠楠公之標」と大書せる大柱を立て、弓銃を備へて水戸街道を遮り、織部等の慰撫を聽かずして却つて襲撃を加へたので、一行はやむなく江戸に還つた。齊篤は乃ち狀を具して幕府に猶豫を乞ひ、齊昭等と協力して百方鎮撫に力めた結果、その大半を散ぜしめ得たが、なほ肯ぜざるもの百餘人、返勅派の藩士に襲撃を加へ、家老鳥居瀬兵衛等の鎮撫隊と衝突するに至つたので、藩では武力鎮壓を決して出兵し、漸く二月二十日に至つて激徒の解散を見た。彼等は藩兵の到るに先立つて自ら退散したといふ。しかも、その首領金子孫二郎・高橋多一郎をはじめ、巧みに逃亡して蹤跡を晦したものがすべて十九人。翌月三日の大老要撃に参加したのは果然この徒であつた。

【水戸家の隠謀】 ミトケのインボウ

盛する下心だとは、苟も眼あるものには分ります。

【隠謀】は陰密にたくんだはかりごと。

【前中納言家】 ゼンチュウナゴンケ 徳川齊昭。幼名虎三郎。通稱啓三郎。初名紀教。字は子信。景山・潜龍閣等の號がある。水戸藩主治紀の第三子。寛政十二年三月江戸小石川の藩邸に生まれ、文政十二年（三十歳）兄齊修の後を襲いで第九代水戸藩主となり、従三位近衛中將に任敘。後參議を経て權中納言に陞つた。爲人剛毅英邁、よく藩政を更革し、藩學弘道館を興して文武を勵まし、又深く民治に意を注ぎ、名君の聞えが高かつた。夙に皇室尊奉の志が厚く、光格上皇の崩御に當つては幕府に上議して奉葬の資を献じ、又山陵の修造を建言する等、誠忠の意を顯す所が多かつた。天保中對外情勢の急迫するに及んで幕府は諸藩に令して海防を嚴ならしめたが、齊昭は率先して意を邊防に注ぎ、封内の梵鐘を徴して鑄砲の用に充て、兵制を改革して洋式操練を施行するなど、大いに軍備を整へた。しかるにこれが爲幕府の嫌疑を蒙り弘化元年隠居慎を命ぜられて家を長子慶篤に譲つたが、嘉永二年許されて再び藩政に與り、六年米艦の浦賀に來るに及んで、閣老阿部正弘の請によりて出でて幕政に參劃、専ら海防の議に臨んで經綸をのべ、安政二年以後は隔月登城して聲望一世に重かつた。併し對外關係の切迫につれて、その鎖攘的主張は漸く幕閣に悅ばれず、加ふ

水戸の齊昭がその實子一橋慶喜を將軍に立てて自ら幕政を擅にせんが爲に、種々の策謀を廻らしつゝあるとは、夙くから南紀派の間に唱へられた所で、彼等はこれを「水府隠謀」と呼んで憤り且警めた。直弼が愈々大老として世子定立・條約調印を斷行し、齊昭に謹慎を命ずるに至つては、一橋派必死の挽回運動はすべて「水府隠謀」の名の下に取扱はれ、齊昭が前將軍家定を毒害し、更に家茂の毒害をも計りつゝあるとの風説さへ行はれた。偶々安政五年八月水戸家への密勅降下が露れ、九月水藩士鶴飼喜左衛門の密使が押へられたが、その所持する書狀にまづ直弼を襲撃して膽を奪ひ、機に乗じて齊昭等の禁錮を解き、大詔を仰いで一舉に改革を計るべき策が記されてゐたので、井伊派は事の重大に驚き、こゝに大獄の斷行に決した。こゝにいふ「水戸家の隠謀」とは直接にはこの鶴飼の計畫をさすのであつて、原文第二幕（井伊邸居室）の井伊・間部對話中には、直弼の言葉として次の記載がある。

この度の勅書も畢竟は水戸老公から京都へ御手入があつて、御三家の蟄居を解かせ、再應の大評定を機會に自分が御城へ入つて我々老職を斥ける―イヤ、現に取押へた密書の中にも赤鬼方へ一發打込めとの文句も見えますから、先づ私を斃す計略でせう、さうして邪魔者を除いた上で、あはよくば幼年の將軍家をあの一橋卿に代へて、思ふままに天下の政治を切

るに、その實子一橋慶喜を繞る繼嗣問題の紛糾は、益々彼を反幕的地位に立たしめるに至り、井伊直弼が執政となるに及んで、遂に完全にこれと對立し、安政五年直弼が勅許を待たずして米國と通商條約を結ぶや、越前の松平慶永等と共に大いにこれを難詰、爲に再び隱居愼を命ぜられ、次いで安政の大獄に坐して永蟄居の嚴科に處せられるに至つた。萬延元年櫻田の變後まもなく、八月六十一歳を以て歿した。諡して烈公といふ。文久二年從二位大納言、明治二年從一位、同三十六年正一位を追贈された。

【中納言】は、太政官の次官。令外の官で大納言に次ぎ、職掌は大納言に同じく、政府の機密を獻替することを掌る。正と權とあり、齊昭は權中納言であつた。但しこゝは單なる任稱に過ぎない。

【家】はこゝでは、官名又は姓氏に添へて敬意を表す。

【蟄居】 チツキョ (一) 蟲などの地中にこもりゐること。(二) 家にこもつて外出せぬこと。(三) 江戸時代に士人以上に科した閏刑の一。閉門を命じた上、更に一室に謹慎せしめたこと。特に終身蟄居せしめることを永蟄居といふ。こゝは(三)の意。

【お腹】 おハラ お心。お考。

【一途に】 イチツに ひたすら。ひとすぢに。

【甘心】 カンシン (一) 心に甘んずること。心に納得する

こと。満足すること。(二) 思ふ存分にすること。思ふ存分に處分すること。こゝは(一) 逸りに逸つてゐる】 非常に勇みたつてゐる。血氣に驅られて一途になつてゐる。

【逸る】 (ハヤル) は(一) 心が自ら進む。勇み立つ。血氣にかられる。(二) あせる。いらだつ。せきこむ。こゝは(一) 鏡にかけて見る】 鏡に映して見るやうに極めて明らかであるの意。

【風前の燈】 フウゼンのトモシビ 風の前のは非常に消え易いものであるから、(一) 人生のはかないこと。俱舍論の疏に「壽命猶風前燈燭」とある。(二) 物事の危険なさまを譬へていふ。こゝは(二)の意。

【草頭の露】 サウトウのツユ 草の葉末の露。物事のもろいさま。又は勢の長久でないさまを譬へていふ。草露。【無謀の刃】 ムボウのヤイバ 思慮もなく振るふ太刀。深い考もなく人をあやめようとする刃。

【かはす】 身を翻してさける。「かはされて」の「れ」は敬語の助動詞。【掛替】 カケガへ 後の用意に同様のものを備へておくこと。ひかへ。かはり。

【取留める】 トリトめる こゝでは、抑へとどめる。引き留める。

【忠節】 チユウセツ 忠義のみさを。君に盡くす節義。君國に盡くす忠義。

【大老のお命は誠に風前の燈とも、草頭の露とも申すべきものでございませう。この際、一時、御職務を辭退せられ彼等の無謀の刃をかはさせられて、天下の爲に、又幕府の爲に、無くてはならぬ掛替のない大切なお命を行末永く取留める策を取られるのが、眞の忠節の道と信じます】

【赤心を打割つた御忠言を】 (次頁二行) と自ら言つてゐる。天下の形勢を説き來り説き去つて、大老の一身を案ずる信茂の衷情が溢れた切なる諫言である。

【物議】 ブツギ 世間の取沙汰。世評。うはさ。

【出仕】 シユツシ (一) 出て官に仕へること。仕官。(二) 勤めの場所に出ること。出勤。(三) 明治の初年、新に官吏を任用しようとする時、その才能を試みる爲に置いた試験官。(四) 明治四年以後、事務の繁劇な場合に、臨時に置いた員外官。こゝは(一)

【御交誼甲斐に】 親密な御交際を願つてゐるしるしに。

【交誼】 (カウギ) は交際のよしみ。親しい交り。朋友として的情誼。

【赤心を打割つた】 セキンをウチワつた まごころをうち明けた。

【赤心】 いつはりのない心。まごころ。丹心。

【忠言】 チユウゲン 忠告の言葉。忠諫のことば。まごこ

ろから諫める言葉。

【枉げて】 マげて 心ならず強ひてなすにいふ副詞。無理に。強ひて。

【忝い】 カタジカナい こゝは、ありがたい。よろこばしい。うれしい。

【厚意】 コウイ 深いなさけ。親切。

【先將軍家】 センシャウグンケ 徳川十三代將軍家定。二代將軍家慶の第四子。幼名政之助。初名家祥。文政四年(二四八一)四月生。十一年四月元服。天保十二年將軍世子となり、嘉永六年(二五二二)六月家慶の死と共に家を襲ぎ、十月將軍宣下、内大臣に任ぜられた。恰もペリ1の來朝の直後、未曾有の非常時にあつたので、老中阿部正弘は、前將軍家慶の遺命を奉じて水戸齊昭を出馬せしめ、ひたすら時局の處理につとめたが、次いで露使ブチャーチンの長崎に來るあり、翌安政元年にはペリ1再來して神奈川和親條約の締結となり、越えて三年米使ハリス下田に駐割し、遂に上京して家定に謁する等、外交問題は日を逐うて複雑化し、一方これに伴ふ國內の政情また頗る紛糾を重ねた。しかも家定は、性虛弱にして親しく政を覽るに堪へず、はじめ鷹司政照、次いで一條忠香の女を夫人に迎へたがいづれも早世し、後更に島津齊彬の養女篤姫(後の天璋院夫人)を入れたけれども遂に子女を得なかつたので、世子選定の議が幕府の内外に

起り、爲に一橋・南紀兩派の暗闘抗争を生じて、亂麻の如き政情を現出するに至つた。かくて、安政五年(二五〇一)四月、井伊直弼が大老に立つて紀州の慶福(家茂)を世子に立て、斷乎たる政策の強行に従つたが、家定はその年七月、病革つて歿した。享年三十五。諡して溫恭院といふ。時局重大なるを以て特にその死を秘し、八月八日漸く發喪した。

【遺命】 キメイ 死期に臨んで遺した命令。

【幼君】 エウクン 年の若い主君。幼主。こゝでは徳川菊千代、即ち後の將軍家茂をさす。

家茂は、徳川十四代將軍。幼名菊千代。初名慶福。弘化三年(二五〇六)生。和歌山藩主齊順(家齊の六男。家慶の弟)の第二子。嘉永二年(四歲)閏四月、前藩主齊彊の後を承けて封を襲ぎ、安政五年(二五一八)十三歳にして將軍家定の世子となり、名を家茂と改め、八月宗統をつぎ、次いで將軍宣下を蒙つて内大臣に任じた。萬延元年大老井伊直弼が斃れて後は、老中久世廣周・安藤信睦が幕政を執り、公武合體を策して、家茂の爲に皇妹和宮親子内親王の降嫁を奏請し、經緯の後文久元年御東下・御入城となつたが、爲に却つて反幕派の誤解を招き、又幕府が米・英・露・蘭等諸國と通商條約を締結し終つたことも尊攘派志士の憤激を買つた。かくて文久二年の春には東に坂下門の事變(安藤閣老要撃未遂)西に寺田屋騒動

(薩藩の過激派鎮壓事件)を生じ、この間に處する家茂の苦心は一方ならざるものがあつた。しかも終始よく公武和親に力めて時局の悪化を防ぎ、和宮降嫁の際は誓紙を上つて不徳を謝し、又攘夷の叡慮を奉じ、時にその年六月勅旨を奉じて幕政改革を斷行、一橋慶喜を後見職に、松平慶永を總裁に擧用した。翌三年には、二百餘年の慶典を復して幕臣・諸侯を率ゐて京師に入觀、賀茂行幸の鹵簿に扈從し、公武合體の實漸く舉らんとしたが、時勢は遂にこれに止まるを許さず、元和元年の禁門の變に次ぐ第一次長州征伐後は、倒幕の機運漸く漲り、慶應元年(二五二五)六月第二次征長の師を率ゐて西上、大阪城に本營を置いて自ら諸軍を統督する中、二年七月城内に歿した。享年二十一。諡して昭徳院といふ。

【輔佐】 ホサ 人を助けて事を處理すること。又その人。

【先將軍家の遺命を奉じて幼君を輔佐する大任に當つてゐる】 先將軍家定は、もとその輔佐に當る齊昭の爲す所を悦ばず、繼嗣問題起るや、慶喜の年長疎族なのを嫌ひ、安政五年四月二十三日直弼の出でて大老に就任するに及び、二十六日特にこれと呼んで萬事を託したことは、「公用方秘録」二十六日の條に「今日御前(直弼をさす)御一人被爲召、御政務之儀品々御談、何分頼み思召候旨、難有上意を被爲蒙候に付、私(直弼)御役中は、何事に不寄、

聊御無斟酌被仰出候様仕度旨、被仰上候由、御直に奉伺世上の風評(家定暗愚の風評)と違ひ、中々聰明に被爲渡候迎、殊御歎被爲在候」とあるのによつて知られる。かくして家定は同年七月二日より病俄に重く、四日やゝ間があつて諸老を寢所に招き、水・尾・越三藩處分のことを議せしめ、その翌夜歿したといふ。こゝに「遺命」とあるのは、これらをさしてゐるのであらう。

【一身が危うからと云つてその職を去ることはむづかしうひやします】

先將軍家の遺命を奉ずる身、而も幼君の御筆になる至誠の二字の額を戴いてゐる身、さうしたのつびきならぬ辛い立場をそれとなく訴へると共に、その覺悟の一端を披瀝してゐる。

【至誠】 シセイ 純一で些かの虚偽・譎詐のない心。極めて眞實な心。

【生命】 原文には「イノチ」と振假名がついてゐる。

【萬】 ヨロヅ (副)ことごとく。總べて。萬事。

【沈思】 チンシ 思ひに沈むこと。深く考へこむこと。

【萬々】 パンバン (副) (一)十分に。全く。缺けるところなく。(二)とても。萬一にも。(三)非常に。甚だ。種々。こゝは(一)の意。

【篤と】 トクと よくよく。念を入れて。つくづく。

【隱居】 インキヨ 任を辭し、或は家を相續人に譲りなど

して閑散の身となること。又、その人。

【その方が却つて……】 唯一身の安固を計る爲でなく、その方が却つて幕府の爲にも、天下の爲にも……と言ひたかつたのである。そして直弼の一命を全うさせたかつたのである。

【一門】 イチモン (一)一族又は同姓の一族。宗族。(二)同じ宗門のもの。こゝは(一)

【諫言】 カンゲン 君父又は尊長をいさめること。又、その言葉。いさめ。

【枉げては自分でなくなりませす】 自分の意志を枉げること。はつまり人の意志を立てること、それは自分といふもの存在をなくすることになるといふのである。この一言に井伊大老の剛毅不屈の人となり躍如としてゐる。

【氣象】 キンヤウ こゝでは生まれついた心だて。もちまへの心。きだて。氣質。氣性。

【呑みこむ】 ノみこむ こゝでは心にさとる。納得する。合點する。

【供廻り】 トモマハリ ともづれ。公家又は武家の外出の際、召連れる従者。

徳川時代に於ては、慶長十二年七月の法度に百萬石以下二十萬以上は二十騎限り、二十萬以上はその相應たるべきことを規定せられ、次いで安永五年三月、江戸市内往來の時、多人數を召連れるのは妨害となるから、一萬石

以上は先供・駕籠脇とも十三四人限り、五萬石以上は同じく十七八人限り、十萬以上は同じく二十人限りたるべき旨が令せられた。

【警固】 ケイゴ 非常を警めて固めること。又その設備。【手ぬかり】 テぬかり 手續の不十分なこと。不注意なことで。おち。おちど。

【天命】 テンメイ 天帝の命令。神のさしづ。又、それによつて自然に定まる人の運命。天運。

【刺客】 シカク・セキカク(セツカクと發音) 人をだましうちにするもの。暗殺者。

【斃す】 タフス 殺し伏す。殺す。死なせる。

【生死禍福は一に皆天命によるものではございませんか。刺客が若し私を斃さうとしても、天命が来なければ斃すことは出来ずまいが、若しそれが果して天命なら如何に用心しても避けることはなりません。】

未曾有の難局に對處して煩悶苦惱の中に到達した直弼の宗教的悟入の深さが示されてゐる。「總べてが裁かれるのは、唯彌勒の出世を待たねばなりません。』(一四五頁二行)といひ、「殺した者は殺されるのが因果の道理」(一四六頁二行)と覺悟してゐた直弼である。「生死の淵を越えた禪僧の佛がある」(一四九頁八行)と信茂が評してゐるやうに、傑僧仙英と深く契つた彼には、實に深い宗教的な悟りがあつたのである。

その翌月歿した。享年七十五。遺命により遺骨を久能山(静岡市の東南)に葬り、三年二月東照大権現の勅號を賜ひ、三月正一位を贈られ、同時に日光山に改葬、正保三年更に東照宮の神號を賜はつた。

【臺命】 タイメイ (一)三公又は將軍等の命令。上意。(二)他人の申越しにいふ敬語。御來命。御尊命。(三)皇族の御命令。こゝは(一)

【黒船渡來一件】 クロフネトライイツケン 嘉永六年六月三日、アメリカ水師提督ペリーが軍艦四隻を率ゐて浦賀に至り、大統領の書を將軍に致さうとした事件をさす。「黒船」は徳川時代に、外國から來航した船艦の稱。多く船體を黒く塗つてゐたのでいふ。

【大綱】 タイカウ (一)おほづな。おほもと。大本。基本。(二)おほぐくり。大要。こゝは(一)

【危む】 アヤブむ 危からうと氣づかふ。危く思ふ。あぶながる。
【權威】 ケンキ (一)権力と威勢。いきほひ。(二)オーツリテイ(Authority)の譯語。一道の大家。こゝは(一)
【赫々】 カクカク (一)光りかがやくさま。(二)勢力・威光等のさかなさま。(三)勳功等の著しいさま。(四)早魃の劇しいさま。こゝは(二)

【不祥事】 フシヤウジ めでたくない事件。縁起の悪い事件。

【格式】 カクシキ (一)身分・儀式などに關する制定。(二)格(律・令・式)の、時によつて變更のあつたもの、又はその足りないのを補つたもの)と式(官職にあるもの勤務の制定)と。こゝは(一)の意。

【三百の大小名】 當時に於ける諸侯の概數。文化十年には二百五十五家、慶應元年には二百六十六家、明治二年には二百八十三家あつた。

【東照宮】 トウセウグウ 徳川家康をさす。三河岡崎城主松平廣忠の子。天文十一年生。初め今川氏に屬し、後織田氏に依り三河・遠江を領して濱松城に居り、姉川・三方ヶ原等の諸役に參じて早くから海道にその武名をせした。天正三年以來信長と共に武田勝頼と戦ひ、その滅亡後駿河を併せ、信長の歿後は駿河城にあつて駿・遠・甲・參・信の五國を統べた。十二年織田信雄を援けて秀吉と戦つたが、翌年和して上洛、次第に位階を重ねて、慶長元年には正二位内大臣に進み、所謂五大老の筆頭に推されて威望秀吉に亞いだ。これより先、天正十八年秀吉に従つて小田原に北條氏を攻め、役後關八州の地に封ぜられて江戸城に入り、秀吉歿後はおのづからその後繼者たる地位に坐し、關ヶ原役後、慶長八年征夷大將軍に任ぜられて江戸幕府の基を開いた。十年その職を子秀忠に譲り、大御所と稱せられて駿府にゐた。元和元年豊臣秀頼を大阪に滅し、二年(二二七六)三月太政大臣に任ぜられ

【天下】 テンカ こゝでは徳川時代に、將軍をさしていつた語。

【地に墮ちる】 チにオチる (一)地上に落ちる。(二)この世に生まれ出る。(三)全く廢れる。衰へすたれる。こゝは(三)

【礎は覆る】 イシズエはクツガへる
【礎】 は(一)土臺石。柱石。(二)物事の基礎。物事の根柢。こゝは(二)

【貴殿】 キデン 多く同輩又はそれ以上の人に用ひる對稱代名詞。

【假令】 タトヘ・タトヒ 「縦」縦令」などもかく。
【威福】 キフク (一)威壓と福德と。(二)時に威壓を加へたり、時に恩をさせたりして人を服従せしめること。こゝは(二)

【犬死】 イヌジ = 無益に死ぬこと。むだじに。徒死。
【今權威赫々たる幕府の大老たるお身が、萬一刺客の手にかゝられるやうな不祥事でも出来しましたら……却て敵方には己が威福をほしいまゝにした爲に、天罰が下つたのぢやと嘲られ、身方の爲には犬死同然と申すものではございませんか】

再び天下の大勢を説き來り、何とか大老をして命を全うさせる策に出でしめようと、百方情と理を盡くしての諫言で、信茂の赤心を割つての衷情が躍々として漲つた言

言句々である。

【誠心】 原文には「マゴコロ」と振假名がついてゐる。【胸にこたへます】 心にしみ／＼と感じます。心に徹して感じられます。

【こたへる】は(一)感ずる。應ずる。通ずる。感應する。(二)とほる。徹する。利く。こゝは(二)

【疎かに】 オロソかに なほざりに。粗略に。不注意に。【聞き流す】 キキナガす 聞いても心にとめない。聞きずてにする。聞いただけで別に氣にかけない。

【譏】 ソンリ そしること。悪しざまにいふこと。けなすこと。又、その言。

【中傷】 チュウシヤウ 「中」は「あてる」意で、人の過失をねらひあてて傷つける義。他人に無實の悪名を負はせて、その名譽を毀損すること。悪しざまにいつて人を陥れること。

【思ひ當る節】 オモヒアたるフシ 成程と思ひあはせられる點。

【思ひ當る】は思ひあはされる。思ひつく。考へつく。思ひよる。

【節】はこゝでは、かど。箇條。點。

【實は私も、夜半に人が寝静まつた頃、只獨りでつくづく自分の胸に問ひ胸に答へて見ますと、敵方の所謂己が威福をほしいままにするといふ譏も、みな中傷ばかりでもない

やうに思ひ當る節がございます】

信茂の赤心に動かされて、こゝに大老の至誠が現れて来た。今こそ大老はその心底を打ち割つて物語り始めたのである。自分の我執と他人の我執を同じものに觀じ、我執の争鬭を眞理探究にあがく人間の眞實の姿と見る時既にその我執は我執ではないであらう。

【強ち】 アナガち 強ひて。無理に。おして。むやみに。

【我執】 ガシフ 梵語 Atma-graha の譯語。(一)衆生の體がもと五蘊の假和合であることを知らずに、常一主宰の實我ありと執著すること。人執。生執。(二)轉じて、自己の見解に執著すること。我意を張ること。こゝは(一)

【衝ち合つて】 原文に「カチアつて」と振假名が附してある。互につきあつたつて。衝突して。

【達觀】 タツクワン 一部にかたよらずに全體をみわたすこと。わだかまりのない心で觀察すること。全體を見通すこと。大觀。

【苟も】 イヤシクも かりそめにも。かりにも。

【娑婆世界の濁つた壺】 シヤバセカイのニゴつたツボ 汚れた、不自由なこの世の中。煩惱に繫縛された人間世界の窮屈さを壺に譬へていつた。

【娑婆】は梵語 Saha の音譯。「堪忍」「忍」「忍土」等と譯し、諸苦を忍受する意。また、「雜會」「雜惡」等と譯

されてゐる場合があるが、これは梵語 Saṅgha の音譯であらうといふ。何れにしても、尊所化の土たるこの世界をいふ。

【瑠璃光の空】 ルリクワウのソラ 瑠璃の光の照らしてゐるやうな、さわやかで自由な世界。煩惱を超越した世界の廣やかさを空に譬へていつた。

【瑠璃光】は薬師瑠璃光如來の淨瑠璃淨土などから思ひついた言葉であらう。

【もがきあがく】 もがいたりあがいたりする。

【もがく】は(一)苦しみ悶えて手足を動かす。あがく。のたうつ。(二)いらだつ。じれる。焦燥する。こゝは

(一)の意。「あがく」は(一)馬等が前足で地を掻くやうにして歩む。(二)手足を劇しく動かす。もがく。(三)あくせくする。(四)わるさをする。(小兒などにいふ)こゝは(一)

【啊呷の息吹】 アウンのイブキ 吐く息と吸ふ息。出入の息。いきあひ。呼吸。

【啊呷】は「啊呷」とも書く。梵語 Ahm の音譯。「啊」は梵字字母の初韻で開口の音、「呷」はその終韻で閉口の音。眞言宗ではこの二字を以て一切の言語・聲音の元初歸著とし、更にこの二字に宇宙の根本原理を認め、萬有の始終を表すものとし、又阿字を大日如來に、呷字を金剛薩埵に、阿字を平等に、呷字を差別に、阿字を菩提心

に、呷字を槃涅に配する。又、出息・入息の義に解し、これを衆生本具の自證と化他とに配する。覺阿抄卷下にも「眞言の數息は阿呷是なり、出息は阿、入息は呷」とある。

【息吹】は(一)息を吹くこと。呼吸。(二)風。

【呪はしい】 ノロはしい 呪ひたいさまである。忌はしい。

【清淨】 シヤウジヤウ (一)きよらかで、けがれないこと。(二)佛教で、惡行の過失を離れ、煩惱の垢染を離れること。こゝは(一)

【無垢】 ムク (一)まじりけのないこと。純粹。(二)けがれないこと。きよこと。(三)佛教で、煩惱を離れて眞淨の境界に住すること。清淨で垢染のないこと。(四)表著から下著まで、表裏全部無地の同じ色で仕立てた衣服。主として、白無垢をいふ。こゝは(一)

【蓮華】 レンゲ 睡蓮科、はす屬の多年生草本。印度地方の原産。池沼・水田等に栽培され、地下莖は肥大して長く、明瞭な節を具へ、葉はその節から生じ、圓く楕状で長い葉柄を以て高く水上に抽出する。葉色はやゝ白味を帯びた綠色。夏天花梗を抜き大形の白若しくは淡紅の美

花を開く。地下莖の肥大部を蓮根と稱し、種子と共に食用に供する。異名―はす・はちす。

【常住】 ジャウヂユウ (一)佛語。生滅・變化なく常に存すること。(二)常に住むこと。(三)つね。ふだん。こゝは(一)

【不斷】 フダン (一)絶え間のないこと。絶え間なく相續すること。(二)平生。日常。つね々。こゝは(一)

【常住の善もなく、不斷の悪もなく】 絶對の善も絶對の悪もなく。

【彌勒の出世】 ミロクノシユツセ 彌勒菩薩がこの世に出現して一切衆生を化度する時。

【彌勒】は梵語 *Maitreya* の音譯。「慈氏」と譯す。南天竺の波羅門の家に生まれ、釋迦以來の佛位を繼ぐべき補處の菩薩となり、佛に先立つて入滅し、兜率天の内院に生じ、彼の四千歳、即ち人界の五千六億七千萬歳を経て人間に下生、華林園の龍樹下に於て成佛し、衆生を濟度するといはれる。これは釋迦入滅後の衆生救済の要求に應じて生じた思想であるが、現實に救済者を求める切なる情は遂に彌勒の出世を待たず、直ちにその現在の居所に至らうとして兜率上生の思想を生じた。彌勒の信仰は印度に於ても往生淨土の信仰と併行して行はれたが、遂にこれに凌駕せられるに至つた。我が國に於ける彌勒の信仰は奈良平安の二朝に盛であつたが、鎌倉時代に至り

新興佛教が隆盛になるに及んで衰へた。

【出生】は佛語。如來の世に出現すること。

【總べてが裁かれるのは、唯彌勒の出世を待たねばなりません】

危難を旦夕に豫期しながら、而も靜かに澄んだ大老の心境である。明日に生きんとする宗教的な達觀によつて到達せられた深い心境もさることながら、人間としての大老の氣宇の大ききなども自ら想到される所である。

【法談めく】 ホフダンめく 法談らしく。

【法談】は佛語。説法談義の意。佛法の要義を説ききかせること。法義に關する談話。説教。

【めく】は名詞に添へてその體に見えるさまを表す。

【薪盡きて火は滅する】 法華經の序品に「佛此夜滅度、如薪盡火滅」とあり、もと釋迦の入滅をいふ。轉じて、機縁が盡きて現象の滅するのをいふ。こゝでは、自分のなすべき事はもう終つたから當然死んでもいい、といふ程の意に用ひた。

【鬱憤】 ウツブン 積りこもつたいきどほり。おさへにおさへたらみ。晴れないうらみ。

【薪盡きて火は滅する】 幕府への御奉公も、もう仕納めの時節が到来したかと思ひますから、この上は、私が刺客の手に加ゝるのが寧ろ本望で、それで他人の我執が通り、今まで鬱憤に鬱憤を重ねた水戸の君臣等の幕府に對する怨も

解はませうから、却つて天下の爲かと思ひます】

今は既に他の我執を通させようとしてゐる。それによつて明日の平和と光明とを希求してゐるのである。端的に言へば、その敵に我が生命を與へようとしてゐるのである。此處に於ては既に死が生なのではなからうか。

【因果の道理】 イングワのダウリ 自然人事の一切は皆因果の理によつて生成變化するものであるといふ佛教の教理。

【因果】はこゝでは、梵語 *Hetu-phala* の譯語。世の一切の現象には必ずこれを惹起させるものがある。これを「因」といひ、因によつて惹起せられたと考へられたものを「果」といふ。佛教では、善因善果・惡因惡果・因果應報等の義を三世に通じて説いてゐる。

【あの大獄】 安政の大獄をさす。安政五年井伊直弼が、水戸への密勅降下事件を動機として、條約調印・家茂迎立に反對した公卿・大名を罰し、多數の志士を投獄・處刑した事件。戊午の大獄ともいふ。

【大獄】(タイゴク)は、重大な犯罪事件で、大勢の者が捕へられること。

【獄】は(一)ひとや。らうや。罪人をいれて置く所。

(二)うつたへ。訴訟事件。こゝは(二)の意。

【定めて】 原文には「キめて」と振假名が附してある。

【斬つたものは斬られ、殺した者は殺されるのが因果の道

理で、私はあの大獄を起す時、始からその覺悟を定めてかかりました】

因果應報の天地の大法に徹しながら、而も歴史的情勢の打開の爲に敢て我執を遂げねばならなかつた大老の苦衷である。

【封建世襲の制度】 ホウケンセシフのセイド

最大の土地の所有者が君主となり、その領土を幾多の諸侯に分與し、諸侯は更にこれを群臣に分與して世襲せしめ、緊密な主従關係を結んで政治を行つた制度。我が國では鎌倉時代から明治維新に至るまで、歐洲では十一世紀から十五世紀までこの制度であつた。

【封建】は封土を分つて諸侯を立てる義。(一)天皇公領以外の地を諸侯に分けて私領させること。(二)豪族が中央政府から半ば獨立して地方で土地人民を私領したことを。「世襲」は爵位・財産・業務等、その家に屬する總べてのものを、その家の戸主たるもの子々孫々承継すること。

【瓦解】 グワカイ (一)屋根瓦の一部が墜落するとその餘勢を受けて全部が墜落するやうに、一端が崩れ始めて全體が崩れること。そうくづれ。(二)特に、徳川幕府が覆滅して、旗本・家人の離散したこと。こゝは(一)

【警鐘】 ケイショウ (一)火災などの非常を警戒する信號に鳴らす鐘。又その聲。はやがね。(二)電車・汽車又は踏切等に装置して、危険を警戒する爲に鳴らす鐘。(三)

轉じて非常をいましめる鐘。危険を警戒する爲に鳴らす鐘。こゝは(二)

【去年の暮】キヨネンのクレ 安政六年(二五一九)十月十七日をさす。

【御本丸】ゴホンマル こゝでは、江戸城本丸をさす。

【本丸】は我が國昔時の城郭の一部で、最も主要な箇所。(附隨部に二丸・三丸・東丸・西丸・北丸等がある。)普通中央に天守閣を築き、城主の居處、主要な役所、倉庫等を置き、外には壘を設け濠を廻らしたるもの。本城。牙城。内閣。

【去年の暮に御本丸の焼け落ちた】

文政六年江戸城に火災があつて本丸がやけおちたのをいふ。

【再び同胞の血を見てはなりませぬ】

ふたゝび安政の大獄の如きを起して同國民を斬刑に處するやうな事をしたくないといふ意。

【これも時勢ぢやが、去年の暮に御本丸の焼け落ちたのを見た掃部頭は、この黒い眼でもう一度幕府の瓦解まで見度くは思ひませぬ。……又二度と再び同胞の血を見てはなりませぬ】

慧眼達識の直弼には幕府の行末もはつきりと見えてゐたのであらう。彼の努力を以てしても、遂に狂瀾を既倒にかへすことの不可能を察して、今一切の責を負うて、幕

と。晚懇。入魂。

【ふつ〜】ぶつとり。きつぱり。斷然。

【生死の海を一足飛に飛び越さうと】一思ひにこの世の生活を離れてしまはうと。こゝでは死ぬことを意味してゐる。

【生死】(シヤウジ)佛語。梵語 Samsara の譯語。衆生がその造る所の業因によつて肉體を受け、三界に生死輪廻すること。(涅槃の對)

【生死の海】は生死の邊際なきことを大海に譬へたもの。迷の世界。止觀一に「動法性山入生死海」とある。

【傍】原文には「ソバ」と振假名がついてゐる。

【手をあける】しかけた仕事をせずにあける。何もせずにあける。施すすべもない。

【何を申しましたも、一旦斯うとお定め遊ばした事は枉げること弛めることもふつ〜お嫌ひなあの御氣象で、生死の海を一足飛に飛び越さうとなさつてをりますので、傍からは唯、手をあけてはらはらするばかりでございます】

その直臣が觀る直弼觀である。現れた所からみれば、その「御氣象」とも見えよう。併し、直弼が「生死の海を一足飛に飛び越さう」としてゐるのは、決して彼の氣象からだけの事ではない。もつと大きい、もつと深い立場からそれは來てゐるのであることが思はれねばならぬ。

府の運命に殉じようとしてゐるのである。同胞の血を流すかはりに、自分自身の血を流さうといふのである。

【睜つて】ミハつて

【不吉】フキツ「不祥」に同じ。

【夢物語】ユメモノガタリ「夢語」ともいふ。(一)夢に見たことを覚えてから後に物語ること。又、その物語。

(二)夢のやうな物語。はかない物語。こゝは(二)の意。

【他言】タゴン 他人に語ることに。他に告げること。たげん。

【さうでございませうとも】勿論さうでございませう。

【とも】は動詞・形容詞の終止形について、いふまでもない、勿論、等の意を表す助詞。

【御免】ゴメン こゝでは、訪問又は辭去する時等の挨拶の言葉。御許し下さい。失禮します。

【ま】こゝでは、制止の意を表す。まづ。しばらく。まあ

【振り切る】フリキル 捉へられたのを強ひて放す。強くふり放す。ふりはらふ。

【且夕に迫つてゐる】今夕か明日かといふほどに時機が切迫してゐる。

【且夕】(タンセキ)は(一)朝と晩と。朝夕。あけくれ。

(二)ふだん。つね〜。始終。(三)極めて短い間。こゝ

は(三)

【もの優しい】ものやさしい どころなくやさしい。何となく柔和である。

【泰山】タイザン (一)支那山東省泰安の北方にある名山。東嶽とも稱せられ、衡山(南嶽)・華山(西嶽)・恒山(北嶽)・嵩山(中嶽)と共に、所謂五嶽の一。古來、天子巡狩の際、諸侯をこゝに會し、又屢々封禪を行つた。

(二)轉じて高く大きな山。こゝは(二)の意。

【膽の据つた】タンのスワつた 膽力のある。腹の出來てゐる。物事に恐れたり、驚きあわてたりすることがない。

【膽】は、きも。きもだましひ。きもだま。心。氣。

【嘉例】カレイ めでたい先例。吉例。

【ふむ】(一)相手の語を了解した意を表す語。又、承諾の意を表す語。さやう。然り。(二)人の話などを嘲笑して眞面目にきゝれない時に發する語。鼻であしらふ時に發する語。こゝは(一)

【果斷】クワダン 決斷力がすぐれ實行力の強いこと。思ひきつて事を行ふこと。

【右から―左から】一方から―他方から。一面から―他面から。

【標本】原文には「テホン」と振假名が附けてある。

【悟入】ゴニフ 眞理を悟り、これと一體になること。

【生死の淵を越えた】シヤジのフチをこえた 迷の世界を

離れた。生死を出離した。こゝでは悟ることを意味してゐる。

「生死の淵」は生死は人を沈没せしめる故に深淵に譬へたもの。「生死の海」といふに同じ。増一阿含經六に「渡流成無漏。以渡生死淵」とある。迷の世界。

【禪僧】ゼンソウ 禪宗の僧。禪を修める僧。

【禪】は梵語「禪那」(Dhyana)の略。「思惟修」「靜慮」等と譯す。一切の妄念雜慮を止め、言語文字を離れて、直ちに自己の正體そのものを徹見し把握することを目的とする。

【佛】オモカゲ 「面影」とも書く。(一)かほつき。かほかたち。おもさし。(二)さながら眼前にあるやうに、髻髻と目さきに見える姿。物の姿のあり／＼と見えること。(三)様子。姿。かたち。こゝは(三)

【右から見れば何者も恐れぬ勇武果斷の三河武士の標本で、左から見ると一切に悟入して生死の淵を越えた禪僧の佛がある。斯ういふお人には、信茂、生涯にもう二度とは逢へまい】

赤心を打割つて最後の忠言を敢てして、直弼の眞實にふれ得た信茂は、大老の深さと大きさに、今更感歎の思を新にしてゐるのである。深く清く澄み徹つた大老の心境の前に立つて、その悲壯な決意を語られた時、信茂は心から感歎哀惜せざるを得なかつたのであらう。

【その方】そのハウ 下輩に用ひる對稱代名詞。

【長野主膳】ナガノシユゼン 井伊家の家臣。名は義言。

初稱は主馬。桃の舎と號した。伊勢の人と傳へられるがその出生は審でない。本居派の國學に通じ、又和歌を善くした。偶々近江に流寓して當時未だ部屋住の公子であつた井伊直弼と識り、その國學・和歌の師として、遂に水魚の交を結ぶに至つた。直弼の家を嗣ぐに及び、家臣に擢用せられ、安政元年直弼が京都守護の命を受けるに及び、その内命を帯びて上京、國學・和歌の縁を以て公卿摺紳に近づき、深く關白九條尙忠の家臣島田左近と相許して、關白家に出入、井伊家の使命たる公武斡旋の事に携つたが、將軍繼嗣問題の紛糾と共に、直弼の腹心として政治的活動に入り、直弼執政後は江戸の宇津木六之丞と相應じて京地の動靜、公家の向背、一橋派の策動を探ると共に、進んでこれが對策を直弼に献じ殆どその帷幕の謀臣たる觀があつた。かくて直弼の勢力一世を風靡するや、京地に於ける主膳の威勢も亦所司代(酒井忠義)を壓するものがあり、老中間部詮勝すらもその掣肘を免れ得ず、安政の大獄の機察の如きは一に主膳の方寸より出たといはれる。萬延元年櫻田の變によつて井伊黨の勢漸く振はず、文久二年(二五二二)島田左近も亦兎及に斃れるに及び、遁れて彦根に歸り、幼主直憲を奉じて猶威權があつたが、まもなく形勢頓に變じて幕議直弼の追嗣

を計るに至り、藩臣も亦主膳の權謀を惡み、遂に同年八月禁錮に處せられ、次いで斬に處せられた。享年四十八。

【古今集姿鏡】「淡路舊蹟考」市邊忍齋別命山陵考】

その他、國學・國史・和歌に關する著書が頗る多い。

【大老のお手前】大老のお手前の茶の意。

直弼は若い時から茶道を修め、その精髓は佛法にあると

2 文の構成

第一節 初—一三八頁五行 宵節供に招かれた松平信茂が、井伊大老へ内談の筋があつて奥へ通ること。

第二節 一三八頁六行—一四七頁五行 松平信茂の忠言と井伊大老の心境。

第三節 一四七頁六行—終 井伊大老の人物に對する松平信茂の述懐。

3 文意

櫻田門事變の起つた前夜、折しも宵節供の茶の湯の宴に招かれた松平信茂は、井伊大老の身にさし迫つた危険を憂へ、時代の形勢を説き、情理を盡くし、赤心を打割つて忠言を申し入れる。その誠意に動かされた井伊大老もまた至誠をもつてこれに答へ、難局に對處する爲政者の苦衷を訴へ、悲壯な覺悟を物語り、生死を超脱した清しい心境を吐露して聞かせる。最後の忠言を敢てした松平信茂は、今更井伊大老の深さと大きさに觸れて、敬慕と感歎の情を新にし、沁々と述懐を漏すのであつた。

4 鑑賞批評

かの安政の大獄を敢て斷行して、世の怨嗟憤懣を一身に浴び、遂に櫻田門外に非業の死を遂げた井伊大老は、實は他面深い宗教的な悟りに徹して廣く澄んだ心境に立つた人であつた。勿論剛毅不屈の意志の人ではあつたが、冷酷驕恣を以て譏

して世間茶を排し、精神本位一派を樹てた。「井伊大老茶道談」の外茶道に關する著書もある。

【手前】(テマへ)はこゝでは、茶の湯に於ける點茶・炭つき等の所作をいふ。

【一服】イツブク 茶・煙草・藥などを一回のむこと。

られるその行動は、結局未曾有の政治的・社会的變革を劃した異常な時代に處する政治家として、止むに止まれぬものだったのである。憂國の至誠に立つて同胞の血を流すことすら敢て忍んだ政治家井伊大老の悲壯な苦衷と、生死を超越した深い心境とが、作者の無限の同情と敬意とを通して遺憾なく表現せられ、井伊大老その人の性格が浮彫の如く刻印せられてゐると共に、その背景をなす物情騒然たる時勢の相も暗示されて、史劇の特質を十分に發揮してゐる。五幕十場の大作の中から唯一場を抄録したのに過ぎないのであるが、併しこれを獨立した一幕物と見ても、十分勝れた作品と見得るのであつて、殊に井伊大老その人としては、その最奥の心境を披瀝してゐる場面であるだけに、これはまた原作の核心に迫るものがある。

三 備 考

1 指導研究

(一) 指導に入るに先だつて、豫め原作を研究して置くことは、指導者自身にとつて缺くべからぬ用意であると共に、原作の筋と構成の概要を補説して置くことは、生徒をして、本課一場の位置とその意義とを理解せしめる上に於て緊要なことではないかと思ふ。

(二) 實際の取扱ひに當つては、これを獨立した一幕として學習せしめることが忘れられてはならない。成程本課は第五幕中の一場の抄録ではあるが、一應原作中の位置と意義とが明かにされた後は、それを離れて何處までも獨立した一教材として取扱はれねばならないのである。そしてそれは、生徒の井伊大老をめぐる歴史的知識の整理によつて決して不能ではないのである。

(三) 一方は生死を超越した悲壯な覺悟をもつてその所信を貫徹せんとする井伊大老であり、他方それを思ひ止まらせ

ようとする松平信茂の赤心を打割つての諫言である。至誠と至誠の對立であり、眞剣な魂の問答である。その爲に曲中何でもない一語一句に重要な結論への伏線的な意義があり、又間接的な話材が、實は中核に觸れる本來的な役割を持つてゐたりするのである。反復精讀して、戯曲的表現と、その表現機構を會得せしめて行くやう工夫が望ましい。

(四) 斯くして筋を筋として理解させて行くことは勿論、その一問一答の間に展開せられて来る變革期に於ける政治家としての井伊大老の苦衷や、その深く澄んだ心境を味到體感せしめ、更にその背景をなす時勢の相と、時代的情勢の中に没して行く人間の運命などにまで考察を深めて行くやうにする。そこに始めて完全な解釋が成立するのである。

2 参 考

(一) 挿繪 井伊直弼肖像

島田三郎全集第三卷(開國始末)所載の口繪を複寫した。本課に記すが如く狩野永岳の筆で、現在滋賀縣彦根町清涼寺所藏のものである。圖中の冠服は四位中将の正装で、本圖にはあらはれてゐないが、上に自詠自筆の和歌「あふみの海磯うつ浪のいく度も御世にこころをくたきぬるかな」といふ讚がある。

(二) 原作五幕十場の梗概を左に摘記する。

〔序幕〕(押掛登城) 安政五年六月二十四日、江戸城内の大廣間。

攘夷派の頭目である水戸齊昭・慶篤父子・尾張慶勝等が、條約調印問題と將軍繼嗣問題とに關する大老井伊直弼の處置に憤慨し、突然登場し來つて違勅の罪を鳴らし、開國政策の撤回を迫る。直弼は世界の大事を論じ、情勢の逼迫を説き、責を一身に負うて調印したと衷情を披瀝し、一同はその識見と論斷とによつて退出せしめられる。時あたかも病床にあつた十三代將軍家定の急變が告げられる。

〔第二幕〕(井伊邸居室)

一九 井伊大老

井伊大老の正室昌子・側室靜子等が主人の近況を氣遣つてゐるところへ直弼が歸邸する。近江清涼寺の仙英禪師が訪ねて来て、直弼の顔に劍難の相が出てゐると注意し、茶など酌んで歸る。朝廷に對する通商條約無斷調印の分疏、京都に於ける反幕離謀派の彈壓等の使命を帯びて京都に上る間部下總守が訪ねて来て、宇津木六之丞を交へて時勢を論じてゐるところへ、姉小路局が和宮降嫁の報を齎して来る。時に刺客が庭前を窺つて追ひ拂はれる。直弼は庭前に出て箒星を仰ぎ、「天の顔にはあの箒星が現れてゐる、私の顔には劍難の相が現れてゐる、何方が先へ倒れるのか？ 天と地との戦のやうなものぢやなう」と淋しく笑ふ。

〔第三幕 第一場〕（京囚江戸送）

品川の宿外れの街道。京都で捕はれて江戸に護送されて来る頼三樹三郎・梅田源次郎（雲濱）・吉田寅次郎（松陰）等を品川の宿外れで奪取しようとして、覆面の浪士が五六人待伏せてゐる。そこへ水戸の浪士金子孫次郎が駆けつけて、大事の前の小事を警め、漸く説き伏せて松竝木に身をしのばせる。間もなく京囚の唐丸籠が来る。三樹三郎が、最早江戸も間近くなつたから梅田や吉田に訣別の杯がしたいと頼んで役人に拒まれ、「今日江戸へ送られて行く天下の志士の、一人々々の首が飛んだら、その一々の疵口から血の洪水が全國に溢れ出すと思へ」と憤慨し、辭世の詩を高吟しながら昇がれてゆく。浪士達が松竝木から出て来て、仇はきつととると涙を拭いて遂に禮拜する。

〔第三幕 第二場〕（井伊家書院）

水戸家御處分の申渡しの使者を仰せつけられた松平信茂が直弼と會談して立去つた後、京都に在つて種々畫策に當つた長野主膳が歸つて来て、お互の無事を喜ぶ。そこへ町奉行石谷因幡守・寺社奉行板倉周防守等が、所謂安政の大獄の吟味書齋を持つて来る。直弼はその處斷の寛大にあきたらず、「井伊も唯、無役の身なら、慈悲善根を植ゑたい心は人一倍ぢやが、天下の大老として、政道の責を一身に擔うてゐる以上は、一步も假借する事は出来ぬ」といつて自ら朱筆をとつて極刑を課する。役人達が歸つた後、正室昌子・側室靜子等が、直弼に對して一味の徒黨に慈悲を加へる手段を迫るが、退けられて去る。直弼は主膳を相手に、今迄は、幕府への忠義は即ち天朝への忠義であるとはかり思つて来たが、天朝の爲と思つてしたことが却つて幕府の礎を腐らせる、「私にはくづれか、

つた封建世襲の制度を、一氣に突くづさうとかゝつてゐる天下の浪人輩の氣持がよく分る」と述懐し、「彼等は勝つ、我々は負ける、これも底から動いて来る時の運ぢや、……世の成行ぢや」と歎息する。

〔第三幕 第三場〕（お靜の方部屋）

側室靜子は更に手段を設けて直弼の處斷を翻さうとするが、自ら作つた生地獄の趣向で却つて自分が劇しい強迫感に襲はれる。折しも江戸城が出火して火焰が天を染める。驟然たる不安の中に直弼は愛闈の表情で空を見上げる。

〔第四幕 第一場〕（品川被樓） 安政七年が萬延と改つた年の三月二日の夕。

水戸の浪士、齋藤監物・金子孫次郎・關鐵之介・佐野竹之介・薩摩の浪士有村次左衛門等が直弼暗殺の謀議に耽る。

〔第四幕 第二場〕（井伊邸宵節句） 前場と同日同夜。

直弼は東帯姿で雜壇の前に伏して朝廷に對する苦衷を述べ、終つて自身の繪像に一首の歌を認め、今は切髮姿に身をかへた靜子に持たせて、彦根の菩提寺に收めさせる。（以下本文。但し、直弼が主膳と共に狂言「鬼が島」を舞つた後「竹生島」の謡が始つたが、直弼の打つてゐた鼓が破れて一座が不吉な豫感に襲はれる、その景氣直しに「鉢の木」を謡ひ始める、といふ後半が省略せられてゐる。）

〔第五幕 第一場〕（井伊邸玄關先） 萬延元年三月三日の朝。

小人頭の指圖で二三人の仲間が雪をかきのけゐるところへ、直弼へ直訴の封書が投げこまれてゆく。間もなく、上巳の節句の登城に、熨斗目の袴に威儀を正した直弼が、家族に見送られて邸を出る。外は季節外れの吹雪が風に巴と舞つてゐる。不吉な豫感。

〔第五幕 第二場〕（櫻田門外）

葎簀張の小さい屋臺店に、兩合羽姿の水戸浪士の一組が烟酒を飲んでゐる。直弼の行列が来る。亂闘が展開される。瞬く間に雪は血潮に染み、直弼の駕籠も襲はれる。遂に首級をあげた浪士達はちり／＼に落ちて行く。雪は又しきりに降つて来る。

〔第五幕 第三場〕（再、井伊邸玄關先）

直弼の部屋に封を切られたまゝ、残つてゐた最後の投込封書が、昨夜水戸の浪士らしい者が品川の妓樓に密議をこらしてゐたといふ大事を訴へたものである事を知つて、極度の不安に驅られてゐる所へ、不時の兇變が報ぜられて邸内が騒然となる。やがて首のない直弼の死體が昇ぎこまれ、殉死した家來達の死體がかつきこまれる。憤激した留守居の諸士が、小石川の水戸邸に斬りこまうとしたが、長野や宇津木等に宥められ、涙を拭つて直弼の首級を探ねにゆく。老中安藤對馬守が慰問使として訪れる。風呂敷包みの首級が戻つて来て奥に消える。對馬守が出て来て「すべて今日の爲に、今日の事を行ふものは一時、世俗から喜ばれもせうが、明日のため今日の事を慮るものは、兎角憎まれたり、譏られたり、果ては殺されましてもしませう。併し、愈々その明日が来て見たら、今日の事が眞實に分つて来るものである」と述懐する。雪が晴れて太陽が輝く。對馬守は青空を仰いで「やがて迷妄の雲も晴れ上つて掃部頭殿が天下の行末、國家の前途を慮つて、生命がけで盡された尊い赤心が、あの太日輪と共に永く我が國民の頭上を照らされる前兆であらうな」といふと、長野も「あの太日輪の中に、我が主君の御満足さうな御顔が幻のやうに拜まれます。魂は天に歸つてそこから永へに地上に遍照し給ふ我が主君は、何時迄も生きてお在でなされませぬ、刀で斬られた位で決して死にはなされませぬ」と合掌する。一同皆、空に洵かつて合掌、沈黙のうちに暮。

二〇 天地の初の時

橘 曙 覽

一 解 題

1 作者

橘 曙覽 タチバナアケミ 徳川時代末期の歌人。幼名は五三郎、名は尙事。舎號を藁舎と稱した。文化九年五月越前國福井石場町の紙商の家に長男として生まれた。二歳の時母を、十五歳の時父を喪ひ、世の無常を感じて僧たらんと志し、同國南條郡大道村の日蓮宗の巨刹妙泰寺の住職明導に従つて學んだ。然るに和漢の學に通じ詩歌をよくする師明導の感化により文學に走り、窃に京に赴いて頼山陽の高弟兄玉士敬の塾に入つたが、間もなく親戚のために呼び戻され、三國港の富商酒井氏の女直子を娶つた。その後國學に心をよせ、契沖・春滿・眞淵・宣長等の學風を慕ひ、天保一〇年(二十八歳)江戸に遊學し、殊に宣長を景慕して、弘化元年飛驒に赴き、宣長の門人田中大秀の門に入り、古學を學び、萬葉集の研究に没頭した。同三年(三十五歳)家業家財を異母弟に譲つて足羽山に隱棲、ついで嘉永元年福井西郊の三橋町に移り、家を藁舎と號し、子弟に古學を講じ、尊王の精神を鼓吹し、王政復古を唱道し、また歌を以て士氣を鼓舞し、藩主松平春嶽の顧る所となつた。安政元年(四十三歳)藁舎が類焼の厄にあひ、彼自身また頻死の重患をわづらひ、新生の意を寓し、橘の縁をとつて「曙覽」(赤實の意)と改めた。同五年藩主松平春嶽の命によつて萬葉集中慷慨氣節ある歌三十六首を選び、爾後屢々爲に古典を講じ道を説いて勤王の精神を鼓吹し、その尊信を受けた。晩年美濃・尾張等を巡遊して伊勢の神宮に詣で、また本居翁の墓を弔つた。明治元年會津征伐の際に逡巡する藩士を鼓舞激勵したことは有名な話である。同年八月

十八日歿。享年五十七。

人となり邊幅を飾らず、蓬髮垢面、敝衣を着し破屋に坐し屢々食を缺くも意とせず、専心學に勵んだといふ。その思想は眞淵・宣長等の古學の精神を繼承したが、歌道に於ては眞淵の始めた萬葉振りに終始した。併しそれは單なる萬葉集の模倣ではなく、古典の精神に新しい時代的意義を加味し、作品の上に具現したものであつた。彼は博覽強記で諸子百家をはじめ稗史小説にまで通じてゐたが、生涯を一貫して精進したのは和歌であり、その最も希求したのは王政復古であつた。著書には「志濃夫廼舍歌集」「葦屋詠草」「葦屋文集」「古今集垣間見」「古風文集」及び、紀行「柳の薫」等があり、今すべて「橘曙覽全集」に收められてゐる。

尙はやく曙覽の歌に着目してこれを世に紹介したのは正岡子規であつて、子規は曙覽を激賞して次のやうに言つてゐる。

「曙覽の志濃夫廼舍歌集を見て始めて其の尋常の歌集に非ざるを知る。その歌古今、新古今の陳套に墮ちず、眞淵・景樹の窠臼に陥らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて縱橫するところ、却て高雅蒼老些の俗氣を帯びず。殊にその題目が風月の虚飾を貴ばずして、直ちに自己の胸臆を據く者、以て識見高邁、凡俗に超越する所あるを見るに足る。」

2 出典

「志濃夫廼舍歌集」から採つた。本歌集は明治十一年の出版にかゝり、自筆の草稿をそのまま版刻した木版四冊本で、曙覽の筆跡の窺へる興味深いものである。松籟艸・櫻樾艸・春日艸・君來艸・白蛇艸・福壽艸の六卷に分れ、松平春嶽の「曙覽の家」にいたる詞」を巻頭に置き、近藤芳樹が序文を書いてゐる。其の後橘曙覽全集（富山房發行）日本歌學全書等に翻刻流布されてゐる。

本課の歌は、「正月ついたちの日古事記をとりて」を卷の三「春明艸」から、「赤心報國」を卷の四「君來艸」から、以下

を卷六「福壽艸」から摘録したものである。

3 主眼及び採擇の趣旨

前課に於ては、政治的社會的變動期に處した大政治家井伊大老の立場と心境と運命とに就いて學んだ。本課には彼と殆ど同じ時代的背景の中にあつて、その時代の推進に側面的間接的な力を致した橘曙覽の和歌を抄出した。形式的には戯曲から和歌へ一轉換してゐるが、その立場と行き方とを異にしつゝ、しかも憂國の至誠に貫かれた精神の上に關聯を求めたのである。

歌はすべて赤心報國の精神を高揚したものであり、和歌を以て尊王思想の鼓吹に努めた勤王歌人曙覽の一面に接することの出来るものである。國民的教材たると同時に、萬葉振りの堂々たる格調を持つこれら歌を通して、短歌鑑賞の習練に資すべき文藝的教材として採擇した。

二 解釋

1 語釋

【正月ついたち】 正月一日。一月元日。

「ついたち」は、「月立」の音便。漢字「朔」に當る。釋名・釋天に「朔、蘇也。月死復蘇生也。」とあり、太陰曆に於て月の第一日をいふ。

【古事記】 コジキ 我が國開闢の初から推古天皇の御代に至るまでの事を記した最古の史書。その編纂は天武天皇の御企圖に由來するものであつて、天皇は開闢以來年序

を歴ること久しく世々代々傳誦され來つた神話傳説史實等が散佚混亂するのを憂へられ、舍人稗田阿禮に勅して「帝皇日繼及先代舊辭」を誦習せしめた。然し未だ何等文字に記録せられるには至らなかつた。その後凡そ三十年を降つて、元明天皇の和銅四年、大安萬呂が勅を奉じ稗田阿禮の傳誦する所に基づいて撰述し、翌五年に至つて完成した。上・中・下の三卷から成り、上卷は天地初發から鵜葺草葺不合命まで、中卷は神武天皇から應神天皇

まで、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの記事である。三巻中、記事の詳細なのは上・中の二巻で、下巻がよほど簡略であることは、古神話傳説の錯誤佚亡を憂へられ本書の編纂を企て給うた天武・元明兩天皇の御意圖の程が拜察せられるのである。文字は、音讀訓讀を交へた國

文で、當時に誦せられてゐた幾多の神話傳説中から最も正傳と思はれるものを取り、整然たる體系を具へた古代史をなしてをり、單に國家の成立・古代文化等を知り得るのみならず、建國の大精神を顯揚したものととして、實に我が神國の聖典とも言ふべきものである。

春にあけてまづ見る書も天地の初の時とよみいづるかな

卷の三「春明艸」の卷頭に收められた一首で、曙覽の代表的作品の一として、人口に膾炙せられてゐる歌である。

〔春〕 ハル 陰曆に於て一年を二十四氣に分ち、立春の時は正月の節に當るので、古く正月を「春」「新春」等といつた。こゝは詞書にある「正月ついたち」を言つてゐる。

〔天地の初の時〕 アメツチのハジメのトキ 天地開闢の時。古事記卷頭に「天地初發之時、於高天原成神名云云」とあるをそのまま取つたのである。

一首の意は「天地新しく甦り正月元旦を迎へて、氣も心も爽やかに聖壽萬歳をことほぎ奉る時、先づ緝く古事記も『天地の初の時』と讀みいづることばは畏く尊いことである。』といふのである。

曙覽は毎年正月元旦には、麻上下を著用し、まづ京都の方に向つて恭しく皇居を遙拜し、終つて机に向つて端坐し、古事記を誦讀したといふ。古學に傾倒する曙覽にとつては、古事記こそ誠に神國の無上の聖典だつたのである。元旦を迎へた敬虔な感情と、この神聖な古典とは自ら結びついて、それを誦讀する曙覽の心は自ら天地の初にあるやうに清明なものであつたであらう。それが一筋に歌ひ上げた高い調子に現れてゐる。殊に「讀みいづるかな」の結句には、朗々と誦み上げる姿や聲までも髣髴させる思がある。頼山陽に「東窓掃几迎初日、讀起春王正月章」といふ詩があり、或はこれらに暗示を得た歌かも知れない。併し、山陽の詩などに較べると遙かに質感的であり、而も雄大莊重で、國學者の

讀書初にふさはしいものである。

〔赤心報國〕 セキシンハウコク 誠心をもつて國恩に報い國のため念ひ瘦せつる腸を筆にそむとて我世ふかしつ

ること。至誠をもつて國のために盡くすこと。

卷の四「君來艸」に、「赤心報國」と題して收められてゐる六首の中、次の「正宗の」「國を思ひ」と併せて三首を抄出した。

〔思ひ瘦せつる腸〕 オモひヤせつるハラワタ 身も心も瘦せ細つた程の憂國の一念。

〔腸〕は、こゝは臟腑の意で、國事を憂へ氣遣ふ一念のために臟腑まで瘦せ細つたといふのである。

ふ。筆に墨を含ませて書・畫等を書くこと。〔世ふかす〕「ふかす」は、夜のふけるまで寢ずにゐるの意で、それを轉用し、「世をふかす」は老年まで存生する、長壽を全うする等の意。

一首の意は「身も心も瘦せ細る憂國尊王の至誠を筆に託して、以て天下の志士義人を鼓舞せんためにこそ、我は今日まで生きながらへて來たのだ。」といふので、曙覽の文章報國の堅い決意を卒直に表明した歌である。

「國のため念ひ瘦せつる腸を」と、先づ端的に慨世憂國の至情を訴へてゐる。「腸を」は衷情を穿つた強烈な表現であつた。かくて、「筆にそむとて」とその生存の目的を詠ひ出で、唯徒に生を貪つてゐるのではないぞといふ決意を以つて結んだのであるが、「我世ふかしつ」の「我」は意志と熱情との原動力としての「我」に對する確信の籠つた一語で、一首に眞實性と迫力とを與へてゐる。

正宗の太刀の刃よりも國のためするとき筆の鋒揮ひみむ

〔正宗〕 マサムネ 岡崎正宗。鎌倉末期の刀匠。五郎入道といふ。初代行光の子で、父及び國光に粟田口の傳

を得、國宗・助眞等について備前の傳を得、且天下を遊歴して古來の名匠の祕傳を探り、遂に相州傳なる一

派を開いた。所謂「正宗」と呼ばれる名刀は、正應頃から以後の作にかゝり、無反りの大廣幅・大切尖の大段平で、實戦の場合を顧慮した無雙の大業物である。その製作は北條氏が滅び足利氏の興つた後もなほ続けられ、門下からは養子貞宗を初め、廣光・秋廣以下、所謂「正宗十哲」と言はれる名工を輩出し、相州傳は一時天下を風靡するに至つた。晩年京都に轉住し、後村上天皇興國五年に歿した。享年八十。

〔筆の鋒〕 フデのホコ「太刀」に對して、筆を鋒に譬へて言つた。筆を逆立てた形状がよく鋒に似てゐるからである。
「鋒」は「矛」の古字。長い柄に諸刃で劍の形をした穂先をつけた兵器。枝刃のあるものがあり、一枝のものを「戈」兩枝あるものを「戟」といひ、二者共「ホコ」と訓ずる。

前歌と同じく、これもまた文章報國の赤心に燃えてゐた曙覽の烈々たる氣魄の吐露された一首で「武人は太刀を執つて君國の爲に報するが、自分はその太刀よりも鋭い破邪顯正の筆を揮つて勤王の志氣を鼓舞し、以て君國に報しよう」といふのである。二句中止の形から第三句「國のため」がはつきりと浮かび上つて、そこに赤心報國の熱情が高揚され、「揮ひみむ」と歌ひ收められた結句に至つて、それが確乎たる決意として言ひ据ゑられてゐる。いさゝかの巧む所なく尊王の赤心と報國の決意とを端的に投げだして、全體に張りのある力強い歌調をなしてゐる。

國を思ひ寝られざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな

特別とりたてて言ふべき語句はない。一首の意は、「憂國の思に昂奮して寝られず、戸外には白々と霜の置く夜更、月光の射し入る窓邊で三尺の秋水の鞘を拂つて、國を汚す輩があらばと堅い決意に心が奮ひ立つ」といふのである。同じ題下の連作に「國汚す奴あらばと太刀抜きて仇にもあらぬ壁に物いふ」といふ一首があり、これと併せ誦する時歌意は自ら明にされるのであるが、併しそれと比べるとこの歌は遙かに内的凝集的で、その故に却つて意志的陰翳を色濃くしてゐるやうに思はれる。霜の白い深夜、冴え光る月光のもとに、磨ぎ澄ました劍を凝視してゐる姿が髣髴として浮か

び上つて凄愴凛烈たる感じの中に、心底から湧き上る赤心報國の決意の深さを想はせるものがある。「寝られざる夜」霜の色「月さす窓」「劍」とかなり多い材料をまとめ上げながら、渾然たる調べの中に情感的に生動させて、些かの亂をみせぬ所、さすがに曙覽の手腕の窺へる歌である。尙前記「國汚す奴あらばと」の他、同じ題下の連作を次に掲げる。

眞荒男が朝廷思ひの眞實 心眼を血に染めて焼刃見澄ます
仇に向き腕たたきけむ古人にならひてこそは國に仕へめ
松葉の夜おつるにも耳たてつ枝ならさざる世とはおもへど

【天使】 テンシ (一)天子の使者。勅使。(二)キリスト教で、天國に於て上帝に奉仕し、上帝の使者として人間界に派遣せられるもの。神と人間との仲介をなし、神意を人間に傳へ、又人間の祈願を神に傳へるもの。(三)日又は月の異稱。こゝは(一) 幕末勅使のことは、文久二年五月、大原重徳が孝明天皇の勅命を奉じて東下してゐるので、恐らくこれを指すのであらう。即ち坂下門の變後局面は一變して、毛利敬親の公武合體、幕政改革の建言が容れられるに及んで、大原重徳は幕府の弊政改革の勅命を奉じて東下したのである。

天皇の大御使と聞くからにはるかにをがむ膝をりふせて
卷の六「福壽艸」に前記詞書を附して載せられた二首の
中の一首を採つた。因に他の一首は、
隠士も市の大路に匍匐ならびをろがみ奉る雲の上人

【下る】 クダる こゝは都から地方に行く意。反對に地方から都に行くのを「上る」といふ。當時は京都であつたために、勅使の關東に赴かれるのを「下り給へる」といつた。
【をろがむ】 「をれがむ」の轉訛で、「折れ屈む義」といふ。「拜む」に同じ。
【天使のはるばる下り給へるをろがみて】
原著には「天使のはるばる下り給へりけるあやしきしはふるひ人どもあつまりゐる中にうちまじりつゝ御けしきをがみ見まつる」とある。本課の詞書はそれを改めたものである。

といふのである。

【天皇】 スメラギ 「天皇」を「すめらぎ」と稱し奉るの
は「すめら君」の約訛で天下を「統べしろしめす大君」

の意。もと「すべらぎ」轉じて「すめらぎ」「すめろぎ」とも稱し奉るのである。

【大御使】 オホミツカヒ 天皇の御使。勅使。

【大御】 は、或語に冠して尊敬の意を表はす接頭語。

大御燈・大御歌・大御食・大御光など、主として神・天子に關する語に添へ用ひる。

一首の意は、「御勅使の御行列である」と聞いたので、大地に膝まづき額づいて遠く拜み奉つた。」といふのである。「天皇は神にしますぞ」(示人の初句)と斷乎として詠ひ出でる曙覽にとつては、その大御使はこれ神の御使に他ならないのだ。「天皇の大御使」と聞いただけで、曙覽はたゞ畏かさ尊敬に擊たれずにはゐられなかつたのである。その敬虔な至情が率直に詠ひだされてゐる。殊に「はるかにをがむ膝をりふせて」の倒裝法は、膝まづき額づく小さい敬虔な彼の姿を眼のあたり描かしめると共に、一首の格調を壯重ならしめてゐる。

【大御政】 オホミマツリゴト 御政治。

【古き大御世の姿に立ちかへりゆく】

昔の天皇御親裁の政治の形にかへつてゆく、即ち王政復古が實現されて行く。
我が國は既に天孫降臨の詔勅に明示せられてゐる如く、天皇の御親政あらせらるべき國であり、神武天皇以來一統の天皇が親しく國政を御統治遊ばされ來つたのであるが、頼朝が鎌倉幕府を開いて以來、政權が朝廷を離れて武家の手に移り、建武中興のとき一時天皇御親政の古に復つたこともあつたが、明治維新に至るまで大體政權は

【聞くからに】 聞く故に。きくので。

【からに】 は、或語に添へて「によつて」「故に」「から」等の意を表はす接尾語。

【膝をりふせて】 膝を折りまげ身を地に伏せての意。

即ち大地に膝まづき額づいてをがんだのである。

幕府の掌握する所であつた。然るに英明の聖主明治天皇の御即位あらせられるに及んで、徳川幕府は遂に四圍の情勢の支へ難きを知り、遂に大政を奉還し、此處に王政復古の運びとなつた。實に慶應三年十月の事であり、曙覽死去の前年に當つてゐる。

【いきほひ】 こゝは、形勢・情勢・なりゆき等の意。

【大御政古き大御世の姿に立ちかへりゆくべき御いきほひとなりぬるを】

原著には本文に續いて「賤夫の何のわきまへぬものからいさましよう思ひまつりて」とある。本課にはこれを省略

した。

百千歳との曇りのみしつる空きよく晴れゆく時かたまけぬ

卷の六「福壽艸」から採つた。前記の詞書が添へられた四首の中から二首を抄出したもので、詞書に示されてゐる如く曙覽が熱望して止まなかつた王政復古の機運の熟し來つたことを知つた歡喜を詠じたものである。

【百千歳】 モモチトセ 長い長い間。「百千」は、物事の数の多いことをいふ語。

【との曇り】 とのグモリ 「たなぐもり」に同じ。雨雲がたなびき合つて曇ること。

【との曇りのみしつる空】とは、政權が幕府に壟斷せられて朝威は陵夷して振はず、人心は萎靡沈滞し、世を擧げて暗澹たる氣分に蔽はれてゐた武家政治の時代の状態を譬へたのである。

【さよく晴れゆく】 前條の譬喩に對して、これは武家專斷の政治の惡弊を一掃して明朗な王政復古に移りゆくことを譬へてゐる。

一首の意は、「頼朝の開幕以來長い時代に涉つて、世を暗澹と閉した積弊は一掃せられて、こゝに再び明朗なる天皇御親政の大御代に立ちかへらんとしてゐる。何といふ喜ばしい事であらう。」といふのである。

曙覽がその生涯を通じて、努めて已まなかつたものは作歌の仕事であり、その最も希求して已まなかつたものは王政復古であつたことは、彼の略傳の條に既述した所である。彼は今、その王政復古のいきほひを悦び歌つてゐるのである。「百千歳との曇りのみしつる空」といふ上三句はその内容にさながらなる滯滞氣味の重い調べをもつて、我が國體に

添はね武家政治時代の暗く重苦しい状態を情調的に印象せしめ、それに對して「きよく晴れ行く時かたまけぬ」と、一氣に詠ひ下された下句の高く朗らかな調へは、陽光の暗雲を掃つて射し出でる趣があり、そこに作者の満足は遺憾なく表現せられてゐる。

あたらしくなる天地を思ひきやわが目味まぬうちに見むとは

意。

「あたらしくなる天地」王政復古の大御代となることを言つた。天皇御親裁の古の政治様式に復るのではあるが、併し現實についてみれば、武家政治に代つて天皇御親裁の時代を迎へることは、政治的・社會的機構がこゝに一變し、法律・制度をはじめ世のあらゆるものが一新されることになるわけである。

「思ひきや」「や」は反語の助詞。思つたであらうか、全く思ひもかけぬことであつたの意。意味の上では結句に接続して「見むとは思ひきや」となるべき所を、その感情を強く表現する爲に倒置したのである。

「目味まぬうち」メクラまぬうち 目が見えなくならんいうち。こゝは「死なぬうち」の意。

一首の意は、「王政が復古して天下萬般の一新される大御代を、生きてまのあたり見ようとは全く思ひもかけないことであつた。」といふのである。「あたらしくなる天地を」とおほらかに高まり來つた感情の波が、倒置された「思ひきや」の一句に高潮し、そこに歡喜の情が溢れ、その漲り進り出る所、自ら下句の奔端の流れ下る勢をなした。「わが目味まぬうちに見むとは」の強い調へは、實に思ひもかけず、生きて「あたらしくなる天地を」迎へ得た曙覽の抑へ難い喜びを遺憾なく表し得たものであつた。

天皇は神にしますぞ天皇の勅としいはばかしこみまつれ

卷の六「福壽艸」に「示人」と題して收められてゐる四首の中から下二首と併せて三首を摘記した。略傳にも記した如く、會津征伐の勅命の下つた時、藩士中に逡巡するもののあるを見て、曙覽が鼓舞激勵したことは有名の話であり、こ

の三首の歌はその歌意から推して恐らくその時の作であらうと思はれる。それとすればこれは作者歿年の歌である。

「天皇」「天皇の勅とし」の「天皇」と共に「スメラギ」と訓ずる。

勅語ときくからには。

「神にしますぞ」神であらせられるぞ。「神にし」の「し」は強めの助詞。「ます」はあり・をりの敬語。おはす。

「かしこみまつれ」御言葉のまにまに御従ひ申し上げよ。つゝしみかしくんで聖旨に御添ひ申し上げよ。

「ぞ」は語末に添へて強い決定をあらはす語。

「まつる」は、(一)奉る。(二)動詞に添へて敬意をあらはす語。こゝは(一)

「勅としいはば」天皇の御みことのと云ふならば。御

一首の意は「天皇は現人神であらせられるのだぞ。だから大君の御言葉ときくからには度しみかしくんで、たゞ言のまにまに従ひ奉れ」といふのである。「天皇は神にしますぞ」の五七調二句止の形に具はる莊重な調へが「ぞ」といふ斷定の一語に結びつく時、こゝに斷乎たる信念の披瀝となり、激勵叱咤の聲をひゞかせてゐるのであるが、第三句に至つて、再び「天皇の」と改めて詠ひ起されると共に、その調子は一轉して嚴肅莊重なものに變り、吾れ人共に君命の尊さに頭を下げざるを得ないかの感がある。曙覽の尊王の至誠と、その烈々たる氣魄の漲り満ちた堂々たる歌で、此の氣慨とこの信念とに撃たれては、何人と言へども君命の重きに狐疑逡巡するを難かるであらう。蓋しこの一首の如き、曙覽の作歌中に於ても、その格調の雄渾な點に於て最も萬葉振りを發揮した秀歌と言ふべきであらう。

太刀佩くは何のためぞも天皇のみことのさきを畏まむため

「太刀佩く」タチハク 太刀を腰にたばさむ。

「ぞ」はこゝは、語末に添へて疑問の意を表す助詞。

「佩」は音「ハイ」身に帯びる・腰につける・腰にさす。わきばさむなどの意。「ハク」はその訓讀である。

「も」は文意文勢を強める助詞。「みことのさきを畏む」大君の御言葉のまにまに、眞先かけて朝敵をうち倒す。

「何のためぞも」何のためであるか。

「みこと」は、「御言」の字に當る。言葉の敬語で、天皇のおほせごと。みことのり。

き奉り、御稜威の伸び行く前路を遮り妨げるものを打ち拂ひ、拂ひのける意に用ひられてゐる。

「さき」は、前追ひ・前拂ひの意から、こゝは叡慮に叛

一首の意は、「武士が腰に太刀をたばさんでゐるのは何の爲か。それは言ふまでもなく大君のみことのりにつゝしみ従つて、真先かけて朝敵を斬り倒さんが爲ではないか。大命降下した今何を疑ひためらつてゐるのか。」といふのである。曙覽にとつては大命を受けながら狐疑躊躇する藩士の態度が腹立たしく、且もどかしいのである。それが「太刀佩くは何のためぞも」といふ稍々怒氣を含んだ激しい調べとなつて現れてゐる。叱咤し、激勵し、懲慚し、しかしてかくあるべき當然の理由を崇高嚴肅な格調をもつて一息に詠み下してゐる。懦夫をも起たしめずんば止まぬ熱情の籠つた底力ある歌である。

物部のおもておこしと勇みたち錦の旗をいただきてゆけ

「物部」モノノフ 武士。つはもの。「物部」の字を當てるのは、古昔、武勇の職を以て朝廷に仕へた部族を「物部」と言つたのによる。即ち「物部」は「武士部」の

名譽をあげることに。面目を高々すること。「おもてだて」ともいふ。

「ふ」を略したもので、又「べ」を略して「ものふ」ともいふ。こゝはそれを取つて「武士」の意に用ひたものである。

「おもて」は、こゝは、名譽・面目・體面などの意。「錦の旗」ニシキのハタ 皇室の御旗。昔、勅命を受けて派遣せられた朝敵征討の將軍が、皇軍の標識として用ひたもので、赤地の錦の長旗の上部に日月の形が並べ描いてある。音讀して「錦旗」といふ。

「おもておこし」「おもてぶせ」(面目を失ふ意)の對語。

一首の意は、「錦旗をいたゞいて朝敵征伐に向ふ、これに過ぎた光榮があらうか。今こそ武門の名譽を擧げるべき時と思ひ勇み立つて征途に上れ。」といふのである。

「天皇は神にしますぞ」と斷じ、武士の太刀佩くは「みことのさを長まむため」と説く。その曙覽にあつては、錦旗をいたゞいて朝敵征討に馳せ向ふこそ、武人にとつて至上のおもておこしだったのである。大道に對する確乎たるこの信念の發露する所、自ら一首の莊重勇壯な調べをなしたのであつた。單純無技巧と思はれるこの歌を生かしたものは、實にこの雄渾な格調であり、三十一文字の短詩形の中に、歩武堂々たる皇軍行進の勇ましさを思はせる所以である。

三 備 考

1 指導研究

(一) 前課「井伊大老」の心境及びその時代的背景と關聯すると同時に、また次課「人臣の道」に對しては豫備的伏線的な關係に置かれた教材であるから、本課は、寧ろ國家的國民的教材としての意義が高調さるべきものである。随つて短歌鑑賞は第二義的に置かれて、その内容とも言ふべき曙覽の尊王憂國の至誠と熱情とを體感せしめることが終局の目的として志向されなければならない。

(二) 併し、本來これが短歌教材である限り、短歌鑑賞の仕事が等閑視されてはならない。曙覽の抱懐する尊王憂國の精神は、彼の萬葉振りの堂々たる歌を通して初めて完全な表現を得たものであり、その單純素樸な、而も莊重嚴肅な格調によつてこそ、懦夫を起たしむる迫力を發揮したのであつた。言ひかへればその烈々たる尊王憂國の至誠と情熱とが凝つてこの短歌的表現を完成せしめたのだと言ひ得よう。随つて彼のこの精神は彼の短歌の特質に觸れる事によつて、愈々明確に把握せられるものであり、その周到な鑑賞を通してこそこれに共鳴共感を喚起し得るのであるから、第二義的な鑑賞味到の仕事が、實は第一義的な國民精神の涵養に先行する過程をとらなければならない。

(三) 曙覽の歌の特質が萬葉振りの雄大莊重な格調に存することは既に屢々述べ來つた所であり、次の參考欄にも子規

の批評を載せて置いたのであるが、彼の和歌は彼の古學研究に深い關係を持つのであつて、その初め眞淵の歌に影響される所が大きかつたのではないかと思はれる。後田中大秀の門に入つて萬葉集の研究に没頭するに至つて、遂に萬葉調の歌風を確立したのであるが、それは單なる萬葉風の模倣ではなくて、彼は彼の個性と時代的色調とを以て萬葉を更に一步脱して、独自の境地を開拓したのであつた。日常瑣末の俗事を扱へ來つて、巧まざる自由な表現によつて偽らざる感情を率直大膽に吐露してゐるのである。曙覽の歌の雄渾な格調と、その眞實性と、根強い迫力とは實にそこに求め得られるのである。彼の歌のかゝる特質を概説することはその鑑賞を輔け、本課指導の目的遂行の上に資する所が多いであらう。

2 參考

(一) 曙覽の生活態度を窺ふべき資として「橘曙覽全集」巻頭の「橘曙覽の家にいたる詞」(松平春嶽作)を左に採録する。

おのれにまさりて物しれる人は、高き賤きを選ばず常に逢見て、事尋ねとひ、あるは物語を聞かまほしくおもふを、けふは此頃にはめづらしく日影あたたかきに、久堅の空晴渡りてのどかなれば、山川野邊のけしきこよなかるべしと、巳の鼓うつ頃より野邊に出たりき。三橋といふ所にいたる。中根師質あれこそ曙覽の家なれといへるを聞きて俄にはむと思ひなりぬ。ちひさき板屋の淺ましげにてかこひもめしたらぬに、そこかしこはらひもせぬにや、塵ひち山をなせり。柴の門もなくおほつかなくも家にいりぬ。師質心せきたてるさまして參議君の御成ぞと大聲にいへるに驚きて、うちよりしじもの膝折ふせながらはひいでぬ。すこし廣き所に入りてみれば、壁落ちかかり、障子はやぶれ、疊はきれ、雨もるばかりなれども、机に千文八百ふみうづたかくのせて、人丸の御像などもあやしき厨子に入りてあり。おのれきものぬぎかへて賤が著るつづりおりに似たる衣きかへたり。此の時扇一握を半井保にたまひて曙覽にたびてよと仰せたり。おのれいへらく、みましの屋の名をわらやといへるはふきはしからず、橘のえにしあれば忍ぶの屋とけふよりあらためよといへり。屋のきたなきことたとへむにものなし。しらみてふ蟲などはひぬべくおもふばかりなり。かたちはか

く貧しくみゆれど其の心のみやびこそいとしたりしけれ。おのれは富貴の身に大厦高堂に居て何ひとつたらざることなけれど、むねに万巻のたくはへなく、心は寒く貧しくして、曙覽におとる事更に言をまたねば、おのづからうしろめたくて顔あからむ心地せられぬ。今より曙覽の歌のみならで、其の心のみやびをもしたひ學ばばや。さらば常の心の汚れたる洗ひ、浮世の外の月花を友とせむにつきづきしかるべしかし。かくいふは參議正四位上大藏大輔準朝臣慶永、元治二年衣更著末のむゆか館に歸りてしるす。

(二) 正岡子規の「曙覽の歌」と題する文中より參考すべき部分を摘録する。

(イ) 萬葉の作者が歌を作るは用語に制限あるにあらず、趣向に定規あるにあらず、あらゆる語を用ひてあらゆる趣向を詠みたる者即ち萬葉なり。曙覽が新言語を用ひて詠じ、毫も古格舊例に拘泥せざりしは、なかなか萬葉の精神を得たるものにして、古今集以下の自ら畫して小區域に局限たりしと同日に語るべきにあらず。

(ロ) 常に題目の新奇なるのみならず、其の敘述の巧なる、實に萬葉以後の手際なり、彼魚彦が徒に萬葉の語句を模して萬葉の精神を失へるに比すれば、曙覽が語句を模せずして却て萬葉の精神を傳へたる伎倆は同日に語るべきにあらず。きはれ曙覽は徹頭徹尾萬葉を擬せんと努めたるに非ず、寧ろその思ふまゝに詠みたるが自ら萬葉に近づきたるなり。

(ハ) 歌人皆頽陋褊狹にして古習を破る能はず。古人の用ひ來りし普通の材料題目の中にて稍變化を試みしのみ。曙覽徳川時代の最後に出でて始めて潤眼を開き成るべく多くの新材料新題目をとりて歌に入れたる達見は、趣味を千年の昔に求めて、之を目睫に失したる眞淵景樹を驚かすべく、進取の氣ありて進み得ず、路阻途遠として姑息に陥りたる諸平文雄を壓するに足る。徳川時代の歌人が僅に客觀的趣味を解しながら、深く其の蘊奥に入る能はざりしは、第一に「新言語新材料を入れるべからず」といふ從來の規定を脱却する能はざりしに因る。曙覽は先づ第一に門戸を破りて歌界改革の一步を進めたり。

曙覽が客觀的景象を詠するは、新材料を入れたる事に於て、趣味を捉へし事に於て、萬葉より一步を進めたと共に、新言語新句法を用ひし事に於て、一般歌人よりは自在に言ひこなす事を得たり。

一人臣の道

北 畠 親 房

一 解 題

1 作 者

北畠親房 キタバタケチカフサ 吉野朝の忠臣。村上天皇の皇子具平親王の後裔、權大納言師重の子。伏見天皇の正應五年に生まれた。家を北畠、又は中の院と稱する。從五位下から累進して、正和五年には正二位權中納言・檢非違使別當兼左兵衛督に至り、後醍醐天皇御即位後は御信任を蒙り、吉田定房・萬里小路宣房とともに三房（サンバウ）と稱せられた。元享三年權大納言に進み、淳和・獎學兩院別當を兼ね、翌年、後醍醐天皇の第二皇子世良親王の傅となつたが、元徳二年親王の早世せられたのを悲しみ、致仕して出家し宗玄と號した。その間後醍醐天皇が王政の復古を畫策せられるに付ては、恐らく親房もその御議に與つたであらうが、この間の傳記は闕けて詳かでない。元弘三年北條氏が滅び帝の京都に還御あらせられるに及んで、再び出でて仕へ、從一位に敘し大臣に准ぜられた。子顯家が陸奥守に任ぜられて、義良親王を奉じ出でて奥羽を鎮するや、親房またこれを輔けて陸奥に下つた。蓋し東國に根據を立てんとする親房の獻策によるものであつた。間もなく足利尊氏が叛して西上する後を追ひ、京都に還つて叡山の行在に至り、楠木正成・新田義貞等と畫策これ努めた。伊勢・紀伊の間に吉野朝の根據地を占める爲、吉野に行幸あり、遂に南北兩朝の分立を見るに至つたのも亦親房の畫策に基づくといはれてゐる。爾來親房は伊勢にあつて京都恢復の計策をめぐらし、顯家の陸奥にあるを促して上京せしめた。然るに顯家が和泉の石津に陣歿して後は、自ら出でて東國の將士を糾合せんとし、義良親王を奉じ、子顯

信と共に海路これに赴かんとしたが、途上颶風によつて舟は四散した。親房は常陸に上陸し、小田治久・關宗祐・下妻政泰等に迎へられ、小田・關・大寶等の城に入り、大義を以て四方を説服せしめんとしたが、意の如くならず、海路吉野に歸つた。以來吉野にあつて後村上天皇を輔け、或は九州の懷良親王と氣脈を通じ、或は楠木正行を起用し、又瀬戸内海海賊を利用する等、百方吉野朝方勢力の恢復に盡力し、三宮に准ぜられ、後村上天皇の正平九年四月吉野の賀名生で薨じた。時に年六十二。蓋し吉野朝が六十年の久しきに涉つて足利氏に抗するを得たのは、親房の功による所が大であつた。明治に至り、別格官幣社安部野神社及び靈山神社に祭られた。親房は博く和漢の學に通じ「神皇正統記」の外に「職原抄」常陸國小田在城中の著「古今集註」「元々集」「二十一社記」等の著述がある。

2 出 典

「神皇正統記」卷の六「後醍醐天皇」の條の一部を抄録した。

「神皇正統記」全六卷。神代に筆を起し、後村上天皇の御踐祚に至る歴史を敘した書であるが、單なる史實の列記ではなく、先づ建國の體制を説き、治亂隆替の迹に照らして皇位の繼承を論じ、吉野朝廷の天子が神皇の正統たる所以を斷じた史論とみるのが至當であらう。

本書の執筆は著者北畠親房が小田城在陣の當時と見るべく、その脱稿は延元四年の秋のことである。脱稿後五年、興國四年に修正を加へてゐることは諸古鈔本に見えてゐる親房の奥書によつて明らかであるが、大體修正以前の體裁その通りであつたことは「以此可爲本、以前披見之輩莫嘲哂耳」といふ群書類従本奥書によつて窺ひ得られるのであつて、同じ奥書に「旅宿の間不著一卷之文書、纔尋後最略皇代記、任彼篇目、粗勸子細畢」とある如く、殆ど参考とすべき史書もなく長年月の史實を述べ去り、述べ來つて礙滯する所のない著者の博覽強記には驚歎すべきものがある。その史眼の卓抜なるその文章の謹嚴なる、その論評の公正なる、後世史家の定論であり、これを以て後世の志士義人を鼓吹し、勤王思想を喚

起せしめた功は眞に多大なものがある。

3 主眼及び採擇の趣旨

前課に於ては勤王歌人橘曙寛が尊王の精神を鼓吹した和歌について學んだ。ひきつゞいて本課は身を以て尊王の大義を具現した吉野朝の忠臣北畠親房卿が、その抱懐する大義名分の精神に立脚して、醇々と説く人臣當爲の大道を學ばんとするのである。親房卿が我が國體の基底の上に立ち、烈々たる尊王憂國の至誠を以て、親しく眺めた當世武人の態度を批判し、古今東西の歴史に徴して當世人心の頹廢を慨き、且國家の將來を憂ふる時、そこに忠君愛國の熱情は溢れて、誠にこれ國家的國民的大文字である。國體の眞髓を再認識せしめ、國民精神を振起せしむべき國民的教材として採擇した。

二 解 釋

1 語 釋

【人臣】 ジンシン 臣下たる者。君主・天子を人君・人主といふに對する語。
【王土】 ワウド 王者の統治する領土。詩經小雅「溥天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。」こゝは特に天皇の統治し給ふ我が國をいふ。
【忠を致す】 チユウをイタス 君に忠義を盡くす。
【致】は、こゝは「盡くす」の意。論語子張篇に「人未_レ有_二自致者_一也。必也親喪乎」とあり、朱註に「致盡_二其極_一也」とある。
【凡そ王土にうまれて、忠を致し命を捨つるは人臣の道な

り】
これが著者の信念であり覺悟である。廣く言へばこの信念こそ神皇正統記一篇の著作の動機であり、狭く言へば本課一篇の文は、この確信を裏書すべき解説に他ならない。随つて文の結びの「人臣の道なり」の「なり」は單なる指定の助動詞ではなく、強い斷定の意の籠つた語と解すべきであらう。全文の序言であり、また結論としてはつきりと取上げらるべき所である。
【高名と思ふべきにあらず】 功績と思つてはならない。
【高名】(カウミヤウ)は、(一)名の高くあらはれるこ

と。名高いこと。(二)てがら。功績。こゝは(一)。普通(二)の意の場合には「功名」の字を用ひる。故に正しくは、こゝは「功名」とすべき所である。

【後の人を勵まし】 功臣に恩賞を行はれ、後世の人臣が愈々忠勤を致すやうに奨勵する。
【後の人】は後世の人民。「君の御政」の君に對し、こゝの「人」は勿論「人臣」の意である。
【勵ます】(ハゲます)は奨勵する。はげむやうにする。
【其の跡】 ソのアト 人臣たる道を盡くした人々の子孫。
【怒び】 アハレび 「怒」は音「ビン」。あはれむ。憐愍・弔愍など熟す。

【賞せらるる】 シヤウせらるる「らるる」は尊敬の助動詞「らる」の連體形。恩賞を行ひ給ふ。
【君の御政なり】 キミのオンマツリゴトなり 君として當然なさるべき御政治である。
【下として】 臣下の分際として。
【競ひ争ふ】 キホヒアラソふ 競争する。互に負けじと張り合ふ。こゝでは恩賞にあづからうと競争する意。
【後の人を勵まし、其の跡を怒びて賞せらるるは、君の御政なり。下として競ひ争ひ申すべきにはあらぬにや】

「我が國は開闢以來君臣の分定まれり、臣を以て君となせること未だこれあらず」とは和氣清麻呂がもたらした宇佐八幡の神託である。皇統一系、君臣の分嚴として動

かすべからざる國體こそ我が日本の精華である。作者親房卿の大義名分の精神は、實にこの國體の基礎の上に立つものであり、随つてその立論の堂々たる所以である。
【あらぬにや】「あらぬにやあらむ」の省略。「ぬ」は打消の助動詞。「や」は疑問の助詞。―ではなからう。―ではあるまい。

これと同類の形式は、なほ一五六頁三行「末世とは言へるにや。」一五八頁八行「賞をも行はしめむが爲にや。」にも見られるのであつて、疑問提示のこの形は、讀者に對して省察を促し、提供せられた問題に對する批判を要求してゐるのである。随つて文勢は頗る強く、確信を以て訴へてゐる作者の氣魄が籠つてゐる。注意して吟味せしむべき所である。

【させる功】 さしたるてがら。これといふ程の功績。
【功】は、「イサヲ」又は「イサヲシ」と訓讀する。
【過分の望を致す】 クワブンのノゾミをイタス 身分不相應な野望をいだく。即ち自分の功績に過ぎたやうな恩賞を賜はらんことを希望する。
【致す】は、こゝは、なす・行ふ等の意。抱く・持つなど譯すがよい。親房はこの前の方で高氏の態度を批評して次の如く言つてゐる。

「抑々かの高氏、御方に參りしその功は誠に然るべし。……關東の高時、大命既に極まりて、君の御運を開きし

こと、更に人力といいたしがたし。武士たるもがら、いへば數代の朝敵なり。御方に参りて家を失はぬこそ、あまりある皇恩なれ。さらに忠をいたし、勞を積みてぞ、理運の望をも企て侍るべき。然るを天の功をぬすみて、おのが功と思へり。」

【自ら危むる端】 自分で自分を危くする端緒。

「危むる」(アヤブむる)は、マ行下二段活用 of 動詞。あやぶくする意。四段活用の「危む」(危からうと氣遣ふ意)との區別に注意。

「端」(ハシ)は、端緒。はじめ。いとぐち。

【前車の轍を見ること】 ゼンシヤのワダチ(テツ)をみること。前車が傾覆した車輪のあとを見て、後車は覆へらないうやうに警戒するといふ意から、先人の過失・失敗に鑑みて、後人がこれを再び繰返さぬやうに自ら戒めること。

「前車の轍」は漢書賈誼傳に「鄙諺曰、前者覆後車戒、秦氏所以亟絶者、其轍迹可見、然而不避、是後車又將覆也」とあるに據つた句であるが、尙同意の語は晏子春秋の「諺曰、前者覆後車戒也」新書(賈誼)の「前車覆而後車戒」文選(卷十六)の「瞻前軌之既覆、知此路之良難」等がある。こゝで「前者の轍」と言ふのは清盛や頼朝をさしてゐる。即ち前文に於て、清盛に就いては「平治よりこのかた、皇威殊の外に衰へぬ。清盛天下の

權を盗み、太政大臣にাগり、子ども大臣大將になりし上は、いふに足らぬ事にや。されど朝敵になりて、やがて滅亡せしかば後の例には引き難し。」と述べ、又頼朝に就いては、「昔頼朝ためしなき勳功ありしかど、高位高官にのぼる事は亂政なり。果して又子孫もはやく絶えぬるは高官のいたすところかとぞ申し傳へたる。」と述べてゐる。

【あり難き習なりけむかし】 困難なのが世の人の常であつたやうに見える。「あり難し」は、たぐひが少い・めづらしい等の意もあるが、こゝは困難である・むづかしい等と解する。現代の用法「辱い」の意味の「あり難し」ではない。

【習】(ナラヒ)は、(一)ならはし。習慣。(二)世の常。世間普通のこと。こゝは(二)。

【けむ】は、過去を推量する助動詞。

【かし】は文末・句末に添へて意味を強める助詞。(三)故郷の花(二〇頁三行「侍れかし」参照)。

【中古】 チュウコ 歴史上の時代區別。(一)孝徳天皇の大化の改新から源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでをいふ。(二)平安朝時代、即ち桓武天皇の平安奠都(一四四四年)から源頼朝の鎌倉幕府開設までを指す。この二説が行はれてゐるが、普通一般には後者の意味で用ひられることが多く、こゝもその意で、藤原氏攝關の時代から院政時

代の初め頃まで、即ち、武家勃興の時代以前を指す。

【さのみ】 そのやうにむやみと。そんなに。

【豪強】 ガウキヤウ たけく強いこと。剛強。

【戒められき】 イマシめられき 次節鳥羽院の制符のことから推して、この「られ」は尊敬の助動詞「らる」の連用形。即ち朝廷がお戒めになられた。

【豪強になりぬれば】 豪強になると。

「ぬれ」は、完了の助動詞「ぬ」の已然形。但し、こゝは意を強めるために用ひられたもので、「時」の意味は殆ど失はれてゐる。

【果して】 ハタして (一)その結果として。(二)案の通りに。案の定。(三)げに。まことに。こゝは(一)。

【例】 「タメシ」と訓ずる。

【理なり】 コトワリなり もつともなことである。道理である。

【鳥羽院】 トバキン 第七十四代鳥羽天皇。堀河天皇の皇長子。御名は宗仁。嘉承二年即位し白河法皇の院政を受けさせ給ふ。御在位十六年、保安四年位を崇徳天皇に譲り、なほ鳥羽殿(今の京都市伏見區鳥羽)にあつて院政をとり給ふ。世に鳥羽院と申した。後薙髮して空覺と號せられ法皇と稱し奉つた。保元元年崩御。寶算五十四。

【院】 は、上皇・法皇・女院のおます御所。又その尊稱。

【制符】 セイフ 禁制の旨を記した公文書。又は揭示。

【符】は、もと唐制から出たもので、主務省又は監督官廳からその被管の下級官府へ下された文書のこと。我が國では、(一)太政官から八省又は諸國に下す太政官符(略して官符といふ)(二)八省又は彈正臺から諸國へ降す省符。(三)國から郡などの被管へ下す國符。

【事ある時】 一朝有事の際。事變の勃發した場合。

【宣旨】 センジ 勅宣を宣べ傳へること。詔勅が表向なのに対して内輪のものをいふ。令の制度では、傳宣は中務省の所管で、内侍が中務卿に勅宣を傳へて宣下したが、平安朝から以後は、内侍が勅旨を承つて藏人に傳へ、藏人から太政官の上卿へ、上卿は少納言又は辨官をして外記又は大史に命じ、その旨を記させて宣下することとなつた。

【召し具す】 メシグす ともなふ。つれて行く。

こゝは諸國の兵を召し具して事の鎮定に赴いたことをいふ。

【近代】 キンダイ (一)この頃。近頃。(二)歴史上の時代區分で、我が國では明治以後、西洋では十九世紀以後をいふ。こゝは(一)の意で、作者存在の時代から、源平勃興の時代を指していふ。

【やがてかたはらるる族】 宣旨によらず直接源平二氏に誘ひこまれて味方に入るやうな兵士どもの意。一本には「肩を入るる族」(源平二氏にひいきする兵どもの意)と

ある。「やがて」は、こゝはちかに・直接などの意。即ち
宜旨を待たず直接にすることを指す。

「かたらはるる」の「るる」は受身の助動詞「る」の連
體形。「かたらふ」は、(一)語り合ふ。話し合ふ。(二)轉
じて仲間に引入れる。味方にとりこむ。(三)かけあつて
頼む。こゝは(二)

「族」は、「ヤカラ」と訓ずる。ともがら。ものども。黨
類。

【此の制符】「鳥羽院の制符」を指す。

【今までの亂世の基なれば】

主語省略の形で、「諸國の武士の源平の家に屬すること
が」(前頁九行)又は「制符に背いたことが」などと補へ
ば文意明瞭となる。

【云ひがひなき事】「言つても効のない事」の義。あさまし
きこと。慨歎に堪へないこと。

【なりにけり】なつてしまつたことですよ。

「にけり」は完了の助動詞「ぬ」の連用に、過去の助動詞
「けり」の接続した形だが、この「けり」にはかなり強く
咏歎の意が含まれてゐるのであつて、こゝでは作者のあ
さましい世情に對する慨歎が強くと述べられてゐることに
注意したい。

【諺】コトワザ (一)訓誡諷刺などを含んで一般に言ひ傳
へられることば。(二)言ひならはしてゐる言葉。言ひぐ

さ。こゝは(二)。こゝでは平家物語に出てゐる平清盛の
次の語などを考へてゐるのであらう。「入道隨分身を捨
てて凶徒をおひおとし、君の御ために既に命を失はんと
すること度々に及ぶ。されば人何と申すとも此一門をば
七代まではいかでか、おぼしめし捨てさせ給ふべき。」
(卷二教訓)

【軍に駆け合ふ】イクサにかけあふ 戦争に参加する。戰
場を馳驅する。

「駆け合ふ」は、乗馬を進めて敵と争ふ。敵と渡り合ふ。
【家の子】イへのコ (一)良家に生まれた子。名門の子。
きんだち。(二)一族の人で、家長に統帥せられるもの、
即ち庶子より以下その族類。一門の者。一族。こゝは
(二)

【郎從】ラウジユウ 郎等に同じ。武家の家臣。けらい。
從者。(四)故郷の花・一九頁二行・郎等の解釋欄参照)
【節に死ぬる類】セツにシぬるタグヒ 忠節のために一命
を捨てるやうなものども。

【節はみさを、忠節・節義・節操など熟する。
「わが功におきては」わが功績に對しては。
【若しは】もしは「もししくは」に同じ。或は。又は。
【などぞ申すめる】などいふやうである。
【ぞ】は、強意の助詞。

【める】は、推量の助動詞「めり」の連體形。「ぞ」の係り

によつて連體形で終止した。「めり」は、「見えあり」の約
略といふ。一のやうにみえる。一のやうであると譯す。

【まことにさまで思ふことはあらじ】本心からそれほどま
でに思ふわけではあるまい。

「さまで」の「さ」は指示代名詞中稱。「そ」「それ」に同
じ。こゝは「日本國を賜へ」「半國を賜はりても足るべ
からず」を指す。「じ」は推量して打消す助動詞。ないだ
らう。まい。

【やがて】こゝは、とりもなほさず・すなはちの意。

【朝威】テウキ 朝廷の御威光。朝廷の御威力。

【おし量らるる】自然推測され。おのづから推量され
る。「おし量る」(おしハカル)は、「推量る」「推測る」
と書く。

「るる」は、可能の意より轉じて、自づとせざるを得な
い意、又は自然さうなる意を表す助動詞。「自然的可能」
の助動詞と呼ばれる。

【言語は君子の樞機なり】言語は君子にとつて最も大切肝
要なものである。

易の繫辭上傳に「言行者君子之樞機。樞機之發、榮辱之
主也。言行君子所_レ以_レ動_レ天地_レ也。可_レ不_レ慎乎。」とある。
この「言行」を作者が「言語」に言ひかへたのであら
う。

「君子」(クンシ)は、(一)學徳のすぐれた人。論語述而

「聖人吾不_レ得_レ而見_レ之_レ矣。得_レ見_レ君子者、斯_レ可_レ矣。」(二)
高い官職にある人。論語顔淵。君子者之徳風也。小人之
徳草也。草尙_レ之_レ風_レ必_レ偃。(三)妻が夫を呼ぶ稱。こゝ
は(一)の意。

「樞機」(スウキ)は、前記易繫辭の孔穎達疏に「樞謂_レ戸
樞、機謂_レ弩牙」とある。即ち「樞」は「戸のくるる」で戸
の開閉を掌り、機は「弩(いしゆみ)のかけがね」で弩の
張弛を掌るもの。「樞機」と熟して、一般に物事の肝要な
ところをいふ。かなめ。要所。

【あからさま】(一)かりそめ。かり。(二)たちまち。には
かに。(三)あらは。あきらか。こゝは(一)

【蔑にす】ナイガシロにす あなどり軽んずること。
「ないがしろ」は、「無きが代」の音便、あれどもなきが
如くすること。即ち軽んじあなどること。侮蔑。輕蔑。
【あるべからぬ事にこそ】あつてはならない事である。
「事にこそ」は、「事にこそあれ」の省略。

【言語は君子の樞機なり】と言へり。あからさまにも君を
蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ】
本心からでないにしても、過分の行賞を強要し奉るが如
きことが國家の亂れを引き起し、朝威を輕からしめる端
緒だと述べ來り、こゝに「言語は君子の樞機なり」の一
句を引いて、心・言葉を戒慎すべき所以を論證してゐる。
世の衰へるといふ事實が、人心の微妙な動向のうち醸

成されつゝあることを深く洞察した立言で、そこに謹嚴な親房卿の人となりが見えたと共に、まのあたり末世汚濁の現實を眺めて、そのよつて來つた原因を憤り愷々痛切な感情も自ら吐露されたのであつた。「あるべからぬ事にこそ」の強い斷定は、つまりその烈々たる氣魄が自らこゝに發露したものに他ならない。

【堅き氷は霜を履むより至る習】 易經・坤卦に「初六、履霜、堅氷至。」とあるより出た語。堅い氷は一朝にして結ぶものではなく、先づ霜の降る寒さを経過し、次第に寒さが加はつて、はじめて氷も厚く堅くなるのがきまりであるといふ意。すべて物事は唐突に生起するものでなく順次進行して遂にその極頂に達することを譬へていふ。

【亂臣賊子】 ランシンゾクシ 君を弑し國家を亂す臣と親をそこなふ子。不忠不孝の惡人。孟子・滕文公「孔子成春秋、而亂臣賊子懼。」

【亂臣】は(一)天下をよく治める臣。書經・泰誓篇「予有亂臣十人。」(二)君を弑する臣。君に謀叛し國を亂す臣。こゝは(二)。

【賊子】の「賊」は殺す・害する等の意。(一)親を殺す子。大不孝人。(二)叛逆の徒。むほん人。こゝは(一)。

【末世とは言へるにや】 佛教の方では末世と言つてゐるのであらう。

【末世】(マツセ)は、(一) 佛語。佛教では釋迦滅後を三

法時に分ける。滅後五百年は佛弟子たちも尙存生して佛の教の正しく行はれる「正法時」であり、次の千年は、佛弟子は既にながら、未だ佛の教は盛に行はれる「象法時」であり、次の一萬年は佛の教が漸く衰へて、諸惡事の充滿する「末法時」である。この「末法時」を末世・末代・末の世などと呼ぶ。(二)轉じて、道德のすたれ衰へた時代。澆季。季世。春秋左傳「叔向曰、齊其如何。晏子曰、末世也。」こゝは(一)の意とみるがよい。

【言へるにや】は、「言へるにやあらん」の省略。(一五四頁四行。「争ひ申すべきにあらぬにや」の條参照)

【許由】 キョイウ 支那上古の隱士。字は武仲。沛澤の中に隠れてゐたが、堯はその賢を慕うて帝位を譲らうとしたので、巢父と諍つて、潁川の北、箕山に隠れた。堯が又召して九州に長たらしめんとした所、由は穢ららしい事を聞いたといつて、潁川で耳を洗つたといふ。又箕山にあつては水を汲むに器がなく、人から瓢を贈られ、飲み終つて樹枝にかけて置いたが、風に鳴るのが煩はしいといつて棄ててしまつたといふ。「事文類聚」隱逸部及び「高士傳」等に見えてゐるが、今は、次條「巢父」と共に老莊流の虛無思想を附託した假想的人格であらうとされてゐる。

【堯】 ゲウ 支那上古の聖天子 名は放勳。帝嚳高辛氏の次子。帝嚳に繼いで位につき、初め陶(今の山東省濟寧

の邊)に居り、ついで唐(今山西省太原の邊)に移り、よつて陶唐氏と號した。後平陽(現山西省平陽)に都したと傳へられてゐる。人格崇高で聖人を以て稱せられ、その治は次代舜の世と共に、所謂鼓腹擊壤の泰平を致し支那の理想的治世とされてゐる。在位七十年に九年の洪水があり、鯀をしてこれを治せしめたが成績が上らず、堯も漸く老いて政に倦み、その子丹朱不肖の故に舜を擧げて天下の事を攝行せしめ、後これに位を讓つた。これは支那に於ける「禪讓」の初めで、支那四千年の革命思想はこゝにその濫觴を求めることが出来る。

【傳へむとありしを】 「傳へむと言ひしを」といふに同じ。

【潁川】 エイセン 河南省登封縣の西境潁谷に出で、嵩山の南をすぎ、東南流して周家口を経て淮水に注ぐ。

【巢父】 サウホ 支那上古の隱士。巢・由又は巢・許といつて許由と並稱せられてゐる。高士傳に「巢父者堯時隱人也。山居不營世利、以樹爲巢、而隱其上。故時人號曰「巢父。」とあり、牛を牽いて潁川を渡らうとしたが、許由が耳を洗つたと聞いて、これを穢しいとて渡らなかつたといふ話は殊に有名である。(前條許由参照)

【五臟六腑】 ゴザウロツブ (一)五臟(心臓・肝臓・肺臓・腎臓・脾臓)と六腑(大腸・小腸・膽胃・三焦・膀胱)(二)腹の中。心の中。こゝは(一)。

【思ひ習はず】 オモヒナラはず (一)了解する。悟る。

(古語)(二)思ひなれさせる。思ひをめぐらして習性とする。こゝは(一)。

【故にこそあらめ】 「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「こそ」の係りによる已然形終止

【行末】 ユクスエ (一)行く先。前程 (二)成り行く末。將來。前途。こゝは(二)。

【思ひやる】 (一)心を慰める。心配をはらす。(二)同情する。(三)推量する。おしはかり考へる。こゝは(三)。

【淺まし】 (一)あさはかである。人情が薄い。(二)意外の事で驚く。驚く程甚だしい。(三)あきれる程である。興ざめる。情ないことである。(四)みすばらしい。卑しい。きたない。こゝは(三)。

【行末の人の心思ひやるこそ淺ましけれ】 將來の人々の心がどれほど悪くなつて行くかを推量るとまことに淺ましいことだ、といふのである。古人の高潔な心構へに對し、靡然として傾きゆく現世人心の頹廢の様を較べみたま時、自ら將來への大きな不安が親房卿の心を暗くせずには置かなかつた。そしてそれは勃然として慨世の激情をかきたてたのである。その慨歎の情の端的に表白せられたのが「思ひやるこそ淺ましけれ」といふ係り結びによる強い文勢である。

尙「こそ一けれ」の係り結びの形式は、全文中にこれを拾つて見ると

【一五五頁一行】あるべからぬ事にこそ(あれの省略)「
 【一五六頁一〇行】思ひ習はせる故にこそあらめ。」
 【一五七頁四行】日本は五百九十四郡こそあれ。」
 【一五八頁九行】賢かりけるをのこにこそ(あれの省略)「
 文末「都の中はええしくこそ侍りけれ。」
 など、かなり多く用ひられてゐるのであつて、これは作者の筆癖とみられもするが、併し矢張親房の慷慨悲憤の情が自然この文勢となつて發露したものと考へるのが至當であらう。

【大方】 オホカタ (一)發語の辭、一體全體。(二)大抵。およそ。あらかた。こゝは(一)
 【恩に驕る】 オンにオゴる 自分獨り恩賞を専らにして榮華に誇る。

【萬人の怨を残す】 萬人に怨をいだかせる。即ち、一人恩賞を獨專してしまつて、他の者がこれに與る餘地をなくし、爲に萬人の不平怨嗟がそのまゝに残されることをいふた。

【萬姓】 バンセイ (一)もろくのつかさ。諸官。書・咸有一德「俾萬姓咸曰大哉王言。」(二)天下の萬民。漢書・谷永傳「益選溫良上德之士、以親萬姓。」こゝは(一)「推して測り奉るべし」「分たせ給はん事」が御出來にならなといふことは、推し測り奉ることが出来るの意。「べし」は、こゝは可能の助動詞。

【六十六人にて皆塞がりなむ】

昔日本は六十六ヶ國二島に分れてゐたからかく言つた。現在の畿内八道八十五箇國の區劃は明治初年配置分割を行つた際に決定したものであつて、古くは畿内七道(北海道を除く)六十六箇國と壹岐・對島の二島に區分されてゐた。

【五百九十四郡】 「延喜式」には五百九十郡、「和名抄」には五百九十三郡。「拾芥抄」には六百四郡とある。本文は何によつたか詳かでない。

【みながら】 みながらの約訛。悉く。全部。残らず。【いづくを知らせ給ふべきにか】 何處を御治め遊ばされたらよいであらう。御治めになる處がなくなつてしまふではないかとの意。

「知らず」(シラス)は、治め給ふ。しろしめす。「給ふべきにか」は、「給ふべきにかあらん」の省略。

「か」はこゝは疑問の助詞で、この疑問提示の形は前述「にや」の形と同じく、作者の慨嘆の發露で、文勢・文意を強めてゐることに注意すべき所である。

【萌す】 キサす (一)草木が芽ぐむ。萌えだす。(二)物事が起らうとする。心が動きはじめ。こゝは(一)

【謀叛】 ムホン 漢文では「ボウハン」とよむ。君王又は主君に叛いて兵を起すこと。

【將門】 マサカド 平將門。上總介平高望の孫、鎮守府將

軍平良將の第三子。嘗つて京都に出て攝政藤原忠平に仕へ、檢非違使たらんことを請うたが顧みられず、憤怒して下總に歸り、一族と争ひ、承平五年伯父常陸大掾國香を殺し、ついで叔父良兼を破り、また國司を攻めてこれを虜にし、つひに天慶二年武藏權守興世王と相謀つて叛旗を翻し、下野・上野等を略取し、下總猿島郡石井郷に假宮を營み、自ら新皇と僭稱し、大臣以下文武百官を備へた。翌三年朝廷は藤原忠文を征夷大將軍に拜して追討に向はしめたが、その至るに先だつて、國香の子貞盛及び下野の押領使藤原秀郷に攻められて誅に伏した。

【比叡山】 ヒエイザン 山城・近江兩國に跨り、海拔八四八米。略して叡山ともいひ、京都の東北方に聳えるので北嶺と呼ばれ、山上を占める天台宗山門派の總本山建曆寺にちなんで天台山ともいふ。頂上を四明嶽と稱する。(一六・春寒・一一七頁「比叡」参照)

尙四明嶽の山頂には、將門が都を俯瞰して野望を起したといふ傳説のまつはる「將門岩」がある。

【大内】 オホウチ 又は「ダイダイ」と音讀する。大内裏。皇居。禁中。

【遠見】 エンケン 遠く望みみる。こと。とほみ。

【漢の高祖】 カンのカウソ 支那前漢の第一世。姓は劉、名は邦、字は季、沛(江蘇)の豊邑中陽里の人。初め秦に仕へて泗水の亭長となり、嘗て咸陽に衛役し、始皇帝

の鹵簿を觀て喟然として「大丈夫當に此の如くなるべし。」と嘆じたといふ。秦末陳勝・吳廣等の舉兵に應じて起ち、楚の項羽と共に秦を亡し、項羽の封を受けて漢中・巴蜀に王となつたが、間もなく項羽と天下を争ひ、蕭何・張良・韓信の三傑を擧用し、項羽を滅して帝位に即き、長安に都し、國を漢と號した。在位十二年。秦の苛法を除いて人心を治定し、周秦の滅亡に鑑みて大いに封建制度を整へ、功臣・老将の富強を憂へてこれを誅伐し、宗室子弟の封を厚くしたが、その結果は同族の富強をいたし、宮室の衰頹を早める原因となつた。

【漢】は、支那の王朝の一。支那に「漢」を國號とした王朝は蜀漢・南漢・北漢等があるが、こゝは所謂前漢・後漢(西漢・東漢)の號を以て呼ばれる支那王朝中最も永續した漢朝を指してゐる。

前漢(西漢)は劉邦が西安に即位した西曆紀元前二〇六年(我が孝元天皇九年)から紀元八年(我が垂仁天皇三十四年)平帝が王莽の爲に弑せられるまで、凡そ三十三代二百一十一年間。王莽が天下の實權を掌握してゐた約二十年の後、西曆紀元二十五年(我が垂仁天皇五十四年)光武帝が洛陽に即位して後漢(東漢)の代となり、後漢は以來獻帝が廢せられて滅亡に至るまで十三代百九十六年間。兩漢を通計すれば四百餘年に及び、支那王朝中最も長期にわたつた。後世支那を一に漢と呼び、その民族を

漢民族といひ、また漢學・漢文等の語のある所以はこゝに存する。

【蕭何】セウカ 沛の豊邑の人。初め沛邑の主吏となつたが、高祖が兵を起すに及んでこれを授け、やがて咸陽を陥れてこれに入り、秦の相府に入つて圖籍を收め、天下の險夷・戸口の多少等を究めた。高祖の漢王となるに及んで丞相となり、韓信の用ふべきを知つて薦めて大將に拜し、高祖が楚の項羽と戦ふや、常に漢中を守つてその民を撫育し、兵員・糧食を高祖に送り後顧の憂なからしめた。高祖が天下を平定するに至つて論功第一に推され、鄼侯に封ぜられた。晩年事を以て帝の怒に觸れ、延尉の獄に下されたが間もなく許され、惠帝の二年卒した。諡號を文終侯といふ。

【張良】チャウリヤウ 字は子房。世々韓に相たるの家に生まれた。韓が秦の爲に亡された時張良は家財を散じて同志を集め、力士滄海君を得て、始皇帝の東遊を博浪沙に要してこれを狙撃したが果さず、その急追を逃れ、姓名を變じて下邳に匿れ、時に汜上に遊んで黄石公から太公望の兵書を授かつたと傳へられてゐる。高祖の擧兵を聞いてその帷幄に參じ、獻替縱横、遂に項羽を滅して天下の統の業を遂げしめた。功を論じて齊の三萬戸を與へんとしたが、辭して受けず、留の地を請うてこれに甘んじた。晩年人事を厭うて石松子に従つて遊ばうとしたが

呂后の切望によつてこれを止め、孝帝の八年歿した。諡號を文成侯といふ。

【韓信】カンシン 淮陰の人。初め項羽に従つて獻策した。が用ひられなかつたので、去つて漢に歸し、蕭何の推薦で大將軍に拜せられた。爾來到る處に武功を立て、高祖の天下統一に與つて力があつた。はじめ齊王に封ぜられたが、ついで項羽を亡すや楚王に封ぜられた。後讒に逢つて淮陰侯に貶せられ、遂に呂后のために誅せられた。少年の頃家貧しく、漂母に食を惠まれ、又屈辱を忍んで少年の胯下をくゞつた逸話は人口に膾炙されてゐる。

【三傑】サンケツ 三人の豪傑。漢書・高祖紀に「子房・蕭何・韓信三者皆人傑也。」とあるに據つたものであらう。

【籌を帷幄の中にめぐらして、勝つ事を千里の外に決するはこの人なり】

帷幄の中にあつて作戰計畫をめぐらし、遠い戰場に於て必勝を得しめるのは張良であるといふ意。史記・高祖本紀に「運籌帷幄之中、決勝千里之外、吾不如子房。」(頭註)とあるに據つたものである。

【籌】(ハカリゴト)は、音「チウ」。もと數をかぞへるに用ひるかずとりのこと。轉じてはかりごとの意に用ひる。

【帷幄】(キアク)は、(一)帷(四方に引きまはして張る

幕)と幄(張に同じく、上から下覆する幕)(二)作戰計畫をする所。陣營。今の參謀本部に當る。(三)謀臣。こ

こは(二)の意。

【千里】は、極めて遠い意。

【留】リウ 今江蘇省沛縣の東にその縣城の趾がある。秦代始めて留縣をおき、漢の代を経て南北朝北齊に至つて一時廢絶し、隋に至つて再び置かれたが、唐代また廢せられて今日に至つた。

漢書地理志注に「瓚曰、宋亦有留、留屬陳、故稱陳留」とあり、一説に留を今の河南省開封府陳留縣とするものもあるが、後世史家の考證する所によれば前者が正しいやうである。隨つて頭註に「河南省開封府」とあるは訂正せられたい。

【あらゆる功臣多く滅びしかど】前記三傑の中蕭何の晩年延尉の獄に下され、韓信の呂后のために誅せられた事等を指す。

【身を全くす】ミをマツタクす 一身の安全を得る。壽命を全うして死ぬ。

【近き代の事ぞかし】これ(次に述べんとする事)はほんの近代の事でありますが、といふ意。一五八頁七行「望み賜はりけるとぞ。」とある次に入るべきを倒置して意味を強めたのである。

【近き代】は、近代(一五五頁二行)に同じ。

「ぞ」かしは、共に意味を強める助詞。

【頼朝】ヨリトモ 源頼朝(五・平家雜感・二九頁)兵衛佐頼朝の條参照)

【文治の頃】ブンチのコロ 後鳥羽天皇の文治五年。東鑑に「文治五年六月二十四日、奥州泰衡日來隱容豫州(義經)科、已軼叛逆也。仍爲征之可令發向給之間云々、七月十九日、二品爲征代奥州泰衡發向給」と見えてゐる。尙次項「奥の泰衡」参照。

【文治の頃にや】は「文治の頃にやありけん。」の省略。「文治の頃でありましたらうか」と軽い疑問形を用ひてゐる所など、身邊一卷の文書をも蓄へてゐなかつた兵馬控惣の間に於ける著録といふ點のあらはれたもので、流石に親房卿の記憶もはつきりしてゐなかつたのであらう。

【奥の泰衡】オクのヤスヒラ 陸奥の豪族藤原泰衡。

【奥】は、古、陸前・陸中・陸奥の三國を「みちのおく」「みちのく」と稱し、略して「奥」とも言つた。「東の海の道の奥の義」だといふ。後には奥羽地方全體を指すやうになつた。

【泰衡】は、陸奥押領使、藤原秀衡の子。文治三年父の卒した後を受けて陸奥押領使となり、兼ねて出羽を管した。當時義經は頼朝の追捕を逃れて秀衡に身を託してゐたが、泰衡の代に及んで、頼朝はこれに命じて義經を害せしめんとした。泰衡は父秀衡の遺命によつて始めこれ

を躊躇したが、文治五年遂に意を決して義経を衣川に襲ひ、その首を鎌倉に送つた。頼朝はその命を聞くことの遅きを辭としてその功を賞しないのみか、却つて兵を進めて陸奥・出羽を攻めてこれを破り、泰衡はその叛將河内次郎に殺された。享年三十五。

【追討】 ツキタウ 賊徒を追ひかけて討伐すること。討手を差向けて征伐すること。後漢書光武紀「追討郡國、到則解散、去復屯結。」

【平重忠】 タヒラノシゲタダ 畠山次郎重忠。本姓平氏。故に平重忠といひ、また累代武藏國畠山に居つてその地名をとつて姓とし畠山氏を名のつた。治承四年源頼朝の擧兵に際しこれに抗し、三浦氏を衣笠城に攻めて勝つたが、漸くして頼朝の軍の振ふに及んでこれに降つた。後義経に従つて木曾義仲及び平氏を追討し、文治五年藤原秀衡追討に先鋒となつて殊功を顯し、更に建仁二年には比企能員の一族を平げた。資性忠亮、頼朝に信任せられ頼家の輔佐を遺命せられたが、たま／＼その子重保が事を以て平賀朝雅と争ひ、朝雅がこれを妻の母牧の方(北條時政の妻)に訴へるに及び、元久二年重忠はその子重保と共に北條氏の毒手に斃れた。享年四十二。

【先陣】 センチン (一)陣立で本陣の前にある隊伍。さきぞなへ。先鋒。(二)眞先に敵陣に斬り入ること。一番のり。さきがけ。こゝは(一)

て傳へられ、後世多く戯曲小説の材料となつた。建久三年久下直光と領土の境界を争ひ、世の無常を悟つて自ら髪を斷ち、京都黒谷の源空の許に走つてその弟子となり名を蓮生と改めた。晩年郷里に歸つて淨業を修し、承元二年寂。享年六十八。

【下文】 クダシプミ 中古以來の文書の一。官宣旨の形式に倣つて院・宮・幕府・權門・神社等の政廳、又は檢非違使廳雜訴決斷處等から、その所管の官衙・土地・人民等に下される公文書。院廳下文・攝關家政所下文・檢非違廳下文・將軍家政所下文・寺社下文等が是である。

【剛の者】 ガウのモノ 勝れて強い人。剛強の武士。

【賜ひてけり】 タマひてけり 賜はつた。

【てけり】は、完了の助動詞「つ」の連用形「て」に、過去の助動詞「けり」の結合した形。こゝでは過去の強めを表す。

【一とせ】 ヒトとせ ある年。

【奏聞】 ソウモン 天子に奏上すること。

【褒美の詞の甚だしきに】

下に「ひきかへて」又は「較べて」などを補つて解すべき所である。

【褒美】(ハウビ)は、(一)ほめたゝへること。(二)ほめて與へるもの。褒賞。こゝは(一)

【いみじ】 甚だしい・すぐれてゐる・ことのほかである等の

【五十四郡】 昔陸奥の國は五十四郡に區劃されてゐた。【長岡の郡】 ナガヲカのコホリ 「拾芥抄」には陸奥三十六郡の中に此の名が存してゐるが、東鑑文治五年九月二十日の條には「畠山次郎重忠賜葛岡郡、是狹少地也。」とある。随つて「葛岡郡」は「長岡郡」の誤記であるとされる。また長岡・葛岡は同一地であるとすると行はれてゐる。前者「長岡郡」とすれば、今の宮城縣遠田郡田尻・富永・中坪諸村一帯の地に當り、後者「葛岡」とすれば今の宮城縣玉造郡葛岡の地であるが、今詳かにし難い。頭註は前者に據つたものである。

【人に廣く賞を行はしめむが爲にや】

東鑑の前記「畠山次郎重忠賜葛岡郡、是狹少地也。」の次に「重忠語傍人云、今度重忠雖奉先陣、大木戸合戰先登爲他人被奪畢、于時雖知子細、重忠不確執。是爲令周其賞於傍輩也。」とある。それによつて書いたのであらう。

【直實】 ナホザネ 熊谷直實。通種は次郎。平貞盛の後裔といふ。父祖累代武藏國熊谷に住し、よつて氏とした。源頼朝の擧兵に際し、大場景親に従つて石橋山にこれを攻めたが、後頼朝の威勢振ふに及んで降つた。爾來源義経に従つて宇治川に木曾義仲を破り、ついで一の谷に平氏と戦つて武功を樹てた。この戦に平氏の公達平教盛の首をあげたことは、平家物語・源平盛衰記等に潤色され

意。善惡邪正何れにも通じて用ひられる。

【いみじき事と】は、「大層感心なことである」といふ意。

【これまでの心こそなからめ】 重忠・直實のやうなこれ程感心な心はなからうとも、せめてそれに近い人が今の世にあつたならよからうに、さうではなくて、といふ意。

【事に觸れ】 コトにフレ 事ある毎に。事あるに際して。

【君を落し奉る】 君をないがしろになし申上げる。

【落す】は、こゝは、劣るやうにする・低くする等の意から、見さげる・ないがしろにする意となる。

【身を高くする】 驕慢になる。

【高くする】は、貴くする・勝れるやうにする等の意から

高貴に構へる・尊大ぶる・驕慢になる、等の意となる。

【ありし世】 (一)生存してゐた時代。(二)前の世。過去の時代。昔。往時。こゝは(二)

【東國の風儀】 トウゴクノフウギ 關東地方の淳樸な風儀

重忠・直實等を生んだ時代の風儀を指す。

【風儀】は、(一)ならはし。風習。習慣。(二)行儀。作法。(三)風姿。禮容。こゝは(一)

【公家】 コウケ (一)おほやけ。朝廷。(二)公家衆の略。

武家出仕の人々に對して直接公家に仕へる人々をいふ。

即ち上達部・殿上人等。こゝは(二)

【公家の古き姿もなし】は、在京の公卿たちの間にも、古

のけだかい氣風が失はれたのを慨いてゐるのである。

【いかになりぬる世にか】 どんなになつてしまつた世の中なのであらうか、といふ意で世態の不可解なことをあやしむ氣持。「ぬる」は完了の助動詞。「世にか」は「世にかあらん」の省略。

【聞えしかど】 といふことであつたが。

【聞ゆ】は、こゝは廣く傳はる・評判される等の意。

【しか】は過去の助動詞「き」の已然形。

【中一年ばかり】 ナカヒトトセばかり 建武中興を指す。

元弘三年六月鎌倉幕府が滅びて後醍醐天皇は隱岐の行在より還御、建武と改元せられて親政を布かせ給ひ、こゝに王政の復古を見た。然るに翌二年尊氏の謀叛となり、延元元年十二月には、天皇は遂に吉野に遷幸あらせられ

2 文の構成

第一節 初—一五四頁八行 人臣の大道を論定し、高名に誇り、豪強に驕るが如きことのあるべからぬやう誡めた。

第二節 一五四頁九行—一五五頁九行 國家の亂れから、延いては朝威衰頹の基は、武家の驕慢に兆したこと。

第三節 一五五頁一〇行—終 やがてそれが亂臣賊子となる原因であるから心・言葉の端をも慎むべきことを述べ、古今東西の古人のこれに對する實例を挙げ、當世人心の廢頹を歎じ、且將來を憂へた。

3 文意

君に忠を致し命を捨てる事を人臣たる者の當爲の大道なりと論じ、上に對し奉つて驕慢に亘り過分の行賞を希ふ如きことの絶對にあるべからぬ事を説いたものであつて、先づ國家混亂して朝威の衰頹に傾く根本の原因を、近代に於ける武家

の豪強驕慢に求め、轉じて、古今東西にわたつて、論功行賞の際に於ける古人の慎み深い實例を挙げ、これに較べて當世人心の廢頹を慨き、且國家の將來を憂へてゐるのである。

4 鑑賞批評

「大日本は神國なり、天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へたまふ。」とは神皇正統記卷頭の言である。これが親房卿に抱懷せられてゐた我が大日本の國體の本質であつた。神皇正統記一卷の書は正にこの國體觀に立脚して、我が神國の神國たる所以を解明した史論であり、隨つて本課の一文も亦かゝる國體觀に基底を置く親房卿の大義名分論に他ならない。身を南北朝の亂世に置き、世道人心の蕩々として廢れ行く現實を目のあたりに眺めた時、親房卿にとつてこれは止むに止まられぬ立言だつたのである。言々句々に盡忠の至誠は溢れ、憂國の熱情が迸り、慷慨の氣魄に充ち満ちてゐるのは、蓋し當然の結果と言はねばならない。而も博覽強記の親房卿は廣くその實例を和漢古今の史上に求め、又深く人心の機微を洞察し、理路整然、縦横に論じ去り論じ來り、加ふるに漢文調の雄勁な筆致を以てし、斷々乎として批判論定して些かの憚る所もない。その破邪顯正の熱意と、その嚴肅崇高な精神とは儒夫をも起たしむるの概がある。誠にこれ國民的大文字と言ふべきであらう。

三 備 考

1 指導研究

(一)本課の論説は、親房卿の業績と、當代の時代的情勢とを明にすることによつて、一層現實性を加へ、妥當性を増し迫力を強めることは言ふまでもない。故に指導に先だつて、生徒のこれに關する既有知識を整理補説して置くことがまづ考へられねばならない。

(一) 現實にその目で見えた當世武人の態度と、靡然として廢頹に傾く當代の世情とは、大忠臣親房卿をして慷慨せしむるに餘りあるものがあつた。神皇正統記一篇の著作の動機は此處に求めらるべく、随つて本課全體に烈々たる慨世憂國の熱情が溢れてゐることは既に述べた通りである。全文の根本たる大義名分の精神にまで讀みを掘り下げて行く爲に、まづ作者のこの熱情に共鳴共感を喚起することは當然の過程でなければならぬ。

(二) かくて嚴肅崇高な大義名分の精神に觸接せしめることによつて、國體の眞髓に就いて、且はまた人臣當爲の大道に就いて認識を新にせしめたい。讀みはそこまで深めらるべきであらう。

(三) 作者のこの熱情は文勢文調の上に自ら發露してゐるのであつて、それがまた文法上特殊な形式となつて現れてゐる。或は疑問法によつて讀者の省察を要求し、或は省略法によつて調子を高め、或は「けむ」「なむ」「らむ」等推量の助動詞を用ひて批判を捉し、また強意の助詞によつて語勢を強める等、烈々たる氣魄はそれ等の點に明瞭に指摘せられるのであつて、解釋欄にもそれ／＼一應取扱つて來てゐる所、生徒の注意を喚起せしむべきである。

2 参考

(一) 挿繪 北畠親房筆蹟

七夕同詠ニ七夕契久和歌 大納言親房

雲のうへに千年のあきをかぞふれば契もひさしほしあひのそら

七月七日、七夕祭の夜の歌會の席の作であらう。同席の人と同じく「詠七夕契久」の題で詠んだのである。

一首の意は、「牽牛星と織女星とが、雲居の空で千年の契を結んだその秋を指折り數へてみると、もはや随分久しいこととなるであらう」といふのである。

(二) 挿繪 親房肖像(菊池容齋筆)

「前賢故實」に據つた。

補材

1 出典

「新葉和歌集」卷第十六・雜歌上に所載の一首を採つた。

「新葉和歌集」(全二十卷)は宗良親王が、元弘以後弘和に至るまでの吉野朝君臣上下の歌を撰したもので、弘和元年十二月になり、後龜山天皇の奏覽に供し、天皇はこれを勅撰集に準せしめ給うた。收むる所の歌數千四百十五首、後醍醐天皇の御製百四十六首、後村上天皇百首、長慶天皇五十三首を初め、撰者宗良親王・花山院師賢、その子家賢等の作歌が特に多く撰まれてゐる。當時一般の歌風が徒らに傳授等を重んじて前代の糟粕を嘗め、内容形式共に何等新鮮味のない低調なものであつたのに反して、本歌集は吉野朝の衰史をそのまゝに反映し、京都恢復を期して流離辛苦する君臣上下の切實な悲憤と涙とが全體に流露し、眞實に溢れた特色ある歌風を示してゐる。

2 解釋

【比叡の山に行幸なりぬ】

元弘元年八月後醍醐天皇の再度にわたる政權恢復の御謀が漏れ、關東より大軍西上の報が傳へられるに及んで、天皇は比叡山に行幸あらせられんと思召された。然るに時の座主、尊雲護良親王より、山門の防備も未だ完からず、大衆の歸向も定め難い故に、餘人をして天皇と偽り稱して假の臨幸を裝ひ、賊兵を此處に牽制する間、南都の方に遷幸あらせられ、徐に京都恢復を圖らるべき由の

奏聞があつた。こゝに於て天皇は笠置に行幸あらせられ花山院師賢に袞龍の御衣並びに瑞輿を賜はつて比叡山に遷幸の體を裝はしめた。時に八月二十五日のことである。随つて此處に「行幸なりぬ」とあるが、實は天皇の行幸はあらせられなかつたのであつて、恐らくこれは時に師賢が山門大衆等の信をつながん爲の詞書であつたらうと思はれる。

【彼山】 カノヤマ 教科書に「後山」とあるは印刷の誤で

あるから訂正せられたい。

【湖上】 コジャウ 湖は琵琶湖のこと。

【有明】 アリアケ (一)月が空に残つたまゝ夜の明けること。又その夜明。(二)ありあけ月の略。明け方まで残つてゐる月。残月。こゝは(一)

一首の意は、ほのぼのと白み行く夜明方、有明の月の下びに寄せ返す志賀の浦波の風情の面白さは何とも言はれない。それすら今は心を惱ます種となるのを思へば、一日も早く天下が平定して、心に思ふことなくこの美しい景色を見たいと願はれてならない、といふのである。「ほのぼのと」といふ第三句が如何にもよく利いて、有明月の薄明りの下に浮かび上る琵琶湖のたとしへない景色を髣髴として眼に浮かばしめる。この風情があればこそ、「思ふことなくぞ見まし」といふ上の句も切實な實感を得たのであるが、殊にこれを上にだした例置法と、その五七調二句切の雄勁な調べによつて、亂世を怨み歎く作者の感情はこゝに強く表現せられてゐる。

歌の主張をなす慨世憂國の一念に於て本課の文と深く關聯する所があり、補材にとつた所以である。

【文貞公】 プンテイコウ 花山院師賢。吉野朝の忠臣。藤原師信の子。花園天皇に仕へて參議に任ぜられ、左大辨・左近衛中將を兼ね、ついで權中納言に進んだが、後醍醐天皇の御即位の後信任を蒙り、嘉暦元年權大納言に進み、天皇の復古の業を圖り給ふに當つて主としてこれに參畫し、謀漏れて北山に屏居した。元弘元年遂に天皇の事を挙げ給ふに及んで、出でてこれに參じ、天皇の笠置行在に御遷行の後、偽つて叡山に臨幸を裝ひ、一時敵鋒を

こゝに牽制したが、間もなく事露はれて山門の大衆離散し、師賢も亦笠置に遁れた。ついで笠置も陥り、信賢は捕へられ、剃髪して素貞と號した。翌二年下總に流され千葉貞胤の家に囚せられ、その冬病んで薨じた。享年三十二。太政大臣を追贈せられ、文貞公と謚せられた。下總國小御村の小御門神社(別格官幣社)は公を奉祀したものである。公は和漢の學に通じ、殊に和歌をよくし、新葉集に撰まれた歌は九十九首の多きに上つてゐる。

三 吉田 松陰

徳 富 蘇 峯

一 解 題

1 作 者

徳富蘇峯 トクトミソホウ 名は猪一郎。大江逸・大江逸郎とも號した。文久三年一月、肥後國上益城郡津守村に生まれた。明治三年熊本の大江村に移り住み、兼坂止水の塾に漢學を修め、六月熊本洋學校に英語を學んだが、九年洋學校閉鎖と共に上京して英語學校(後の第一高等學校)に入學、その冬京都の同志社に轉じた。同校普通科卒業後、キリスト教に對する懷疑のために十三年同校を去つて郷里大江村にかへり、十五年大江義塾を創立して後進の教育に當つた。十八年「第十九世紀日本の青年及其教育」(後に「新日本の青年」と解題)を發表してその才能を認められ、自ら著述を以て起たんことを決心した。十九年上京、翌年民友社を起し、雑誌「國民の友」を發行して平民主義を高唱し、その啓蒙的思想と清新な文體とを以て、當代青年の心を執へ、ついで二十三年國民新聞社を創立して「國民新聞」を發刊した。二十九年内務省勅任參事官となつたが、幾ばくもなく辭した。この頃から漸く「國民の友」が苦境に陥り、三十一年廢刊し、以來専ら國民新聞に力を注ぎ、四十四年文化事業の功勞を以て貴族院議員に勅任せられた。昭和四年故あつて國民新聞社を退き、同年大阪朝日・東京日々兩新聞社社賓となり、同紙上に「國民史」等を執筆してゐる。大正十二年、その著「近世日本國民史」に對し帝國學士院から恩賜賞を授與され、現に帝國學士院會員である。

著書は頗る多く、前記「近世日本國民史」「新日本の青年」等をはじめ、「吉田松陰」「靜思錄」「文學斷片」「人物管見」

「近世政局史論」「日本帝國の一轉機」「蘇峯文選」「支那漫遊記」「國民十訓」等はその代表的なものである。

2 出典

「吉田松陰」の中、第十三「松下村塾」から抄録した。「吉田松陰」は作者が明治二十五年春、東京本郷會堂で講演したものを敷衍して雑誌「國民之友」に連載し、翌年十二月單行したものである。四十一年乃木大將の懇懇、野村靖（舊名和作）子爵・吉田庫三氏（松陰の相續者）等の助力を得て改訂版を出し、幾多事實の正誤、行文の添削を施したが、併し少壯の作に老成の筆を加へることは自然の調和を害するとなし、爾後昭和五年の改版、九年の普及版にも敢へて加筆しなかつた。その後版を重ねること數十回、初版は清國にも翻譯されて辛亥革命の志士に愛讀されたといふ。本課の文は作者の少壯時代に於ける清新氣鋭な文體を目標として特に民友社發行の初版本に據つた。

3 主眼及び採擇の趣旨

明治維新史の上に不滅の光輝を放つ「松下村塾」の歴史的意義を論述し、更に主宰者吉田松陰の偉大な感化力と、その根柢をなす人となりとを論究した評傳である。漢文脈の雄勁な筆致と、潤ひのある文調と、而して豊富適切な史實の引例とをもつて、松陰その人の心熱を如實に傳へてゐる。この偉大な精神と崇高な熱情とに對する感動を誘起して、以て國民的陶冶に資せらるべき教材として採擇した。

顧みると本學年初頭以來幾多の偉人傑士の人格德行業績等について學んで來たのであるが、松陰は正に日本近世史に黎明の鐘をうち鳴した先驅者であり、時代に於て生徒に極めて近い俊傑である。こゝに彼のうち鳴らす新時代の曉鐘に耳を傾けながら本學年を終らうと思ふのである。

二 解 釋

1 語釋

【吉田松陰】 ヨシダシヨウイン 名は矩方、字は義卿、通稱を初め大次郎、後寅次郎と改め、松陰又は二十一回猛士と號した。天保元年（二四九〇）八月長州藩士杉百合之助常道の次男として萩在の松本に生まれた。五年仲父吉田大助（常道の實弟）の養子となり、翌年大助の歿するや家督を相續し、九年玉木文之進（一六二頁一行）を始め林眞人・山田宇右衛門等家學高弟の後見の下に教授見習として藩學明倫館に登り、十一年藩主敬親（一時慶親といつた）の前に武教全書戰法第三篇を講じ、爾後屢々親試ある毎にその偉才を賞せられた。家學（一六一頁末行）の外、他流の兵學・馬術・砲術・劍術・西洋陣法等を兼修し、學・術並びに進んだが、この學習時代を通じて内叔玉木より受けた薫化が最も大であつた。

嘉永元年（十九歳）獨立の師範となり、二年命を奉じて藩内の要所を巡視し、門人を率ゐて城東羽賀臺に演習を行ひ、翌三年九州を遍歴して諸學者を訪ひ、海外の事情を問うて、知見を博めた。四年林眞人より家學奥儀の返傳を受け、また藩主にこれを皆傳した。次いで藩主に從つて江戸に出で、佐久間象山等に就いて文武の業を磨き七月より翌年にかけて東北を遊歴して一旦歸國し、六年また諸國を巡り、伊勢大廟を拜して江戸に入り、米艦渡來を聞いて浦賀に馳せ、露艦來るを聞いて長崎に赴くな

ど人事を論ぜむと欲せば、まづ地理を觀よ」との持論に從ひ、具に各地を踏査した。その間梁川星巖・梅田雲漢を始め各地の志士と切磋した。安政元年（二十五歳）渡海の策が敗れて藩獄に下されたが、二年の暮獄を許されて杉家に蟄居した。これより先僧月性・默霖等が相踵いで萩に來り、これと往來し肝膽相照らし、三年秋以降漸次心力を松下村塾に注いで、遂にこれが主となり、四・五年の交時勢の急進と塾の隆盛と共に、彼を中心とする同志門下の活動は漸く實踐化した。その草する所の「時務策」は遂に孝明天皇の敕覽に達し、又屢々藩主の願する所となつたが、併しその急進的態度は藩府の憂ふる所となつて、五年末再び野山の獄に投ぜられた。しかも氣節愈々軒昂、獄中猶畫策を捨てず、また他面死生觀について明の李卓吾の遺著に啓發される所が少くなかつた。偶々所謂安政の大獄起り、六年五月幕命によつて江戸に檻送され、幕吏の訊問に對しては間部要撃策・伏見要撃策等を赤裸に陳じ、且堂々尊攘の眞義を説いて傾聴せしめたが、十月遂に死刑の宣告下り「吾今爲國死、死不負君親、悠悠天地事、鑑照在明神」と清吟しつゝ、愆愆として死に就いた。享年三十。明治二十二年特旨を以て正四位を贈られ、また四十年村塾の域内に縣社松陰神社が創建され、現東京市世田ヶ谷區若林町の松陰神社（明治十五年創建）も昭和七年府社に列せられるに至つた。

著書は「幽囚録」「回顧録」「講孟餘話」「孫子評註」「坐獄日録」「留魂録」その他「兵書」「詩稿」「書簡」「日記」「意見書」「抄録」等夥しき數に上り、詳細なる傳記及び關係資料と共に、「吉田松陰全集」(全十卷)に收められてゐる。

【天成】 テンセイ (一)人力によらず、自然に成立すること。自然に具つてゐること。(二)天性。こゝは(一)

【鼓吹】 コスキ (一)鼓を撃ち笛を吹くこと。(二)勢をつけること。氣勢をつけはけますこと。(三)意見・議論を主張すること。こゝは(一)

「鼓吹者」とは他人を刺戟鼓舞して、その精神をふるひ勵ます人。

【感激】 カンゲキ 深く感じて奮ひ立つこと。

「感激者」とは、こゝでは、自ら感激すると共に、他をも感奮興起せしめる人の意。

【松陰は天成の鼓吹者なり、感激者なり】

松陰の偉大な感化力を簡潔適切に綜括した一句である。時・處・位を超越して、觸れる者はすべて動かさず置かない彼であつた。それが「天成」であつた所に彼の本質がある。「彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈」(一六三頁五行)であつたのだ。その故に彼は觸接するあらゆる人を鼓吹してやまず感激させずには措かなかつたのである。松陰の人となりは實にこの一句に盡くされてゐる。

ると言ひ得るであらう。

【渡海の策敗れて】 トカイのサクヤブれて

先に佐久間象山は幕府の勘定奉行川路聖謨に勧め、松陰等數十名の前途有爲なる青年を蘭船に託して海外に遊學させようと企てたが、實現されずに終つたので、松陰はこゝに始めて單身渡海の決意を堅くした。後、嘉永六年九月長崎に下つて露艦に投じようとしたが、既に二日前に出帆した後で、これまたその志を果すに至らなかつた。ついで安政元年三月二十七日夜半、同志金子重輔を伴ひ、折柄下田に碇泊中であつたペリーの率ゐる米艦に投じて熱心に便乗を乞うたが、ペリーはその志は諒とするも、條約上應諾し難き旨を告げて、これを陸地に送還したので決死の計畫も遂に畫餅に歸した。實に三回目の渡海計畫であつて、こゝではこの第三回目の策を指してゐる。尙この舉については松陰の手記「幽囚録」及び「回顧録」に詳しい。

【下田の獄に繋がる】 シモダのゴクにツナがる

失敗した松陰と金子とは「ウロツク間ニ縛セラレテハ見苦シト・直ニ柿崎村ノ名主ヘ」自首し、長命寺に預けられ、下田番所に於て黒川嘉兵衛の取調を受け、平滑金太郎なる者の守る獄(廣さ僅かに一疊敷)に下された。

【下田】は現静岡縣賀茂郡下田町。伊豆半島の東南端に位し、伊豆第一の良港で、古來關東・關西を結ぶ航路の

重要寄港地であつた。元和二年幕府はこゝに船改番所を設けて江戸入津の船舶物品を點檢し、天保十三年更に奉行所を置いたが、享保五年これを浦賀に移した。次いで安政元年日米和親條約の調印されるに及んで奉行所の復活を見るに至つた。後安政三年我が國最初のアメリカ總領事タウンゼンダーハリスが來て、近郊柿崎の玉泉寺に駐在したが、神奈川開港の後萬延元年を以て再び奉行所も廢されるに至つた。

これより先ペリーはまづ下田港の適否を調査させ、和親條約締結後自ら入港し(安政元年三月二十一日)浦賀奉行支配頭黒川嘉兵衛等もこゝに出張して種々周旋する所があつた。松陰の擧はこの間に行はれたのである。

【獄吏】 ゴクリ 牢獄の役人。罪囚を取扱ふ役人。

【綱常】 カウジヤウ (一)「三綱五常」の略。(二)人の守るべき大道。人倫の道。「綱」は人倫の大道。「常」は萬世不易の道の意。こゝは(一)

【三綱】は儒教に於ける道德の三大綱で、君臣・父子・夫婦の道をいふ。白虎通、三綱六紀篇に「謂君臣父子夫婦也、故君爲臣之綱、父爲子之綱、夫爲婦之綱」とあり、禮記にも同様な説明が見えてゐる。

【五常】は、尙書、泰誓篇に「狎侮五常」とあり、この五常に二様の註がついてゐる。即ち孔穎達疏の「五常即五典、謂父義・母慈・兄友・弟恭・子孝」と、蔡傳旁通の

「典常之理、即仁義禮智信也」との二つである。尙書の注としては前者が古いが、仁・義・禮・智・信を五常とするは漢の董仲舒及び班固等の説で、「漢書」の董仲舒傳及び「白虎通」の情性篇等に見え、後世この説による者が多し。

【彝倫を敘づ】 イリンをツイづ 人の常に守るべき道に順序次第を立てる。即ち君を最重とし、以下父子兄弟朋友といふやうに、人の守るべき常道に明確な次第をたてる。書經、洪範に「我不_レ知_二其彝倫攸_レ敘」とある。

「彝倫」の「彝」は「綱常」の「常」に同じ。常に變らぬ道。「倫」は義理・道の意。

「敘づ」は順序を定める。次第を立てる。

【獄吏の眼に涙あらしめたり】

松陰は下獄すると直ち讀書を始め、皇國の皇國たる所以人倫の人倫たる所以、皇國の尊ぶべき所以等を日夜高聲に稱説してやまなかつたといふ。「爲に獄吏も涙を揮つて吾輩の志を悲しまさるはなし」と自らその回顧録に記してゐる。

【檻輿江戸に赴き】

松陰等は黒川の取調を受けた後、四月十日江戸八丁堀同心二人・岡引五人に護られ、唐丸籠にのせられて江戸北町奉行所へ送られた。

「檻輿」(カンヨ)は罪人を護送するに用ひた駕籠。こゝ

では唐丸籠。

「唐丸籠」は江戸時代重罪人の押送に用ひた竹籠で、その形が唐丸(長鳴鶏の一種)を飼育する籠に似てゐる所から、かく呼ばれた。

【三島】 ミシマ 現静岡縣田方郡三島町。伊豆第一の都邑で、半島の頸部を扼し、上古は伊豆國府のあつた地。徳川時代には箱根を挟んで小田原と相對し、東海道に於ける重要な宿驛として繁華を極め、天正十八年以來代官所が置かれた。昭和九年十二月丹那隧道開通後は熱海とともにこれを挟んで新に交通上の意義を有するに至つた。

【警護の賤民】 ケイゴのセンミン 回顧録の三島の獄の條(次項参照)の割註に「三島にて××三四人出づ、皆年少氣力ある者」とある。こゝはその番人共を指してゐる。

【大義】 タイギ おほいなる道。おほもとの道。(一)人のふみ行ふべき重大な義理。君國に對して臣民のなすべき道。(二)あらましのわけ。大體のすぢみち。こゝは(二)行を勵むこと。奮勵。

【色に見れしめたり】 顔色に表れさせた。「見る」は「アラハる」と訓ずる。きざす。表れる。

【途三島を經るや、警護の賤民に向ひて大義を説き、彼等をして憤勵の氣、色に見れしめたり】 松陰の回顧録に「扱宿にて番人等寐すの番をなす故、亦

爲めに大道を説聞する事下田の獄に在る時の如くにして更に快なり、余生來の愉快、此時に過るはなし、因に云三島にて××三四人出づ、皆年少氣力ある者、余が話を聞いて大に憤勵の色あり、去るに臨て甚戀々たり云々」とある。

【感化】 カンクワ 感じて善道に移らしめること。今は、惡に化するにも轉用する。こゝは前者。

【同囚者】 ドウシウシヤ 同じ獄の囚人。同じ囚人仲間。【司獄者】 シゴクシヤ 牢獄を司る人。典獄。こゝは次條福川犀之助を指す。

【其の獄にあるや、其の感化は同囚者に及び、獄吏に及び、遂に司獄者までも彼が門人となるに至れり】

江戸に護送された松陰は四月十五日到著と同時に吟味を受け、傳馬町の揚屋(未決囚の牢屋)に下され、九月十八日「父杉百合之助へ引渡於在所、蟄居申付る」旨判決され、萩に送られたが、藩府は幕府を憚つてか、野山の獄に下した。こゝはその野山の獄(一六一頁一行参照)のことを指してゐる。

野山の獄に下つて以來の松陰は、一意讀書・抄書に精進し、また同囚の有志を誘ひ、吉村善作及び河野數馬には俳諧の、富永有隣には書道及び漢詩の指導に當らしめるとともに、自らは孟子・論語等を講義しつゝ、人倫を説き、歴史を論じ、時事を談じて、倦むことを知らず、

い。

【薔薇の在る所、土も亦香し】

香氣の高い薔薇の花の植ゑられてある所は、大地もその移り香をうけて芳香を發するといふ意で、偉人・善人の感化は自らその周囲の人を善良に傾かしめることを譬へていふ。

【松下村塾】 ショウカソングク 天保三年長門國萩の在松本村に於て、玉木文之進が創立した私塾。嘉永二年藩務漸く繁劇を加へるに及んでこれを廢したが、嘉永六年に至つて同じく家塾を開いて村童の教育に任じてゐた久保五郎左衛門がその名を襲用した。安政二年末偶々獄を許されて杉家に囚せられた吉田松陰は、出獄後間もなく父兄の懇懇によつて獄中で始めた孟子を續講し、また屢々近親子弟等を會して講筵を敷くうち、何時しか久保塾と共通一體となり、事實上松陰がその主宰者となり、彼独自の信念と方法を以て子弟の薫陶に當つた。松陰の歿後は久坂玄瑞・小田村伊之助等の遺弟により、また再び退官後の玉木によつて相續され、明治初年まで斷續的に繼續された。

但し、こゝでは本文にある如く、松陰主宰當時のそれを意味してをることは言ふまでもなく、事實またその期間がこの塾の最も生彩に富み且有意義の時期であつて、一般にたゞ松下村塾といふ場合には多くこの意味に用ひ

遂に牢獄を化して塾となした。司獄福川犀之助もその人格に感じて廊下に坐してこれを聴き、遂に弟高橋藤之進とともに弟子の禮を執るに至つたといふ。この間、不朽の名著「講孟節記」(後「講孟餘話」と改む)を始め幾多の著述が爲されたのであるが、就中「福堂策」は、牢獄を自治化し、その風教を振作して、これを一箇の「福堂」たらしめようといふ説で、彼自身の體驗から生まれ出た特異な文献の一として有名である。

【彼の在る所、四圍彼の如き人を生ず】

存在そのものが既に教育であり、感化であり、鼓舞激勵の動因であつたといふ。彼の感化力が眞に「天成」であつた所以であり、又彼が眞に偉大であつた所以である。

【薔薇】 シヤウビ 「バラ」「イバラ」と訓ずる。薔薇科。薔薇の灌木の總稱。多くは直立して刺がある。葉は羽狀複葉で互生し、托葉が葉柄に著生する。花は美麗で香氣があり、多くの雌蕊が壺狀の花床内に隱在する。世界各地に産し、種類は約百餘種に上るが、熱帯地では山地のみに生じ、平地には適しない。ヨーロッパの風土は特に薔薇の香氣を保つに適し、且花の色彩をよく現すから、ヨーロッパ人は薔薇に關する愛著甚だしく、これを花の代表とする傾がある。中でもイギリスでは薔薇を以て國花としてゐる。

【香し】 カンバシ 「かくはし」の音便。香がよい。香が高

られてゐる。

【顛覆】 テンブク (一) くつがへすこと。くつがへること。(二) ほろぼすこと。ほろびること。(三) たふすこと。たふれること。こゝは(三)

【孵化】 フクワ 卵が成體になること。卵がかへること。又かへすこと。

【保育場】 ホイクチャウ 小兒を收容してこれを保護・養育する所。

【幕府顛覆の卵を孵化したる保育場】 徳川幕府を顛覆して皇政を復古せしめるに與つて力あつた人々を啓發し、養成した所といふ意で、その門下から高杉晋作・伊藤博文・久坂玄瑞・木戸孝允・山縣有朋・品川彌二郎・野村靖等多くの幕末勤王の志士を輩出した。

【維新】 キシン 「これあらたなり」の義。(一) 政事や政體の改まること。(二) 物事ががらりと面目をあらたにすること。こゝは(一)の意で、明治元年を中心として政治上社會上に行はれた大變革の時、即ち明治維新をさす。

【天火】 テンクワ 天のおこした火 人爲によらず自然に發した火。こゝでは神火、聖火、ほどの意で、明治維新の旺盛な光輝ある革新運動を火にたとへて言つた。

【聖壇】 セイダン 神を祭る壇。神聖な壇。

【維新の天火を燃やしたる聖壇】 明治維新といふ光輝赫々たる大革新の烽火をあげ、時代の先驅をなした神聖な道

場。

【燐】 リン 燐は窒素族元素の一で、天然には主として燐酸鹽として産出する。その主なる礦石は燐酸カルシウムとしての燐灰石で、動物の骨も亦大部分これより成る。黄燐・紫燐・黒燐・紅燐等の同素體があり、酸化するとき微かに青光を發する。こゝではこの酸化に伴ふ微光を指す。

【松下村塾は幕府顛覆の卵を孵化したる保育場の一なり。維新の天火を燃やしたる聖壇の一なり。笑ふ勿れ、其の火燐よりも微かに、其の卵、豆よりも小なりしと】

【臺所六疊、座敷八疊】(一六九頁一行)の矮屋に過ぎなかつた松下村塾の重大な歴史的意義と、その全貌を言つてゐる。「天火を燃やす」といひ、「聖壇」と呼ぶにふさはしい生活がそこに營まれたことを思ふ時、その形が如何に微小であつたとしても、歴史の上にもたらした意義に於ては永遠不滅の光輝を放つものであると言はなければならぬ。誠に歴史的意義の輕重は形の大小に關するものでなく、生命の充實による事が思はれるであらう。

【赤間關の砲臺】 アカマガセキのハウダイ 幕末赤間關

(馬關) 一帯に敷設された諸砲臺。文久元年二月露艦が對馬に、四月英艦が下關に、それ／＼來航滯泊するの事があり、物情騒然として遽に馬關警備の要を悟り、徳川

幕府はこゝに砲臺を築かうとしたが、長州藩はこれを阻止して、自ら門司岬の對岸壇浦を中心に、西は彦島より東は長府に至るまで、十數箇の砲臺を築いた。

固よりこれら砲臺の目的は單なる防備の爲ではなく、攘夷の實行にあつたから、攘夷期限と定められた文久三年五月十日、恰も海峡を通過しようとした米船を手始めに、引續き佛・蘭の船艦を砲撃し、逆に米・佛の報復的砲撃を蒙つた。超えて翌元治元年八月五日英・佛・蘭の軍艦十六隻・英・米の商船各一隻より成る聯合艦隊の來襲を受け、奮戦大いに努めたが、海軍の微力と、兵器の差異とは如何ともし難く、砲臺は殆ど破壊せられ、尠からぬ打撃を蒙つて、遂に和を講ずるに至つた。

「赤間關」は現下關市。瀬戸内海の咽喉を扼する交通上の要地として、中世以後、源平の運命を決した壇浦合戦あり、また大内氏の對外貿易等によつてその軍事的乃至經濟的意義は益々重要となつた。

【奇兵隊】 キヘイタイ 文久三年六月高杉晋作等が組織した義勇軍。朝廷並びに幕府から攘夷の期限を五月十日と定める旨の布達があつたので、長州藩では毛利能登を馬關總奉行に任じて著々その準備を進めさせたが、久坂玄瑞以下入江九一(杉藏)・山縣小輔(有朋)・山田市之允(顯義)等は特に藩に乞ひ、敵情偵察の名を以て陸續として馬關に赴き、所謂光明寺黨を組織して活躍した。然る

に五六月の交數回に互る第一次の砲撃は長州藩に頗る不利に終つたので、藩は屏居中の高杉を起用するに至つた。こゝに於て高杉は直ちに馬關に赴き、折柄上洛中の久坂に代つて光明寺黨その他の有志を糾合し、奇兵隊を編成した。その骨子は「奇兵隊之儀は有志之者相集候儀に付、陪臣輕卒藩士を不選同様に相交り、専ら力量を貴び、堅固之隊相調可申」といふにあり、封建門閥制度打破を爲したるものとして注目に値する。その名稱の由来は「常に奇道を以て勝を制する」を目的としたのに因るものである。高杉自ら總督に任じ、名望ある者を軍監とした。元治元年四國聯合艦隊の際に勇戦して聯合艦隊を驚かしたのをはじめ、第二次長州征伐・戊辰伏見役・越後會津役等に奮戦して、能くその勇名を天下に轟かした。下關市櫻山招魂社にはその戦歿者の靈を祀つた碑がある。

【流風】 リウフウ 先人の遺して置いた美風。

【遺韻】 キキン 遺されたひびき。遺された人格上の風韻。歿後の感化影響。

【欽仰】 キンギヤウ・キンガウ うやまひたつとぶこと。あふぎしたふこと。仰欽。

【伊藤博文】 イトウヒロブミ 政治家。長州藩士。幼名利助、後俊輔と改め、春畝と號した。天保十二年九月林十藏の嫡子として周防國熊毛郡東荷村に生まれた。嘉永二

年秋に移り、後父が足輕伊藤直右衛門の家を嗣ぐに及んで始めて伊藤を名のつた。初め栗原良藏の嚮導を受けたが、その推輓によつて松陰の門に入り、その英才を著目され、將來を囑望された。後更に長崎に赴いて西洋文物について學ぶ所が多かつた。後桂小五郎に従つて江戸に赴いて國事に奔走し、文久三年井上聞多(馨)とイギリスに留學したが、馬關の騷擾を聞いて急遽歸朝し、攘夷の不可を唱へ藩論の統一に努めた。明治元年外國事務掛を命ぜられて以後次第に要職に進み、三年財政事務調査の爲アメリカに、五年特命全權副使として歐米各國に派遣せられ、歸朝後は工部卿の職にあつたが、十一年十一月内務卿大久保利通遭難後内務卿となり、十五年憲法調査の大命を奉じて歐洲に赴き、十八年四月渡清して天津條約を締結し、同年十二月官制改革によつて最初の内閣總理大臣となつた。爾來内閣を組織すること三回、帝國憲法草案の起草に力を盡くし、樞密院・貴族院の議長となり、又立憲政友會を組織し、その間功を以て初め伯爵を授けられ、累進して公爵に陞つた。晩年は韓國統監に任じ、よく誘掖指導の任を果したが、四十二年十月露都に向ふ途上哈爾濱驛頭に於て兇彈に斃れた。享年六十九。從一位を贈られ、特に國葬の禮を賜はつた。

【如今廟廊棟梁器、多是松門受教人】
伊藤博文の作「松下村塾作」といふ七言絶句の起承の二

句「道德章敘彝倫」精忠大節感明神」を省略したものである。

【如今】 ジョコン 今の世。たゞいま。現今。

【廟廊】 ベウラウ 朝廷。廟堂。

【廟】は(一)おたまや。祖先の神靈を祀る殿堂。(二)やしる。鬼神・聖賢を祭る堂舎。(三)轉じて、王宮の前殿。政治を行ふ所。朝廷。こゝは(三)

【棟梁】 トウリヤウ (一)むなぎとうつぱり。共に家屋構造上重要なもの。(二)一國又は一族一門等を支持する重任にあたる人。柱石。(三)かしら。をさ。(四)大工のかしら。匠長。こゝは(二)

【器】 ウツハ (一)物をいれるもの。いれもの。(二)器具。器械。(三)才能。器量。人物。こゝは(三)

【松門受教人】 松陰門下で明治政府に重きをなした人は博文以下、木戸・山縣・品川・山田(顯義)・野村靖等である。(幕末顛覆の卵の項参照)

詩一首の意は「道德を説き文章を作り人倫の大道を次序し、その精忠大節は天地の神々をも感動せしめる程であつた。宜なるかな、現在政府にあつて棟梁の器を以て目される人物は、多く松陰の門下にあつてその教を受けた人々なのである。

【野山の獄】 ノヤマのゴク 現萩市南古萩常念寺筋に在つた長州藩の士分の爲の獄であり、南北二棟十二房(各房

三疊)から成つてゐた。

【塾居】 チツキョ (一)蟲などの地中に籠つてゐること。

(二)家に籠つて外出しないこと。(三)江戸時代に、士人以上に科した閏刑の一。閉門よりやゝ重く、一定の室に蟄伏せしめて謹慎せしめた。その中、終身蟄居するものを永蟄居と稱した。こゝは(三)

【家學】 カガク その家に代々傳へ來つた學問。こゝでは吉田家の家學山鹿流兵學をさす。

【安政三年七月に至りて、塾居中家學を授くるの許を得たり】

嘉永四年松陰が林真人から家學の返傳をうけたことは略傳に既述した所であるが、その外彼は長沼流兵學・荻野流砲術・西洋陣法等をも兼修し、若年微祿ながら兵學の權威として藩内に重きをなしてゐた。されば安政三年八月幽室に於ける山鹿素行の武教全書開講以來、日を追うて來り學ぶ者多く、藩亦これを默許してゐたが、安政五年七月に至り門人等の申請により、傳授差許す旨の公許を得るに至つたのである。(本文に「安政三年七月」とあるは俗説)併し實際に施す所は兵學に止まらず、經史・子・集萬般に互り、否寧ろ書を超えて、直接自己の信念を以て相手を陶鑄する底のものであつたことは「講孟翁記」などを見てもその一斑が窺知される。

【内叔】 ナイシユク 父方の叔父・叔母。

【玉木】 タマキ 松陰の父方の叔父、玉木文之進。長州藩

士。名は正韜、玉韜と號した。文化七年九月杉七兵衛常徳の第三子として生まれ、幼くして同藩の玉木氏を繼いだ。が、實家にあつて兄百合之助・大助と共に貧困の中にあつて耕讀を事とした。經史に通じ、詩文書を善くし、又勤皇の志に深く、躬行實踐を重んじた。天保十三年松下村塾を開き、國史家乘を授け、門下に松陰を始め、久保清太郎・杉民治(松陰の實兄梅太郎)・六戸璣・乃木希典の逸材を輩出した。初め松陰の後見として藩學明倫館で兵學の講義を代攝したが、後その都講に擧げられ、又黒船防禦手當掛を命ぜられ、次いで數郡の代官に歴任し、郡奉行に陞つた。その間時務を上陳し、屢々重議に參與したが、性嚴正剛直で、常に直言して憚らず往々俗吏に敬遠された。明治二年勇退を許されるまで、在職二十餘年の久しきに互り、よく孤高清節を持し、長州藩勤皇の大義を輔翼する所が大きかつた。公餘再び松下村塾を開き、耕讀に従事したが、明治九年前原一誠の擧兵に際し門人中これに與する者數名を出し、深く自責する所あり十一月先塋の側に自刃した。享年六十七。

【外叔】 グワイシユク 母方の叔父・叔母。

【久保】 クボ 松陰の母方の叔父、久保五郎左衛門。長州藩士。名は幾之進、諱は久成、通稱を五郎左衛門ともいつた。弘化元年四十一歳を以て家督を長男清太郎(十三

【識】 シキ こゝは、かんがへ、見識の意。
【齡未だ熟せず】 ヨハヒイマだジユクせず 年齢がまだ十分でない。成人の域に達しない。
【熟す】 は、こゝは十分の度に達するの意。
【白面】 ハクメン (一)素顔。(二)色の白い顔。(三)年若くして経験に乏しいこと。こゝは(三)
【一中書生】 イチチュウシヨセイ 中年の一書生。
【書生】 は、(一)學問修業中の青年。學生。(二)他家にあつて家事を手傳ひながら學問する者。玄關番。こゝは(一)

【襲用】 シフヨウ もとのまゝに用ひること。踏襲。
【推して】 オして こゝではおしすすめての意。
【開山】 カイサン (一)山を開くこと。(二)佛語。寺院の創始者。宗派の祖。(三)ある物事の創始者。こゝは(三)
【千波萬濤】 センパンマンタウ 幾重ともなく寄せくるなみ。多くの波濤。こゝでは、限りなく推移して極まりない歴史上の變化を波濤の起伏去來するに譬へた。
【起激點】 キゲキテン 起し激する所。激しい動きの起原をなす所。

【此の二箇年半の歲月が、其の後の日本歴史に於ける千波萬濤の起激點となりたるなり】
「笑ふ勿れ、其の火、燐よりも微かに、其の卵、豆よりも小なりしを」と、作者はそこに歴史的意義の輕重が形の大小に關るものでないことを言つた。こゝではそれが年月の長短に左右されるものでないことを言はうとしてゐる。僅か二箇年半に過ぎない歲月の教育が、後の日本歴史上の大變革の起激點をなし得た程の重大な歴史的意義を齎したものは、實にその生命力の充實にあつたので

【彼が學未だ深からず、識未だ高からず、齡未だ熟せず、經驗未だ多からず、要するにこれ白面の一書生のみ】
松陰を指して「白面の一書生」と呼ぶ。大膽な論斷ではあるが、天成の偉人とはいへ、年齒三十に滿たぬ松陰にとつて、或は至當の言であらう。而も學識・經驗の淺いこの一書生の力が、よく天下を動かし得たものは何か。「感在知己」にありの一語に盡きる生命力の燃焼であつた。歴史的意義の重大さは、また學識の高下、經驗の多少に依存するのではなく、知己の間に交流する生命の深淺にかかるともあつた。

【匹敵】 ヒツテキ (一)つりあふこと。(二)對等の相手。(三)つれあひ。配偶。こゝは(一)

【感在知己】 カンチキニアリ 偉大な感化は眞に己を知る者の間にあつてはじめて行はれるの意と解されるが、何に典據したものか今詳にしない。

「知己」は、よく自分の心を理解してゐる眞の友。史記・刺客傳「士爲知己者死、女爲悅己者容」

【造化兒】 ザウクワジ 宇宙間の萬物の創造・化育を掌る神。造物主。「造化兒」の語は、造物主を指していふ戲言に「造化小兒」なる語があり、その「小」の字を略したも。唐書・文藝傳「杜審言疾甚、宋之間等省候、答曰、爲造化小兒所苦。」「造化」は(一)萬物を創造 化育すること。(二)宇宙を創造し、化育した神。造物主。(三)天地。宇宙。こゝは(二)

【精神的爆裂彈】 セイシンテキバクレツダン 内に旺盛な感化力を藏し全精神を傾倒して事に當る態度をいつた。

【觸著】 ショクチャク 觸れ合ふこと。接觸。

【轟然】 グワウゼン とどろきひびくさま。

【彼は造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸著すれば、轟然として火星を飛ばす。此の時に於ては物も碎け、彼も亦碎く】

彼の感化力は造化兒の手になつた「天成」のものであつた。而してその然る所以は、實にその生命力の充溢であつり、自他共に焔となつて燃え上る生命力の燃焼であつ

た。こゝに松陰の本質があり、その歴史的意義の永遠性がある。形に於て小さく、時に於て短く、指導者の學識經驗の完からざる松下村塾が、何ものにも替へ難い聖壇として永遠不滅の光榮に輝く所以は此處に存在するのである。

【火星】 クワセイ 太陽系の惑星。太陽から數へて四番目、金星について地球に近い。六百八十七日で太陽を一周する。外見は赤色、地球より遙かに稀薄な雰圍氣を有し、温度も低く、少くとも過去に於て生物が存在したと考へられてゐる。
但しこゝでは單に、火の星、火花位の意。

【燃質】 ネンシツ 國語辭書にもなく、科學上の術語としても用ひられない語である。燃え易い質、熱し易く激し易い性質、位の意で、恐らく作者の造語であらう。

【乍ち】 タチマチ 「忽ち」に同じ。

【鎔かす】 トカす 音は「ヨウ」熱して金屬をとかす。

【インスピレーション】 Inspiration (英)「靈感」と譯す。神靈を吹込まれたやうに感ずること。

【精神的高潮】 セイシンテキカウテウ 精神のかたまりの極點。精神の昂奮の絶頂。
「高潮」は(一)あげしほ。みちしほ。又その極に達したも。 (二)物事の極點。こゝは(一)

【眞骨頭】 シンコツトウ 作者の好んで用ひる語であるが